

なくならないもの

mn_ver2

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある戦場で金剛は殿を務めた。

轟沈寸前まで追いやられたが、なんとか生還を果たす。

しかし、目を覚ました彼女は記憶を無くしていたのだった……。

目次

Which choices do you choose?	
無くした記憶	1
与えられた期限	5
外へ行きましょう	21
本当にいいのですか？	34
一航戦は大食い	52
ヤツの名は	69
卓球	82
歌	100
死神の噛い	121
出撃？	144

あなたはなぜ戦うの？	160
長門の紅茶	177
ガングート	196
未だ結論に至らずにして	212
私は……	222
My Teacher	
邂逅	241
死神	261
掃討戦	283
真相追及	303
提督問答	316
迫られる対応	333
大掃除ですって、奥様	346

386	訪問	360
	ドツタンバツタン大騒ぎ♪	373
	ドツタンバツタン大騒ぎ♪	
	終	
396	むかしのおはなし	
406	厄病神の講義	
415	評価	
425	カボチャ大騒動	
445	金剛、初出撃	
463	生意気のはね返り	

Which choices do you choose?
see?

無くした記憶

「絶対に……ここは通さない……デス!!」

砲撃の雨。魚雷の嵐。

これまで数多の戦場を駆け抜けた彼女はここで死を悟る。

艦装はほぼ破壊されている。プスプスと火の粉が舞い、砲門はあと2門残すのみ。

こちらが一に対し、向こうは……数が数えられない。視界がぼやけ、黒い点しか彼女の目には映らないので、数えるのは諦めた。

「ハア……ハア……うぐつ、こんなことになるなら、出撃前に提督と……ティータイムでも、したかったネ……」

敵からの砲撃が左耳を掠め、後方に着弾した。水しぶきが高く上がり、頭からかぶる。

一瞬でも気を抜くと、容赦無くあの世へと送られてしまいそうだ。

これを背水の陣と言うのだろうか。

ふと、自分の口角が上がっているのに気づく。理由は金剛自身にもわからない。とうとう狂ってしまったのか。しかしそれは否。否である。

「ひえい……はるな……きりしま……あとは……頼みマース……」

――彼女……金剛は突撃する。

妹達の未来のために……仲間の未来のために……。そして、愛したあの男の未来のため。

◆ ――急げ！ はやく入渠させろ!! 最優先だ!!

――お姉様！ しっかりしてください!! 私達、お姉様がいなければ……!!

――ごめんなさい、私のせいで……。

飛び交う怒号。泣き声。嗚咽。

身体のだこにも力が入らず、目を開くことが億劫だ。さらに息をすることすら難しく、もうそれすらやめてしまいたい。

そして、深く、深くまどろみへと意識を落とす。

◆ ……もう二度と、浮かび上がることができないくらい、深くへと。

ゆっくりと瞼を上げる。

すぐに身体に暖かいものが覆いかぶさっていて、すぐに自分がベッドに寝かされていくこと気づく。

「あ……あ……」

声がどもり、うまく言葉にできない。

眩しい視界に、目をしょぼしょぼとさせながら左右に頭を振り、周囲を確認する。

人影だ。まだ目が慣れていないせいか、しっかりと映らない。おそらく4人。

「あ！ お姉様が目を覚ましました!! 加賀さん、提督を呼んできてくださいー!」

「っ！ わかりました」

短髪の女性に呼ばれた髪を後ろで結んだ女性が部屋を走り去っていった。

「良かったです！ 本当に良かったです……」

そう言いながら抱きつかれる。その後さらに残りの2人にも抱きつかれる。そのぬくもりは彼女の意識を完全に覚醒させるのに十分事足りた。

目の前の三人の女性はいづれも白い巫女服のようなものを着ており、はじめに抱きついてきている者を除いて、存分に髪を垂らした者と、眼鏡をかけた大変理知的な者がいる。

「気分はどうですか？ 何か食べたいものはありますか？」

彼女は胸にうずめていた顔を上げ、質問してくる。

そして、こう答える。

「えっと……貴女たちは誰ですか？ それにここはどこでしょうか？」

三人の表情が固まる。

「あと……私は誰でしょうか？」

与えられた期限

「あと……私は誰でしようか？」

「——え？」

空気が凍りついたのを彼女でもすぐにわかった。

おそらく今口にしたことはこの人たちにとつてとても大きなことだったのかもしれない。

自分でもわかっている。こういった発言をする人はだいたい記憶喪失の人だと相場が決まっているのだから。

つまり、彼女はまさに自分がそれであるということはこの時点で理解したのだった。

「え、えつと……ごめんなさい」

とりあえず謝罪を口にする。しかし、これは何の意味をもたらさないことはわかっていた。

「いえ、そんな……本当に何も覚えてないのですか？」

今にも泣きそうな表情で尋ねてくる。握っている手がさらに強く握られ、少し痛いほどだ。

「はい…………ごめんなさい」

「そう、ですか…………」

「は、榛名は明石さんと呼んできません！」

そう言うのと榛名という女性は慌ただしく部屋を走り去っていった。

明石とはなんだろうか？ 明石海峡大橋？ 彼女の中で疑問が渦巻く。

「あの…………」

彼女はしどろもどろに質問を口にした。

「私はいったい何をしたのですか？」

「それは…………」

「……」は霧島がお答えします、比叡お姉様」

比叡は頷き、霧島は少し赤い目をゴシゴシと擦り、眼鏡をくいと上げた。

「お姉様は私達を逃がすために…………その…………残つて殿を務めたのです」

言い淀みながらもどうにか霧島は彼女にあの時の事を包み隠す事なく伝えた。

「殿、ですか？」

「…………はい」

あまり…………というよりむしろ、とても気分の良くない話だ。

彼女としてその言葉の意味は知っている。

撤退をする際、最後尾に残り、死ぬ気で敵の追撃を食い止める役割である。文字通りの死ぬ気で、だ。

彼女とて真実が知りたかった。自分に何が起こり、そしてどうなったのかを。しかしそこでつい投げかけてしまった疑問はさらに比叡と霧島を苦しめることになるとは全く想像しなかった。

「ということは……私は戦いでもしていたのですか？」

「まさかそれすらも……！」

霧島が驚きに目を見開き、2人とも今度こそ固まってしまった。

「比叡お姉様、これは……！」

霧島が比叡に目配せをする。彼女にとっては本当に些細な疑問だったのに、それすらも比叡たちの心を粉々に打ち砕くものでしかなかった。

「そう……ですね。目覚めて早々質問責めなんて失礼なことをしてしまいましたね。あとで私たちはまたここに来るので、それまでゆっくりしててください。水は……ここに置いておきますね」

グラスに水を注いで側の机の上に置くと、比叡は霧島を連れて部屋を出てしまった。彼女は黙って2人の背中を見つめる。

その背中はとて小小さく、泣いているようにしか見えなかった。

誰もいなくなった病室で、彼女は『自分』を確認してみようと思った。

彼女は薄水色の病衣を着ている。

透き通るような白い手。指。そして長いサラサラした茶色の髪。

容姿は？ とても気になるが、ここには鏡はないようだから確認ができない。しかしそれは後でも大丈夫だろう。

「あー、あー。私は……あれ？」

そういえば自分の名前を訊くの忘れていた。それもまた後で。

窓から外を覗いてみると、遠くには美しい海が広がっていた。水平線が遙か先に見える、なんとなくそれに見惚れる。

そして、そのすぐ下を見下ろしてみると、そこにはグラウンドが設置されていて、何人かはベンチで談笑したり、また何人かは運動したりとそれぞれの時間を過ごしている。

「つて、女の子しかいないじゃない!?？」

そう。女の子ばかりで、どこにも男の子がいないのだ。それに、どう見ても小学生っぽい子もいるし、逆に大人のような人もいる。

なんだかここは変な場所だ。彼女はそう思い、外を眺めるのをやめた。

「どうなってるんだろ……(´・`・´)」

少し疲れた。喉も渴いたし、比叡という女性の用意してくれたグラスに手を伸ばす。
瞬間。

「うぐっ？？」

腕に電撃が走り抜けたような痛みにもめき声も漏れてしまった。そして掴み損ねたグラスが倒れて床に落ちてしまう。

「……あ」

パリンッ！ と割れる音がして身体をビクリと震わせてしまう。痛めた腕を反射的に反対の手で抑えながら、彼女はやってしまったことを感じた。

おろおろして周りを見るも濡れた床を拭く物は何もなかった。

「怒られちゃうよ……」

案の定、ドアの外が急に騒がしくなり、いきなり勢いよく開け、鬼の形相で1人の男が入ってきた。

その男は彼女のベッドの下に来るなりすぐに彼女の手を強く握った。

「金剛……！ 本当によかった……!!」

てつきり自分は怒られると思っていたのだが、まさかの全くの正反対の状態に彼女は焦った。

その強さは思った以上に強く、男の必死さがうかがえた。

「少し……痛いです」

「あ、ああ……すまない」

そう言つてパツと手を放し、男は今度はまじまじと彼女の顔を見つめ始めた。

「な、なんですか……？」

「いや……なんでもないよ。それより金剛、怪我は大丈夫なのか？　いつ治りそうなんだ？」

「怪我は……腕を動かすと痛い、です」

そう言いながら先ほどと同じように動かそうとすると、やはり痛みを感じ、それ以上無理に動かそうとはせずにだらんと力を抜いた。

「……そうか。あの時参加していた皆が金剛に感謝しているからな。早く元気になってくれよ？」

「はい……あの……」

「ん？」

「あなたの言う『コンゴウ』とはなんですか？」

「……は？」

男のすべての動きがこの質問で止まった。

彼女自身なんとなくだが、結構な地雷を堂々と踏んでいるような気がした。やがてす

こしして、男はゆっくりと再起動した。

「……金剛は金剛だろう？」

「あ、もしかして私は『コンゴウ』という名前なのですか？」

「そん、な……」

明らかに落胆している男に彼女は焦りながらもなんとか次の言葉を口にする。

「ごめんなさい……私、記憶がないらしいのです」

「記憶喪失ということか？」

「はい」

ちょうどその時、再びドアを開けて4人の乱入者が入ってきた。その内3人は白い巫女服のさつき見た人だから覚えているが、最後の1人は誰だか全くわからない。

「提督、お姉様は……」

苦虫を大量に噛み潰したような顔をして霧島が言う。

「ああ、俺も今知ったところだよ」

「……どうしますか？」

「ちよつと……時間が欲しい」

「……わかりました」

彼女……金剛は会話についていけず、どうすればいいのか全くわからない状態に陥つ

ていた。

気がつくくとベッドに寝かされていて、起きたら起きたで記憶喪失認定されて……と身の回りで事態があまりの早さで進んでいくのだから、もう金剛はその流れに流されるしかなかった。

「金剛さん」

少し疲れたので寝よう、と思い、瞼を閉じようとした。

「……金剛さん？」

「……っ！ ハイッ！ 私は『コンゴウ』ですなっ!?？」

二度目の呼びかけで金剛は自分が『コンゴウ』だということを今さらのように思い出して、ついすつとんきような声をあげてしまった。

金剛以外の皆が驚いた様子でこちらを見たため、恥ずかしくなってしまう、布団を目の下まで引き上げた。

「ごめんなさい、金剛さん。私は航空母艦、加賀です」

「あつ、はい、『コウクウボカン』さん」

そう言うと、なぜか突然皆が小さく吹き出したのだ。

意味がわからず、羞恥に羞恥が重なった結果、顔が自分でもわかるほど真っ赤になっていた。

「な、なんで笑うんですか!?」

「いや、『コウクウボカン』さんって……ぷくく」

榛名が口を一文字に閉じていたが、とうとう我慢できなくなつたようで金剛から視線を逸らして笑つた。

『コウクウボカン カガ』っていう名前ではないのですか?」

「……はい、航空母艦というのはあくまで種類であつて、私の名前は加賀です。まさかこんな間違いをされるとは思いませんでした」

「そうなん、ですか……その、種類というのは?」

「すみませんがそれはまた後ほどに。それより、私はあなたに謝らなければいけません」
次の行動は金剛をひどく困惑させるものだった。加賀はビシツと姿勢を正すと、いきなり頭を下げたのだった。

「あの時は本当にごめんなさい。私の油断がなければ、そもそもあなたがこんな目にあうことすらなかったわ。決して許されることではないことはわかっているけど、それでも謝っておきたかった。ごめんなさい」

ここで、金剛に加賀の言っていることを理解できているか、と問われれば、間違いなく欠片も理解できていないと答える。

金剛からしてみれば突然訳のわからないことを言いだしてこうして謝られているの

だから。

「とりあえず、頭をあげてください」

「それは、できません。慢心しないようにといつも赤城さんに言われていた他でもない私がっ！ 一航戦の誇り以前に、これは……私自身の問題です」

加賀の初めての感情的な発言に金剛以外が驚いていた。いつも無表情で、どんな時でも冷静を保つことで有名な彼女がこうして頭を下げ謝っているのだ。

金剛はどうすればいいのかわからなかったが、これは自分が動かないと何も始まらないようだった。

「私には……その記憶がありません。だから、許す許さないの問題じゃなくて、そもそもお門違いじゃないですか？」

「そんなことは……」

加賀の言葉の続きを遮るように金剛は言葉を紡いだ。それは金剛としてではなく、今、ここで目覚めた『金剛』としての、率直な言葉を。

「だって、この『私』は今初めて加賀さんに会ったんですよ？ そんな人にいきなり謝られてもこつちがびつくりします。ですがその心はちゃんと私に届いています。なので、それは私がかちゃんと記憶を取り戻した時、その時に言ってください」

優しく金剛は加賀の肩に触れ、顔を上げさせた。その表情は無表情だったが、肩の荷

が下りたのか、どこか安心しているようにも見えた。

「うん、よろしい」

「あの……金剛お姉様」

「ん？ 私？」

比叡に呼ばれ、金剛はそちらの方を向く。

「はい。説明が遅れましたが、金剛お姉様を含め、私たち四姉妹は金剛型戦艦なので、知っておいてください」

「……ん？」

「金剛型戦艦です、金剛お姉様」

「金剛型、戦艦？ ……んん？」

金剛とは彼女の名前。しかし『金剛型戦艦』とはまた未知の単語が出てきた。しかも、自分の名前が使われているのだ。

ますます意味がわからなくなり、金剛は混乱の渦でぐるぐると回っている。

「はい、金剛お姉様、私、榛名、霧島、です」

「私とあなた達は……軍艦……ということですか？」

「そうです」

「でも……」

自分の身体を見て、その次に姉妹を名乗る彼女たちを見て、さも当たり前のことを思う。

「どう見ても人間だよな？ 私たち」

「その通りです。でも、軍艦でもあるのです」

「じゃあ、加賀さんも……？」

「はい、『航空母艦』です」

「じゃあこの男性も？」

話を振られた男は苦笑いを浮かべながらかぶりを振った。

「いや、俺は提督だよ。船じゃない。俺はここを最高責任者であつて、金剛たち艦娘を指揮する者だ」

「かんむす？」

「そう。過去の戦争で沈んだ軍艦。その魂が宿った存在。それが艦娘だ」

「では、私もその艦娘、なのですね？」

「そういうことだ」

一気に疲れがどつと出てきた。

とうの昔に金剛の情報はパンクしていたが、そこにさらに詰め込まれたせいで頭が痛い。

船の魂を宿した艦娘、そしてそれらを指揮する提督という存在。

目覚めた直後からとても非日常的なことを告げられた金剛は一瞬冗談なのかと一蹴りにしてしまいたかったが、演技とは思えない彼女たちのそれを見て、金剛の中でしだいに現実味を帯びてきた。

「それで……これから私はどうなるのですか？」

いつまでも寝転がった状態ではマズイと思い、せめて上半身だけでも、と榛名に手伝ってもらいながら身体をゆっくりと起こした。

提督は難しい顔をし、加賀、比叡たちは困っている様子だ。

「正直、今決めることはできない。俺だつてこの現実をまだ受け入れきれていないからな」

提督は金剛の落として割れたグラスを手で拾い、ポケットから出した黒いハンカチで濡れた床を拭き始めた。

「無理をしなければ、明日には車椅子つきで退院することができるそうさ。明石曰く、一週間もすれば全快するそうさ」

提督以外は安堵のため息を吐いたりして金剛の無事を喜ぶ。

「――金剛は忘れているが、俺たちは深海棲艦という敵と戦争をしている。そこに戦いすら忘れたお前を復帰させるのはどうかと思う」

「戦争、ですか」

「ああそうだ。実際、その敵と今までどうやって戦ってきたのかも覚えていないんだらう？」

金剛は一瞬思い出そうとしたが、その成果は得られず、素直にこくりと頷く。

「だから、この戦争に参加するかしらないか、金剛自身に決めてほしいんだ」

「私自身、ですか」

「戦争に参加を決意するもよし、俺たちを忘れて平和な生活を送るもよし。どっちにするかは金剛の自由だ」

「提督、本当にそれで……!?？」

榛名が狼狽して提督を見つめる。

「比叡、榛名、霧島、加賀、お前たちはどう思う。俺は間違っているだろうか？」

4人は下を向いて黙りこくってしまふ。

4人からすれば金剛は戦友であり、その前に大切な友だ。その友がどこかに行ってしまう、というのは本音を言うとうとうしても嫌なのだ。

「一週間。一週間後にどっちにするか聞かせてもらう。それでいいか、金剛」

「はい。でも……」

「わかってる。加賀たちだって本当は一緒に戦ってほしいと思っているはずだ」

「なら私は別に……」

「いやダメだ。同情抜きに真剣に考えてほしいんだ」

提督のその声は頑として譲らない、そんな声だった。

やがて床を拭き終わった提督はそれでグラスの欠片を包み込む。咄嗟に金剛はありがとうございませう、と言うと、気にするな、と提督は返した。

「ねえ、本当は私に残ってほしいの？」

金剛は4人に質問してみる。

それにすぐさま反応したのは比叡だった。

「それはもちろん……！　ですが、提督の言っていることはとても正しいです。だから、お姉様がどつちを選んだとしても……私はそれを尊重します」

自分の姉がいなくなる。そんな恐怖を比叡は抱えているのだろう。そんなことを言えば榛名、霧島にだってこれは当てはまることだ。

4人そろって家族なのだ。1人でも欠けてしまってもうそれは家族とはいえなくなってしまう。苦楽を共にし、生きてきた家族。今の金剛にはそのような実感があまり湧かないが、比叡たち妹から見たらどうだろうか。

……それはとても辛く、悲しいことだろう。

「新しい水は後で俺が持つてこよう。それに……ほら、もう夕方だ。俺も仕事が残って

いるし、お前たちだつて明日の準備があるから四六時中金剛の側にはいられない」

提督は、お前らも後で戻れよ、と加賀たちを催促させた後に部屋から出ようとした。

「明日から一週間、金剛は車椅子なしではこの鎮守府を回れない。これでは誰かがいないといけないようだなー」

そして、胸ポケットからメモ帳を取り出して確認すると、わざとらしく棒読みで言い始めた。

「おつとー、どうやら運良く加賀、比叡、榛名、霧島に明日から一週間休暇が与えられているようだー。有意義に使うといいー」

そう言い残し、提督はドア開け、部屋を出て行った。

加賀は相変わらずの無表情だったが、3人の表情が光が射したように明るくなったのは言うまでもない。

外へ行きましょう

朝が来た。

金剛は窓の方に寝返りを打って、カーテンを開けるか数秒考え、結局開くことにした。サツと勢いよく開くと、飛び込んで来たのはこれでもかというほどの眩しき。

「おうっ」

手で目を覆いながら、提督が持つて来てくれたグラスの水を飲み干す。

さすがに一晩置きっぱなしだったから少しぬるくなっていた。

腕の痛みも幾分かマシになっていて、無理をしなければ支障はおそらくない。長時間腕を使う作業はまだ当分できそうにない。

窓がちよつとした鏡のような役割をはたし、金剛の顔を薄く映す。

そこにいたのはどう見ても美少女。

「……」

顔をぺたぺたと触ると、その逆をそれは映す。

頬をつねってみても、やはり同じ。

「……ひゃん」

そして、金剛はある不自然なものが映っていることに気がつく。それは寝る姿勢によつて様々なフォルムをとるもの。

「……寝癖だ」

右側でぴよんと独立し、ワタシダ！　と言わんばかりに自己を主張している寝癖を見つけたのだ。

頑張つて手で抑えようとしても、離してしまえばフザケルナ！　とバネのように元に戻る。

「んんんんん！」

なんだか頭にくる。何度やっても寝癖は治らず、ついに金剛は諦めてしまった。これはもう別の生き物なのだ。そう思い込まないとやつてられない。

「私が悪いんじゃないくて、この寝癖が悪いんだから……ん」

最後にもう一度だけ挑戦してみたが……世の中、思い通りにならないことなど当たり前である。フンツ！　と元に戻り、もう完全に諦めることにした。

「金剛……さん？」

そして、突然後ろから誰かに名前を呼ばれて、ふあっ！　と馬鹿丸出しな声を漏らしてしまふのだった。



ー正直に言おう。

あの時はもうダメかと思った。

工作艦、明石。彼女の仕事は主に艦娘たちの装備の手入れである。改造をしたりもあるが。

彼女はあまり戦場には行かない。だから、サポートに力を入れることとなった。しかし、そういった仕事だけではない。怪我人の看護なども彼女の仕事に含まれる。

たいていは入渠すれば治る。なのでそのような仕事は滅多に回ってこない。滅多に、だ。

……あの時がその『滅多』だった。

あれは誰が見ても入渠では治らないと心の中で悟っただろう。なにせ、明石も全く同じ思いを抱いていたのだから。

白い担架に乗せられ、それを一瞬で赤く染めながら運ばれる無残な金剛の姿を間近で見た明石は改めて死の恐怖というものを認識した。

背筋が凍り、息がつまり、知らず知らずのうちに担架の骨を握る手が震えていた。もし自分も戦場に行くと、こうなるかもしれないと思うと、どうしようもなく怖かった。

緊急かつ最優先で入渠させた結果、金剛の見た目は元どおりになった。見た目だけは。

艦娘は人間より頑丈な身体を持つている。ちよつとやそつこのことでは怪我はしない。せいぜい、3階建ての屋上から飛び降りて小破に届かないくらいだ。

見た目だけが治つても、その内側でどんな酷い傷を負つたのかは、実際起きない限りわからない。

マズイのは神経系に大打撃を受けた。最悪は精神的にやられた、だ。

神経系なら入渠である程度修復され、長い時間をかければ治る。精神的に、だつたら……もうどうしようもない。もしかすると、根気強いカウンセリングで癒やすことができるかもしれないが、そんな都合のいいことは起こらない。

トラウマ、というものは本当に恐ろしいものだ。以前、明石は精神病についての本を読んだことがあるが、そこでそれがとても厄介だということを読んだ。

何がトラウマを呼び覚ますのかわからないがその理由だ。これほど厄介なことはない。

金剛が目覚めたのは入渠してから4日後のことだった。

その間ずっと鎮守府では緊張が張りつめていた。

金剛はどうなったのか、なんて言葉は誰も口にしない。その言葉はもうある意味禁句となり、そのせいで大きな不安が胸につつかえ、それがさらに緊張に拍車をかけるのだった。

そして、突然走ってきた榛名に呼ばれ、直接金剛の状態を確認したところ、もう最悪中の最悪。明石が最も危惧していたことだった。

それも、単なるトラウマではなく、記憶喪失。

廃人にならなかつただけまだ喜ぶべきか、と考えてしまった自分を明石は深く呪った。

◆ 「おはようございます、金剛さん。朝食を持ってきました」

そう言いながら入ってきた桃色の髪の人、明石。昨晚寝る前に一度検診ということで診てもらったからよく覚えている。

金剛は先ほどの声で完膚なきまでに恥ずかしさに打ちのめされ、明石に気の抜けた返事を返した。

ふふ、と小さく笑うと、明石は朝食を乗せたお盆を側のテーブルの上に置いた。

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして」

こちらを向いて、ニコリと微笑む。一瞬ドキツとしたが、彼女は女であり、その辺の心は動じない。

「食べられますか？」

「はい、でも……」

そう言つて金剛は気まずそうに自分の腕を見る。昨日に比べると楽にはなっているが、器用に箸を使つて食べるのはまだ難しそうだった。

「わかつてます。私が食べさせてあげますね」

明石は椅子に座ると、箸を手に取り、白米をつまむと、金剛の前に持つてきた。

素直に金剛は口を開け、それを食べ、咀嚼する。

「おいしいですか？」

「おいしいです、と返したかったが、まだ口の中に残つていたので、それを呑み込んでから答える。」

「ふふ、よかったです」

今度は明石は器用に焼き魚の身を切り開いて、一口分を持つてきた。

「……ん、あ?」

しかし、食べようとした金剛の口から箸が離れてしまった。

明石はというと、頑張つて笑いをこらえようともう片方の手で口を隠している。

「いや、ごめんなさい。ちよつとイタズラがしたくなつてしまいました」

「……もう」

「次はちゃんとしめますよ。金剛さん、はい、あーん」

「つ……?」

言つたそばからまたもや明石は爆弾を投下した。

今食べようとしてたのにつ! と金剛は心の中で毒づきながらもさつと頬を朱色に染めた。

「何するんですか?!?」

「何つて……あーん、ですよ。ほら、カップルとかがよくやるつていう」

ニヤリ顔の明石がそれが何か? とでも言いたげに再び箸を金剛の口元に持つていった。

「……」

「……」

無言のにらめっこが続く。ここには2人しかいないから、誰かが介入してこの奇妙な状況が変化することはない。

やはり抵抗が強い。明石が変なことを言い出したからどうしても意識してしまふ。

しかし、明石の介護なしでは食事がとれないのは事実であるし、感謝もしているからどうも抵抗にくい。

少しして、ついに金剛は折れ、躊躇いながらも受け入れることにした。

「あ、あーん」

「はい」

羞恥に満ちたこのやり取りは、結局金剛がお腹いっぱいになる最後まで続いたのであった。



「たぶん、もうすぐしたらあの4人が来ると思うので、あとは任せておきます」

そう言つて、半分食べ残した朝食をお盆に乗せて出て行つた。可愛かつたですよ、と最後に言い残して。

案の定、その4人が部屋に走りこんできたのはそれから10分もなかった。

「お姉様！ ただいま参りました!!」

ドアのつくりが弱ければ絶対に壊れていた。それほどの強さでドアを開けて比叡、榛名、霧島が声を揃えて入つてきた。その後ろを加賀がついている。

「おはようございます」

「おはようございます、お姉様！」

「うん、おはようございます」

またもや3人の声が揃う。本当にこの3人は仲が良さげだ。加賀が挨拶したのはわかつていたが、それをかき消すほどの音量。

「ではお姉様、早速ですがこの霧島が外へお連れしますねっ！」

それはもう現実にキラキラのエフェクトを出しそうなまでに目を輝かせた霧島が、鼻息まで荒くして金剛に詰め寄った。

「いえ、ここは榛名が！」

ぎゅう、と霧島を押ししのけ榛名が。

「普通に考えてここは次女である私、比叡ですよねっ！ お姉様っ!!」

最後にぐいぐいっつ押し込んで比叡が割り込んできて、結果的に金剛は3人の妹たちにぎゅうぎゅうに押しつぶされそうになってしまった。

「ちよっ、ちよっと……ぐるじいでずう……」

助けて加賀さん！

金剛は必死に頼みの綱である加賀に救いの目を向けた。そして意味が通じたのか、加賀は口を開いた。

「……ではここ間をとって私が」

「加賀さんは黙っててください！」

「あ、はい」

素晴らしい3人の被り声で加賀はしゅんと一撃でおとなしくなってしまった。

頼みの綱、脆すぎい！ 金剛は目力だけで加賀に訴えたが、気まずそうに視線を逸ら

されてしまった。これで金剛はシスコン3人に流されることになってしまった。

「ではこうしませんか？ 私、榛名お姉様、比叡お姉様の順で1日交代ではどうでしょうか？」

「ハッ！ と霧島が何かに気づいたようでご自慢のメガネくいつをして明らかに悪者がするような笑みを浮かべながら提案を出した。

頭がいい霧島、腹黒い。霧島の提案した順番で一週間のローテーションを組んだとすると、3人とも2回は金剛の車椅子を押せることになるが、最後の7日目で必然的に霧島に3回目が回ってくるのだ。

加賀はそれに気づいたようだが、あえて口出しはしない様子。

「順番ですね、それなら榛名は大丈夫です」

「それなら……私も……はい」

「……どうやらこの2人はポンコツだったようだ。

おそらく金剛の車椅子が押せる、という喜びしか頭の中にはなく、それ以外のことはまるで気にもとめていない。

霧島はというと、勝利の笑いが我慢できず、目に出てしまっている。口をもごもごと動かして必死に我慢している。

「では決定ですね。ふふふ……では、今日は私が金剛お姉様の車椅子を押させてもらいます。いいですか？」

「あ、はい。お願いします」

「では、失礼しますね」

霧島は金剛が被っていた布団を退け、身体を倒させた金剛をお姫様抱っこで持ち上げた。

「わわっ!?!」

そして、そのまま車椅子に降ろす。

「ありがとうございます、霧島さん。ちよつと恥ずかしかったですけど……」

「いえいえ、こちらこそごちそうさまです」

「……え?」

「……え?」

ついつい霧島は本音を漏らしてしまったみたいで、2人とも動きを止めてしまった。すぐ隣では比叡と榛名が羨ましそうにしている。

お姉様方は2回できるからいいではないですか、まあ……私は3回ですけどね。

今のボロがまるで無かったように霧島は金剛へと笑みを向ける。すると、金剛も返してくれ、彼女はとても幸せに感じた。

というのは表面上のことだ。もちろん本当にごちそうさまであったのだが。

同時に、霧島はシヨックを受けていた。

「ーあまりにも金剛が軽かったのだ。

少し痩せたのはわかつていたが、それでもだ。力を入れて持ち上げようとした自分がバカに思えるほどの軽さだった。

おそらく加賀、比叡、榛名も軽々と金剛を持ち上げた霧島を見て同じショックをうけたはずだ。それでも顔に出さないように普通を装った。

金剛は自身が四日間も眠りに落ちていたことを知らない。今朝も他の艦娘たちの食べる量の半分を与えたが、その半分しか食べなかつたとすれ違った明石から聞いた。つまり、金剛は普段の食事の四分の一しか食べていないのだ。

もしかしたら無理をしているのかもしれない、ついそう思ってしまったが、それは金剛の純粋な笑顔を見せつけられるとその疑惑は一気に晴れた。

悲しみを誤魔化すようによしっ！ と自分に喝を入れ、霧島はハンドグリップを掴む。

「さあ、行きましょうお姉様。……まずはどこへ向かいましょうか？」

そして金剛は目覚めてから初めて、この部屋を出るのだった。

心臓がばくばく打っているのがよくわかる。緊張しているのかもしれない。でも、楽しみにも思っている。これから一週間、できるだけたくさんものを見よう。そう心の決めた。

「ところでお姉様、私たちがずっと思っていたのですが、これってまさか寝癖ですか？」

本当によいのですか？

彼女は海の上でひとり佇み、静かに歌う。

「——♪ ——♪」

そしてどこかへ消えた。



車椅子に乗せられ、霧島に押されながら金剛は病棟を抜けた。

正面玄関をくぐると、まず初めに感じたのは、潮の匂いだつた。ずっと室内にいたからわからなかつたが、この匂いはどこか懐かしい気がして、胸を張つて大きく深呼吸した。

そのすぐ両脇には比叡、榛名、加賀と、周りから見ればいつも百合百合しい四姉妹に加賀が加わるという異色な構成だ。

「金剛お姉様、どこに行きますか？」

霧島に尋ねられ、金剛は周りをぐるりと見渡す。正面はグラウンドが広がり、その右の方には赤レンガが特徴的な建物が。そしてその周りに様々な建物が建ち並んでいる。

「じゃあ、一番近い赤レンガの建物に」

了解しました、と返すと霧島は車椅子の向きを変えた。

「そういえば、どうしてグラウンドに誰もいないんですか？ 昨日は何人かいたはずなんですけど」

誰もいないグラウンド。誰かが直し忘れたか知らないが、ボールが一球転がっている。

「今は朝食なのよ。もうすぐすると皆出てくると思うわ」

加賀はボールを拾ってから答えた。

「じゃあ加賀さんたちは朝食を食べてないのですか？」

「いえ、ちゃんと食べました。それはもう、大急ぎで」

「加賀さんの量は赤城さん並みに多かったですからね。榛名は大丈夫でしたが、それでも同じ時間に食べ終えていたので、加賀さんの食べる早さは異常ではないでしょうか？」

「比叡もお姉様のために、気合い！ 入れて！ 早食いしたんだから!!」

「私は計算通りに食べましたね」

最後にさすがが私、と霧島がぼそり呟いたのが金剛の耳にはつきりと聞こえたが、あえてツツコまないでおいた。

こころも金剛のために早食いまでしてくれるのはとても嬉しいことなのだが、気持ち悪

くなったりしないか心配でもある。

しばらく談笑の後、やがて目的地の建物に着いた。

「そういえば、この建物は何の建物ですか？」

「本棟よ、提督のおられる執務室もここにあるの」

「加賀さんはその執務室に行ったことはあるのですか？」

「はい、報告などで時々」

「へえ、そうなんですね」

まだまいち実感が湧かないが、これが上司と部下の関係というものだろうか。

昨日、必死の形相で部屋に入ってきたあの男が提督なのかと思うと、なんだか妙な感じだ。どういった経緯を経て提督に就任したのかは知らないが、上に立つような怖そうな人には見えなかったし、歳もたぶん二十代ぐらいだろう。

「この時間なら提督は部屋にいらっしやると思うので、ついでに寄って行きますか？」

ボールを倉庫に直しに行った加賀を尻目に榛名が尋ねてきた。

「でも……もし仕事中だったりしたら邪魔にならないですか……？」

「大丈夫ですよ、むしろ喜んでくれると思いますよ」

「どうしてですか？」

「それは……行ってみればわかりますよ」

加賀が倉庫から戻ってくる。その手には鍵が握られていた。

「……鍵もそのまま……少し頭にききました」

「昨日は……確か暁ちゃんたちがサッカーをしていたような気がしますよ」

「それは本当ですか、榛名さん。なら、きっちりしごかなくては」

「ははは……ほどほどにね」

苦笑いを浮かべる榛名に加賀は善処します、と軽く返す。

エレベーターに乗って3階に登った5人はやがて執務室の前に立った。

記憶を失う前は。

記憶を失う前は、少なからずここを通ったことがあるはずだ。今は覚えていないが、そう考えてしまうとなんだか、自分ではあるが自分でない曖昧な境界線上に立っているように錯覚してしまう。

金剛は自分の記憶が果たして戻ることができるのだろうかと思案する。

きつと今金剛を世話してくれている4人はその努力を惜しまないだろうが、どうも取り戻せる自信がない。

これは初めから諦めている、という部類に入るかもしれない。もちろんそんなつもりは毛頭ないが、客観的に指摘してしまうとそうなってしまう。

金剛が恐ろしく感じるのは、記憶——『金剛』——を取り戻した時、それを今の金剛

が受け入れられるかという懸念であった。

「では入りますね」

そう金剛に確認してから比叡がドアをノックした。ガタツと物音がして数秒後にどうぞ、と返事が返ってきたので、比叡はドアを開けた。

「失礼します」

全員が中へ入る。

提督はというと、大きな机に無造作にばら撒かれた書類をこなしている最中だった。

「こんな朝っぱらからどうしたんだ？ いきなりノックされて驚いたじゃないか」

「それは……ごめんなさい」

「ん、まあ別にいいけど。で、どうしたんだ？」

提督がふう、と息をついてちようど終わらせた書類の一部を机の隅っこにおいてやつた。

「特に理由はないです。金剛さんを案内するついでに来ました」

「おおそうか。まあここにいてもいいけど俺は執務中だからお静かに頼むよ。といって、すぐに終わるんだけどな」

提督はペンを片手に持ち、それを器用に回しながら言った。

「ああ、そのソファアに座って待ってればいい。机の上に和菓子があるから適当に

もらっててもいいぞ」

「いいんですか??」

「なんだよ榛名、そんな目をキラキラさせなくても……」

「ではいただきますね!!」

「お、おう」

誰よりも早くソファアに座り、和菓子を食べる榛名の姿に金剛は啞然としながら見ていた。その後比叡、霧島、加賀も和菓子に手を出した。

「お姉様、和菓子いりますか?」

「うーん、じゃあ一個だけもらいます」

「はい、お姉様」

霧島が袋紙を広げて中の饅頭を金剛の元へ運んだ。

「はい、あーん」

「え……?」

「……! 待ちなさい霧島! それは卑怯よつ! そのポジションは私ですツツ!!」

比叡の必死の止めが入りそうだ。

霧島は計算高い。もしかしたらこうなる可能性を考慮して車椅子をあえて霧島の隣……つまり一番近い場所に移動させたのかもしれない。というよりこれは確信でしか

ない。

榛名はというと口いっぱい頬張りながら何かを言おうとしているが、女の子としての振る舞いとして言えまいと苦悩している。

「またですか……？」

金剛のその一言に提督も含む皆に衝撃が走った。

榛名の手は止まり、霧島のメガネがずり落ちる。比叡石のように固まり、加賀はそんな様子の皆を見てオロオロしている。

「提督、ペンが折れてしまっています」

「ああ、本当だ。こんなこと今までなかったのに……なんでだろうな」

予備ならある、とペンをゴミ箱に捨てると、提督は新たなペンを引き出しから取り出した。

「『また』……ですって……!?？」

ぼとり、と饅頭を床に落とし、それすらに気に留めない様子で霧島は突っかかって来

た。

「いったい誰がそんなことを……！ うらやま……いえ、うらやましい!!」

ついに隠すことなく本心を言いきった霧島はすでに我を忘れ、メガネを直すこともしなかつた。

「あ、いや……ほら、明石さんに朝食を……ね」

「わかりました！ 明石さんですね!!? この霧島が『お話』してきますねっ!」

有無を言わずに霧島はボタンツ！ とドアを開けて獲物を見つけた猛獣の如く飛び出していつてしまった。

一見頭がいいように見えるが、金剛のことになるとついつい回りに盲目になってしまう。実際、今霧島がいなくなってしまったことでこの後金剛の車椅子を押す者が不在となった。

「もう、本当に霧島は金剛お姉様にお熱なんだから」

くすり、と笑い、榛名は霧島が落とした饅頭を拾い上げた。

「ちよつと待つてくださいね」

すると、新しい饅頭を差し出してとてもスムーズに金剛にアーンをさせた。

「美味しいですか？ 後一口で残りいけますか？」

「はい、たぶん」

「では……はい」

「ん……もぐもぐ……ありがとうございます、榛名さん」

「いえいえ、これくらい容易いです。それはそうと加賀さん、どれだけ持つて帰るつもりですか？」

ジトツと目を加賀に向けると、和菓子を大量に懐に入れようと加賀は奮闘していた。

あれほどあつた和菓子はもう残り2、3個となり、どう見ても原因はこの空母ではない。

「これは……赤城さんへのお土産です」

「多すぎでしょう!!？」

ナイスなツツコミが比叡から入る。しかし、彼女の目の前に広がるゴミの山を見てしまふとどうも説得力に欠けてしまふ。

「の、残りは金剛お姉様のために残したらどうでしょう？ ほら、一個しか食べてないですし」

「むう……わかりました」

いそいそと懐から出す饅頭の量に驚きながら金剛の、赤城という人の印象が大食いということで固定した。

「加賀、俺にもひとつくれ」

「わかりました。仕事が終わったのですか?」

「そうだな……うん、うまいな。よっこいしょつと」

提督は霧島のいた場所に座ると、ぐあく、とだらしなく力を抜いた。その拍子で被っていた帽子がずれ、彼の顔を覆い隠してしまった。

金剛はそのずれた帽子をとり、机の上に置いた。

提督の目が金剛と合い、どことなく提督が少し赤くなる。

「お……サンキュ」

「いえ、どういたしましてです」

しかし、数秒たつても提督は金剛から目を離そうとはしなかった。

「な、なんですか?」

「そつちこそどうしたんだよ、ずっと俺のこと見て」

「提督さんもそうじゃないですか」

「いやいや、そつちが……」

「いえそつちからじゃ……」

そんなやりとりをなん度も繰り返して、とうとう折れたのか、提督が唐突に吹き出した。

「な、なんですか」

「まさかお前とこんなやりとりができるなんて夢にも思わなかったからな。こ……お

となしい金剛もいいもんだ、うん」

ニヤニヤする提督はなんだか気持ち悪かった。

「気持ち悪いですよ」

「ごめんごめん、金剛はいつもあれだ、隙あらば俺に抱きつこうとしてきたからな。どっちかというときの時のお前の方が気持ち悪かったな」

「だ、抱きつき……えええ？？」

前の金剛はそんなことをしていたのか。恥ずかしいことこの上ない。

かつての自分が提督に……男の人に抱きつこうとしていただなんてとても想像できなかった。

「比叡さん、提督さんの言ってることは本当ですか？？」

「本当ですよ？　というより、提督LOVE？」

「そんな……」

もう一個もーらいつ、なんて言いながら隣でニシシと笑いながら饅頭を手取る提督を観察するも、どうもそのような感情は起きない。

「お前はお前だよ、金剛」

「え？」

饅頭を飲み込んでずずずとお茶を啜った提督が突然真剣な顔になって口を開いた。

「無理に記憶を取り戻せるよう頑張れなんてことは言わない。確かに以前の金剛と今の金剛では違うさ。でもどっちも紛れもなく『金剛』だ。他の誰でもない、な。だから、自分に自信を持つてほしい」

「ありがとうございます……」

「ん。……おい加賀、今こっそり懐に饅頭入れたら」

「……………は譲れません」

「いや譲れよ。俺の分がなくなるだろうが」

この温度の急激な変化はなんだろうか。一瞬だけいい人だな、と思ってしまうた自分が愚かに感じてしまうような掌返しだった。

でも……それでも……この人は面白い人だな、と思うのだった。



「では、失礼しましたー」

加賀から饅頭を奪還してからややあつて金剛たちは帰っていった。金剛の分の饅頭を渡すと喜んでくれたからよかった。

「さて、と……ん？ 榛名？」

全員帰ったのかと思っていたが、榛名だけは部屋に残っていた。

「どうしたんだ？ あいつらのところに行かないのか？」

「……提督、お話があります」

「……わかった」

昼前の、高く昇った太陽の光が窓から射し込んでいる。

時計はちょうど12時を差し、チャイムが鳴る。

「提督は……これでいいのですか？」

「金剛のことか？」

「はい」

「いいと思っっているが？」

「本当に、ですか？」

「……」

「私、知ってるんですよ？ あの日、金剛お姉様が出撃する前、提督が話されていたことを」

「なんで……」

「あはは……偶然近くを通りかかって……聞こえちゃいました」

「そうか」

「本当はここにいて欲しいんですね？ 本当は記憶を取り戻してもらって、いつも大事そうにポケットの中に入れてある『それ』を渡したいんですね？」

榛名に目で射止められ、提督は観念したように、ポケットから小さな箱を取り出した。「もちろんだとも」

「ならどうして……!」

箱を開け、中の指輪を手取る。美しく輝くそれは、窓からの光を反射してさらに美しさを際立たせている。

「『あなたの言う『コンゴウ』とはなんですか?』って訊かれたんだ」

「提督がひとりで病室に入られた時ですか?」

「そう。金剛が目を覚ましたことしか頭になかった俺は、その言葉でどん底に落とされたよ」

指輪を弄び、いろんな角度から眺めている。

「……少しだけ、邪な考えを持つてしまったんだ。強引にここに残らせて、記憶を取り戻させて……って。ああそうだよ、それがいけないことだってわかっていたよ」

「榛名には……わかりません。そんなに金剛お姉様のことが好きなのに、ああして選択させようとしたのが」

目に涙を溜めながらも、己の意見を、妹としての姉への思いを提督にぶつけた。

「私は金剛お姉様が大好きです! 私にとつて……いえ、比叡や霧島にとつても本当に本当に大事なただひとりのお姉様……! 榛名は怖いのです。金剛お姉様が私たちを

残して、どこかへ行つてしまふのが……。そう思うと、胸が苦しくて苦しくて、もう……。うぐつ、ううう、うう」

そこまで言い切るととうとう榛名は泣きだしてしまつた。

提督は全艦娘の前で、金剛が目覚めたことを伝えた時に湧いたあれを忘れていない。それはつい昨日のことであり、今でもまだその熱は冷めてないだろう。彼女のお見舞いに行きたいと言ひ出した何人もの艦娘たちを押さえつけるのに苦労したのも記憶に新しい。

現在の金剛の状態は伝えてはいるが、残るかどうかなどの話はしていない。

話すべきだったかと振り返れば、それは不必要であつたと今でも思う。余計な不安を抱いてほしくなかつたからだ。

そして、目の前で泣いているのは、艦娘であり、兵器であり、そして人間でもある。

兵器に自我を与えた人類の残酷なことよ。

この鎮守府で皆で励まし合つたり、訓練したり、出撃したりと、その中で兵器では絶対に築かれない信頼や絆などが艦娘たちの間では生まれる。そしてそれはやがて大きな運命共同体と成長する。

……艦娘はただの兵器とは違うのだ。

提督は指輪を箱にしまうと、椅子から立ち上がった。そして、袖で涙を拭う榛名に近

づくと、無言で抱きしめた。

「あ……」

突然感じた温もりに榛名は小さく声を漏らす。そして、それを拒絶することなくむしろ受け入れるように提督に抱きついた。

「もう今さら変えることはできない。それはわかるな？」

胸に顔を埋め、榛名はこくりと頷く。

「でも、こうして自分の姉のために涙を流せる。それはとても、とても大事なことだ。その気持ちは絶対に忘れるなよ。それはただの兵器じゃない、人間だっていう証拠なんだから」

ぎゅつと提督は強く抱きしめる。

「でも、榛名はどうすればいいかわかりません……」

そう言うのと提督は明らかに落胆したような大きなため息を吐いてみせた。

「バカだなあお前は」

「え……？」

「なんのために俺が一週間の時間をお前らに作ってやったと思ってるんだよ」

「それは……」

「わかるか？ この一週間で金剛はどうするか決めるんだぞ？ つまり、その間はお前

らのアピール期間ってわけだ。ちよつとひどい言い方になるかもしれないけど、妹3人と加賀でこれでもかかってぐらいあいつを揺さぶってやればいい。そしたらこつち側に来るかもしれないだろ？」

「そう、ですね」

「で、今お前はそのキチョーな時間を俺と過ごしてるわけだ。ほれ、さつさと行ってこい。まだ1日目の午前中しか過ぎてないぞ」

提督は榛名を離すと、両手で頬を挟んだ。

「なんれふか……」

「うーん、なんとなく。早く目を拭いていけよ。可愛い顔が台無しだぞ？ なんてキモい言葉はかけてやらないが、その赤い目を隠すためのサングラスならかけてやるよ」

なぜ持っているのかわからないサングラスを制服の内ポケットから抜き出した。

榛名は提督のポケットはかの4次元ポケットなのかと驚きつつも、やんわりと断つた。

「なんですかそれ……いらぬに決まってるじゃないですか」

「ごしごしと目をこすり、特上の笑顔を提督に向け、榛名はドアを開けた。」

「提督は、本当に下手ですね」

「安心しろ。自覚はしている」

「では……失礼しました」

「はいよ」

そして榛名が部屋から出て行った。廊下を走っていくリズムカルな音が聞こえる。

「ちよつとドキッてしたぞ、おい」

提督はそんな独り言を呟きながら棚からとあるファイルを抜き取り、机の上に広げる。

「こいつが……あの時言っていた……」

まだ確証はない。しかし、特徴はほぼ一致している。

ファイルの名は『超極秘中の極秘 未知の深海棲艦』。1ページ目に貼られている写真は解像度を限界まで引き上げて拡大したもの。それでもボヤけていてちゃんと確認できないが、これだけはわかる。

——その深海棲艦には、一切の武装がない。

一航戦は大食い

「次はどこに行くのかしら?」

執務室を出た金剛たちはエレベーターに乗った。霧島がいなくなったので、代わりに加賀が車椅子を押している。

比叡が一階のボタンを押し、閉を押す。

「……あれ? そういえば榛名さんは?」

「本当ね。いないようだわ」

気づけば、いつの間にか榛名がいなくなっていた。どうりで来た時と比べてエレベーターの狭さを感じられなかったわけだ。

「迷子にならないか心配ですけど……まあ大丈夫でしょう」

「それどつち!?」

「合体して大心配……でしょうか?」

「……」

「……」

「……ごめんなさい」

ポーンと一階に着いた音がして、3人はエレベーターを降りた。廊下を歩き、日差しが眩しい外へ出た。

正直本当にどこに行けばいいか金剛には全くわからなかった。

最終的に、もう適当に順番に見ていこう。そう2人に提案しようとした、その時だった。

ひとりの女性が曲がり角からスツ、と現れた。綺麗な黒髪を惜しみなく垂らし、手には弓矢を持っていた。

「あ、加賀さんじゃないですか」

その女性はこちらに気づくと、加賀に声をかけた。トタタと走り寄って2人が並ぶと、服装が似ていることに気づいた。

「赤城さん……こんちには」

「はい、こんちには……って金剛さん!?!?」

「はい、金剛です。こんちには。えっと……」

「私は赤城です、金剛さん」

赤城……そういえば、加賀がよく口にしていた人物だ。

どこかおっとりしていて、頼り甲斐のある人、が金剛の、赤城への第一印象だった。

「あかぎ……あかぎ……覚えました」

呪文のように何度か呟いて頭の中に叩き込む。

「ところで赤城さん……やりましたよ」

「何がですか？」

ニヤリと口角を上げて加賀は懐に手を入れた。そして出て来たのは……。

「……わかつているじゃないですか」

「はい」

先ほどの執務室から持ち出した饅頭だった。さらに驚いたことに、その数は6個もあつた。

果たして赤城という人物はどれほどの食いしん坊なのか。気になる。

「まあ、これは後ほどで……ところで、金剛さんは今は暇ですか？」

「まあ……言われてみれば暇……なんでしょうね」

実際のところただ車椅子を押されてぶらぶら見学しているだけだから。なにも否定することはしない。

それに、彼女と行動を共にすることで何かを思い出せるかもしれない。

赤城は嬉しそうにそれはよかったです、と手を合わせた。

「ちようど今から演習場に行こうと思っていたのですが、見学に来ませんか？」

金剛は快く了承しようと思ひ、比叡と加賀に確認を取ろうとしたが、迷わずに首肯さ

れ、せつかくだから見学させてもらうことにした。

「じゃあ、見学させてもらいます」

「ならついでに私も赤城さんと一緒にやります」

「もちろんですよ。努力は絶対に裏切りませんからね」

「そうですね。今から道具を持つてくるので、金剛さんをお願いします」

はい、と喉をのぼって口から発せられようとした時、赤城は『それ』を見た。

比叡だ。比叡がなにやらおかしい行動を始めた。

こつそり赤城にだけ見えるように手を出して、二本の指を立てたのだ。全然意味がわからない。

そして、次に現れた物を見て、赤城は目を見開いた。

――饅頭だ。

紛れもなく、饅頭であった。

そして、再び二本の指を立てる。

比叡の考えていることはわかった。

比叡は赤城を買収しようとしているのだ。饅頭で。どれだけ金剛の車椅子を押したいのかうかがえる。

次に比叡は三本の指を立てた。

「いや……ここは比叡さんにお任せします。ほ、ほら、大事なお姉さんですからね」
赤城は食欲に勝てなかった。

◆ 「お待ちせしました」

「……では、始めましょうか」

金剛が連れてこられたのは岬。海上には何個かのがあつて、たぶんそれを撃つのだらう。

そういえば、まだ榛名と霧島に合流していない。榛名は執務室に残り、霧島は明石に『お話』をしに行つたきりだ。

探しに行きたいのもやまやまだが……まあ、比叡の言う通り、大丈夫だということを信じる。

「赤城、いきまますッ！」

赤城が矢を放つ。

空気を裂く気持ちのいい音を鳴らしてまっすぐに飛び。

炎に包まれ、数機の爆撃機へと姿を変えた。

「……え？」

それらは的に向かって飛翔し、機銃の一斉掃射で破壊した。

「どうでしたか、金剛さん。これが私たち空母の攻撃方法です」

ドヤ顔で赤城はこちらを向いた。

金剛には今の現象を理解することができなかった。それはもうはつきりと、ゼロだ。矢が爆撃機に変わったのだ。

これはもう物理法則などの前にこの世の摂理からも明らかに逸脱していた。

「ちよつと……驚きすぎて……あはは……」

「そうでしたか？」

「だって矢が爆撃機に変わるんですよ？ 顎が外れるかと思いましたがよ」

開けた下顎に手を当て、顎が外れるを実演してみせる。

その金剛の行為に赤城は目を見開き、ぶつ、と吹き出した。

「……なんだか変な感じですね」

風が吹き、赤城の長い髪がなびく。

「え？」

「金剛さんはいつもハイテンションでした。でも今はすごくおとなしい……それはそれで面白いんですけどね」

くすりと笑い、こちらに歩いてくる。その後ろでは加賀が待つてましたと言わんばかりに矢を放っていた。

「私ってそんなに変わりましたか？」

「ええ、とても。180度変わりましたね」

「……やっぱり皆が求めているのは私ではなく、以前の金剛でしょうか？」

提督にも、そして赤城にもお前は変わった、まるで別人のようだ、と言われてしまった。金剛はそれをどう受けとればいいのかわからないでいた。

自分はただセーブデータをなくしただけなのか。それともセーブデータそのものがなくなってしまったのか。どちらか、なんてわかるわけがない。

「率直に言いますと、前の金剛さんを求めているのは確かです。この私も含めて」

「そう、ですか……」

「でも、だからといって今の金剛さんを蔑ろにするつもりなんてありません。ですよ、比叡さん」

「そうですよ！ お姉様は皆のお姉様なんですから！」

いい顔をしてサムズアップする比叡を見ると、なんだかマイナスに考えていた自分がまるでバカに思えてしまった。

そして加賀も訓練を終えたようで、3人の元に寄ってきた。

「お姉様お姉様」

「ん？ どうしましたか？」

比叡はもじもじとしていてなんだか落ち着かない様子だ。

「比叡さん、じゃなくて、普通に比叡って呼んでほしいです……」

「ああ、そうですね」

「あと……敬語も……」

「それで……うん」

目覚めてから今の今まで金剛は敬語でしか話していなかった。姉妹、や仲間、と言われて納得していないわけではなかったが、やはり自分でも知らない心のどこかで彼女たちに遠慮していた。

一週間しかないのだ。

どちらを選択するかによるが、一週間で彼女たちと別れるかもしれないのだ。

せめて、その限られた間だけでも、精一杯関わって……いや、自分から関わっていき
たい、と……。

「じゃあ……比叡……？」

「もう一度……」

「……比叡」

「はい、比叡です！」

アハ！ と嬉しそうに笑うと、比叡は勢い構わず金剛に飛びついた。

ぎゅう、と締め付けられる強さが比叡の愛情そのもののように感じられて、金剛も嬉しくなった。それと同時に色々なことが吹っ切れてしまった。

「もういつそのこと皆のこと呼び捨てにしようかな。どう思う？ 赤城？」

「ええ。もちろんいいと思いますよ。その方が他の子たちも接しやすくなるでしょうね」

赤城の目は金剛を通り過ぎ、その後ろの艦娘寮を捉えていた。金剛も彼女につられて後ろを振り向く。

耳を澄ませば誰かの声が聞こえている。

果たしてあそこにはどんな子がいるのか、楽しみだった。

「……うん、ならこれからはそうするよ」

よかったです、と再び赤城が戻ろうとした時と、加賀が放ち、矢から変化した爆撃機が最後の的を撃ち落とした時は同時だった。

「……ふう」

「あ、加賀さん!? 私の分は？ ねえ私の分は!?」

「……やりました」

「知ってますよッ！」

赤城が加賀の肩を掴んでぶんぶん揺さぶっている。そんなふたりを見て、比叡と金

剛は腹を抱えて笑ったのだった。



ドアをノックする音。

「どろうぞ」

「失礼します」

そう言つて中に入つてきたのは大淀だった。

「大淀、呼び出しに応じ、参りました」

「ん」

提督はどこか難しそうな顔で大事な呼び出しであることを大淀は感じた。

そして、つい反射的に彼女は提督の机の上を覗き、驚いた。いつも通りならば、なんの法則性もなく書類が広げられているのだが、今回はそうではなかったのだ。

代わりに、封筒が一通。

「要件なんだが……」

「は、ん」

なんとなく予想は付いているが、念のためそれっぽく装った。

提督が椅子から立ち上がり、封筒を持って大淀の前に立った。

「これを長門、陸奥に渡してほしい」

……やはり。

「わかりました」

意外に簡単な仕事だ。と杞憂に終わった大淀は提督から封筒を受け取ろうとした。

「……これは決して他の誰にも見せてはいけない」

掴む瞬間に手を引かれ、大淀は空を掴んだ。

「来週には全艦娘に伝えるつもりだが、一応先に知っておいてもらいたいと思ってこうした」

今度はきちんと提督から差し出され、大淀は受け取った。

窓から射す光が封筒を容赦なく照らし、中の文字や画像がボヤけてだが見えた。

「あの……どうして私に……？」

「お前含めて3人に知ってもらいたいからだ」

長門は秘書艦を務めている。その補助を担っているのが陸奥。大淀は作戦中に進行形で報告を受ける、言わば鎮守府と現場を繋ぐ架け橋であるのだ。

つまり、この封筒はそれほど重要なものであるということ。

「……わかりました」

「ああ、あと最後に。この封筒についての質問は一切受け付けない」

「それはまたどうい……」

「話してるところを偶然聞いてしまうやつがいるかもしれないからだ」

「ちなみにこれの中身は……?」

「比叡、榛名、霧島、加賀の報告書と俺独自に調査し、そこから推察できることを簡単にまとめてある」

もうその特定の4人で、なんのことは考える必要すらなかった。

「了解しました。では、失礼します」

最後にそう言い残して大淀は出て行った。



「おいひいれすねえ、かがふあん」

上へ上へと積み重ねたご飯に、たっぷりとカレーをかけて赤城の食べっぷりは異常だ。また、赤城ほどではないが、加賀も同様だ。

「すごく食べるね……」

「お姉様も負けてはられませんね!」

「いやいやいや、無理でしょ?!? それに私はもうお腹いっぱいだし……」

半分ほど減ったカレーを見てあはは、と弱くなる。

赤城と加賀の食べる量がもはや笑えないレベルなのだ。

それに加え、4人全員が同じメニュー、つまりカレーであり、皿は4つ並んでいるは

ずなのだが……なぜか2皿多い。

「翔鶴姉、あんなに食べすぎたら何が起こるかわかる?」

「もちろんですよ」

姉妹、だろう。

服装が金剛型のように酷似しているため間違いないだろう。

片方の白髪の方が、最後の一口を食べ終え、恥ずかしながらカレーを口の端に残したままドヤ顔で言った。

「ー太るわ」

おそらく今の会話はこそこそ話でするつもりだったろうが、どう考えてもわざと赤城と加賀に聞こえるような声量で話している気がしてならない。

「……なぜ五航戦の子たちなんかと一緒に食事をしないといけないのかしら?」

ふたりを一瞥するや加賀は容赦なく愚痴を漏らした。

「ここに金剛がいたからよ。なによ、悪い?」

不機嫌そうに鼻を高く鳴らし、ツインテールが特徴的な子だが、これまた恥ずかしいことに、服にカレーが付いていることに気づいていない。

「良いわ」

「……ふん」

「言っておくけど、私たちがこんなに食べるのは、それほどの量じゃないと戦闘を満足にこなせないからよ」

加賀はふたりを見て、ふっ、と蔑むように口角を上げた。

「……それに、あなたたちを見ると、女の子のなんたるかを忘れてしまいそうで怖いわね」

何を言っているのかわからないとでもいうように翔鶴と瑞鶴は顔を見合わせると、すぐに互いの至らない点を発見してしまった。

「ねえ比叡」

「なんででしょうか?」

「あの2組っていつもあんなに仲が悪いの?」

「うーん、どうでしょうねえ……見た感じはああなんですけど、たぶん本当に嫌悪しているわけではないと思いますよ」

瑞鶴がツインテールを猫のように逆立てて加賀に突っかかるが、それを赤城は微笑ましく眺めているだけだ。

「そうだ比叡、私の分、いる?」

金剛は残した皿を指す。

比叡は既に食べ終えていて、あとは皆が終わるのを待つだけだった。

「食べ残し、ですか……」

どうも興奮する。

愛しの姉の口づけ……つまり間接キスとなるこの食べ残し……。しかも、金剛の使ったスプーン付きときた。

「あ、嫌だった？」

「そそ、そんなわけないじゃないですか？ 比叡、気合い！ 入れて！ いきます！」

金剛から渡されたスプーンと皿を比叡は大事にしながらもらおうと……その時。

「待ってください!!」

突然榛名と霧島が現れて、今まさに食べようとしていた比叡の邪魔をしたのだ。

「勝手は榛名が許しません！」

「私たちがいない間にこんなことを……うらやま……いえ、うらやましい！」

驚きか、それとも怒りか。

おそらく怒りだ。眉をピクピクとさせながら比叡は静かに立ち上がった。

「比叡……？」

「大丈夫です、お姉様。妹たちと『お話』してきますので、少し間待っていてください」

「う、うん」

そしてふたりは泣く子もさらに泣くような笑顔のまま食堂の外へと出た。もちろん

内容は、誰が金剛の食べ残しとスプーンを手に入れるか、だ。

「あの3人、最近で言う、ヤンデレにいつかなるんじゃないの?」

遠い目で3人を見送った瑞鶴がぼつりと漏らす。

「あら、極めて遺憾だけど、私も同意見よ」

「あなたと同じだなんて、翔鶴姉のスカーートを剥いてしまうほうがマシよ」

「ちよつと瑞鶴!?」

瑞鶴と加賀のやりとりは見ていてなんだか面白く感じる。

昼食をとるだけだったのに、もう今はすでに15時を越えようとしている。

「瑞鶴と翔鶴はこれからなにかあるの?」

「なんか金剛が片言じやないって面白いわね。まあ、今日は特に何もないから、これから翔鶴姉と艤装の点検に行こうと思ってるのよ。昨日の出撃で少し傷がいったからね」

「私は瑞鶴がどうしてもって言うからついて行ってあげるだけなんだけどね」

「もう、翔鶴姉!」

ポカポカと翔鶴を叩く瑞鶴はまだ成長しきっていない甘えん坊のようだ。

ところで、赤城はというと、ずっと金剛の方を見ている。詳しくは、金剛の食べ残し。

「もしかして……欲しいの?」

「どうしてわかったんですか!?」

「顔に書いてたからね」

あれほどの量を食べたというのにまだ足りないというのか。比叡たちはまだ帰つてこないし、これ以上時間が過ぎれば、カレーが冷えて美味しくなくなってしまう。

「あげるよ。冷えたら嫌だし」

「いいんですか?」

「比叡には私からちゃんと説明するし、きっと大丈夫だよ」

「ありがとうございます!」

美味しそうにカレーを食べる赤城を横目に瑞鶴は口を開く。

「完全に餌付けされたわね」

「そうね、瑞鶴。あと、妹3人に闇討ちされるのが頭の中で簡単に想像できるわ」

金剛は嬉しそうにカレーを食べる赤城を見て、彼女たちと過ごす時間がとても楽しく、容易に手放したくない。そんな風に考えた。

……しかし、金剛はまだ『艦娘』を知らない。

ヤツの名は

結局のところ、食堂でなんと夕方まで過ごしてしまい、会話に興じたせいでもう疲れたので、金剛は病棟に戻って寝ることにした。

赤城が食べ終えた後にやってきた比叡たちは金剛の説明を納得のいかない様子で聞き入っていたが、偶然見つけた金剛使用済みのスプーンを見つけ、それが再び彼女たちの戦いの火種となった。しかし、すでにそれが赤城によって犯されていることに気がついていない。勝ち取って喜んでいた比叡は哀れと言うべきか。

誰かがノックをする音に、布団にくるまっとうとうとしていた金剛は重たい身体を上げ、入室を促した。

「失礼しますね」

入ってきたのは明石だ。時計を見れば夕方から夜へと差し掛かる頃合いであり、夕食の時間が来たのかと悟る。

明石が持って来たのはうどんだ。小さめのお碗に入っているそれは熱い湯気が立ち、美味しそうな匂いが金剛の鼻腔を刺激した。

「食べれますか?」

「うん、たぶん食べれるよ」

明石から箸を受け取り、お碗を片手で持った。

「大丈夫？」

彼女に頼つてばかりではいけない。いつまでも彼女の好意に甘えるわけにはいかないし、また『あーん』されるのも恥ずかしい。

不器用に箸を動かしながらなんとか一本挟むことに成功し、ずっと啜った。

「実は今日、霧島さんに『お話』をされて……いや、ホント金剛さんが好きなんです
ね」

それはもう病的なほど。

嬉しいは嬉しいが、もう少し自重してほしいものだ。

明石は疲れたようにため息を吐いた。

「金剛さんへの愛を耳にタコができるほど聞かされましたからねえ」

「妹がごめんね……」

「いえいえ、気にしないでください」

ゆつくりとした食事がほぼ完食し、空腹は満たされ、しだいに眠気が金剛を襲った。

「あれ？　そういえば敬語をやめたんですか？」

「うん、比叡と赤城にそっちのほうがいいって言われたからね」

明石から受け取ったコップに水を注いでもらい、一気に飲み干した。

「もう一日目が終わったんだね……」

「そう、ですわね」

「明日は楽しみだな。食堂でたくさんの人に話しかけられて全員の名前が覚えられなかったから、今度はちゃんと覚えたいなあ」

目が回るほどの人に囲まれて、多方面から話しかけられ、淡白な返事しか返すことができなかった。聖徳太子であるのならば対応しきれたかもしれないが。

まぶたが無意識に閉じ、静かに眠気の海へと沈んでいった。



偵察機が一機、海上を飛んでいる。

偵察範囲を飛んでいるはずだが、未だ目標は発見できていない。

もう少し奥に進んでみる。

見えた。

姫、三。鬼、五。

こちらには気づいてはいないようで、偵察機は悟られないようにその周りを飛び回る。

目標とは、姫と鬼の混合艦隊のことではない。目標『たち』ではない。これらだけで

も圧倒的脅威であることに変わりはないが、偵察機の目はその中心に鎮座するものを写す。

闇を具現化したような黒いワンピース。それに異議を申し立てるような真つ白い肌。身長はあまり高くないように見える。推定でしかないが150cmに届かないくらいだろう。そして、武装はない。

これが目標だ。

情報通り。間違いない。はつきりとした目標の写真を撮ろうと接近しようとした瞬間、目標がこちらに気づいた。

この偵察機は簡単には察知されないようにできている。

サイズは最小。飛行機雲も全く発生せず、エンジン音は注意深く耳を済まさない限り聞き取ることとは不可能。おまけに空に紛れるように塗装も施しており、そうやすやすと察知されることはまずない。

なののだ。目標はそれに気づいたのだ。

なんとか撮影に成功し、データが送られる。

送信が完了した瞬間、死角からの攻撃によって、偵察機は破壊された。まさにギリギリであった。

◇

「目標の撮影に成功。画像、出します」

プロジェクトルームで大淀がスクリーンに偵察機が撮影した写真を映した。「なんなのだろうな、この深海棲艦は」

長門が顎に手を当て、眉間にしわを寄せる。

「そんなに怖い顔しないの」

「む……」

陸奥に指摘され、今度は腕組みに移行する。腕に乗った長門の長門がその豊満さを強調している。龍驤あたりがここにいたら、女の戦場になっていたことは明らかだ。やはり女の世界は世知辛い。

「見てもわかるように、こいつが例の深海棲艦だ」

「金剛たちを追い詰めたという……」

「そうだ」

提督は10ページほど綴られた一冊の資料を長門、陸奥、大淀に配った。

「あの封筒は情報が少なすぎたからな。それには現時点でわかっていることが全て書いてある」

3人はぺらぺらとページをめくり、中身を確認する。

これから議論するのは目標……あの深海棲艦についてだ。ここには提督含めて4人

しかおらず、比叡ら以外の艦娘は誰もこれを知らない。

時計をちらりと見れば、針は深夜の3時を迎えようとしている。皆、寝静まっているころだろう。夜更かしをしている子がないことを祈る。

「こんなクソ眠い時にこんな難しい話を持ち出して悪いな」

「そんなことはありませんよ。気にしないでください。……コーヒーを入れますね」

大淀はカップを用意すると、コーヒーを入れた。

「皆さんどうしますか？」

「俺はブラックで」

「ブラックだ」

「長門に砂糖たっぷりで」

「なっ！ 陸奥……！」

「提督の前だからってやせ我慢しなくてもいいのよ」

「いや、これは目覚ましに……わかった」

少し抵抗したが、やがて長門は折れ、素直に陸奥に従うことにした。

辛いのが苦手なのは知っていたが、まさか苦いのまでとは初耳である。暁たちとの食事が合うかもしれない。

「あれか、身体は大人。心は子供ってところか」

「ち、違う!」

必死にかぶりを振る長門。普段は堅く、威厳に溢れた人物のように見えるが、意外に子供な部分がある。これを広めたらこれまた面白いことが起こりそうなのだが……。

「長門さんは砂糖たっぷりですね。陸奥さんは?」

「もちろんブラックよ」

「裏切ったな!?」

「別に裏切つてないわよ?」

大淀がコーヒーをそれぞれの手元に運んでいく。皆感謝をし、一口を啜ってから真剣な表情になる。提督たちはここにコーヒーを飲みに来たわけではないのだ。

ちなみに大淀は砂糖を一本入れた。

「こいつは武装がないから攻撃力はおそらくゼロだ。でも断定はしないでおく」

「この資料によると、直接的な攻撃は一切なかったらしいな。しかし……」

長門が資料のある1ページに目が止まる。

「姫や鬼を率いる深海棲艦……か」

「金剛らが会敵したのは姫、一、鬼、二。ヤツは戦闘開始早々離脱したらしい」

「もし全員揃っていたら……この程度では済まなかったのでしょうかね。畏にかかった獲物……なのでしょね、金剛さんたちは」

「そして取り巻きが……これは酷いわ」

記録に記されているのは、その数だ。

姫鬼で三。

……取り巻きが、約四十。

帰投中でのこれだ。皆、疲労しているのにこの数はまさに地獄と言えよう。

ヤツの罠にハマリ、味方が分断され、混乱の渦を掻き回すように襲つて来た深海棲艦。このような戦術はこれまで一度もなかった。しかし、これはヤツの出現と同時に起こつたのだ。ヤツの戦術……知性が高いからこそできる諸行。指揮にとつてもなく長けているということだ。これはかつてない強敵になりそうだ。

「報告によると、そのうち姫一体を中破、鬼一体を小破にはできたらしい」

「特に姫や鬼が強化されているわけではないのだな？」

「おそらく。言っておくが、今ここで話していることは全て推測だ。あまり鵜呑みにするなよ」

提督がコーヒーを半分ほど飲む。苦みが喉を通り、眠気に襲われた提督の意識を叩き起こす。

憶測でしか話せないから、事実は何もわからない。もしかすると、姫、鬼が本気を出していないかっただけかもしれないし、ヤツが砲撃ではなく、格闘を得意としているのか

もしれない。

近接戦闘でやりあえるとしたら、おそらく……あの娘しかいない。

「そういえば、あの深海棲艦は言葉を話すのでしょうか……」

いつの間にか資料を読み終えた大淀がスクリーンを見つめながらまるで独り言のよ
うに呟いた。

姫や鬼となると、流暢ではないが、意味ある言葉を発することができることを既に確
認している。

「それはわからないな」

「毎回手をこまねくあいづらを率いているのだ。きつと上位に君臨しているはず。なら
必然的に話すんじゃないのか？ それも片言ではなく」

「あまりにも情報が少なすぎるわね……」

なにせ、わかっていることは、姫、鬼を率いる。武装がない。姿。たつたそれだけだ。
もうこれは仕方のないこと。

陸奥が発言の許可を求めた。

「どうした」

「もう一度調査することを進言するわ。それも、偵察機ではなく、艦娘でね」

「言っていることの意味がわかっているのか？」

「ええ、もちろんよ」

決しておふぎけではない、凜とした瞳が提督を射す。

実力も未知数の敵にいきなり艦娘を送り出すのはいささか酷ではないのだろうか。ヤツの戦術、ハマってしまえば容易に脱することはできない。以前のように数の暴力で大打撃をうける可能性だつて有り得る。

「……却下する」

「どうして……」

不安そうに提督を見るが、結論は揺るぎなかった。

「金剛のアレがあつてからまだ一週間も経っていないんだ。戦艦がああなるほどの力を持っている敵を偵察しに行けなんて言われたら、俺だつて尻込みする」

現実として、この4人と比叡たち以外はどんな敵なのかも知らないのだ。それをいきなり呼び出されて、姫、鬼を率いる規格外の深海棲艦の偵察を命じられても……。実際に目の前に立って、恐怖で動けなくなる艦娘が絶対現れるはずだ。

艦娘は意思ある兵器だ。

ましてや女の子という身体を得ている。恐怖に怯えるのは本能的で、人間的である。具体的に挙げると、睦月らへんが気になる。

「……」

「俺が今、出撃頻度を最低限まで減らしているのはなぜだと思う？　陸奥、お前にはわかるか？」

「……わからないわ」

「こちらがヤツを認知したつてことは逆にヤツもこちらを認知したつてことだ。そして自然に相手の本拠地を叩こうとするのが普通だ」

「そう……ね」

「ヤツには知性がある。それも俺たち人間と同じくらい高い知性がな。発見されたら次こそ終わりだ。ここまで尾けられて、総攻撃されるだろう。だから慎重に行動しないといけない」

「この鎮守府には艦娘が他の鎮守府に比べると多い。もしここを攻撃されても、迎撃できる装備は用意しているが、それでもヤツを撃退できるとは思えない。」

「素直に言ってしまうえば、こちらには何もかもが足りないのだ。準備、分析、あるゆるものがだ。」

「陸奥の言う通り、艦娘での調査はいずれにせよしなくてはならない。が、まだ早い。一度大本営に報告して、指示を待つことにする」

「どうせ手は出さずに様子見、を押し付けられるのだろうが。どうせ嫌われているのだから、面倒ごとを起こされるのは御免」

だと思われているはずだ。

「明後日、爆撃機を数機出撃させて、ヤツの出方を見る」

「なぜ明日ではないのだ？」

「ちよつと俺自身、用事があるんだ。悪いな」

「そうか。ならしようがない」

長門は最後の一口を飲み、この空間とは対照的に甘い味を堪能する。

そして、3人が彼女よりも苦いコーヒーを飲んでいるのを見て、いつかは自分もブラックに挑戦する、と密かに胸に決心する。

「ん、今日はこれで終わりだ、ご苦労様。大淀、今じゃなくてもいいから、大本営に提出するための書類を用意してくれ」

「わかりました」

大淀が全員分のコーヒーを片付け、スクリーンに映した画像を消す。

「提督」

「ん？」

「ずっとヤツ、とかこの深海棲艦って私たちは呼んでいましたが、さすがにそのまま提出するのはマズイので、何か名称をつけませんか？」

大淀の言う通りだ。

姫でもない鬼でもない。かといって既存の深海棲艦のどれにもあてはまらない。全くの新種。これから立ちはだかるであろう、強く、高く、硬い壁。それを超えた時、何が変わるかもしれない。

「これで頼む。名称はー」

卓球

本日の朝食を運んできたのは霧島だった。

それだけで、なんとなく昨夜明石の言っていた『お話』の内容がわかってしまう。

どうせ、金剛お姉様の朝食はこの霧島に任せてください！ とか何とか言ったのだから。

「おはようございます、お姉様」

「うん。おはよう、霧島」

朝食は食パン。あと、牛乳とヨーグルトだ。

「いい匂いがするよ」

「そうですか。ふふ、よかったです」

「霧島はもう食べ終わったの？」

「はい」

霧島がどんな朝食を食べたのか知らないが、やはりそうとうな早食いなのは確か。

比叡たちとの食事でもできれば一緒にとってほしいものなのだが。

「別にそんなに急がなくてもいいんだよ？ どうせ私は暇だから朝食食べるのが遅くても

構わないんだけど」

「お姉様とふたりきりであることに意味があるのです！」

鼻息を荒くしながらそう語る霧島がいろいろと怖い。

そんな感情を押し殺しながら上半身を起こし、霧島からパンを受け取り、もそもそと食べ始めた。

ふわつとしたこの食感。美味しい。

「ねえ霧島」

「なんででしょうか？」

「そんなにジロジロ見られたら食べにくいっていうか……恥ずかしいっていうか……」

「霧島は大丈夫ですのぞ」

「金剛は大丈夫じゃないんだけど……」

完全に榛名の真似だが、つい反射的に同じように返してしまう。頑張つて霧島を意識せずに食事に努めるが、視線がどうしても気になってしまう。ちらりと見ると、微笑みを向けられる。なんだか変な気分だ。

沈黙を守り続けるのも癪だ、金剛は話の種を蒔いた。

「あー、今日はどうしようかなー」

とてもあからさまな棒読みだったが、これに霧島は魚のように食いついた。

「だったら運動しませんか！ 運動ツ！」

「運動かあ……いいね」

全く運動していないし、そろそろ車椅子に押されながらも移動も少し飽きてきたところだ。2日目にしてこれでは、妹たちに車椅子を押してもらう機会が減ることになってしまうが……我慢してもらうしかない。

といつても、過激な活動はできないから、走ったりなどはNGだ。

「で、何があるの？」

どうやらこの言葉を霧島は待っていたらしい。

メガネをくいと上げ、目を光らせた。

「――卓球です！」

そう、言ったのだった。



「この鎮守府には卓球なんてあるんだね」

「そうよ。提督が私たちのために娯楽を取り入れてくださっているわ」

とある棟に案内され、金剛は目を見開く。そこは、どう見ても体育館のそれだった。バスケットゴールもきちんとして設置されており、バドミントン用の穴もちゃんと床に打ち抜いてある。

赤城とペアで卓球台を準備していた加賀が続ける。

「私は、何事にも本気で取り組む主義なのよ」

ドヤ顔でそんなことを言われても困る。

他にも何人が初めて見る艦娘たちが準備を手伝っている。当然ながら妹たちもいる。

「ちよつと！ もつと力入れなさいよ！」

「力入れにくいから難しいのよ！」

3人組の小さな子たちが懸命に卓球台を立てていた。しかし、身長的にそれはどうも難しそうだった。

「3人で力を合わせればできるさ」

「さすが響、わかってるわね！」

金剛からしたらそれは微笑ましい様子だったが、いつまでもあれだと進みそうにないから、手伝ってあげようと思い、車椅子から立ち上がった。

「お姉様？」

榛名が心配して声をかけてくれたが、大丈夫だとなだめる。

「手伝おうか？」

「んににいいい！ お子様扱いしないでよ……て金剛さん!?」

顔をしかめながら力を入れていた黒紫色の長い髪の子は初めは金剛だと気づかな

かったようで、驚いた拍子に手が離れかけ、咄嗟に金剛はそれを支えた。

「おっと……うん、金剛だよ」

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

そのまま4人で協力をして無事卓球台を設置できた。

「ありがとう。助かったよ」

そう言ったのはおとなしそうな白髪の子だ。ズレた帽子を被りなおす。

「うん……えっと……」

「響だよ」

「響……」

「そう」

「覚えたよ。他の子は？」

「さつき助けたのが暁。もう一人は雷だよ」

響が一人一人指差して金剛に教える。

「わかった。ありがとう」

「気にすることはない」

「ついでだし手伝うよ」

「私は構わないさ」

でも、と響はふたりに視線を向ける。金剛はそれにつられてふたりを見ると、どうも納得していない方に偏っているようだ。しかし、助けが必要であることもちゃんと理解しているっぽい。

「頼られる私が頼ることになるなんて……」

「私は子供扱いしてほしくないだけよっ」

「じゃあ手伝わないでおこう……か？」

そう言ってもなんだかすつきりせずにはうやむやになっっている。

「せっかくの善意だ。たまには頼ることも必要ではないだろうか」

響が見た目にそぐわぬ対応をしてふたりをなだめている。きつと精神的には響ははるかに年上だ。

なんとかふたりの了承を得て3人を手伝い始めた。結果、ものの五分と少しで終わった。

「さて、では始めましょうか！」

赤城が号令をかける。

メンバーは金剛、比叡、榛名、霧島、赤城、加賀、暁、響、雷、瑞鶴だ。

「どうしてあなたがいるの？」

呆れはてた顔で目頭を押さえながら加賀が呟く。ラケットを持った瑞鶴は腕を捲り、ふふん、と威張った。

「私もたまたまここを通りがかっただけよ。なに、文句ある？」

「……ないわ」

「ふん」

仲が良いのか悪いのか、やはりわからないこのペア。さつそく加賀に決闘を申し込んでいるところ、瑞鶴はやたらと加賀に絡みたがる。

「金剛お姉様、どうしますか？」

「私、卓球やったことないからなあ」

榛名に尋ねられ、ポリポリと後ろ頭を掻きながら答える。知識としてはもちろん知っているが、実際したことがあるかと訊かれると、ない。

「大丈夫です、お姉様。私たちが手とり足取り教えるのでっ！」

霧島と比叡も、榛名の言葉に賛同して頷く。

比叡にラケットを受け取り、卓球台まで移動した。

「どうしようか？ どうせだしダブルス？」

ふたりが卓球をして、もうふたりが休憩ならば、それより皆でやった方が断然楽しいと判断した金剛の提案だった。

……ここに、戦いの火種が生まれた。その内容は、誰が金剛とペアを組むかだ。必然的にそれはひとりに断定される。

さらに、比叡たちには順番で回すという、ごく一般的な解決方法を頭に欠片も思い浮かばなかった。車椅子の件でそれを提案した霧島でさえもだ。

「霧島は今朝金剛お姉様の朝食の相手をしていたから別にいいよね？」

笑顔を浮かべながら霧島に語りかける榛名だが、その目は笑っていない。ちようど金剛は赤城から軽いレクチャーを受けているからそのような妹たちの修羅場を目撃することはない。

「そういう榛名は今日はお姉様の車椅子を押ししたからもう大丈夫よね？」

「そんなこと言っていないですよー？」

はたから見ればそら恐ろしい有様であるが、別段仲が悪いわけではない。表面では仲良くして……なあれでもなく、ただ、金剛のことになると、気持ちが高くなるだけ。3人とも本心からの悪意ではない。

「O・H A・N A・S H Iしたいところですが、そんな時間はなさそうですね……」

残念そうに霧島がピンポン球を握る。プラスチック製のそれはいとも容易く割れてしまう。それを偶然にも見かけてしまった暁は不幸としか言えまい。

金剛が赤城のもとから帰ってくる。比叡たちの嵐はここで急速に勢力を失うことに

なる。

「ごめんね、3人とも。待ったかな？」

口々に否定し、かぶりを振る3人。

「そう？ よかった。チームは……じゃんけんで決めようか」

さつきまでそのことで修羅場となっていたのに、そんな純粋な言葉で一瞬にして治められてしまった。

「じゃあいくよー？」と金剛が声かけをし、4人でグッパで別れましょ！と手を出す。

「私はグーだから……アハッ♪ やったあ！ 金剛お姉様と一緒にだあ！」

結果は榛名、霧島のペア。そして金剛、比叡のペアとなった。

「覚悟してくださいね。私の計算で翻弄してさしあげますわ！」

ラケットを比叡に向け、宣戦布告。

「姉として、受けて立つ！」

胸を張って比叡が声高に宣言する。

そして、ここに（金剛を除いた）姉妹喧嘩の火蓋が切って落とされた。



「さて、私たちもやるわよ！」

「もつちろん！」

「ハラシヨ―」

彼女らの小さな手には似合わない大きなラケット。そして、胸の上まである高い卓球台。誰の目から見ても卓球どころではないのは明らかだった。

「暁ちゃん？ その高さでも大丈夫なの？」

心配そうに赤城が声をかけた。

意地でもやり遂げるつもりは暁だが、側で白熱の試合を繰り広げている加賀と瑞鶴―の使っている卓球台の高さ―を見て、さらに実際の戦闘よりも殺気の漂った試合をしている金剛姉妹―の使っている卓球台の高さ―を見てその意地にセメントが上塗りされる。

「大丈夫よ。私たちは立派なレディーなんだからっ！」

ふんすと無い胸を張る暁。ある赤城からするとそれは哀れなことだった。しかし、ここからの成長に期待。

「いや、普通に無理でしょ」

素直なツツコミを雷がいれる。響も無言だが首肯する。もしそのまま卓球をしたところで、まともに球など打てないし、逆に子供っぽく見えてしまう。

暁はどうも『レディー』もしくは『大人の女性』、またはそれらに類するものに非常に

敏感だ。子供の背伸びにしか思われぬのだが、その心がけは殊勝なことである。本物の『レディー』にいつなれるかは誰にもわからないが、余裕をもった女性となることを願う。まだ着任していない暁型駆逐艦4番艦の電の面倒もみられるような。

「脚の高さ、調節するの手伝ってあげますよ」

「わ、私はそんなこと頼んで……わかったわ」

両横からのふたりの視線に耐えきれなかったのだろう、暁は意外にあっさりと折れ、大人しく協力して脚の高さを下げた。

「さ、やるわよ！」

雷が先導して卓球を始めようとする。

「なんで雷が仕切ってるのよ！」

「別にいいじゃない、ほら、しよ？」

暁たちにちようにいい高さになった卓球台に立ち、球を手に持つ。

しかし……。

「3人……はキツイわね」

暁がポツリと呟く。

シングルになると、1人余ってしまうし、かといってダブルスだと釣り合わない。赤城をちらりと見る。加賀の応援をされていて、それ以外は特に忙しそうになさそうだ。

暁は意を決して赤城に近づいた。

「赤城さん」

「ん？ どうしたの暁ちゃん」

振り返った赤城が暁に尋ねる。

何度か脳内シミュレーションを行ったが、いざとなるとどうも緊張する。口をパクパクさせ、やつとのことで意思を伝えた。

「私たちは3人だからシングルもダブルスもで、できなくて……だから」

俯いていた頭を上げて、赤城を見つめる。

「だから私たちと一緒に卓球してほしい！ ……です」

「うっ……」

今の赤城の呻きは嫌悪感からではない。自分より小さな子に上目遣いでそんなことを言われてしまったのだ。過度な上方修正をほどこされ、まるで赤城しかない、かのように聞こえてしまったのだ。

何かの扉を開きかけた赤城であった。

「も、もちろんよ。さあ行きましょう」

「あ、でも高さが……」

「心配しないで。ハンデだと思えばいいのだから」

「うん」

実は赤城、卓球についてはだいたいベテランだったりする。



金剛がああ棟にいと聞き、提督はそこへ足を向けた。

入った瞬間、提督を襲ったのは熱気だった。卵を一気に焼いてしまうような。

「なんだこれは……！」

そばにいた長門が驚愕を隠せない様子だ。それもそうだろう。意地の争い、そして姉妹喧嘩がここで渦巻いているのだ。そうなるのも仕方のない。

陸奥はあらあら、と完全に傍観者視線だ。

あわよくば俺も参加を……という思惑でやって来たのだが、どうやらそれは叶いそうにない。

そして、提督の後ろからぞろぞろと艦娘たちが押し寄せてきている。誰もが皆、金剛がいると聞きつけてだ。

「終わるまであまり関わらない方が良さそうだな……殺される」

熱気に混じって感じるのは、鋭い殺気。鋭利なそれは、無闇に踏み込んだ瞬間に首を狩られそうだ。

しかし、赤城たちの方はその中で悠々と卓球を楽しんでいる。飛んで火に入る夏の虫

が火をもらともせず飛翔しているのだ。

なんというイレギュラー。」

「ど、どうするっ？」

長門が尋ねる。

ビッグ7の彼女ですらこの怖気ようだ。提督たちはそうとう恐ろしい領域に踏み込みかけている。

「あの二組が終わるまで待機だな……」

「ああ、それがいい……」

後ろの艦娘たちもわかつてくれている。

「提督」

「どした」

「金剛姉妹の金剛への執着……あれって異常じゃないかしら？」

注意深く観察している陸奥が提督に質問を投げる。

「元々異常だったろ。で、あの件があつてそれに拍車がかかった。それだけだ。いずれ元に戻るさ」

「そうね」

どうしてこんな質問をしたのか意図がわからなかったが、その後陸奥が長門を見る目

を見て確信する。なるほど、百合百合しいやつだ。

静かに卓球が終わるのを待って10分くらいした頃。ようやく勝敗がついたようだ。勝者は加賀、そして榛名、霧島のペアだ。

「終わったかな？」

背中冷や汗を感じながら提督は肩で息を吐く彼女らに話しかけた。

かいた汗を袖で拭う姿に思わず見惚れる。

「どうしたの？ 提督？」

金剛のひと声で引き戻された提督は視線を泳がせた。

「お前がここにいと聞いて、な。他にもいっぱい来てるんだが、その相手をしてくれな
いか？」

親指で後ろを指さす。金剛は大人数の艦娘たちを見て、苦笑いを浮かべる。

「私、卓球したばかりで疲れてるんだけどなあ……」

嫌だ、と言えば簡単なのだが、そういうわけにもいかない。実際疲れているし、はやく車椅子に座りたい。完治したわけではないから無理はあまりしたくなかった。

だがこれはチャンスだ。今は赤城、瑞鶴、翔鶴、暁、響、雷と仲良くなつたが、この鎮守府にいる艦娘はもつといる。その子たちと仲良くなるチャンスなのだ。

鈍った身体に鞭打ち金剛は笑顔をつくってみせた。

「うん、わかったよ」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫！ 金剛、気合い、入れて！ いきます！」

「さすがお姉様！」

自分の真似をしてくれた比叡がとても嬉しそうだ。その様子を見て金剛も嬉しくなる。

「じゃあ一緒に卓球しようか！ あなたはなんて名前なの？」



彼女は歌う。

「——♪」

怒りをのせて。

絶望をのせて。

寄せられるように味方が海に浮上する。

「——♪ ——♪」

その歌声に聞き入り、その聴衆は増えに増え、とどまるところを知らない。

雄叫びが海に轟く。それはまだ、陸には届かない。

まだだ。



金剛は車椅子に乗せられ、ぐったりしている。疲労が溜まり、眠りに落ちている。その寝顔がとても可愛らしく、車椅子を押していた榛名は比叡と霧島に見られないようにこっそりと頬を突く。

「んにゅ」

金剛が短く呻く。

それが榛名の庇護欲を大きく揺さぶる。

爆発寸前となったが、そこは理性でどうにか抑える。

「着いたわね」

霧島が呟く。病棟に戻った彼女たちはエレベーターに乗り、金剛の部屋の階まで上がった。

「起こす?」

榛名が提案する。

しかし、ふたりがそれに反対した。どうせ返事はわかっていただけだ。

「ですよね」

金剛の背中に手を回し、軽々と持ち上げる。そして、ベッドに寝かせ、優しく布団をかける。おだやかな吐息をはき、眠っている。

比叡たちは金剛のしばし魅入り、見惚れてしまう。

「私たちも行くかうか」

比叡の呼びかけで妹たちは部屋を出ていく。

その前に。

「お休みなさい、お姉様」

ひとりひとり、眠る金剛の頬に軽く口づけをし、今度こそ部屋を出ていった。笑顔になったように見えたそれは、決して見間違いではない。

歌

痛い。

恒久的に電気を流されているような鈍い痛みを感じる。腕がうまく上がらない。足も上がらない。

頑張ればなんとかできるが、その痛みは代償として大きくなる。どちらかというと、腕の方が痛い。具体的に右腕。

金剛は顔をしかめながら、その痛みに抵抗する。やはりキツイ。

頭は痛くない。意識ははっきりしているし、布団の暖かさだつてはつきりと身体全体に伝わっている。

ではなぜか。

なぜこのような事態に陥ったのか。

寝ぼけている金剛の思考能力は言うまでもなく著しく低下しており、その原因がわからない。

事故？

違う。そんなことはない。昨日はそんなことはなかった。

ならば病氣？

可能性としてはありえる。轟沈寸前だったらしい身だ。明石でさえ気づけない、重大な何かがあつたのかもしれない。

下手すると死ぬかも？

結局結論は出ることはなかった。諦め、太いため息を吐く。

「ああ、痛いよ……きりしまあ」

甘えるような声で隣でりんごを上手に切る霧島にかける。

一瞬にして理性が吹っ飛び、りんごを落とすようになったが、どうにかもち堪える。

切り終えたりんごを皿に乗せ、金剛の側に置いた。そして、メガネをくいつと上げる。

「筋肉痛ですね」

「そかー。あいてて……」

爪楊枝で切つたりんごのひとつを刺し、なんの抵抗もなく、霧島からの『あーん』を受けていた。

そこを偶然比叡と榛名に見られた霧島にその後どうなったかは、涙をのんで見守つてほしいものだ。

己の欲求を満たすことには成功したが、その代償は壮絶なもの。

霧島に、合掌。

◆ 「あの卓球がちょうど俺が帰ってきた直後で良かったわ」

執務室でくつろぐ提督は、暇そうにペン回しをしている。

集合時間はそろそろ。今日は爆撃機による様子見の日である。長門、陸奥、大淀と揃い、待つのああと1人だ。3人ともソファーでくつろいでいて、あまり作戦前という状態には見えにくい。

コンコンとノックの音。

「失礼します」

入って来たのは赤城だ。

これで全員そろった。

「ん。じゃあ始めるか。長門」

「ああ」

ちよつとしたお菓子パーティーを絶賛開催中だったが、目にも留まらぬ速さで片付けると、地図を大きく広げた。

映るそれはこの鎮守府からはるかに離れた海域だ。そのど真ん中に大きな赤丸が書かれている。

「これがあの深海棲艦の存在予測地点だ」

長門が指でなぞる。

しかし、簡単に言っているように聞こえるが、そうではない。縮尺などの関係から考えると、その範囲はとても広い。

これでは爆撃するどころか見つけることすらできないかもしれない。

「あの……どうして私でしょうか？」

赤城は不安にかられ、とうとう提督に尋ねてしまった。

確かに赤城は爆撃機を発艦できる艦娘だ。だが、それだけならば同じ一航戦の加賀……他にも飛龍などでも十分事足りるはずではないのか。

そんな不思議が絡み合い、解けそうになくなってしまったのだ。

「なんでだと思っ？」

「わからないから訊いているんですけど……」

「あ、うん、そうだったな。ごめん」

赤城は心の中で少し提督に呆れてしまった。が、提督はやることはちゃんとやる、真面目な提督だ。そこは揺るぎのない真実であり、深い信頼もある。

「お前、加賀が心配なんだろ」

「……はい」

言い当てられた赤城は素直に頷いた。

「だってお前、いつも加賀のこと気にしてたもんな」

「そうです。加賀さんの辛そうな顔を見たくない……ずっとその一心でした」

思い返す加賀の苦悩。誰もいないところでひとり頭を抱えていたのを見てしまった赤城はどうにかして加賀の助けになりたかった。赤城にできるすべてをもつてして加賀を救い出したかった。

「だから私を選んだのですか？」

「まあそんなところよ。引き受けてくれるか？ ……って言っても正直いろいろ話してしまつたからあれなんだけど」

「私が断るわけじゃないじゃないですか。いえ、むしろぜひ私にやらせてください」

「おーけー。じゃあ具体的なこと話すからそのソファーに座つてくれ」

陸奥がソファーのスペースを空け、そこに赤城が座る。

「この作戦は相手の戦力を見極めるためのものだ。無駄に深追いしたり、過剰な攻撃は禁止する」

「では具体的にどうすれば？」

赤城が質問を投げかける。

「基本的な行動は数発だけくらわせてやって、その後の様子を見る。で、想定外のことが起こらない限り即時撤退だ」

「あ、爆撃機には映像カメラを搭載させてもらいます」

大淀が間に入る。

「構いませんよ」

「ありがとうございます」

「あと最後に、この攻撃は超遠距離にしたいから、お前はこの辺な」

「えっ!?」

提督の指した場所は予測範囲外であることはもちろん、またさらにその遠方だった。

「これまでの敵とは賢さが別次元だ。なんらかの方法で位置を察知されてしまうかもしれない。正直もつと下げてもよかったんだが……」

そう言つて今さらになつてうんうん提督が悩み始めた。

「またか……もつと、もつと後ろにつ！ つて駄々こねてたのは提督ではないか」

「いやあ、だけどきさ？ やっぱりほら、あれじゃん？」

「あれとはなんだ？」

「なんとなく感じるよ」

なるほど、長門が話している内容から、提督は赤城をできるだけ後ろに配置しようと考えていたらしい。

そんな優しい気遣いが嬉しくて、ついつい笑みがこぼれた。

「ありがとうございます、提督。私は大丈夫ですから」

「む……わかった」

歯切れの悪い返事だったが、どうにか提督をなだめることに成功した。

「随伴艦として長門と陸奥を連れて行ってくれ……頼むぞ」

神妙な提督の表情に、ふたりとも無言で首肯する。

「よし、じゃあ行こうか！」

膝を叩き、己に喝を入れた提督は4人を連れて執務室を出る。

できるだけ明るく努めた提督の顔の裏では、あることを危惧していた。その『想定外の出来事』が起こることを。



「あゝゝゝ」

「はしたないわよ」

「でもゝ」

「デモもストもありません」

「むうゝ」

身体中がギシギシして、油をさされていない機械人形のような。つつい呻き声を漏らすと、すぐに加賀に突っ込まれる。昨日、金剛に負けじ劣らずの動きをしていたはず

なのだが、筋肉痛の様子はあまり見られない。

車椅子を比叡に押しされ、鎮守府をぶらぶらする。それが本日3日目だ。

本当に何もすることがないので、誰かにかまってほしいものだ。

「こうやってぼーっとするのも……悪くないな」

太陽の光に照らされ、目の前の海の潮を嗅いでいると、心が無心に還る。

戦争を忘れ、自分が艦娘だということも忘れて……。

妹たちもそう思っているのだろうか。

ふと金剛は首を傾けて妹たちを見てみる。

3人とも大きく深呼吸をしていて、平和を身に染みて感じるようだ。

「あ、金剛さん、こんにちはー」

ランニングの途中だろう、ジャージを着た吹雪が肩で息を吐きながら挨拶をしてきた。足踏みをしながら頬を流れる汗を拭い、にぱつと笑顔になる。

「うん、こんにちは。吹雪ちゃんランニング中なの？ えらいね」

「はいっ！ 私、もつと強くなりたいです！」

元気でいい子だ。金剛は吹雪の生真面目さを評価した。

体力をつけ、戦いの中でも息が切れないように日頃の鍛練を欠かさない。そういったところか。

そういうえば、戦うといっても、どうやって戦うのだろうか。海の上を文字通り走ったりしているのか。しかしそれは普通に考えたら不可能なことで、本当に自分が記憶をなくしているのだと痛感する。

「昨日はすごく楽しかったですね！ 金剛さんとシングルだったのに、なんだか比叡さんたちも相手になっているみたいでした」

おそらく、いや絶対それは勘違いなどではない。

金剛と一対一をしたのだ。比叡たちの嫉妬のバーニングラブに襲われていたことを吹雪は知らない。

むしろ知らない方が幸せだ。

「また今度やろうね」

「喜んで！ あ、そうだ。赤城先輩を見ませんでしたか？」

金剛は頭をひねって思い出したが、赤城に会った記憶はなかった。比叡たちも見てないようだ。

「うーん、見なかったかな。ごめんね」

「いえ、大丈夫です」

「赤城に何かあったの？」

「何かあったわけじゃないんですけど……」

急に吹雪がもじもじしました。

下を向きながら、恥ずかしそうに言った。

「一緒に食事に行きたいな」。なんて……」

「そういうことなんだね。じゃあ赤城に会ったら吹雪ちゃんが呼んでるって伝えておこうか？」

「はい、お願いします！」

「うん、了解」

親指を立ててカッコつける。

「あははっ。ではこれで」

そう言い残して吹雪は走り去っていった。

その後ろ姿を見て、金剛はあることを考えていた。

艦娘としての戦いとはどんなものなのだろうか。人間という形に収まり、かつ軍艦並の力を誇る。それが艦娘。

金剛はまだ『戦い』を知らない。ベッドの上で資料ならいくらでも読むことができるが、それはただ間接的に知っただけだ。どれだけ詳細に書かれていようが、本物とは程遠い。

今の子ども『戦い』を知っているのだ。知らないのは金剛だけだ。そう思うと変に恥

ずかしく感じる。

そして、そんな自分がここにいていいのかという不安も浮き上がる。

ここに残る残らないにしても、艦娘というものをより深く知らなければならぬと思っただ。

「ねえ比叡」

「なんででしょうか？」

「あとでさ、艦娘の戦いを教えてくれない？」

その質問に比叡が不意をつかれたように一瞬だけ足を止めた。

きつと記憶喪失のことが頭をよぎったのだろうが、それを振り払って比叡は笑顔で答えた。

「任せてください。比叡、気合い！ 入れて!! 頑張るから!!」

「じゃあ金剛も気合い入れるよ」

「はい!!」

比叡はとても嬉しそうだ。

「お姉様、霧島もですよ!」

「わ、私も!」

「百合百合しい姉妹ね」

やはり賑やかな姉妹だ。

加賀がツツコミを入れても誰も否定しないまであるのだから。

はたから見れば百合百合姉妹。そして、実際も百合百合姉妹なのだが、強固な愛と絆によつて結ばれた、誰にも引き離せない姉妹でもあった。

「暇だからさつそく行くこうよ。比叡、どこに行つたらいい?」

「それなら出撃ドックですね。皆そこから出撃するんです。あ、でも今は滅多に使われないから貸切になるかもしれません」

貸切になれば周りに迷惑がかかることなくいろいろなことができそうだ。

比叡に車椅子を押され、出撃ドックへ向かう。

「久しぶりね。後で艤装の手入れをしなくては」

「そうですね。あ、なら終わつたら一緒にしませんか?」

「別にいいわ」

「ありがとうございます!」

加賀と榛名で会話の花が咲いている。この組み合わせはわりと珍しい。

「あ、そろそろですね」

霧島の声で金剛はふと顔を上げた。確かにそこは他と違う造りで、赤レンガの建物と比べると、よりしつかりしてある。

「私が開けるわ」

加賀が前に進み出て横開きのドアを開けた。

「金剛さん、ここが出撃ドツ……赤城さん？」

案内しようとした加賀の足が止まった。

中では3人がぐったりとしながら艀装を下ろしているところだった。中にいたのは赤城、長門、陸奥だった。しかも、3人とも軽傷とは言えない怪我を負っていた。

「加賀さん……？」

重そうな頭をゆつくりと上げて赤城は加賀、そしてその後ろにいる金剛たちを見た。

赤城の服は破れ、はだけ、ところどころ黒ずんでいた。そして、飛行甲板も派手なダメージを受けていた。

「お前たち、どうしてここに……！」

長門の声に力が入っておらず、ただ広い出撃ドツクに虚しく響くのみ。長門も、陸奥も同じように様々な箇所にも傷が目立っていた。

「私が艦娘がどんなのかって訊いたら皆でここに行こうって話になって……」

「そう、か……」

金剛の説明に長門が納得したように低く息を吐いた。

「提督を呼んでこようか？」

「いえ、それには及ばないわ。もう来ると思うから」

陸奥が疲れた表情を隠しきれずに答える。

出撃を最小限に抑えているのに、強者の3人がここまでになるのか。

これこそが『戦い』だ。

金剛はそう思った。事後ではあるが、直接に見ることができた『戦い』に身体を強張らせた。

これは恐怖か。震える手を見つめ、それを誰にも見られないように努めた。死と隣り合わせの『戦い』は、これほど怖いものなのか。

いつの間にか唇は震えていた。

「いったい……何があったの……？」

そう尋ねるので精一杯だった。



予測範囲に侵入してからすでに数十分。爆撃機は未だ目標を見つけられずにいた。

「なかなか見つかりませんね」

「そうなのか？ このあたりは身を隠す場所はないはずなのだがな」

観測を続けていた赤城の報告に長門が腕を組む。

そろそろ全てを見て回った頃合いだ。

敵は賢い。提督はそう言った。

考え、策を労し、勝利を手にする。それが艦娘たちの戦い方だ。深海棲艦側に、それと同じようなことを思考できる強敵がいることを提督は示唆したのだ。

正直信じられない話だが、金剛の件でその疑惑は確信へと変わった。

はやく沈めなければ、また悲惨なことが起こってしまう。それだけは、なんとかしてでも避けたかった。

その時だった。赤城は敵影を見つけ、声を張り上げた。

「目標、発見ッ！」

「陸奥……！」

「わかってるわ！」

長門に呼ばれた陸奥が鎮守府に通信する。返事は、作戦実行。

「OKよー！」

「わかりました。ではこれより爆撃します！」

赤城の号令ではるか遠方の爆撃機に爆撃の体制に入る。

目標……そしてその取り巻きの姫二体と鬼一体。一網打尽にできれば幸いなのだが。

こちらには気づいていないようで海上に停止しているようだ。

急降下し、爆撃機が迫る！

駆動音に気づき、頭を上にあげたがもう遅い。

爆弾が切り離され、綺麗に頭上へと放物線を描いて落下した。

撃ち落そうと構えるのもすでに遅い。

何もかもが遅い。

なんの抵抗も受けなかった爆弾はその役割を見事果たした。

爆発し、爆風が敵を殴り、爆炎が回りを包み込む。

「爆撃、成功しました！」

「気を抜くな、観測を続けるんだ」

「わかりました」

陸奥が爆撃成功の旨を鎮守府に報告。返事は長門と同じ、観測を続ける、だ。

映像はリアルタイムで鎮守府に届いている。

爆撃機が大きく弧を描いて飛び回りながらその後の様子を映像に撮り続ける。

煙が晴れ、だんだん姿が見えてくる。

傷ついた姫と鬼。そして、目標は健在。それはまさに味方を守ったようにしか見えな

かったのだ。

「守った……？」

赤城が驚愕の声が出る。長門と陸奥はその様子を見られないから何が起こったの

かは赤城に尋ねないとわからない。

「どうしたんだ？」

「いえ、その……姫と鬼が目標を守り……えっ」

ました、と報告しかけていた赤城の口が震える。爆撃機ごしに赤城もリアルタイムで見ているから、目視している事態に、まるで理解できなかった。

あの動きは……どう見ても……。

「歌っている……？」

「どうしたんだ赤城、はやく報告するんだ」

急かしてくる長門。しかし、それすら耳に届かない。おそらく鎮守府でこの様子を見ている提督と大淀もそうだろう。

映像だけで音声は録っていないから具体的にはわからないが、歌っているのだ。さらに驚くことはそんなことではなかった。

「姫、鬼……歌によって回復しています……」

長門が目を見開く。

「なんだと……!?」

出血した箇所が塞がれ、折れた部位が再生してゆく。

映像はまだ続く。姫鬼を全快させた目標は爆撃機を捉え、目を合わせてくる。

冷たく口元が笑い、知らない方向に指をさす。

次の瞬間、爆撃機は跡形もなく破壊された。

「爆撃機、墮とされました。はやく引きましょー！ 報告は後です!!」

覇気迫る表情で訴えられた長門は、一言も文句を言うことなく赤城に従った。

鎮守府に撤退を進言し、許可をもらう。

即座に後ろに向くと、最大戦速で撤退を始めた。

3人の焦りとは裏腹に海はとて静かだ。そこを猛スピードで駆け抜ける。

赤城は考える。爆撃された後のあの余裕の対応。そして、謎の指差し。

なぜあんなにも余裕を醸し出していたのか。歌うなど、自ら隙を晒け出すも同然の行

動だ。

だが、もし爆撃機が存在を初めから分かっている、これ以上の敵機はいないと判断し

ていたなら……?」

そう強引に仮定しなければ納得ができなかった。

しかし、そんなことが……。

……爆撃機が爆撃をする前には存在を認知されていたということ。

それしかありえない。そうでない限り、かの仮定は成り立たないのだ。認めしまったくはなかった。なぜならば、それはつまり赤城の実力不足であることを意味するからだ。もちろん見つかからないように心がけたのに。

赤城は熟練中の熟練だ。それを破るとならば大きな脅威であることは間違いない。

提督の言葉が頭の中で何度も流れる。

賢い、と。

決して侮ってなどいかなかった。ただ、それが予想の遥か上をいっただけ。だがそれは言い訳だ。

そして、あの指差しには必ず意味があるはずだ。あの方角、目標の位置から考えると、もしかして、自分たちの待機していた場所……？

意味があるとしたらそれしかない。それ以外考えられないのだ。

だとしたら、

どうやって……！

ふたりに忠告しようとしたその時だった。

「三時の方向、敵影発見！ 戦艦1、重巡2、駆逐3ツ！」
遅いのは向こうでなく、こちらだった。

陸奥が悲鳴に近い声で叫んだ。こちらはたった3人だ。

いったいどうやってこちらの位置を捉えたのか。そんなことをぐだぐだ考えている暇はない。敵は既にこちらに砲を向けている。

これが『想定外』のことだろうか。赤城は焦りの中でひとり漠然とそう感じた。
「まずいぞ……九時の方向にも敵影……はさみうちだ」

長門が悔しそうに呟く。

赤城は長門の言った方向を見る。確かにはさまれている。しかも、姫が混ざっているときた。

もしかして初めから、遊ばれていたのではないか……。赤城はそのように考えてしまった。

「とにかくありつたけの砲弾を撒きながら撤退しましょう」

陸奥の言葉に長門は頷き、ふたりはそれぞれ砲台を左右に向けた。

「赤城、必ずお前を帰してやるからな」

そこにあるのは信頼だ。

赤城は疑いの欠片もなく長門と陸奥を信じた。

「私も必ず帰してあげますよ」

「うむ。では行くぞ！ 全砲門……斉射ア!!」

長門の砲門が火を吹く。

3人の、決死の撤退戦が始まった。

死神の噛い

男は床を這いながら執務室に入った。

その跡はべつとりと血が線を引きしている。

執務室であるその部屋に天井はなく、壁は破壊され、下に広がる絶望を見せつけてくる。

止まない砲撃。悲鳴。叫び。

「どうして……こうなった……」

鎮守府正面海域は何も問題なかったはずだ。それなのに、なぜ。

奇襲を受け、こちらは完全に後手にまわってしまった。必死の防衛戦を繰り広げているが……艦娘たちはほぼ全員やられた。毎日を共に過ごして来た艦娘たちが、だ。それは男の人生の中で、間違いなく最も絶望を感じた時であつたろう。ここを落とされるのは時間の問題……それもすぐだろう。

せめて、と。

奇跡的に偶然机の上に置かれていたカメラが目に入る。

限界の力を振り絞って腕を伸ばし、ペンやら置物などを払い落としながらなんとかそ

れの掛けひもを掴んだ。

「う、ぐ………おとおお!!」

もはや男の命は風前の灯火。それすらも力に変えて為すべきことを為す。まさに提督の鏡である。

敵の大將をカメラに捉え、シャツターをきる。確認などどうでもいい。これを誰かに送らなければ。

敵の一部がこちらに気づき、顔を上げた。

「はは………」までか」

そう言いながらもカメラをゆつくりと接続し、宛先を確認せずにアップロードする。

アップロード先は、最悪なことに、悪評で有名な『死神』提督だった。しかし、男はその提督の本質をよく理解していた。そしてその『疫病神』もだ。ふたりとも他の提督たちからは忌み嫌われる存在……。

だが、男はこのふたりに全てをかけることにした。

彼がこの戦争に本気で向き合おうとしている数少ない提督のひとりでもあるからだ。そしてその『死神』の指導により、『疫病神』はあまりにその見た目にそぐわぬほどの力を入れた。

これは期待してもいいはずだ。

鬼の砲がこちらを向く。その表情はどこまでも冷たく、淡々としていた。やれることは全てやった。

小さく口角を上げる。

「ーいいだろう。お前の砲弾が俺の身体にめり込むまでこの眼、開いておいてやろう。そして、『死神』と『疫病神』に存在を知られたことを後悔するんだな。」

「ふっ……あと、は任せたぞ……『死神』」

鬼の砲が深紅の火を吹き、執務室を根こそぎ吹っ飛ばした。

この日、五本の指に入るほど有力だったとある鎮守府は、たった一体の###とその取り巻きによって、僅か数時間で、完全に壊滅させられた。



「お前ら！ 大丈夫……か？」

陸奥の言う通り、提督は大淀と共にすぐに出撃ドックに飛び込んで来た。

だが、金剛たちの姿を見ると、その言葉がしだいに覇気をなくしていった。

「なんでお前らが……」

「私がここに行こうって言ったんです……」

「比叡……」

提督ははだけた制服を整えると、中に入って来た。

「見られてしまったからにはもう誤魔化せない、か」

「提督、それはどういうことなの？」

金剛が尋ねる。

なにしろ、金剛たちの知らないところでこうして赤城たちが出撃し、さらには傷ついでしまったのだ。おいそれと見過ごすわけにはいかなかった。

「……はあ、話すしかないか。あとで執務室に來い。そこで話そう。赤城、長門、陸奥、お前たちもだ。高速修復材を使うから大丈夫だよな？」

「はい。それなら問題ないです」

赤城が返事する。

金剛にとって、提督が言った高速修復材なるものがどんなものかわからなかったが、名前の通りはやく傷を修復する薬か何かだろうと推測した。

提督が出撃ドックを出る。

「では私たちは入渠しようか。待たせたら悪いからな」

煤けた服を気にする様子のない長門にはもう少し恥じらいを感じてほしいものだ。

艦装を完全に解除し、整備机の上に置く。

「ねえ長門、入渠………だっけ？　するんだったらそれ、私たちが片付けておいてあげるよ」

「気持ちはあるがたいが……断る。これは私の艤装だからな。自分でしたいのだよ」
金剛の善意があつさり拒絶される。別にそれに怒りを覚えることはないが、まさに軍人——と表現すればいいのだろうか——のような心構えだった。

そのこだわりはやはり金剛にはわからない。しかし、赤城も陸奥も同じようだったから、なんだか金剛だけ一步引いた世界にいるみたいだ。

「ごめんね」

「気にすることはない。その心遣い、感謝するぞ」

「どういたしまして」

「うむ。提督に少し遅れると伝えてくれ」

快く返事をして、金剛たちは出撃ドックを後にした。

戦争とは忌むべきことであり、してはいけないことだ。そう書物で耳ではなく目に蝕ができるほど金剛は目にしてきた。

しかし、金剛たちのしていることはその戦争だ。ではこれは忌むべきことなのか？と疑問に思う。これはおそらく違う。少なくともこちらに非はなく、一方的な向こう側からの侵略から始まった戦争だと聞く。

ならばこれは正当なものであるはずだ。きっとその考えは正しいのだろう。それでも金剛にはどうしても、この鎮守府に残る残らないの判断の材料にしたい疑問があるの

だ。

それは、なぜ戦うか。だ。

今の金剛には自覚はないが、その身体には軍艦の魂が宿っている。そうであることは確かだが、それと同時に女の子でもあるのだ。なのにどうして傷ついてでも戦えるのかわからなかった。

深海棲艦との戦いによって人々が救われているのは事実である。

人々を守るためだけなのか？ それだけなら金剛は腰を上げられないような気がする。立派な目的だ。それを否定しようものなら非難の嵐に晒されるのは明白なことである。

最後に後ろに振り向いて長門たちを一瞥した金剛は、執務室に向かうのだった。

「気にしなくていいわ、と言うのは無意味ね」

加賀がぼそりと呟く。

「まあ、ね」

金剛がそれに反応する。

車椅子移動もいつの間にか慣れてしまった。初めは少なからず羞恥を感じていたが、今ではそれはない。が、明日には卒業するつもりだ。筋肉痛が治ればだが。

「お姉様……」

「うん。なんとなくわかってるよ」

心配そうな霧島を金剛がなだめる。

言わなくてもわかっている。提督の話そうとしていたことは、おそらく金剛に深く関わりのあること。

「榛名は……聞かない方がいいと思います……」

それは、きつと金剛を傷つけることになるから。

何も言わないが、きつと比叡も気にしているはずだ。しかし、それでも金剛は聞きたい……いや、むしろ聞くべきだと思った。

「ううん、私は聞きたいな。きつとそれで、もつと『戦い』を知ることが出来るから」

「正直止めたいところなのですが……そんな眼をされると止めようがありませんね」

霧島に指摘されて初めて自分の眼に力がこもっていたことに気づいた。

「えっ？ ああ、ごめんね」

「いえいえ」

「これが終わったら、今度こそ教えてもらうね、比叡」

「はい！ もちろんです！」

グラウンドの端を横切り、提督のいる本棟まではもうすぐだ。

暖かい日差しがほかほかと感じ、これから重い話を聞きに行く金剛たちとは正反対

だ。

「あれ？ 金剛さんじゃん」

ベンチに座っていたのは大井と北上だ。

ふたりがレズだというのは前から知っている。というより、大井からの一方的な愛情なのだが。

素晴らしい百合の花を咲かせていたようだが、北上は金剛たちに気づくとピンク色の会話を止め、こちらに手を振った。

「北上と大井だね？ うん、ちゃんと覚えてるよ。こんにちは」

「覚えててくれて嬉しいなあ。こんにちは」

「ちよつと、私の北上さんを誑かさないでくれる？ ……って言いたいところだけど、今日だけ許してあげるわ」

「え、いいの？ ありがとう」

「心配性だなあ大井っちは。私は大井っちのこと好きだし、金剛さんのことも好きだよ」
「北上さん……！」

大井が北上の手を握り取り、目を輝かせる。その眩しさはもう神々しさの域にまで達して……。

これはまたシスコンとは違うアブナイ香りだ。

「ところで金剛さんはどこに行くの？　もし暇だったら一緒にどこか行かない？」

北上の提案はとても嬉しいものだったが、提督の大事な話があるから、苦虫を噛んで断ることにした。

「ごめんね。ちよつと今から執務室に行かなくちゃいけないんだ。だからその後でもいい？」

「ふーん。なら仕方ないね。じゃあここで大井つちと話でもして待つてるよ」

「本当にごめんね」

「ううん、大丈夫だよ。その間に大井つちと話すのも楽しいからね」

そう言つて北上は握られていた手を握り返す。当の大井はというと、頬を薄く朱色に染めている。

シスコンとかレズとか、全くそういうものに明るくない加賀は、まさにその二大勢力に挟まれている状態であり、なんだかむず痒かった。

加賀の赤城への思いはそういった愛情ではない。大きなカテゴリーで括つてしまえば愛情ではあるのだが……違うのだ。

比叡たちも大井も、ひとりの女を好きという気持ちに嘘偽りはない。加賀とて金剛のことは好きだ。変な意味ではない。ただ、そのベクトルが違うのだ。

人の生き方は様々だ。そこには口を出さないでおこう。加賀はそう思うのだった。

「それじゃあまた後で〜」

「うん。またね」

「さよなら金剛さん。ところで北上さん……」

などとさつそく大井が話題を投げかける。

比叡たちはそんな様子を見て、ある意味大井を尊敬した。

北上は少し鈍い系だが、それに臆さず果敢に絡んで行くその熱い愛情！

「私たちも見習わなければいけませんね」

「気合いを入れれば……！」

「3人で寄つてたかつて逆にもさ苦しい気が……」

各々金剛へのアプローチを考えるが、やはりどれだけシミュレーションしてもこれと
いうものはない浮かばない。

艦隊の頭脳、霧島。頑張れ。

「そろそろ着くね」

「えっ？ あ、はい！ そうですね」

「どうしたの？」

「いえ、なんでもありません！」

急にかけられた金剛の声にびつくりしたようで、ハンドグリップを握る手がびくり、

と震えた。

「緊張するわね」

「意外です。加賀さんも緊張するなんて」

「ええ。といつても、これは武者震いとかではないけど」

「大丈夫、皆緊張してますから！」

「それは私を慰めようとして言っているのかしら」

的外れな榛名の言葉に加賀は薄く微笑む。

「でも……少しは緊張がほぐれたわ。ありがとう」

「はい！」

エレベーターを上り、執務室の階へ。

霧島がドアをノックする。

「ん、入っていいぞ」

中にいる提督に促されて霧島たちは中に入る。

提督は窓際に立って外を眺めていた。広がる青い海を。

「赤城さんたちは少し遅れるとのことです」

「そうか。ところで霧島」

「はい？」

「今の俺、なんか提督っぽいだろ？」

「は？」

「いやこうやって外を眺めてるこの感じってどうか」

「言われれば……まあ、そうですね」

「ここで臭いセリフのひとつやふたつ言えれば完璧だと思っただが……思い浮かばなくてな」

「『……やはり海は綺麗だな』とか言ったら結構いいんじゃないかな？」

「おお、金剛！ それいいな！ いつかその言葉使わせてもらおうぞー！」

「これから大事な話をするというのに、このゆるさはなんだろうか。そんなことを訊いてくる提督も提督で少々カッコ悪い。」

「……前置きはこんなもんでいいか。本題前の談笑だよ。最初から重かったら俺もいろいろとキツイからな」

「カッコ悪いですよ、提督」

榛名が突っ込む。

「安心しろ。俺自身のお墨付きだ」

「なんですかそれ」

榛名がぶつ、と吹き出す。

その時、ドアをノックする音。

赤城たちが来たのだろう。

「ん、入っていいぞ」

赤城たちが入ってくる。

「ずいぶんと急ぎできたのがわかる。3人ともまだ髪が乾ききつておらず、少し濡れている。」

「そんなに急がなくてもよかったのにな。ほら、髪まだ乾いてないぞ?」

提督に指を指されて初めて気付く。

「そんなことはどうでもいい。はやく話してくれないか」

長門がいつにも増して覇気迫ってくる。

「そうなのか? 特に陸奥とか気にしそうだけどな。ま、いいか。そのソファアに座ってくれ」

金剛たちはソファアに座る。ソファア自体は大きく、さらに数個あるから全員座れる。

「さて、いきなりぶっこみで話すか。簡単に言えば、金剛らが遭遇したあいつの偵察に行った」

「あの深海棲艦ですか!?!」

霧島が声を荒げる。

「そうだ。名称もあるからついでに覚えておいてほしい」

「名称？ なんですか？」

金剛にはやはり記憶になかった。まず、深海棲艦がどんな姿、形をしているのかも知らないのだ。

思い出そうとしても、そもそも断片すら忘れてしまっている。だから、頭のどこかに引つかかることも、ない。

『蜘蛛』と呼ぶことにした。一応これで大本営に通してあるし、いずれ正式に決まるだろう。そうだよな？ 大淀」

「はい」

「蜘蛛……？」

口にしてみるも、金剛にはやはり何もわからない。

「賢い頭脳。そして超広範囲にわたる蜘蛛の糸。一度足を取られると抜け出すのは至難の技だ」

提督が机に肘をつき、手を組み合わせてその上に顎を乗せる。

「実際、赤城たちは蜘蛛に遊ばれていたからな」

提督がそう言うのと、長門が悔しそうに顔を顰めた。

金剛はそんな長門を見て、その蜘蛛という名の深海棲艦の恐ろしさを感じ取った。

「きつと私たちは逃げられた、というより、逃してもらえた、の方が正しいからな」

「それはいつたいたいということでしょうか？」

榛名がもどかしさを振り払って長門に尋ねる。

「私たちは挟み撃ちにされたんだ。だが、逃げ道が初めから作られていて……そこからまんまと逃げおおせたというわけだ」

長門が握りこぶしをつくり、わなわなと震えていた。それほど屈辱的な戦いだったのだろうか。

陸奥も長門のそんな様子を見るが、何も声をかけられずにいた。

「赤城。しばらく前、あそこの鎮守府が落ちたの、知ってるだろう？」

いきなり他の鎮守府の話題を切り出されて驚きながらも返事を返した。

「はい。ですが、それが何か……？」

「あれは蜘蛛の仕業だ」

「え……？」

知られていなかった真実がまさか提督の口から明かされると誰が予期できたのだろうか。

「なぜそれを知っているのですか？」

「向こうの提督が教えてくれたからな」

「でも向こうの提督は……」

「死んだとも」

そう言うのと提督は椅子を引いて机の棚を引くと、一枚の写真を取り出した。

そして、それを赤城に渡す。

「これが蜘蛛だ」

赤城を囲み、皆がその写真に見入る。

手を震わせながら撮ったのだろう、少しぶれている。しかし、敵の姿はちゃんと映されていた。

陸上を歩く蜘蛛。そしてその周りに姫と鬼。

「これが深海棲艦……」

ここで初めて金剛は間接的にだが、深海棲艦を初めて目にする事になった。

どう見ても人型……強引に言ってしまうえば、艦娘に似ていた。

「俺はあの人を尊敬するよ。自分が死ぬ直前まで提督だったんだ。俺とは全然違うな……」

どこか意味深な発言だったが、金剛はそれを追及すると、重い話に進みそうだったから聞き流すことにした。

「とまあ、蜘蛛は姫とか鬼とかそういうったものとは違う次元の敵になるだろう」
「倒す方法は？」

真剣な表情で加賀が尋ねる。

「今のところはない。蜘蛛には守りがいつもついてるからな」

「ならその守りを倒せば？」

「そうしたいのは山々なんだがな。その守りが姫、鬼だからな。しかも、受けた傷を蜘蛛が回復させる。なんて無理ゲーだ」

「そんな……」

加賀の落胆する声。

敵ながらなんて理想的な戦術だ。

金剛たちに動揺が走り、無理ではないのかと心の中で弱音を吐いてしまう。

「……なら、回復させる時間も与えずに沈めることができれば、蜘蛛を攻撃できる。そうですね？」

比叡が珍しく頭を使う。

「そうだ。でも、姫鬼を一気に倒すには、それこそ最大火力をもってしないとイケない。言ってしまうえば大和型とかだ」

「でも、大和型は……」

「ああ、いない。だから現時点でこの鎮守府の力では蜘蛛を倒すことはできない」
「そんな……それじゃあ私たちに力がないって言っているようなものじゃ……！」

事実上の戦力外通告に比叡が激昂しかけた。しかし、それを腕を金剛が抑えた。

「比叡」

「お姉、様……」

提督は比叡を無下にするつもりで言ったわけではない。

それを金剛は比叡にわかってほしかった。

「実は、大和型がいなくてもそれに同等……いや、それ以上に強くなる方法があるんだが……」

「あるのか!?? 教えてくれ!!」

ソフアーから身体を乗り出して長門が声を大にした。

しかし、提督はかぶりを振る。

「……絶対にそれをやらせるつもりはない」

「な、なぜ!??」

「――必ず死ぬからだ」

「なにを言ってる……」

るんだ、と言おうとした、血が頭に上りかけた長門の口がそこで動きを止めた。

提督を怖く感じたのだ。

まるで、身体を透視され、心臓の動きを見られ、いつでも握り潰せるぞと脅されたかのような、恐ろしく、そして冷たい恐怖が長門に絡みついたのだ。

「そ、それでも私は……」

引くまいと凄む長門だが、それは提督によつてあつけなく否定されてしまった。

「やめておけ。中途半端な覚悟であつても、そうでなくても無理だ」

「なら、提督は今ままでそれをしたことは……」

「ある」

「……その艦娘は」

「死んでない」

「提督、それならなぜ死ぬなんてことを言うのですか？」

「ここで赤城が口を挟んできた。

過去に提督が実践して生きているのに、それをなぜ。

「あいつは死んだよ。いろんな意味で。だから乗り越えられた」

「ではその艦娘は今どこに？」

「さあな。どこかの鎮守府にいるだろう」

「心配しないんですか？」

「ああ、もちろんだ。……あいつは絶対にやられないからな」

遠い目をしながら後半部分をぼそりと呟く。

「なら、これから私たちはどうするのかしら?」

「ここままでだんまりを続けていた陸奥が口を開く。

「とりあえずはお前らの戦力の底上げ。あとは大和型の建造だな」

「資源は大丈夫かしら?」

「うっ、頭が……」

「あらあら」

つい先ほどの赤城たちの入渠で結構な資源を持っていかれたから、全力で建造に走る

ことはできない。

「……しばらくは遠征大会だな」

できるだけ、蜘蛛の糸から遠く離れた場所でなければならぬ。しかし、もしかすると蜘蛛はそれすらも先読みして立ち回っているかもしれない。

はつきり言うと、これは提督と蜘蛛の頭脳戦と化してきている。裏の読み合い。

「これで話は終わりだ。金剛、何か思い出したか?」

「ううん、何も」

「そうか。金剛」

「？」

「……怖いと思っただか？」

金剛は赤城の持つ写真を見る。

他の鎮守府が落ちた、なんて他人事のように感じてしまうが、だからといって、この鎮守府が攻撃されないとは限らない。

鎮守府が落ちれば、その地域一帯が無防備になり、深海棲艦の格好の的になる。つまりは、戦わない道を選んだとしても、死ぬ可能性はありえるということだ。

「……うん」

「それはいいことだ。俺たちはそんな敵と戦っていることを覚えておいてくれ」

「わかった」

「よし、じゃあこれで話は終わりだ。金剛、4日後に聞かせてもらうからな」

金剛は黙って頷く。

「ん、解散。あ、そうだ大淀。あとで飯行かないか。喋りすぎて疲れた」

「なんですかそれ。……まあいいですけど」

提督の切り替えの早さはきつと全人類の中で上位に入ることだろう。

そんなことを考えながら長門たちは執務室を出ていった。

「……提督」

「ん?」

「手紙です」

「はいよ」

大淀から手紙を受け取り、封を開けて中を読む。

すると、提督はなぜか額に手を当てて豪快に笑い出した。

「ふふふ。はははは!!」

「ど、どうしたんですか?!?」

「ははは!! あいつ、マジかよ!」

やがて笑いが止まり、笑い疲れた腹を抑えた。

「いやあ、ごめんごめん。ついな」

「そうですね。ちなみになんと……?」

「他の鎮守府から艦娘がひとり左遷されてくるんだよ。来るのは大体5、6日後くらい」

「左遷?!?」

大淀が驚く。

「まさか、このタイミングで来るとはな。これは可能性が出てきたぞ……」

「可能性……?」

提督は面白おかしくて仕方がなかった。

果たしてこれが運命……神の啓示か。

絶対そうだ。そうに違いない。さぞかしあいつも喜ぶことだろう。

獯猛なほどに口角を上げて提督は嗤う。

「『蜘蛛を殺す』可能性だよ」

◆ ぞわり、と大淀はその時だけ提督を恐ろしく感じた。

蜘蛛は踊る。

蜘蛛は歌う。

「——♪ ——♪」

今日の聴衆はいつもより少し多い。

それが何より蜘蛛にとつて嬉しかった。

踊りに磨きがかかり、声に美しさが宿る。

月の映える夜。その月光に照らされる彼女はまさに美の化身。

「ああ、今日はツキが綺麗なネ」

うっとり、頬を染めながら呟いた。

出撃？

「おお、金剛さん。終わったんだね」

金剛たちが外に出ると、すぐ側のベンチでおしやべりをしていた北上たちがこちらに気づいた。

「うん、今終わったよ。ごめんね、待たせちゃって」

「全然だいじよぶだったよ。大井っちと話してたら時間がはやく過ぎるからね」

「え、もう来てしまいましたの……!?」

聞こえないように大井が最後にチツ、と舌打ちをした。

せつかくのお話を邪魔したのは事実だし、少し引け目を感じてしまった。

「うーん、この人数だったら何したらいいんだろかねえ」

金剛姉妹に加賀の5人だ。

7人でいったい何ができるのだろうか。

「あなたたちがよく行く場所とかは？」

「いやですねえ加賀さん。北上さんと一緒なら、どこでもいいんですよ」

ねー？ と顔を見合わせる大井。

「詰んだわ」

「加賀諦めるのはやつ」

加賀のさじの投げように金剛がツツコミを入れる。

しかし、いざ考えてみると、金剛も何をすればこの7人で有意義な時間を過ごせるか思いつくことができなかつた。

「そうです、今からもう一度出撃ドックに行きましょうよ！」

その声をあげたのは比叡だつた。

「ほら、人が多いほど色々勉強できますから」

「出撃ドック？」

大井が不思議そうに比叡に訊き返した。

それもそのはず。7人で出撃ドックなどに行つても特に楽しいことができるわけではないのだから。

「はい。お姉様に色々教えようと思ひまして」

「……ああ。そういうことね」

金剛が記憶喪失だということは、もちろん……そういうこと。

比叡の言ひたいことを察した大井はひとつ頷いた。

「え？ でもせつかくだしもつと何か違うことを……」

「じゃあ逆にどこに行けばいいの?」

「それは……」

「決定ね。善は急げ、というわけで早く行きましょう。北上さん」

「うん。大井つち」

大井は北上と手を繋ぐと、そそくさと行ってしまった。

なんだか大井がとても行動力の高い子のように思えて来たが、きつとそれは思い違いではない。

「私たちも行きましょうか」

霧島に声をかけられ、ふと我にかえる。

「なんだかあのふたりに悪いね」

「そんなことはないですよ、お姉様。なんだかんだいって、ふたりともお姉様のことが好きなんですから」

「へ?」

「……まあ、私には及びませんが」

「聞こえてるよ?」

「空耳です」

そんな笑顔で言われてしまえば、今の霧島の言葉が本当に空耳かのように感じてしま

いそうだ。

「あ、うん」

金剛は心の中で密かに楽しみにしていた。

艦娘がどのような様子で戦うのか。

長門たちが装備していた艦装というもの。あれがいったいどのようなものなのか。

それを知ることができると思えば自然と気分が上がる。

比叡に車椅子を押され、すでに姿が見えなくなった大井と北上を追いかける。

海から香る潮の匂いも慣れたものだ。

金剛は大きく息を吸ってそれを堪能する。

ふと海に顔を向ける。

これが戦争を繰り広げている海だというのか。全くそうには見えない。

しかし、その向こうでは深海棲艦の手が広く伸びている。

「お姉様？」

榛名が心配そうに尋ねてくる。

「いや、なんでもないよ」

かぶりを振り、笑顔を向ける。

「変なお姉様」

「そうだ、私も艦娘なんだからその……艦装ってあるの？ 私のが」

興味が湧いた。

長門は自分の艦装をとっても大事に考えていた。

赤城なら飛行甲板。陸奥なら巨大な砲台。

ならば金剛の……金剛だけの艦装もあるはず。その姿を一目見たかったのだ。

「もちろんありますよ。でも……」

榛名が言い澀む。

あるにはあるらしいが、何か事情があるらしいようだ。

「その……今は修理中ですよ……」

「修理中……？ ああ、もしかして前に蜘蛛と戦った時に傷ついて……みたいなの？」

「はい、そうです。実はほぼ一から治しているような状態で」

あんなに強そうな蜘蛛と戦って生き残ったのだ。むしろそれだけの被害で済んだこ

とに喜ぶべきなのだろうか……？

「じゃあその治してくれている人にお礼を言わないとね。どこにいるの？」

「出撃ドックにいますからついでに案内しますよ」

「そう？ ならよかったです」

「そろそろよ」

榛名との会話に夢中で、加賀に言われて気づいた。

出撃ドックが目前に広がる。

「お、やっと来たね」

入口の前で待っていたのは北上と大井だ。

相変わらずの気の抜ける声でこつちに声をかけてきた。

「遅いわよ！ でも北上さんとお話できたからなしにしてあげるわ」

「あー……。ありがとう？」

「はやく入りましょう」

加賀に促され、中に入る。

「ほら、あつちが工房です」

金剛は榛名に指差された場所を見た。そこにはありきたりな『工房』と可愛らしく書

かれた。

なんだか名前と意味が合わない。

榛名が先に入り、金剛はその後に続いた。

はじめに金剛が感じたのは熱気だった。しかし、それは少し熱いだけの熱気であつ

て、真に感じたのは魂の熱気だった。

思わずごくりと生唾を飲む。

「確かこのあたりのはずでしたが……」

榛名の後ろをついていく。

その道中には大きかったり、小さかったりそれぞれだったが、どれも立派な艷装が並べられている。

傷ひとつ見当たらない。とても綺麗な艷装だ。

その下に名前が立てかけられていて、その者の所持物であることを示す。

だがやはり、『金剛』の場所には虚しくも何もなかった。

「……ですね。失礼します」

ようやく何かの部屋を見つけたみたいで、その中に迷うことなく入室した。

中では艷装を治して……いや、作りなおしている最中だった。そして、それをしてい
るのは……。

「小人……?」

金剛よりもはるかに小さな子供? が黙々と作業を行っていた。

「妖精ですよ、お姉様」

「妖精? ははは……これはまたファンタスティックだね」

と、こちらに気づいたようで、その妖精たちのひとりがトタタと走り寄ってきた。

「#####!」

「!??!?!?!?!」

金剛の知らない言語で流暢に話しかけられ、驚きのあまり目を白黒させた。

「###? #######」

「ごめんね、ちよつと何言ってるかわからない……」

妖精が可愛らしく首を傾げている。

何度も身振り手振り金剛と会話をしようと試みているが、それは叶わなかった。

妖精は残念そうに顔を伏せてしまった。

「お姉様、わからないのですか……?」

「……うん。そうっぽいね。以前の私ならわかってたの?」

「はい」

「そっか……」

何もわかってやれないのが悔しい、のではない。そもそも妖精だなんてファンタスティックとファンタジックを合わせてファンタズジスティックだ。

そのような存在を理解し、さらに会話もできていたなんてとても想像できなかった。

「でも……ありがとうっていう気持ちは伝えられる」

言葉が通じなくても、意思を通わせることはできる。

金剛は妖精の頭に手を伸ばすと、優しく撫でた。

突然のことで驚いたようだが、すぐに気持ちよさそうに目をつぶった。

「ありがとう。私のために」

最大限の感謝を込める。

「#####」

「お姉様。行きましようか」

「そうだね」

最後に手を振って金剛たちは工房を出た。

榛名に連れられ、金剛は『出撃』と地面に書かれたパネルが複数ある場所。

そしてその目の前はちよつとした浅瀬になっていて、そこに海水が低い波を立てている。

「……」

「はい、私たちはここから出撃するんですよ」

改めて辺りを見回してみる。

その様子は初めて遊園地に連れてこられてはしやぎ回る子供のようで、どこか榛名自身も嬉しかった。

「待っていました、お姉様」

北上たちと談笑をしていた霧島がこちらに気づいた。

「ごめん、待たせたね」

「そんなことありませんよ。さき、前へ前へ」

車椅子の運転手が榛名から霧島へと交代し、会話の中心に押された。

他愛のない話だ。

金剛の好きなどころや、金剛の可愛いところ。金剛の愛情を……。

語っているのは主に比叡である。

そのあまりの姉妹愛に金剛も頬を引きつらせてしまう。

「そう！ これらのことから証明されることはただひとつ！」

なぜか霧島つぼく理知的なキャラを演じてないメガネをくいつと上げるそぶりを見せた。

「お姉様は素晴らしい！ 以上です!!」

「……比叡？」

金剛が後ろにいることに気づかず、愛を叫んだ比叡はゆつくりと後ろを振り返った。

大井の隣では加賀があちゃー、と言わんばかりに額に手を当てている。

「……あ、今の聞いてました？」

「うん、全部」

「で、でも！ 私の気持ちは本物です！」

「そんなこと言われたら余計に恥ずかしいよ……」

「もじもじするお姉様も素敵です!」

「えええ……」

今日の比叡はまた一段と荒ぶっている。このままだと榛名と霧島にも伝染して悲惨なことになってしまうかもしれない。

「ああ、また北上さんを唆す人が1人増えた……」

大井の敵、ここに増えたり。

大井の金剛への危機感は尋常ではない。今はよくわからないが、以前のあのコミユカの高さ。あれをもつてすれば愛しの北上への最終防衛ライン——大井結界——が容易く破られそうでもいつも危惧していたのだ。

「私はそんなにチョロくないからね」

「そんなこと言つて……前にもあつたじゃないですか」

「あれ? そうだっけ?」

「北上さん、あとでパフェ奢るわよ」

「え、ホント? 行く行く」

「北上さん!?」

口では言うが、実際にはこの有様。

大井を経由しない、北上へのダイレクトアタックにはめっぽう弱い。

大井の日々の苦勞が少しだけ垣間見えたような気がした。

「そ、それではお姉様、とりあえず形だけですが出撃しますね」

これ以上話を盛り上げたらカオスになっていきそうな嫌な予感がして、榛名は強引に加賀たちの会話を断ち切った。

『今のところ』この中で最もしつかりしているのはこの榛名で、金剛は妹の助け舟にこそぞと乗った。

「うん、しよう！ 楽しみだね！ あ、でも私の艦装は修理中だから……」

「大丈夫ですよお姉様。脚部艦装ならとうの昔に治していますよ」

なぜかウイंकを決めた榛名だったが、深入りはしないようにした。

加賀たちも先ほどの余韻に浸りながらも出撃のパネルを踏んだ。
すると。

正面の大きい木製の看板が名前を表示し、パネルは形を変えると、地下から上つてきた脚部艦装が彼女たちの足に装着される。

そして、最後に、底から鉄の鎖に引き上げられて海面に勢いよく浮上した艦装を、ガチャリと重い音と共に装着すれば完成だった。

「金剛さんはやくー」

北上に促されて、恐る恐る足を差し出そうとしたが、触れそうところでその動きが止まった。

「これ、踏んでも何も無いんだよね？ 落ちたりしないよね!!?」

「そんなわけないじゃん」

「ホントのホントに?」

「嘘ついてどうするのさー」

なかなか踏み出そうとしない金剛と北上の漫才に痺れを切らした大井がこめかみに太い青筋を浮かべている。

「お姉様、はやくしないと大井さんが……」

榛名がちらりと覇気めぐらせている大井を一瞥して、冷や汗をたらりと流す。

「あ……うん。そだね」

敵意むき出しの犬のような鋭い視線ををようやく感じ取り、金剛は苦笑いを浮かべながらとうとうパネルに足を乗せた。

直後、浮遊感が金剛の身体を包んだ。

「わふっ!!?」

あつという間にパネルがその姿を変化させ、下から脚部艤装が浮き上がってきた。

一瞬だけ逃げてしまいたくなったが、その衝動をどうにか抑えた。

左右のアームが伸び、金剛の足首を捉えた。

「ふわあいッ??」

すべすべな肌に金属の冷たさが触れ、つい腑抜けた声を漏らしてしまった。

その冷気は一気に上昇し、身体がぶるりと震える。

これで脚部艤装だけの装備は完了した。

足に金属の確かな重みを感じ、ゆっくりと足を一步踏み出す。

「こんなにうるさい装着シーン初めてだなー」

北上のツツコミに金剛は恥辱に頬を染める。

◇

誰にも気づかれることなく、出撃ドックの隅から彼女はシャッターを切る。

まさにその姿は職人。

「青葉、見ちゃいました！ これはいいネタになりそうです……!」

スナイパー顔負けの正確さで、送られるデータ量は雪崩のごとく、勢いがとどまるどころを知らない。

◇

「さて、出撃しましょうか」

金剛の恥ずかしがる姿を脳内に何枚も保存し終えた霧島は、鼻血が流れそうなところ

をぐっと堪えて、それを誤魔化すように声を張った。

皆すでに準備は完了で、浅瀬の上に浮いている。

「大丈夫よ、金剛さん。怖がらないで」

「う、うん……」

金剛の握る手が汗ばむ。

「ご、ごめんね」

「大丈夫よ。気にしないで」

加賀に手を引かれ、金剛はおろおろしながらもなんとか浮くことができた。

「わあ……！ すごい！ すごい浮けたよー」

子供のようにはしゃぎようだ。

加賀は思わず口元が緩んでしまい、にへらと微笑んだ。その顔は決して誰にも見られ
てはならず、加賀のプライドに関わるものであった。

しかし幸いそれは誰にも見られていない。

「よかったわね。さあ、ゆつくり行きましょう」

金剛の嬉しそうな表情とは裏腹に、足元はバランスを取るので精一杯で、ガタガタと
震えている。

その様子はまさに生まれたばかりの子鹿だ。

ふたりの前方では、比叡がぎりぎりど悔しそうに口を歪ませている。

比叡、榛名、霧島の総意は、『加賀、今すぐそこを代わりなさい!』だ。必死に足をハの字に伸ばしてバランスを取る。

「大丈夫。怖くない。怖くないから」

まるで子供に諭すような口調だったから、金剛はムスツと顔をしかめた。

「そ、そこまで怖がってないんだから!」

「そう? なら行きます」

加賀がゆっくりと発進した。

手を繋がれた金剛はそれに引かれ、たどたどしくもなんとかついていく。だが、今にもコケてしまいそうだった。

「ちよ、待つ……!」

案の定、数メートル進んだところで金剛はバランスを崩し、盛大に水しぶきを上げて見事にコケた。

「お、お姉様ー!!」

妹たちの声が出撃ドックに反響した。

未だ、出撃ドックからの出撃には至らず。

あなたはなぜ戦うの？

「うえええ……びしょびしょだよ」

加賀に手を引かれ、なんとか出撃ができた金剛は、ずぶ濡れになった巫女服の冷たさに不快感を覚えている。

「……」

だが、不快感を覚えているのは金剛だけではない。目の前の加賀だって水飛沫で派手に濡れてしまっている。

自分が引き起こしたものだから文句は言えないが、やはり拭えない。

「……ごめんね加賀」

「……いえ、私にも非がありましたので」

天気快晴とあって、今日の海はとても穏やかだ。

「お姉様、大丈夫ですか？」

比叡がこちらに近づいて尋ねてくる。

「身体的には大丈夫。でも、精神的には……微妙かな、うん」

「あははは……」

これ以上は自分と加賀が余計に哀れになっていくからできれば突っ込んで欲しくない。

「と、とりあえず頑張るよ」

両手の拳を握り、気を取り直して金剛は脚に力を入れた。

「私が変わりましょうか？」

「ここまで来たので、最後まで私がやります」

比叡の提案に、加賀がキリツと断る。

一航戦の意地なのか、それともただのプライドなのか。おそらく後者だろうが、これで比叡の金剛へのスキンシップは阻まれることになった。

「落ちていてゆっくりやれば必ずできるわ。だから、一緒に頑張りましょう」

「うん」

バランスを取るのはいさしできるようになった。しかしまだ不安定。

大井と北上は離れたところで早速と言わんばかりに、金剛たちそっちのけで走っている。

「は、速い……」

金剛はぼそりと呟く。

とても滑らかな走り、まるで自分の庭かのように楽しそうだ。

「もつと速い子だっているわ」

「そうなの？」

「ええ。あなたは高速戦艦だから、とても速く走れるようになるわ」

加賀に手を引かれながら、金剛は胸の内に期待を膨らませる。

例えるならば、ビート板なしでは進むこともままならないが、もつと上達して、いつかは……。

そう浮かれていた時だった。

意識が逸れたせいで、大きく足元がズレた。

「うそんッ！」

「ーえ？」

脚部艤装のスピードによって足が前に出すぎて、腰が置き去りにされ、盛大にお尻から着水した。

加賀と手を繋いだままで。

バシヤリと尻餅をつくだけでなく、その上から加賀が乗っかって来た。

ひととき大きく水飛沫が上がり、それに気づいた皆が近寄ってくる。

「お姉様!?」

霧島に起こされ、なんとか立ち上がった金剛は道連れになつて濡れてしまった加賀を

見る。

彼女が表情を見せることはあまりない。もつとも近い出来事ならば、金剛が目覚めた時に謝られたあの時だけだ。

そして、今回は無表情だ。もう怒っているのかすらわからなくて、余計に不安にかられた。

「ご、ごめんなさい！」

「……大丈夫。大丈夫よ。誰にでも失敗はつきもの。だから安心して」

濡れながらも、凜とした加賀の姿が金剛にはとてもカッコよく見えた。クールビューティーな彼女に金剛は少しだけ見惚れてしまった。

その瞬間——金剛が乙女になった瞬間——を霧島は見逃さなかった。

「今のはきつと、腰の重心が不安定になったから倒れたのよ。だから、今度は腰を落とし、重心を安定させることを意識して」

「うん、わかった」

差し出された手を握り、金剛は腰を落とした。

「行くわよ」

「了解」

ゆつくりと加賀が金剛を引っ張る。それに負けじと足に力を入れ、そして腰の重心も

忘れないように、懸命にバランスを保った。

霧島たちから見れば、今の金剛はとても不恰な走り方をしている。だが、真剣な眼で加賀の講義を受ける金剛の必死さに誰もが暖かく見守った。

「いい感じよ」

「あ、ありがとう」

「もう少しスピードを上げましょうか？」

これ以上スピードを上げられる自信はまだなく、金剛はふるふると頭を横に振った。

「そう、わかったわ」

なんとか大井たちがいるところまで移動することができた。その距離は約50メートルほど。

「お、頑張ってるねえ金剛さん」

北上が言葉をかけてくる。

しかし、金剛は集中し過ぎていて、そつちに気を向けることができずに、かくかくと頷くことで反応する。

「あははは……まあ私たちのことは気にしないで頑張つてねー」

北上に首を向けることもできない。

大きく縦に降るので精一杯。

きつとすごい形相になっているが、そんなことを気にする余裕はなかった。

「こんなお姉様を見るのはなんだか新鮮ですね……」

「こう……庇護欲を掻き立てられるような……」

「あ、それは色々と危ないやつですよ」

霧島のアブナイ発言に榛名が冷静にツッコミを入れる。

遠目から見ただけで、何もすることがない比叡を含めた3人はただぼんやりと立っているだけだ。

「ですが、榛名にもなくはないでしょう?」

「まあ……そう……かな」

「これまではお姉様が私たちを支えてくれましたが、今度は私たちがお姉様を支える番ですね」

いつも明るく、妹たちを教え、導いてくれる姉。しかしその姿は消えてしまった。明るさは変わらないが、今や無垢で無知で、そしてなによりも……弱い。

風に晒されれば、その方向にすんなりと流されてしまう、一輪の花だ。

「これはある意味チャンス!」

拳を握り、比叡が叫ぶ。

「それはどういうことですか?」

「ふっふっふー、わからない榛名？」

「わからないです……」

「無垢なお姉様を私たちでいっぱい甘やかす！ そうしたらお姉様は私たちに首つたけっこと！ そう、つまり……」

霧島がせっかいいい感じに……深い感じに空気を作り出したというのに、比叡がそれをおかしな方向に屈折させようとしている。

比叡の言いたいことはわかる。もちろんわかる。妹として。

しかし、流れというものを読んでほしかった。

「金剛お姉様育成計画です！」

なんとも馬鹿げた計画だが、彼女たちにとってはとても魅力的なものだ。

それぞれが想いを……妄想を壮大に繰り広げ、浸る。

頭を撫でる妄想。ハグする妄想。膝枕……添い寝……。

彼女たちの興奮は一気に最高潮まで持ち上がる。

「素晴らしい……計画ですね」

「でしよ？」

榛名と比叡がニヤリと笑う。

これが金剛にとって吉と出るか凶と出るか。それはわからない。わからない……が、

ひとつだけ言えることがある。

それは、それほどまでに金剛を愛しているということだ。

◆ 「よくやったな。これで俺の心の潤いが保障された」

提督は差し出されたものを一枚一枚吟味し、満足そうに目を細める。

「いえいえ、これが仕事です。こちらとしても楽しかったですし」

けらけらと敬礼を崩して彼女は自分の仕事道具を撫でる。

「この子がいけば一騎当千！　へまなんてしでかせんよ」

「さすが、安心と信頼で有名なお前だ」

「あはは〜」

彼女は後ろ頭をかいて照れる。

提督は机の下からある物を渡すと、それを手渡した。

「ほら、報酬だ」

「こゝ、これは最新型の……？？」

「これでお前の仕事ももつとはかどるようになるだろう？」

「はい！　それはもう！　……でもいいんですか？　これほどのもの。今回の仕事にし

ては報酬が高すぎるのでは？」

怪しむように提督を見る。

彼女とて幾多の修羅場を駆け抜けた者だ。何か裏があるのではないかと疑う。

「他意はないから安心しろ。ターゲットが簡単だったからそう思ったのだろうが」

「ならオーケーです。これ、大事に使わせていただきますね！」

「仕事があればまた頼むよ、青葉」

「はい、まっかせてください！」

青葉は新たな仕事道具……カメラを手に意気揚々と鼻歌を歌いながら執務室を出る。

提督の手には青葉が撮った金剛の写真の数々。

「ふむ。これ比叡とかとの交渉材料にもってこいだな。あと普通に可愛い」

提督は写真を入手し、青葉はカメラを入手する。そんなウインウインな関係。

誰にも知られていない、2人だけの秘密。

◆

金剛の海上訓練を終え、入渠施設で風呂に浸かった彼女たちは更衣室でグダグダしていた。

成果としては、加賀の補助なしでもなんとか走れるまでに至った。

そこまで上達するのに、何度転倒したかはもはや言えまい。

「……生き返るわ」

風呂上がりの牛乳を飲んだ加賀がふう、と長く息を吐く。

いつもはサイドテールだが、今はうなじあたりまで降ろしていて、とても魅力的だ。
「今日はありがとうね、加賀」

金剛が加賀の隣に座る。

金剛も同じでいつもの電探カチューシャは外している。

いつもなら妹たちが金剛の両脇を争い、1人だけ哀れにも弾き出されるのだが、これ逃さんと比叡が金剛に次いで座った。

「感謝する必要はないわ。私はただ、私のしたいことをしているだけよ」

「そっか」

「ええ」

「その牛乳、一口もらっていい?」

「いいわよ」

加賀からビンを受け取り、金剛は一口飲んだ。

――瞬間、比叡たちに電撃が走る。

特に比叡などこの世の終わりを目撃したかのようなのだ。

いったいいつ加賀と金剛が間接キスをするまでの仲になったのか……! !

わかっている。金剛が無自覚で間接キスをしたのはわかっている。

わかっているのだが……!!

「うらやましいッ!」

霧島が横槍を入れる。鼻息を荒げていて少し気持ち悪い。

「ど、どうしたの霧島」

「い、いえ、私も金剛お姉様と間接キ……ハッ! なんでもありません! ハイ、なんでもありませんよ?」

つつい欲望が垂れ流しになりそうだったが、なんとか自分を抑えつける。

「そっか。ねえ霧島……カチューシャとめてくれない? 髪型とか自分じゃちよつとしづらいからさ」

「ー」

霧島はここに轟沈した。

してもいいと思った。なんといつても、大好きな金剛の髪を合法的? に触ることができるのだから。

あちらでは大井が北上の肩を揉んでレズ色の薔薇が咲いているが、こちらでは妄想ファイヤーのバーニングラブが噴火している。

「はい! もちろんやります! むしろ私にやらせてください!!」

「そんなに熱くならなくてもいいと思うけど……うん、お願いするね」

金剛にカチューシャを渡され、霧島は後ろに立った。

さらにその後ろに榛名が音もなく回り込み、霧島の耳元で囁く。

「……私と代わりましょう」

だが霧島はここで即座に答える。

「ノーよ」

と。

たとえひとつ上の姉だろうが、譲ることはできない。

金剛の前髪を手で持ち上げ、カチューシャをかける。そして丁寧に髪を垂らし、左右に分けたあと、耳元で団子を結び、それらに巻きつける。最後に太い触角髪を肩の前に流して終わりだ。

「できましたよ、お姉様」

最後に霧島はあろうことか、金剛の頭を撫でた。

予想外のことで驚いた金剛は小動物のようにピクリと身体を震わせた。

霧島はその可愛らしい反応にくすりと笑う。

「え、ちよっ、どうしたの？」

振り向こうにも、髪型が崩れてしまうからそのままの姿勢で金剛は言った。

「なんとなく、です。嫌でしたか？」

「そんなことはないよ。んっ……ちよつと気持ちいいかも」

目を細めるその様子は顎を撫でられてごろごろ気持ちよさそうに唸る猫のようだ。

「はい、おしまい」

ところが、途中で霧島は頭を撫でるのをやめてしまった。

「えっ……」

金剛が物欲しそうな眼で振り返る。どうしてやめたの？ とその眼は問いかけている。

「だってこのままだとお姉様、寝てしまいそうでしたから。大丈夫、また今度してあげますよ」

「う、うん」

もう皆、髪が乾いた頃だ。もうそろそろ晩に近いし、お腹も空いた。

霧島は皆を催促して入渠施設から出た。

外は薄暗く、海が近いから随分と涼しい。

「北上さん、また一緒にお風呂に入りましょうね。今度はふたりきりで」

『ふたりきり』を強調して大井はやや興奮気味に喋っている。

北上の手にはまだ飲みきっていない牛乳のビンが握られていて、キュポン、と蓋を抜いた。

「うんいいよー」

そう言つて牛乳を飲む。

「ホント！ 嬉しいー！」

キヤツキヤツと大井がはしゃぐ。

今日あんなにもふたりに海の上を動き回っていたのに、なんとという気力の回復力だ。

「ねえ、大井」

そこに金剛がふたりを遮った。

そんなことをするとどうなるか知っているはずなのに、よくできたものだ。

「……なんですか。今忙しいんですけど」

案の定、一気に不機嫌になった大井が低い声で金剛に問いかけた。

「ちよつと真剣な話なただけど、いい？」

大井は豆鉄砲を食らつたような顔だ。

「まあ……それなら」

「ありがとう。いきなりで悪いんだけど……」

金剛はここで口を止めた。一瞬だけ本当に訊こうか戸惑つた。

これで、何がわかるかもしれない。でも、知らなければよかつたことも知つてしまふかもしれないと思つたからだ。

いやそれでも。

艦娘とは何か。深海棲艦とは何か。

この戦争の意味は何か。それを知らなければならなかった。

「大井はどうして戦ってるの？」

「どうして……って言われても……。人類を守るため、なんて言っても納得できないの
でしょう？ きつと」

うん、と金剛は頷く。

「正直に言うとなら、そこまで深く考えてないですよね」

いきなりの暴論に金剛は肝を抜かれた。

「そうですね……北上さんがいるから、かな」

「それは……どうして？」

「それはもちろん、私が北上さんを好きだからよ。私は北上さんを守りたいんじゃない。
……一緒に支え合って、日々を戦い抜きたいの。笑われてもいい。軽蔑されてもいい。
それが、私の戦う理由よ」

「大井っち……」

完全に北上は大井の言葉に酔いしれている。

堂々としたその言葉は確かに金剛の胸に届いた。金剛は大井の瞳に覚悟をみた。暗

い夜をもろともしない燃えるような瞳にだ。

「あ、なんか自分で言つてすごく恥ずかしくなってきたわ……！」

しかし、今の熱が嘘のように一気に冷め、今度は違う意味で熱くなった。

「ありがとう、大井。私、すごくいいことを聞けたと思うよ」

「そ、それは良かったですね……あ、いや、違うッ！ 忘れなさい！ 私が今言ったこと、

忘れなさいッ！！」

ぶんぶんと手を振り回して大井が喚く。

「比叡さんたちもですよ！ 絶対ですからね！！」

指を差された彼女たちは苦笑いを浮かべるだけだ。

「……大井っち」

「あ、はいなんですしょうか北上さん？」

「すごく嬉しかったよ。……ありがとう」

「ソッファー！！ 天使は……ここにいたの、です……ね」

北上の可愛さに大井は興奮の頂点に達した。

勢いよく鼻血が流れ、その場に卒倒する。

「えええ大井っち……？ 大井っち……！！」

レズカップルと、永遠なれ。

金剛は大井を抱きかかえる北上を見ながら、心に熱いものを感じた。どうしてか、大井の言葉に感動した。

胸に手をギュツと当て、心臓の鼓動を確かめる。規則正しく脈打つ心臓が、自分が生きていることを教えてくれる。

一度は死にかけてたらしいこの身だ。

戦つて死ぬ、なんてことはまだ金剛にはわからない。戦いに命の花を散らす艦娘たちの心はまだわからない。

明日で6日目。提督に与えられた7日間の大詰めだ。

残るか残らないか。それを決める判断材料は、やはり戦う理由を訊くことに尽きると考えた。

残り時間は短い。全員は無理かもしれないが、できるだけ多くの人に訊いてまわりたい。

金剛は、雲から姿を現した三日月を見上げながら、そう決意した。

長門の紅茶

提督は今日の書類を一通り済ませると、背もたれに大きくもたれる。堅苦しい椅子は嫌いだ。バネの縮む音と共に背もたれが後ろに倒れる。

ちらりと左目だけで掛け時計を見れば、もう夜中をさしていた。数時間トイレに行っていないから、意識すると急に尿意が催してきた。

少し内股気味に立ち上がろうとした時、ドアがノックされた。

「提督、『明日はいい天気でしたね』」

その声は、艦娘……女性特有の細い声ではなく、野太い男の声だった。

提督はここで心の奥底で舌打ちを連撃する。今からというところを邪魔され、提督は不機嫌だ。しかし、合言葉を言われたら、そう無下にもできなかつた。

「どっぞぞ」

入ってきたのはひとりの中年の男だ。歳は詳しくは知らないが、おそらく30を少し過ぎたくらい。中途半端に剃った無精髭が特徴的で、第一印象は遊び人だ。

一応提督より年上である。

「俺もすまないと思ってるが、簡潔に報告してくれ。トイレに行きたいんだ」

「おやおや、こんなところで漏らしては『死神』の顔が面潰れですね」

「いいからはやく」

「わかりましたっ……と」

男は上着の内ポケットを弄り、USBメモリを机の上に置いた。

「これが今回手に入れた情報です。艦娘とは何か。深海棲艦とは何か。やはり掴むのは困難ですね。大本営も必死に隠しているのでしょうか。もう少し深く調べたいところですが……」

「ダメだ」

「おおう、固い固い」

やけに男は上機嫌だ。

「なんだ」と言えば、「何も」と返される。

「どうせ艦娘に話しかけられて嬉しかったとかそんなところだろ」

「提督がそう思うならば」

いまいちつかみどころのない男だ。

尿意もそろそろマズイ。はやく切り上げたい提督は口早に話す。

「薄い紙でも何枚も重ねれば本のように分厚くなる。そういうことだ」

「時間はかかりますけどね」

「そこはツツコむな」

提督はUSBメモリを手に取ると、それを引き出しにしまった。

もう限界だ。素早く提督は立ち上がり、足早にドアへ向かう。

「ご苦労だった江本。また呼ぶ」

その返事が聞こえるよりも先に、提督は渡り廊下へと躍り出た。そして、ロケットの如く駆けるのだった。



未だ答えには至らず。

金剛は布団を被ったまま、目元まで引き上げる。

妹たちはすぐ隣で金剛にくつつくように寝ている。その力が思いの外強く、大人しく引き離すことを諦めた。

首を曲げてカーテンの方を見ると、まだ少し明るくなり始めたところで、おおよその時間がわかる。

今日で6日目だ。

金剛は静かに目を閉じる。

本場の戦場に行ったことがないからわからないが、きつとつらく、痛く、悲しいものなのだろう。

しかし、それでも戦い続ける妹たち……艦娘たちの心を知らなければ答えは出ない気がするのだ。

榛名がもぞもぞと動き、小さく唸る。

起こしてしまっただかと慌てるが、榛名はしがみついた腕にさらに力を入れただけだった。

「いたた……」

この3人はとても可愛い妹たちだ。記憶をなくした金剛にとってはまだ出会って一週間も経っていないのに、こんなにも懐いてくれている。

この子たちのためにも離れるわけには……。

——同情抜きで真剣に考えて欲しいんだ。

「——」

それは提督が言っていた言葉だった。

金剛の……金剛の心で結論を出さなくてはならないのだ。

これは葛藤である。

大井は北上への心を語った。

あれは嘘偽りのない、とても美しいガラスのような本物だった。そして同時に、それが大井の戦う理由でもあった。

あの時、金剛は大井を素直に尊敬した。

では、果たして穏やかな寝顔を晒している妹たちは、どのような理由で戦いに臨んでいるのだろうか。

長門も、陸奥も、暁も、響も、雷も、赤城も、加賀も……他の子達も。そして、提督も。

今日はやることがたくさんありそうだ。

カーテンから射す太陽がいよいよ強くなってくる。朝だ。

正直二度寝に突入するのも悪くないかな、と思ったが、そういうわけにもいかない。妹たちの肩を揺さぶって起こす。

そして、精一杯の元気で最初の一言をかける。

「おはよう私の妹たち！」

姉として。



彼女は異動となった。

別にいい。もう慣れたことだ。10を超えたあたりからもう数えるのはやめた。

彼女は自分が異常だということは重々理解している。受け入れもしている。それは皆が知るような『彼女』とはまるで違うからだ。

今日でこの鎮守府ともお別れ。

これまでと比べれば幾分かマシだったとは言えるが、好奇の視線が突き刺さるのはやはり不快だった。

ある者は彼女を怪物と罵った。

違う、ただ強いだけだ。

ある者は彼女を心のない奴だと責めた。

違う、ただ割り切っているだけだ。

ある者は『死神』と『疫病神』を口悪く非難した。

黙れ。何も知らないくせに。先生と私の努力を何も知らないくせに。

ここの姉たちはまるで彼女に他人行儀だった。ある意味、こちらとしても一番楽な姿勢だった。

友情がなんだ。絆がなんだ。

馬鹿馬鹿しい。

命中する時は命中する。被弾する時は被弾する。

轟沈する時は轟沈する、だ。

なぜ轟沈するか。答えはあまりにも簡単。

弱いからだ。

力を合わせて、なんて虫酸の走る考えはいらない。弱いからそんな綺麗事を言つて、個人ではできないことを他人に押しつけているだけではない。

彼女ならできる。できるから今の今まで泥臭く生き残つてきた。

無傷で帰つてきたこともあつたし、逆に彼女一人だけ生還したこともあつた。

荷物は自分で改造した艀装と勉強のための教科書とノート。あと、大事な軍服だ。

迎えが来た。

「この指揮官への挨拶は軽く済ませてある。彼女は先生……提督以外の提督を提督とは認識しない。あくまで上官。先生が彼女にとつての唯一の提督だ。」

黒く、胴が変に長い車のドアが音もなく開き、彼女はそれに乗り込む。

「ここからは距離があるのでおそろしく一日くらいかかります。途中で休憩をはさみますが、睡眠をとつてもいいですからね」

運転手が後ろも振り向かず、彼女に手短かに伝える。ミラー越しに彼女が頷くのを見た運転手は車を発進させる。

「この鎮守府に異動させられるかは尋ねる気は無かつた。」

願わくば、先生の鎮守府に異動されたい。これが彼女の些細な願い事だ。

「こんなにも時間が与えられているというのに、寝るとは愚かでバカで、沈む奴のすることだ。」

彼女は早速教科書とノートを取り出し、当然のように設置されていた机の上に広げた。どの本もボロボロで、そうとう使い込まれているのがわかる。

その中から天気に関するものを手に取り、ノートを開く。

何度も繰り返し返すことによつて、忘れることのない記憶として覚えられる。ペンを手に持ち、器用に一回転させると、すらすらと走らせる。

到着まであと1日。



「ねえ長門」

「む？ 金剛か」

「うん」

朝の日差しが眩しく鎮守府の中を照らす。

これから上り始める太陽が大きくあくびをしているようだ。

金剛に声をかけられ、長門は後ろを振り向いた。

今は金剛ひとりだけ。無理を言つて単独行動をさせてもらっている。

司令室で何かの文書を整理していた長門がその手を休めた。

「ひとりとは珍しいな」

「ひとりで歩き回りたくて、ね。そつちこそ、陸奥と一緒にじゃないんだ」

「お互い様ということだな。で、どうしたんだ？　こんなところに来て」

長門が柵からティーカップを二個取り出す。

そして、丁寧な紅茶を淹れて金剛に一杯差し出した。

「あまり上手ではないかもしれないが……よければもらってくれ」

「喜んでもらうよ。ありがとう」

「う、うむ」

金剛はそれを受け取って上品に飲む。

喉を滑らかに通り、茶葉の旨みを存分に引き出しているおかげで、とても美味しく感じられた。

「美味しいよ長門」

「それはよかった。前々から練習していたんだ」

「へえ……」

「私が紅茶を淹れるのは……変だろうか？」

少し恥ずかしそうに長門が尋ねる。

柵の方を一瞥すると、そこには何枚も付箋が貼り付けてあって、淹れ方についての細かいメモが記されていた。

しかも、柵の裏に貼られているから、開かない限り見られることはない。

これならば美味しいのも頷ける。努力しての結果だから、胸を張って誇ってもいいはずだ。

「長門のイメージはまだ定着してないけど……変なことは絶対ないよ」

「そうか。そう言ってもらえると嬉しいな」

ホロリと微笑んだ長門の笑顔を金剛は見逃さなかった。

「まあこれはお前を真似して始めたことなんだがな」

「私？」

「ああ。よくお前は提督に紅茶を淹れていたからな。提督を休ませるために。だから私も何かできることをしようと思ったんだ。……結局、同じことをするくらいしか思い浮かばなかったが」

そう自嘲した長門が紅茶を啜る。

以前の金剛が紅茶を提督のために淹れていた？ どうも信じられないことだ。だがしかし、提督は金剛に対して特別な思い入れがあるようにも感じられたし、長門の言葉も決して嘘ではなさそう。

「あれだけ頑張ってるんだから完成度が高くなるのは当然だよ」

開きつ放しの棚を指でさして金剛は面白そうに笑う。

「なっ！ み、見るんじゃない！」

慌てて棚を閉めた長門がまた愉快で、金剛の笑いが止まらない。

「あははは！ ……ふう、面白かった」

「誰にも話すなよっ」

「はいはいわかつてるよ」

最後の一口を飲み干し、金剛はティーカップを机の上に置いた。

金剛がここに来たのはただ長門から紅茶をもらいに来たためではない。

沈黙の空白が流れ、両者に本題に入る前の心の準備とも言える休息が入る。

長門も紅茶を飲み干し、ほう、と温かい息を吐いた。

「で、長門」

「うむ」

「いきなりで悪いとは思っているんだけどいいかな？」

「内容によるがな。言ってみるがいい」

長門はとも思いやりのある艦娘だ。それは確かなことだ。

実戦だけでなく、提督の執務なども手伝っているのもよく見ていた。みんなにとつ

て、きつと長門は……頼れるお姉さんのようなポジションなのだと思う。

だからこそ尋ねたい。彼女を知りたい。

「……どうして長門は戦うの？」

「本当にいきなりだな」

「人類のためだとかは抜きにしてね」

「……わかった」

「ごめんね」

「別に構わんよ。記憶を無くしているんだ。私たち艦娘がなぜ戦うのかがよくわからな
いから、そのような疑問が湧くのだろう？」

「……うん。長門のような大きな子から眺みたいな小さな子まで。私にはそれがどうし
ても理解できないの」

「そうか」

長門は机に肘をつき、手を重ねてその上に顎を乗せる。

目をつぶり、考えを巡らせる。金剛はその様子を黙って見ていた。
「他にも同じことを誰かに訊いたのか？」

「うん。まだ大井ただけだよ」

「なんと言っていたんだ？」

「北上のために戦う、って」

「あいつらしいな」

「まあ……うん」

長門が目を細める。

誠心誠意答えようとしている長門を金剛はただただ待ち続けた。

そして五分ほど後、自分なりの答えを見つけた長門がゆっくりと口を開いた。

「私が戦いに臨むのは……人類だけではなく、艦娘の皆も守るため……だ」

その目は真剣そのものだった。

それに射止められ、金剛は心の中で一瞬たじろいだが、負けじと見つめ返した。

「艦娘として生まれ、こうして私たちは戦っている。しかし、かつての軍艦の魂とやらを引き継いでいても、私たちは人の姿を得て、人の心を有し、そして確かな感情がここに埋まっている」

金剛は黙って長門の言葉に聞き入る。

胸に手を当て、目をつぶり、長門は自分の鼓動を感じる。

「もし私たちが鉄の塊で、建造された言葉通りの軍艦ならば、こんな人間の真似事はできなかつたろう。だが実際に私たちはこうして存在している。だからこそ私は『願う』のだ。愛すべき者たちの傷つく姿は見たくない。ビッグセブンなんて肩書きなどどうでもいい。ただ、皆を守りたい。そんな純粋な願いをな」

言い切った長門の表情はとても晴れ晴れとしていた。

長門の『願う』は金剛の胸に熱く打った。

「そう、か」

「ああ」

長門が金剛に新しく紅茶を一杯薦める。金剛はそれを快く受け、長門は立ち上がる。

「答えは人それぞれってことかな……?」

呟くように口から溢れた金剛の言葉。

とぽぽ、という紅茶を注ぐ音にすらかき消されそうだった音量を長門は聞き取った。

「さあな……もしかしたら私と同じことを考えている者もいるかもしれん。素直に言うてしまえば、ありきたりな理由だから」

「そんなことはないよ、長門」

「ー」

金剛はポットを持つ長門の手の上から自分の手を静かに重ねた。

紅茶の香りがふたりの……ふたりだけの空間に広がる。

金剛の行動に驚いた長門はピクリと身体を震わせてしまい、少しだけ机に溢れてしまった。

「そうやって自分を卑下しないで。長門はすごい人だって……信頼できる人だって皆が言っていたよ。自分の持った『願い』を貫けばいい。じゃないと、ビッグセブンの名が泣く、でしょう?」

「うまいことを言うではないか」

淹れ終えたポットを戻し、失敗した方を自分へ、やり直した方を金剛に渡した。

「ノンノン、私がこつちをもらうよ」

半ば強引に長門のティーカップを奪い取ると、金剛は自分のものと言わんばかりに口をつけた。

「それは溢れたから……!」

「いいのいいの。ほら、ふたりでの共同作業ってやつ?」

「どうしてそんな恥ずかしいことをすらすらと出てくるんだ……」

「そういう長門だつてさっきのあれは赤面ものだよ?」

「言うな、言うわないでくれ金剛……!」

頭を抱えてぶんぶんと横に振りもだえる姿を見ると、もう少しいじつてみたいといいたずら心が燻ぶってしまった。

わざとらしくドアの方に素早く振り返り、さも誰かが向こう側で聞き耳を立てているような雰囲気醸し出した。

「ん……? 誰かがいたような……」

「なに……!?!」

金剛の言葉で長門が石像のように固まる。

わざとらしく手をポン、と叩いてかわいい嘘をつく。

「そういえば、ここに來るときに青葉をみたような……もしかしたらさっきの録音されていいネタにされるかもね」

第三者から見れば完全な棒読みだったが、焦っていた長門はそのことを気にも留めなかった。

「まずいぞ……まずいぞ……」

ひとり恥辱の迷宮に入り込んでしまっていて、なかなか帰ってきそうにもなかった。

その様子を見てみると、お腹を抱えて笑いたくなる衝動にかられ、我慢せずにお腹の底から笑った。

……なんて幸せな時間だろうか。

戦う艦娘たちも、こうして恥ずかしがったり、楽しんだり、笑ったりしているのだ。これこそまさに長門の言った人の心、そして感情だ。

紅茶のような甘い時間がずっと続けばいいのだが……現実はどういうわけにはいかない。

せめて、この鎮守府にいる時だけはこうして皆と他愛のない話でもして団欒をとる。まるでひとつの大規模な家族だ。

「……まあ、嘘なんだけどね」

「金剛く〜！」

ムツとした長門がへそを曲げる。

だがすぐに何か面白いことを思いついたのか、ニヤリと口角を上げた。

「そつちがその気なら、こつちにも考えがあるぞ……」

そう言つてふふふ、と不敵に笑う長門。その様はまさにゲームのラスボスの雰囲気
それだ。

いつたい何をするつもりなのだろうか。

金剛は長門を観察する。

長門は紅茶を楽しそうに飲み干す……が、そのことばかりに気が向いて気管にでも
入ったのか、何度も咳をした。

「……」

「今見たのはきつと幻だ」

「でも」

「幻だ」

「……はい」

「ではこちらも反撃といこうか。目と耳が拒絶しても私は強引にでもするぞ……」

「な、なにをするの……!?？」

「お前が今のお前だからこそ言えることだな、これは」
嫌な予感だ。

金剛はとてつもなくこの部屋から退散したくなかったが、長門の目がそれを許すようには到底思えなかった。

おとなしく諦めることにした。散々笑ったのだ。因果応報。ここは甘んじて受け入れるべきだ。

「これは青葉が仕入れた物だが……」

長門が机の引き出しからひとつのUSBを取り出した。

「いつか何かに使えると思っただろうな、提督の指示で記録されたものだ」

「中身は……なんなの……？」

恐る恐る金剛は尋ねる。

その指一本よりも小さなUSBが金剛にとっていったいどんな悪夢を孕んでいるのか。想像することもできない。

「この中身はな……お前が提督とスキンシップを図ろうとにやんにやんしていたシーンが数日分にもわたって保存されている」

「にや、にやんにやん？」

「そう、にやんにやんだ」

長門はすぐそばに配置されていたPCを立ち上げ、そのにやんにやんを収めたUSBを挿し込む。

「さあ、とくと見るがいい！」

長門がやや興奮気味に声を高ぶらせる。

画面に映された映像の数々……！

——それは、今の金剛にとっては十分すぎるほどの黒歴史だった。

しかし、金剛にさらなる不幸が襲い掛かる。

「……貴様、何をしている」

ちやうど向こうの角から現れたひとりの女性。

長い銀髪を惜しみなく垂らして、燃えるような朱いつり目。帽子を浅くかぶり、僅かに驚愕の混じらせた声で言ったこの人物を金剛は知っている。

ほんのつい最近、この鎮守府に着任したガングートだ。

事もあろうことか、何かと怖いという印象のそんな彼女に見られてしまったのだ。

これは、扶桑姉妹も驚きの不幸つぶりであることは間違いない。

「あ、いや、これは……」

「金剛型戦艦一番艦、金剛……」

「どうしてフルで呼ぶ……?」

依然ガングートは険しい表情だ。

ひやりひやりと汗が背中を流れるのを感じる。

「まるで覇気が感じられんな。貴様それでも戦艦か?」

「……」

「まあいい。記憶喪失だとか言っていたな。知ってるとは思いが、つい最近着任した身だ。私としては、はやく前線に立ちたいものだが……って聞いているのか?」

「へ？ ああ、うん」

壁に手をついたままの金剛は我に返り、空返事した。

すると、ガングートが突然何かを思いついたようで、「そうだ」とひとり呟いた。

「金剛よ、私を提督のところに入れて行つてはくれないか。まだ数回しか顔を合わせていないからな。なに、親睦を深めるためだ」

「いいよ」

「ありがたい」

できるだけ何事もなかったように澄まし顔で姿勢を正すと、金剛は凛々しく、そして美しくガングートを案内し始めた。

全てはさきほどの失態を自分の記憶から抹消するため。ナニモミテマセンヨネ？ という意味も込めて。

金剛とガングートがいるのは本棟から離れた別棟。その二階。距離は遠くなく、むしろ目と鼻の先だ。

あつという間に本棟に入ると、エレベーターに乗り込んだ。

「もうこの鎮守府の地図は頭に入っているのか？」

「もちろん。この一週間近くはいっぱい歩き回ったけどね」

思い返せば、半分以上が妹たちに車椅子を押ししてもらって、だが。

ふと、今ごろ妹たちは何をしているのか気になった。

(たぶん) 少し金剛にお熱な彼女たちだ。それは金剛自身もある程度理解している。ずつとべつたりくつついて離れない、磁石のような存在。

もしかするとどこかでストーキングされているのかもしれない。

別にされても嫌ではないが。

上りたい階層のボタンを押し、閉のボタンを押す。

ゆつくりと閉まっていくドア。

しかし、その隙間から……。

「待ってくださあああああいー……!!」

ひとり、全速力で駆けてくる少女。

灰色のポニーテールをぶんぶんとプロペラのように振り回し、必死の形相だ。

その顔に圧倒されて、金剛は反射的に開のボタンを押した。

ゆつくりとドアが開き、そのギリギリの隙間を縫いわけ、スピードを抑えきれずに中に飛び込んできた。

ーガングートの胸へと。

「へふっふっ!!」

その衝撃、無きに等しく、むしろ柔らかな弾力に彼女ー瑞鳳ーの顔は包まれる。

気まずいのか、瑞鳳はそのまま動くことができない。

金剛にはその心境がよく……とてもよくわかる。あわよくばこのままカツコよくムーンウォークでもキメて、何のハプニングなど起きてない、と自己暗示すらかけたい気分だろう。

「……おい、貴様」

「……」

ガングートは無言のまま腕を伸ばし、瑞鳳の頭をがしりと掴んだ。

ああマズイ。とてつもなく気まずい。

金剛はこの場から消えてしまいたい衝動にかられるが、不幸かな、ここはエレベーターの中だ。

「私の故郷なら銃殺刑ものだぞ」

そう言いながら胸から引き離す。

「……ごめんなきいいい!!」

「悪気があったわけではないからこれ以上は言わないが……次はないぞ」

おそろしく怖かった。

瑞鳳はもう涙目だ。

ガングートが本気で怒っているわけではないのはわかるが、それでも威圧というか、

恐れというか……とにかくそういうものを感じた。

ガングートがぱつ、と手を離す。

痛そうに瑞鳳が頭を抱える。

「ふんっ、軟弱だな」

鼻で笑うと、金剛に執務室の階層を聞いてきつさと三階のボタンを押した。

それに遅れて瑞鳳が屋上のボタンをおずおずと押す。

「屋上？ 何しに行くの？」

屋上とは珍しい。まだ金剛は行ったことがないが、どんなものか興味がそそられる。

きつといい風が吹いていることだろう。

「ああ……はい。お弁当を食べようと思ひまして」

手に持った弁当箱を上げる。

包みがなんとも可愛らしい。緑色の水玉模様だ。

金剛が可愛いね、と言うと瑞鳳はえへへと笑う。

「ひとりで？」

「今日はなんとなくそんな気分です……」

「あれか、ぼっちというやつなのか？」

「違いますよ！」

ガングートの率直な言葉に瑞鳳が耳を赤くして否定する。

そうしている間にもエレベーターは上昇し、やがて目的の階に着いた。

「金剛さんたちは執務室へ？」

降りようとする金剛たちの背中に声をかけられ、後ろを振り向いた。

「え？　そうだけど？」

「提督なら今食堂にいますよ？　昼食には少しはやいですけどね。たぶん……島風ちゃ

んと食べてますね」

とんだすれ違いだ。

せつかくここまで来たというのに、戻らないといけないのか。

ガングートには悪いことをしてしまった。

「そうなんだね。ありがとう瑞鳳」

「いえいえ」

そう手を振りながら言って、残った瑞鳳は屋上へと上っていった。

「ごめんねガングート。戻ろうか」

「チツ……仕方ないか」

執務室はすぐ向こうに見える。

しかし、提督はそこにはいない。

ガングートもガングートで、提督といい瑞鳳といい、苛立ちが溜まってきているようにも見受けられる。

果たして今日の占いはナニ吉だったろうか。きつと自信満々に金剛はこう言える。凶だと。

ドミノのように連鎖する不幸の連続に、戻ってきたエレベーターにガングートと乗り込んだ金剛は心の中で声を大にして嘆いた。



「提督さん、おっそーい！」

「島風、はっやーい！」

「……提督さんが言ったらなんだか気持ち悪いですよ？」

「……悪かったですネ」

とうの昔に食べ終えた島風が提督の肩を大きく揺さぶる。

おかげさまでろくに食事が取れない。箸で掴んだコロツケが、カオスなことに味噌汁の中に入ったとき、顔面蒼白になった言うまでもない。

そして食べ物を粗末にはいけないと、あのふやふや、ふにやけたコロツケを食べたのは泣いた。

食堂は現在、とても空いている。ちらほらと時雨や足柄などがいるが、それだけだ。

……と思つたらまさかの江本がいた。

ひとり寂しく食べているのかと思えばほうなことはなく、むしろその逆だった。

睦月型の子たちに囲まれ、そこだけ騒がしい有様だった。

時々「にやしい」と聞こえる。

なるほど、日々文字通りヤバイ仕事をしている彼にとつては癒しであり、心の拠り所なのかもしれない。

「はーやーくうー」

「……」

すでに皿の返却も終わらせた島風がピーピー騒ぎだす。

「お前には『ゆっくり』って概念はないのか？」

「ないー！」

「さいですか」

提督は再び箸を動かす。

しかし、じつと島風に見つめられながら食べるといふのはなんだか気恥ずかしいものだ。

「そんなに見つめられたらあんまり集中できないんだけど……」

「気にしないで！」

「うん、する」

ちらりと江本のほうを一瞥すると、偶然にも目が合ってしまった、江本はにやりと口角を上げた。

あんなやつは無視だ無視、と提督は即座に視線を外し、八つ当たりをするように一気に残りのコロツケを食べ、味の変わった味噌汁をぐくりと飲み、白米をガツガツ箸でかいた。

「提督、はっやーい！」

「……ふっ」

立ち上がり、皿を返却しようとした時、誰かに呼びかけられた。この声はほぼ間違いなく金剛だ。そう結論づけて声のしたほうを向いた。

確かにそこに金剛はいた。

こちらに大きく手を振っている。提督も手を振り返す。

「意外だな」

「なにがですか？」

「ガングートと金剛のふたりきりってというのが」

ガングートは血気盛んな性格だ。

思ったことをストレートにぶつけるし、何かあるごとに銃殺刑銃殺刑とうるさい奴

だ。

それは別にガングートの特徴と言えば済ませられるのだが……どうも彼女には相手を見下す悪い癖がある。

金剛が記憶喪失となった次の日に着任したのだが、提督に対する第一声が「貴様が提督というやつか」だった。そしてあの目。あれは品定めをするまでもなく、一方的に下に見る目だった。

提督は寛大だから見逃したが、いつかはきちんとたたきこんでやらなければならぬ。

ここしばらくは金剛の対応に忙しく、構ってやれないのは申し訳なく思っている。

提督の唯一の危惧するところは、他の艦娘との衝突だ。

そんなガングートが金剛といるのだ。

見たかんじでは仲が悪そうには見えなかったからひとまず安心し、ふたりが寄ってくるのを待った。

「こんにちは、提督」

「ん、こんにちは。ガングートもこんにちは」

「うむ」

ガングートはひとつ頷くと、提督と島風の前の席にドカッと座った。

金剛はガングートの隣に座る。

「お前があいつらを置いてくるなんてな。よく許してくれたもんだ」

「話せばちゃんとわかってくれたよ」

「そうか」

そんなわけない、と提督は我ながら酷いと思いつら……比叡とか加賀のことを考えた。いやもしかすると加賀は引き下がるかもしれないが、重度のシスコン3人組は絶対に引き下がらないだろう。絶対。

「んで？ どうしたよ」

「私は特に何もないんだけど……」

ちらりと金剛がガングートの方を見る。

金剛ではなくガングートが、というわけか。

「貴様は一応私の上司ということだから、最低限のコミュニケーションは取ろうと思っ
てきた。ただそれだけだ」

どこかの曙みたいにツンデレ属性ではなく、ツンツンを超えてツンツンな属性だ。

「だから何か話せ」

「とんだ無茶ぶりだなおい」

「提督ならばそれくらいやってみせろ」

「……提督って万能なんだな」

「ね、ねえガングート。食堂に来たんだから、どうせだしお昼食べようよ」

嬉しい助け舟だ。

金剛に連れられて間宮に注文しに行くガングートの背中を見ながら、提督は太くため息をついた。

「ここ最近でとても疲れた。有給休暇が欲しくてたまらない。」

金剛の記憶喪失についての大本営への報告。そしてその返事の対応。大和型の建造。……もちろん蜘蛛のこともある。

ガングートが根は悪い奴ではないのはわかっている。そもそも艦娘たちはみんないい子だし、欠点さえなんとかできれば長門や日向と仲良くなれそうだ。それこそ建造できればの話だが武蔵なら素晴らしい友になれるはずだ。

「私、もう行くね。ガングートって人、苦手かもしれない。じゃあ提督、また後でー！」
ずっと静かだった島風は立ち上がると、そばにいた連装砲ちゃん達と一緒に食堂を出て行った。

さすがは速きこと、島風の如しだ。

「おまたせ、提督……ってあれ？ 島風は？」

しばらくすると金剛たちが戻ってきた。

キヨロキヨロ見回すが、とうの昔にいなくなっている。

「あいつなら今さつき行つたわ」

「残念だなあ。話したかったのに」

ガングートは大盛りのカレー。……しかし、金剛は小さなおにぎりふたつだけだった。

「貴様、それだけで足りるのか？」

不思議そうにガングートに尋ねられ、金剛は苦笑いを浮かべた。

「まあ、ね。そんなにいっぱい食べられないから。全然運動してないのも理由だけど。

それでも前に比べたらだいぶ食べられるようになったんだよ！」

そう言うと、エツヘンと胸を張った。これを喜ぶべきか悲しむべきか。

「そんなのでは戦いに出ても力なんて出ないぞ」

「そうだね」

「食欲がなくても食べれるだけ食べる。基本だ」

「私を心配してくれてるの？」

「多少はな」

「嬉しいな。ありがとう」

「……ふん」

提督はいつの間にか江本がいなくなっているのに気づいた。通りで食堂が静かになったわけだ。睦月型の子達も全員いなくなっている。

「そうだガングート」

「ん？　なんだ」

提督に話しかけられたガングートは食事の手を止め、水を飲んだ。

「ロシア出身だよな？　ならちようどいい。ここには響がいる。どうか仲良くしてやってくれないか」

「そうなのか？　それは私としても嬉しい。是非そうさせてもらおう」

響と仲良くなるのはもちろん嬉しいことなのだが、必然的にいつも一緒にいる暁と雷との仲が心配だ。何も起こらなければいいが、と素晴らしいフラグを提督は立てる。

こうして、提督と金剛、ガングートの楽しい食事は続いた。



カサカサ。

カサカサ、カサカサ。

「マイクチェック。……パーフェクト。さすが私ね」

3人は気配を殺し、誰にも気付かれず、そして無音にて。

全ては己が姉を求め。己が姉を見守るため。

……例え姉に同行を断られようとも。

コードネームHIEIの手には青葉から借りた双眼鏡。

コードネームHARUNAの耳には青葉から借りたヘッドフォン。

コードネームKIRISHIMAの手には青葉から借りたヘッドフォンに繋がった

集音マイク。

シスコン3人組は、今日も平和であった。

未だ結論に至らずにして

6日目の昼下がりに。太陽は頂点まで昇り、さんさんと照りつける日射しが暑い。ガングートと提督はもう少し話しこむらしいから、金剛はひとり食堂を出ていった。んーっと伸びをして、大きくあくびをする。

ちようどグラウンドで遊んでいる睦月たちがこちらに気づき、手を振ってくれた。

全く、元気な子たちだ、と金剛はほくそ笑んで手を振り返した。

何度も言うが、今日が6日目。

明日には提督に金剛の決断を告げなければならぬ。まだどちらにも傾いていない現状に、自分は果たして答えを導きだせるのかと不安になる。

……なんとなく、海を間近で見たくなくなった。

残る残らないにせよ、艦娘たちがこの海を守るために戦い続けることに変わりはない。

艦娘は過去の大戦で奮闘した軍艦の魂を引き継いだ存在だという。

しかし実際金剛にはそんな自覚はないし、歴史……『金剛』の経緯を学んでも特に心に響くものはなかった。せいぜい轟沈したことについて少し悲しくなった程度だ。

悲しみを感じても、自己投影することはできない。

それは『金剛』としての誇りというか自尊心というか……が共鳴……というべきか……していないからなのだろうか。

やがて海に着いた金剛は浜辺に腰を下ろした。

脚をいっぱい伸ばし、後ろに手をつく。さらさらした奇麗な砂をその手で感じ取る。

空気を大きく吸い込んで、吐く。

そしてただ呆然と水平線の彼方を眺めた。

風の吹く音。または波の打つ音。あるいは海の生氣。

もし自分が残る決断をしたら、この海を守るために深海棲艦なる敵と戦わなければならぬ。それはきつと怖く、恐ろしく、どちらかというところといった面の方が遥かに経験する回数が多いだろう。

だがしかし、残らないと決断したのなら。

この鎮守府を去り、普通の世界でその辺にいるごく一般の女性として生きていくことになる。そこに将来への希望があり、さらにそれは無限大であり、きつと人生が満ち満ちたものとなるに違いない。

極端に言ってしまうえば、苦しい方か、楽しい方、どちらを選ぶか、だ。

だらしなく口を開け、ぼかーん、と顔を上げる。

まだ二人だけにしか訊いていないが、どちらも立派で、素晴らしいものだった。その理由さえあれば毎日を戦い抜いてみせると胸を張って答えてみせたのだ。

きつと二人の心はとても強い。理由がなんであれ、そのために尽くす覚悟は金剛は見たのだから。

……では、残るとしたら、自分は何のために戦うのだろうか。

「……」

糸口すらつかめず、思案に暮れる。

これは果たして怠惰なのだろうか。

明日には決断しなければならぬのに、未だこの様。

真剣に考え始めたのは本当につき最近になってからだ。

それまでは妹たちやその他の子達と遊んでばかりで何も考えていない、ただの馬鹿だった。

手を目一杯に広げ、背中を砂浜に預ける。

先ほど昼食を食べたばかりだから、これでは眠気に誘われて眠ってしまいそう。すぐに起き上がった金剛は海に踵を返して鎮守府へと帰っていった。

まだやるべきことは残っている。時間は限られているが、まだ十分にある。

力強く歩く金剛の顔は、決意に固く彩られていた。

◆ シスコン三姉妹は金剛の様子を遠目で見ていた。

しかし、青葉から借りた装備は今は工房に隠して来ている。

彼女らとて顔を出すべきではないタイミングなどは弁えている。

特に今などがそうだ。

「悩んで……ますね」

木陰から顔を覗かせていた霧島が小さくつぶやいた。

霧島の目には金剛が黄昏ているように見えた。

きっと決断について悩んでいるのだろう。

この一週間ほど、霧島たちは金剛に猛烈なアタックをした。それはもう自分たちでも

やりすぎではないか、というほどに。

しかし後悔は欠片もしていない。

もし金剛がこの鎮守府からいなくなってしまうば、もう金剛と会うことはできなくな

るだろう。もちろん金剛は建造なりすれば再会できるのは確かだが、『あの』金剛ではな

いのだ。本質は同じだとしても、ズレがどうしても生じてしまう。

「どうやら心配なのは私たちだけではないようですね……ほら」

榛名が横を向きながら言う。

霧島は催促されてそちらに顔を向けると、また別の木陰から赤城と加賀が同じように金剛を見守っていた。

しばらくするとこちらに気づいたようで、加賀が視線を送ってきた。

さすがに声に出すわけにはいかず、比叡たちは軽く会釈を返した。

比叡たちも、加賀たちも、金剛がどちらを選択するのかがとても気になるのだ。

なんといつても、圧倒的な力を持つ蜘蛛に対し、不動の殿を務めてみせた金剛。そんな勇ましい姿を置いていった、ある意味罪とも言える重荷を彼女たちは背負っているのである。

仕方ない。仕方ない。

その時の判断、そして今振り返ってもそれは最善の判断だったと胸を張って言えるだろう。

しかし、歯が折れるほどギリギリと噛み締め、我慢しなければならぬほどの苦悩がそこにはあった。

ーお姉様をひとり残していけない。

三人揃って金剛に追従しようとするも、それは他ならぬ金剛によって止められた。

唯一後悔していることといえば、そこで無理にでも金剛を説き伏せなかったことだ。

今となつてはもうどうしようもない、バタフライエフェクト。

「私は、金剛お姉様を守りたい……今度こそ」

己の拳をぎゅつと握りしめ、比叡が目を伏せる。

思い起こすは、血の涙を流しながら半ば強引に榛名と霧島に手を引かれて撤退する自分の姿。

あんな……あのようなボロボロの姿の金剛を置いていく苦しみがまるでそこにあるかのように、また比叡の心を締めつける。

金剛が浜辺に寝転がったと思えばすぐに立ち上がった。

その顔は何か決意に固められていて、ああ……やつぱりお姉様だ、と安堵する。どこが、と問われると具体的には答えられないが、なんとなくだ。

木陰に隠れながら金剛の後ろ姿を見送り、よくわからない緊張感から解放された比叡たちは息をついた。

そして、木に手をつこうとして霧島が腕を伸ばしたが、見誤つのか、空を掴む。

「……あれ？」

◆ 結末は言わずもがな、無様にコケた。

「失礼します」

執務室に入ってきたのは大淀だ。

その手には一通の手紙が握られている。

「大本営からの返事が返ってきました」

「はいよ、サンキュ」

提督は大淀から手紙を受け取ると、端を乱雑にハサミで切った。

そして中から紙を抜き取り、目を通す。

「……ま、予想通りつちやあ予想通りだわな」

読むか？ と大淀に紙を渡し、大淀もそれを読む。

「金剛の記憶喪失の原因を『未知の深海棲艦との戦闘によるもの』って送ったらこれだ。

『未知の深海棲艦とは何か。詳細な情報を提供せよ』か。……どうせ知ってるくせに」

「知ってる……ですか？ 大本営が？」

「おっと、これは他言無用でよろしくな」

「それはどうしてーはい、わかりました」

提督の無感動な表情が、大淀に裏があると思わせた。

度々聞く、提督の意味不明な発言。きつとそれらは全て大事なもので、変に追求する

べきではない。

提督とは、深海棲艦と戦う艦娘たちを率いる役職。

軍に属するものであるから、軍規は厳しく、罰則もまた同様。

提督はきつと、『提督』という枠組みから外れて、何かをしているのだ。またそれがどれほど危険なものなのかすらわからない。

深海棲艦との戦い以外にも提督の戦場は存在している。そう大淀は確信していた。

「なんと返事を返すつもりなのですか？」

「そうだな……よし、無視しよう」

「無視はダメでしょう!?？」

「ダイジョブダイジョブ。向こうも返事なんて期待してないだろうよ」

その根拠はいつたいいどこから湧き上がるものなのか、大淀には不思議でならなかった。

大本営は事実上この鎮守府の上位……つまりは管轄上なのだ。そして今、提督は大本営からの返事を無視すると言つてのけたのだ。

これは間違いなく違反であり、罰則は免れないはず。

それなのになぜ。

「俺と『大本営』の関係は所詮そんなもんなんだよ。だからそんなに深く考えなくていいぞ、大淀」

「そう、ですか？」

「ん」

しかし、そんな提督を影ながらでもいいから支えたいと思った。

「提督、提督が何を考えているのか私にはわかりませんが、何か力になれることはないのでしょうか？」

「悪いけど、ないな」

はつきりとした拒絶。

本当にすることがないのか。それとも信頼されていないのか。

大淀は肩を落とした。

「そう落ち込むなって。お前らにはお前らの仕事がある。で、俺には俺の仕事がある。それだけだ。それに……誰にでもひとつやふたつ、知られたくない秘密はあるだろう？」

いたずらっぽく笑う提督。

「例えば……そうだな……お前なら、夜な夜な自室に籠もってはあんなことやこんなことを……」

「ど、どうしてそれを……!」

「え？」

慌てふためく大淀に提督は目を丸くさせた。

「え？」

「適当に言ったただけなんだけど……」

数秒の沈黙が流れる。

完全に両者ともフリーズしたが、先に再起動したのは大淀の方だった。

「あ、あははー！　そうですね！　そうですね！　適当に言ったのが実際に当たることなんてないに等しいですからね！　もう、嫌ですねえ提督は」

あまりにもわざとらしいとぼけ方は、逆に全力で肯定しているようにしか提督には思えなかった。

「大淀」

「……はい」

「お前がナニしてるのかまでは訊かないし、このことは忘れるわ。だからその……悪かったな」

「嫌ですやめてくださいそんな申し訳なさそうな顔して謝られたら逆にこっちが虚しくなるじゃないですか!!」

耳まで真っ赤にして、大淀は目尻に涙を溜めながらそう叫んだ。

私は……

金剛はパチリと目を覚ますと、妹たちを起こさないようにゆっくりと身体を起こす。霧島が腕に絡みついている、思わず苦笑いを浮かべた。

時計を見ると、まだ6時すらむかえていなくて、比較的涼しい。洗面台で顔をゆすぐと、適当に上着を羽織って外へ出た。

やはり日は上っておらず、薄暗い光が海を写している。暗色に輝く海を眺めながら、ふと、左前方のベンチに誰かが座っているのに気づいた。

時雨だ。

雨大好き大好きな彼女がこんなに朝早くに起きているのはとても珍しい。とはいっても、金剛も人のことを言えない。

「おはよう時雨」

「うひゃう?!?!」

虚ろな目で遠くを眺めていた時雨が、突然にかけられた言葉に驚いてベンチから猫のように跳ね上がった。

「あ、ごめんね。驚かせちゃったかな」

数秒驚いた動作のままフリーズしていたが、ゆっくりと再起動し、そして金剛を確認した。

「う、うん、それはもう。おかげさまで目がぱっちりだよ」

ほら、と時雨が手で目を開いてみせる。

「ちようどよかったよ。僕も少しうとうとしていたからね。いい目覚ましさ」

ふう、と一息つくと、時雨は再びベンチに座った。

座るかい、と促され、金剛は素直に座る。

「ところでどうしたんだい、こんなに朝早く」

「私も全く同じこと言いたいよ」

「ははは……そうだね、どっちもどっちだね」

「私はなんとなく目が覚めたからだけど……時雨は？」

「僕は日が上る瞬間を見るのが好きでね」

意外な告白だ。

さらに言葉を紡ごうとする時雨を金剛は黙って聞いた。

「暗闇に光が差す刹那。それに僕の身体が照らされた瞬間。その時初めて、ああ、新しい

1日が始まったなって……そう思えるんだ。変かな？」

気恥ずかしそうに頭を下げながら金剛を見つめるそれは、まさに上目遣いのそれだっ

た。

その無自覚な可愛い仕草に、金剛の胸は一発大きくドクン、と熱く高鳴った。さらに頬をさくらんぼ色に染めているのが、またなんとも言えない興奮に拍車をかける。

「そんなことはないよ。早起きはいいことだしね」

ほぼ無意識のうちに伸びた手が時雨の頭を優しく撫でた。

「もう……」

ぷくりと頬を膨らませるが、それだけだ。

金剛はまるで抵抗しない時雨を撫で続け、満足したところで手を離れた。

「あ……」

もの寂しそうに時雨が甘い声を漏らし、すぐに自分でもそれに気づき、耳まで真っ赤になる。

「もっとしてほしかったのかなあ〜?」

金剛がニヤニヤとしながらおちよくなるように時雨に尋ねた。

金剛も以前、霧島に頭を撫でられた時、なんだか癒されるというか、ほっこりするかどうか、そんな気持ちだった。控え目に言うところ最高だったし、いつかは自分も妹たちにもこの感覚を味わってほしいとも思っていた。

そして今、こうして時雨の反応を見ると、効果は絶大だったようだ。

「い、いや、そんなことはないよ。もっとしてほしいなんて……お、思っていないから」
知っている。

これはふりである。

後半、声高になりながら言われても説得力のかけらもなっていない。

「はいはい」

時雨の返答に面白おかしく笑いながら、金剛は正面を向いた。

ふう、と笑い涙を拭って、まだ闇に沈んでいる水平線の彼方をじつ、と見つめた。

「……金剛さんはさ」

「うん？」

「記憶を失ったわけで、僕たちを忘れたわけだよね。それで今、必死に覚えようとしている。何も知らない、何もわからないここに白紙で送り込まれた紙飛行機」

「まあ、そうだね」

「僕には金剛さんがどう思っているのかわからないけど、僕は……僕たちは金剛さんのこと、大好きだし、よく知っているからね？」

突然、左手に何か暖かいものが覆いかぶさるさつたのを感じて、金剛は反射的に自分の左手を見た。

すると、その正体は時雨の手であり、にぎにぎと何度も握ってきた。

「あ、あの……時雨さん？」

「あ、いや、ごめんね。この手が今まで戦い抜いてきた手なんだなあ、って思ってた」

「それは『私の』手じゃないんだよ？」

「違うよ、これは『金剛さんの』手だよ。金剛さんは金剛さんでしかない。中身が別人だろうと、その本質は同じさ」

なんだかとても気恥ずかしいセリフを言われた気がする。

自分でもそのことに気づき、時雨も赤面する。

「ありがとう時雨。……私ね、今日決断しないといけないことがあるんだ」

これを知っているのはごく一部の人物のみ。しかし赤城はどうも知っているような感じなのだが、おそらく加賀が話したのだろう。

なぜこのタイミングで金剛は時雨に打ち明けようとしているのか。それは金剛にすらわからなかった。

残念ながら、この時点ではまだ金剛は決断できていなくて、本当に悩みに悩んでいる。それだけはまぎれもない事実だった。

「何をだい？」

「この鎮守府に残るか去るか」

「――」

案の定、時雨の目が見開き、自然と握る手に強い力が入った。

その力は痛いほどだったが、金剛は眉をピクリとも歪めず、言葉を紡いだ。

「二週間前に言われたの。提督に。同情なしで、どうするか自分で決めろつて。それで私、いろんな人に聞いてまわつた。どうして戦うのかつて。人類のためとかそういうのを抜きにして、ね。とはいっても少し前に始めたばかりだつただけだ」

あはは……、と後ろ頭をかく金剛。

力はこもつたまま、時雨はそつと目を閉じ、そして開き、口を開いた。

「僕は……僕は、帰るために戦っているよ。金剛さん」

薄暗かつた水平線から太陽がゆっくりとてつぺんを覗かせた。

世界に新しい朝を与え、闇を討つ光を与え、そして何より、安堵する温もりを与える。

一筋のようにこちらに伸びた太陽の光が鎮守府を照らし、金剛と時雨を照らす。

太陽の沈んでいる間、海がたつぷりと溜め込んだ輝きを放出する。

その様はまるで地に広がる朝の星空。

「この鎮守府には皆がいる。戦いから帰ってきたら、皆がいる。一緒に入渠しながら、今日のご飯はなんだろうな、とか、そんな他愛の無い話がしたい。僕が戦う理由は、その中に僕の幸せがある。きつとそういうことなんだ」

「……そっか」

「うん」

ようやく時雨が金剛の手を握っていた手を離す。

日は完全に昇り、水平線からその完璧な円形が浮かび上がっている。

そろそろ他の艦娘達も起床し始める頃だろう。後ろを振り返ってみれば、いくつかのカーテンが開かれている。

「本当は残って欲しいけど……同情は抜き、だもんね」

両膝を軽く叩くと、時雨は立ち上がった。

「そろそろ僕は戻るよ。金剛さんはどうする?」

「そうだね、私も戻るよ。妹たちが私がいなくてそろそろ騒ぎ出しそうだからね」

ちようどその時、「ひえー!!」とお姉様ー!!と聞こえる。そして、ドタバタと一部屋だけ明らかにうるさいのがある。

ほらね、と金剛は無言で肩をすかせてみせる。

「なら早く帰ってあげないとね」

くすりと、時雨は小さく笑うと、トタタと駆け出す。

その後を金剛は追いかけていった。

その最中、金剛は決めた。

決断するにはあとひとつ、足りないものがある。それはー。

鎮守府を見上げ、もう起きているかな、と呑気に思った。

◆ 彼はずっと待っている。

いれは言わば分岐点。

これは言わば運命。

これは言わば……。

静かに、ただ静かに彼は待っている。

机の上に肘をつき、顎を手の上に乗せ、じつとドアを見つめている。

榛名に言われた。

それを金剛お姉様に渡したいのだろうか？ と。

全くそうだ。否定しようの無い事実である。

金剛が例えこの鎮守府を去ると宣言しても、彼はそれを黙って受け入れるしかない。

『あの時』 去ったのは彼だ。

いや、残された艦娘たちの目には彼が逃げたように見えたのかもしれない。

彼は彼女の……『疫病神』と呼ばれるようになる彼女の願いを汲み取り、それを叶えてやりたいと思った。だから去った。

結局、元いた鎮守府に再着任することはできなかつたが、この鎮守府に着任すること

ができた。なぜかは知らない。どうせ向こうは何かを企んでいるのだろう。

しかしそのおかげでこれだけの艦娘たちに囲まれて毎日を生きている。彼女たちには感謝しているし、大げさに言ってしまうえば家族のようなものだ。

以前、蜘蛛によって壊滅させられた鎮守府を除き、この鎮守府はとうとう五本の指に入った。

大本営にとつて、彼の鎮守府が脅威であることが十分認識されたはず。それでも何もしてこない。

ただ遊ばれているだけなのか……？

「……」

考えが関係のない方向にずんずん進んでいることに気づき、頭を冷やそうと冷えきったお茶を啜る。

そして、その時がやって来る。

コンコン、と力強くドアが叩かれる。

「提督」

「……どうぞで」

では聞こうではないか。お前がこの一週間で考えたこと。悩んだこと。そして、その決断を。

◆ 金剛は提督の了承をもらい、執務室に入った。

「おはようございませす、提督」

「ああ、おはよう金……って、お前らもか」

金剛の後ろから現れたのは比叡、榛名、霧島、加賀、赤城だった。

「はい、ドアの前で盗み聞きしようかと思いましたが、やはりこうした方がいいという結論が……」

加賀がやたらと饒舌に語る。

簡単に一言、気になるから、心配だから来たと言えはいいのに、めんどくさく遠回りする。

「わかったわかった。……で、ここに来たってことは、そういうことでもいいんだな？」

「はい」

「そうか……。なら聞かせてくれ。お前はどこうするんだ？」

皆の視線が金剛に刺さる。

ごくりと生唾を飲み込むことすら許されない沈黙。

そして、金剛は決意を語る。

「私の決意を話す前に、ひとつ訊きたいことがあります」

たっぷり溜め込んでから吐き出された言葉がそれで、提督は大きく息をついた。

裏切られたというかなんというか……焦らしがとても上手だ。

「なんだよ。俺たちは心臓ばっくばくでお前の言葉を待つてたのに。もう一回メンタル強化して待機しないとイケないじゃないか」

「ご、ごめんなさい。でもこれを訊かないとイケないと思っっているんです。——提督に、訊きたいことがあるんです」

「言ってみろよ」

「提督はどうして提督に……いえ、戦うのですか？」

「……」

「私、考えてみたんです。どうして皆は戦うのかって。それで訊いてまわって、最後、提督の理由が知りたかったんです。これを聞かないと、私は私の決断を告白できません」

金剛は本気だった。

提督はその瞳に射抜かれ、呼吸をすることさえ忘れてしまった。

「そうかそうか。俺が戦う理由、か……」

提督は遠い目で金剛を見つめると、ゆっくりと呼吸を繰り返すと、重々しく口を開いた。

「提督っていう役割はな、艦娘たちを運用、指揮して深海棲艦と戦うことだ。それはお前

も知っているよな?」

金剛は黙って頷く。

「ということは、たいていの提督は深海棲艦をやつつけるために戦っているわけだ」

金剛は黙って聞いている。

赤城たちも黙って、提督の話に聞き入っている。

「でも俺は違う。そんなちやちな理由で戦っていないんだ。俺は真にこの戦争を終わらせるために戦っている」

「それはどういう……?」

金剛が口を挟む。

真にこの戦争を終わらせる、と深海棲艦をやつつける。このふたつに何も違いなどないように金剛には思えたからだ。

「結果は、原因がないと成立しないんだよ。では聞こう金剛。深海棲艦とはなんだ」

それくらい金剛として知っている。この一週間で学ぶことは学び、最低限の知識を蓄えたつもりである。

「突然現れた人類の敵、ですよね?」

そうだな、と提督は短く返す。

「お前らもそういう認識だよな?」

提督は赤城たちにも尋ね、皆が首肯する。

「ならさらに訊こう。『深海棲艦はなぜ、どうやって現れた?』」

それはまさに核心を突く質問だった。

提督の求めているのは深海棲艦への勝利ではない。力でもない。

『原因』だ。

そのことに気づいた金剛たちは何も返事することができなかつた。そんなことは当たり前だ。なぜなら知らないから。

「……そういうことだ。俺はそれを暴かない限りこの戦争に終わりは来ないと思ってる」

提督は腕組みを崩し、引き出しを開けて中から分厚いファイルを取り出す。表紙には『蜘蛛』の写真が貼り付けられている。

ファイルを開き、中身をペラペラとめくる。

「これまで様々な特異個体の深海棲艦と戦ってきたわけだが……こいつはその中でも特に異質だ」

金剛には提督の言っていることがわからないが、比叡たちは思い出すように神妙に頷く。

記憶を失う前の金剛と赴き、何体も遭遇した超強力な深海棲艦たち。何度も撤退を繰

り返し、何度も出撃した、あの戦いの数々。

「俺は、この蜘蛛に何かあると睨んでいる。鬼や姫を率いているんだ。特異個体すら率いる可能性だって十分ある。あつたら冗談抜きでヤバイけどな」

ファイルの中には蜘蛛によって崩壊させられた鎮守府の提督が送ったという、蜘蛛の写真を大事に貼り付けられていて、その周りには真つ黒になるまで文字を書き殴っているのが見える。

それはまさに提督の執念の塊だった。理由の具現化だった。

「というわけで、俺はとりあえずは蜘蛛をどうにかするのが優先事項だ。これで満足したか？」

提督の、金剛からの質問に答えた。これを金剛がどう受け止めるのかは知る由もないが、これが決断材料の最後の一杯となったのは言うまでもない。

沈黙という名の空間が執務室を支配する。今度は金剛の番であり、この沈黙の打破は金剛によってでしか為されない。

「……戦う理由はそれぞれでした。艦娘の皆を守るため。大好きな人と共に生きるため。ただ、この鎮守府に帰り、何気ない毎日を送るため。他にも挙げ出せばきりがありません。でも、それを語る時の顔は本気で、真剣で、生き生きとしていました」

たくさんの艦娘に聞き回った記憶を脳裏に思い浮かべながら金剛は言葉を紡ぐ。

彼女らは艦娘であり、金剛もまた艦娘だ。

長門の言った通り、艦娘とは心が存在し、意思があり、感情のある兵器である。

そして、嬉しければ笑い、辛く、悲しい時は涙を流す。そんな人間でもある。

「実は私、この瞬間まで去る方に決断が偏っていました」

金剛の後ろで誰かが息を飲む。それが誰かわからないし、知ろうとも思わなかった。彼女たちを落胆させるには十分すぎる言葉だと理解していたから。

金剛は戦う理由を見つけたかと思っていた。本気だ。

だが、流されるように残るのなら、いつそ去った方が、中途半端な自分に決着がつけられる。そう思っていた。

しかし、提督の言葉……理由が離れようとする金剛の足首を掴んだ。

それが何か言葉を投げかけるわけではない。ただ、本当に金剛の動きを止めただけだ。少しだけ、振り返る時間を与えただけ。

一週間で金剛の見たもの、聞いたもの、感じたもの、考えたもの。その全てが金剛の記憶を駆け巡る。

理由は見つからない。だから私は去る。

……そうしろと言ったのはどこの誰だ？

誰も言っていない。むしろ去れなんてこの鎮守府にはそんなことを言う者は誰一人

としていない。

ただの金剛の思い込みだ。

理由がなくても、武器を持ち、弾を撃つことはできる。

提督の戦う理由は真にこの戦争を終わらせること。

この人はきつとやってみせる。そう信じ、艦娘たちは提督の背中についていくのだらう。

では、そんな提督を誰が守る？

艦娘たちからしてみれば提督は純粋な光。美しい、心惹かれる光。

しかし孤独な光が果たしてあってよいのだろうか？ それが穢れないように、濁らな

いように助けるのは誰だ？

なら、その役目。役割を――……。

足首を掴んでいた提督の理由が離れた。

しかし、金剛の足はそれでも動かなかった。

それどころか、身体を鎮守府へ向け、早足気味に歩き出す。

金剛の胸からは重荷がストーンと降り、いつそ身体が軽くすら感じられる。

この選択が物語をどのように導くかなどわからない。誰にもわからない。

後悔はない。あるのはこれからの未来への渴望だ。

「私の戦う理由はたった今決まりました。それは、全てを守るため。人類も、艦娘も、そして提督も。なので私は——この鎮守府に残ります」



これは、金剛が決意を表明した時間から遡る。

彼女はまだ車に揺られていた。

もうこの本は何度読んだのだろう。

端がぐにやぐにやに柔らかくなり、ページ表示の部分が読めなくなっている。

本とは知識であり、力である。先生は山のような本を彼女に与えた。

とうの昔に彼女はそれらすべてを頭の中に叩き込んでいる。気象学。心理学。地学。

数学。実技を伴うものとして、工学。医療学。格闘術。

すべて必要なものだ。戦いに生きる彼女にはなくてはならない知識。

しかし完璧な生物は存在しないわけで、どこかで忘却の墨を垂らせば、そこからじわと広がっていく。

彼女の今している作業はその修復だ。

そんな様子を運転手は口を縫いつけた状態で鏡越しに見ている。

空気の読めないラジオのDJがレベルの低い冗談を言っている。

いつそラジオを消すべきか。運転手はその決断の狭間に揺れる。今消してしまえば、ラジオの音を意識に入れて集中している彼女の邪魔になるのではないかという杞憂もある。

運転手はその職業柄、数多の艦娘たちをこの高級車に乗せた。ある者は子供のようにはしやぎ、ある者は静かに目を閉じ、ある者は呆然と肘をつけて外を眺める。

しかし彼女は違う。

この移動時間を『ただの勉強時間』と認識している。その集中力も恐ろしいもので、出発した時から全く動じていないのだ。

ただ、ページをめくり、ノートの上でペンを走らせる。それ以外の行動が一切ない。後ろからーきつと無意識なのだろうーの見えない圧力に運転手は冷や汗をかき、

ストローを啜えて水分補給をする。

目的の地まではあと少しだ。

「あと半日ほどで着きますよ。あの鎮守府は……ああ、『死神』提督のところじゃないですか」

視線だけを動かして書類を眺め、勇気をもって運転手は彼女に語りかけた。

「『死神』……？ 先生……」

ここで初めてリアクションらしいリアクションが見られた。びっくり、と手が止まり、前を見る。

「先生……？ それは死神提督のことでしょうか？」

たっぷり時間が空いてから、返事が返ってくる。

「はい、そうですか？」

「そうですか……。ふふふ。それはー楽しみですね」

その笑顔を運転手は忘れることは……忘れることができなかつた。

『彼女』にその笑顔はあまりにも似合わなかつた。まるで地獄から召喚された悪魔の笑みのそれだつた。

My Teacher

邂逅

「おおおお……」

工廠で提督はこれまで蓄えに蓄えた資材の山の前に感嘆を漏らす。

この時をずっと待っていた。この時のためにどれだけの出撃海域の制限を行い、遠征に徹してきたことか。今となつては懐かしいほど。

それは恐れであり、不安であり、またそれらを上回る期待でもある。

「提督、本当にいいのですね？」

「ああ……」

隣に立つ明石が誇張して尋ねる。

それもそうだ。これまでずっと「……しませんか？」と尋ねると、まるで重い病のよう
うに頭を抱えて呻き出すのだから。そして今日。錆び錆びのブリキの首に油がさされ、
ついに縦に振つたのだ。

提督はどのような結果だろうと受け入れてみせるメンタル強化はすでに行っている。
あとは妖精さんたちを信じ、託し、膝について手を合わせ、深く祈ることしかできない。

提督は目を瞑り、片手を強く握め、めいっばい力を溜めてから拳を上突き出した。

「――大型艦建造の時間だあああッ!!」



「改めて、金剛型高速戦艦、一番艦、金剛です。よろしく願います」

これは金剛の決意表明の次の日の朝の集会。

グラウンドに集められた艦娘たちや職員たちの前で、金剛はマイクを握り、今一度自己紹介をした。

「皆も知っているとありますが、私には記憶がありません。今ここにいる全員との記憶がありません。艦娘として戦っていた記憶もありません。それでも……私は、私の理由のために戦うことを決めました」

皆が静まり返り、顔を上げて金剛の話に聞き入る。

「今の私がかつての頼り甲斐のある『金剛』ではありません。何も知らない、非力な金剛です。それでもこの私を……明るく接してくれるととても嬉しいです。どうか……どうか、よろしく願います」

そう言つて、金剛は深く頭を下げる。

しん……、と静まる艦娘達。

しかし金剛はなおも頭を下げたままだ。

この時、金剛には恐怖があった。他の艦娘たちが自分をどう思うのかが怖くて仕方なかった。もちろん好意的に接してくれた子が多かったが、まだ全員と接したわけではない、中には以前の金剛との変わりように失望する子がいるかもしれない。だがどうしようもない。

そんな行き止まりな関係になるのが堪らない。

ようやく金剛が頭を上げようとした、その時。

隣に立っていた提督が金剛の手からマイクを取った。

「……お前らは金剛のことをどう思う？ 受け入れられないか？ 邪魔か？ 消えてほしいか？」

提督の思いにも寄らない言葉に一同の顔が強張った。

「金剛はな、悩んで悩んで、ギリギリまで本当に悩み抜いて！ それで艦娘として戦うことに決めたんだ。これが金剛の決断なんだ。……いったい誰が否定できる？ 唯一無

二の、金剛の意思だぞ？」

提督が熱く語る。そして、小声で金剛に「顔を上げろ」と促す。

金剛はゆっくりと顔を上げ、周りを見回す。たくさんの艦娘。そして職員。今度はその表情を目に焼き付けようとした。

「俺たちは、仲間を大切にする。そういう奴らだ。戦い？ できないのならできるよう

になるまで俺たちが一から千まで手取り足取り教えてやればいい。ただそれだけのことだ。金剛を歓迎しよう、と心から思う奴は拍手してくー」

するとどうだろう。

提督の言葉を邪魔してまで皆が割れんばかりの大きな拍手したのだ。それはグラウンドだけにとどまらず、鎮守府全体にまで轟くほどに。

身体が震えるような音に、金剛は感極まり、目頭に涙が浮かんだ。

「どうだ金剛。どうやら皆、お前のことが大好きなようだぞ？」

「とても嬉しいです。ありがとうございます……ございます……！」

指で涙を拭い、笑顔を浮かべる金剛。

ーそれ、比叡を筆頭としたお姉様大好き大好きシスターズと青葉は見逃さなかった。前者はたつぷりと脳内の『金剛』ファイルに嚴重保存し、後者は迅速にシャツターを切った。その用途は言わずもがなだ。

こうして、金剛の新たな『人生』が始まる。艦娘としての金剛の、がだ。そして深海棲艦との戦いが同時に、これまで意識の希薄だった金剛に根強く絡まってくる。

その果てに何を見、何を考え、何を導き出すのか。それはこれからの金剛次第だ。

「ん。金剛の件はこれで終わりだな。話が変わるがふたつ、俺から伝えておかなければ

ならないことがあるからよく聞いてくれ。どっちも重要なことだ」

相変わらずの唐突な切り替わりようだが、『重要』という単語に反応して皆の態度が一変した。

「まずひとつ、この鎮守府に新しく艦娘がふたりやって来る。ひとりは他の鎮守府から。もうひとりは建造でだ」

どよつ、とグラウンドがざわめく。

つい最近ガングートが着任して間も無い中、再び新しい艦娘と会えるのだ。新たな戦力の増加に川内が「太っ腹っ！」と声を上げる。

まず始めることは練度の上昇だろう。前者はどれほどかわからないからなんとも言えないが、後者は明らかな新米だ。ガンガン演習などに引っぱりだこになるのが容易に想像がつく。

みるみるうちに力をつけるその様子を見られるのがなんとも達成感の感じられるものだ。

「他からやって来るほうだが……あー、うん。性格というか人格に難があるからそこはどうか理解してほしい」

言葉を濁しながら話す提督。

人格とは深く言ったものだ。艦娘にはそれぞれ個性がある。例えば『時雨』を例にあ

げる。各々の鎮守府にいないは目を瞑る。時雨は時雨であり、その姿、体型、言葉遣い、基本装備、そして根本的性情などは全くの同一である。しかし、ひとりひとりよく観察すると微妙に異なる点がいくつかある。右利きの時雨がいれば左利きの時雨もいる。アウトドアな時雨がいればインドアな時雨も……。

まるでパソコンのように、初め与えられるアプリは同じだが、使う人物、環境によって様々な特徴を持つようになる。

その中で提督は『人格』と言ったのだ。どういった意味だろうか。

「馴染むのは下手しい無理かもしれないが、そこは皆の努力次第だ。まあ頑張れ。最後に建造で来る艦娘だがー」

もはや慣れた。提督の適当な性格に。投げやりな言葉を紡ぐと提督はそつと目を閉じ、開いた。

「ー喜べ、大和型でち。しぎい……？ しらないこですな」

あまりにレベルの低い提督の言葉に皆がズツコケた。

うんうんと頭を抱える提督が、きつとこれから消費される莫大な資材の量に四苦八苦されるのは間違いない。

「とまあ、場の雰囲気と和ませようとしたんだがどうだろうか？ ……エッ、つまらない

？ これは泣いたな」

隣の金剛に耳打ちされ、悲しい評価に提督があからさまな嘘泣きをしてみせた。

これでは重要な話をすると言ったくせに、それが嘘のように思えてしまう。

ごしごしと袖でない涙を拭うそぶりを見せ、提督はマイクを持ち直す。

「……」

しかし提督は何も話さなかった。

ガヤガヤと話し声がたむろする中、提督はただじつと立っていた。

「……」

提督は何も話さない。

「……」

提督は何も話さない。

「……」

提督は何も話さない。

いつしかグラウンドは静まり返り、物音ひとつ立てることすら許されないような空間と化していた。

艦娘も、職員も提督の沈黙に、息をするという行動を禁止されたような錯覚を覚え、息苦しさを少なからず感じていた。

金剛にはそんな様子がよく伺えた。金剛はどちらかというとな提督側だから、皆の雰囲気

気が変わりゆく様を眺めていた。

しかし流石にこの沈黙は長すぎる。

金剛が提督にそのことを言おうとした、その時。

ようやく提督は口を開いた。

「……ふたつ目だが、これはおふざけなしでいくぞ。新たな深海棲艦が発見された。すでに何人かは知っているが、そこらの特異個体とはさらに異質なヤツだ。こいつは知性が遥かに高く、おそらく俺たちよりも高い可能性すらある」

思い起こすは蜘蛛に弄ばれた屈辱。

そのどこにもぶつけることのできない激しい憤りをあの3人は密かに感じているはずだ。

危険。あまりに危険だ。蜘蛛はこれまで戦った、一定時期になると出現する特異個体の強さが10だとするならば、『戦力的な評価を抜きにして』たやすく50は上回るだろう。言わばこれは知性面での話だ。他の要因も付け足せば……。

謎のベールに包まれた蜘蛛。果たして今、何をしているのだろうか。

「これから遠征を徐々に減らし、出撃を増やすつもりだが、ひとつだけ約束して欲しいことがある。これは提督としての絶対命令だ。……蜘蛛を見つけた瞬間、その報を鎮守府に送り、ただちにその場を離脱して全速力で帰ってこい。あらゆる任務を放棄してでも

だ。そして帰り次第、我が鎮守府は戦闘配置につき、付近の住民の避難をさせ、24時間体制で警戒にあたる」

皆、黙って聞き入る。

「よし、これでお知らせは終わりだ。たぶん今日中に新しい艦娘を紹介できると思うから楽しみにしとけよ。あと、17時に長門、陸奥、赤城、加賀、大淀、明石、門番長の佐伯、広報長の柏木、警備長の石田は執務室に来るように。じゃ、解散！」

◆ ああ宣言したのはいいものの、何から始めたらいいかわからない金剛は、比叡たちのアドバイスの元、出撃ドックへやって来た。

今の金剛は海の上を走ることすらままならない。ということの基本中の基本を再び学ぼうというわけだ。

「もう着いたんだけど、いつまで手を握っているの?」

苦笑いを浮かべながら両脇の比叡と霧島に尋ねる。

じゃんけんで負けた榛名はとても悔しそうだ。

寮を出てからずつとこうしていて、周りからの視線が恥ずかしかった金剛だが、すでに鎮守府の皆から公認のレズ姉妹であり、比叡たちも何を気にしていない。

「お姉様成分を補充中です」

「あ、うん」

タイムリングよく比叡と霧島が声を揃える。

そのまま金剛たちは艀装保管室へ入った。中では妖精たちが何やら作業をしている。トンチンカンとトンカチを振るったり、せつせと資材を運んだりと忙しそうだ。

「すみませーん、私たちの艀装、使えますか？」

榛名が妖精のひとりに声をかける。

すると、トンカチの手を止めて何やら話を始めた。

金剛には妖精の言っていることがわからない。音としてちゃんと聞こえてはいるものの、その理解が出来ない。加賀曰く、艦娘たちは妖精の言葉を普通に日本語として理解しているらしい。そして、提督は金剛と同じく理解が出来ないらしい。

なぜ金剛は妖精と会話できないのか。

記憶がなくなったから、ではないだろう。聴神経の欠陥なら納得できるが、特定の、それも妖精だけというのはどうも都合が良すぎる。

記憶だからではなく、それ以外で何かに傷を負った……？ のは確かだろう。しかし、致命的ではないし、金剛もそこまで気にしていない。杞憂に終わればいいのだが、また新たな障害が浮き彫りになるのは、怖い。

「ふむふむ、そうですね。ありがとうございますー！」

話を終えた榛名が金剛の元へ戻って来る。

榛名の押す荷台には四人分の艤装が乗せられている。見るからにとても重そうなのに、なんなく運んでいる。

「私たちの艤装、使えるそうですよ、お姉様！」

私もあんなに力がつくのかな、なんてぼんやり金剛は考えながら榛名に促されるがままに出撃パネルを踏み、艤装装着アシストによつてあつという間に装着が完了する。

ギユツ、と押し付けられるような装着に

声が絞り出されてしまうのはきつといつまで経つても克服できないような気がする。

そんな様子を妹たちに笑われて恥ずかしくなったが、(そんなことはないが)仕方のないことだと張り切り、「もう」と頬を膨らませる。

そして恐る恐る海の上に足をつける。脚部艤装がうまく作動し、水面上に留まる。さらに反対の足を乗せ、金剛は完全に海の上に立った。

「さあお姉様こつちですよ！」

「何を言つてるの霧島！ お姉様は私のものよ！」

「いきなり『もの』に発展するのはどうかと……でも、私はここであえて、お姉様は私のものと言います!!」

レズレズしい喧嘩を始める3人。

妙に達観した目で妹たちを眺めながら、金剛はよろよろと足を進めた。

◆ 「なあ陸奥よ」

「何かしら？」

「大和型が来る、ということとは提督は蜘蛛の撃破を目指すということでもいいのだよな？」
「まあ、そうじゃないかしら？」

長門は提督の報告にやつとか、と歓喜している。長門自身、まさかここまでではやく建造されるとは思わなかったが、はやいに越したことはない。

長門は淹れた紅茶を陸奥に手渡した。

「ありがとう。……うーん、正直に言う昨日の方が美味しかったわ」

陸奥は一口啜ると、僅かに口を歪めて評価を下す。

「そうか。淹れ方を少し変えるだけでこうも違うのか」

ぼそりと呟き、メモ帳に事細かに記録する。

ここ最近、長門はほぼ毎日紅茶を入れている。そして陸奥に飲んでもらう。もはや日課となったこれだが、陸奥は確実に上達していると確信している。初めこそその辺の粗茶と同じだったが、今や人に出しても恥ずかしくないほどまでになった。

なぜこんなことを始めたのかはなんとなく想像がつくが、だからこそ訊く必要がな

い。

『紅茶を淹れる長門』はそうない個性だろう。もうどこの鎮守府の長門かは忘れたが、『機械いじりが大好きな長門』を思い返し、あれより強烈なのと遭遇することはない……はずだと願う。

陸奥はここ最近の出撃、遠征の詳細をまとめた書類をパラパラとめくり、不備がないことを確かめる。

「うん、問題ないわ。出撃もないし、今日は暇になるわね」

ふう、と息をつき、陸奥が両手を上げて伸びをする。

残っていた紅茶をこくこくと飲み、やがてなくなったティーカップを長門に返した。

「17時に執務室に、と言われたが、なんだと思う？」

簡単に水洗いし、スポンジに洗剤を染み込ませて使った食器を洗いながら長門が問いかける。

「私が知っているとでも思ってます？」

こく当たり前な返答に長門が小さく笑う。

「そうだったな。すまん」

といつても陸奥も提督に呼ばれた身だ。気にならないこともない。

ふと時計を見れば14時で、まだまだ時間がある。三時間もある。手持ち無沙汰な長

門と陸奥にとっては長い三時間だ。

「少し目も疲れたことだし、2時間ほど寝ようかしら」

眠そうに目をこすり、腕を上げて大きく欠伸をする。

「どうしようか……少しトレーニングでもしようか」

そう言いながら長門は窓の外を眺める。

日はすでに登り、燦々と地上を照りつける。

長門はリズムカルな音を耳にした。たつたつたつ、と走る音。いったいどこからだ？

と下を見れば、吹雪、初雪、深雪、沖波に長波が走っていた。

長波が先行して前を走り、その後を追っているという様子だった。

「ランニング……ランニングか……いいな」

即座に決めると、洗い終わった食器を拭き、シンクに並べて濡れた手を拭く。

ランニングに行くのならもっと楽な格好をした方がいい。今来ている服は言わば戦闘服。いささか不似合いだ。

そうと決まれば行動は早い。

「私はランニングに行くとしよう」

「終わったからお風呂に入るといいわ。提督の前に汗をかいた状態で行くのもあれだからね」

「もちろんわかつているとも」

確か前に新しく買ったランニングウェアが棚の中にあつたはず。少し見た目が地味だが、そんなのに興味はない。

……胸が熱くなるな。

きつと長門はそんなことを思っているだろう。

なんせ大和型が来るのだ。感動というか興奮というか、それらがいろいろとポウルに突っ込まれ、ガチャガチャとかき混ぜたような様々な思い。

長門はこの鎮守府では古参者だ。その練度共々、皆に慕われるビッグセブン。例えば日本最強の戦艦だろうと導いてみせる。

そのためにはやはり力がある。名ばかりの軟弱戦艦だと失望されるのは間違いない。言ってしまうえばこれは長門のプライドだ。誰にも譲れないプライドだ。常に皆から頼りにされる艦娘でありたい、そう願う長門の。

短く別れを告げると、長門は資料室を出た。

小走りに離れて行くその足音はちゃんと陸奥の耳に届いていた。

「……あ」

そろそろ私も行こうかしら、と立ち上がった陸奥は、偶然それを発見してしまった。

「忘れてるじゃない、これ」

それはメモ帳。

びつしりと事細かに紅茶のことについて書かれていて、その字もとても美しく、意外にすらすらと読むことができた。

こんな、何かに没頭することはきつと楽しかろう。

ふふ、と笑う。

「私も何か、始めてみようかしら」

陸奥は紙の匂いが強く鼻につく資料室を、ゆつくりと出た。



どこかで。

蜘蛛は歌う。

「——♪ ——、 ——……♪」

月夜に照らされる海上。

今宵は以前に比べて観客が多い。

姫や鬼だけではない。一定期間にだけ出現する特異個体の姿も複数確認できる。

普段ならば決して出会うことのない深海棲艦たちが邂逅する。

皆が静まり、蜘蛛の歌に聴き惚れる。

そんな様子に蜘蛛は嬉しくなる。

「嬉シイわ。歌は素バラしいモノよ。皆もウたいましょう」
今宵は無礼講だ。

海上は会場と化し、黒い歌声は魚たちの子守歌になる。

病的なほど白い腕を月に伸ばし、「アア」と感嘆する。

蜘蛛はひとつ。ひとつだけ残念に思っていることがある。

ー歌という、素晴らしい文明を産んだ人類を滅ぼすことを。



夜だ、晩飯だ、宴……！ ではない。お酒はほどほどに。二十歳になってから。

酒の入った軽空母はよろよろとでろでろとだらしない。戦場での勇ましさは彼方へと消えてしまった。

年季の入った針時計が七時を知らせる。

「悪いな、また招集かけて」

提督の号令により食堂に集められた艦娘達はそれぞれの表情で壇上の提督を見る。眠かったり、酔っていたりと様々だ。

全艦娘がやって来たから食堂はごった返している。食堂の構造的になんとか全員が入れているが、本当に『なんとか』だ。

「これから新しくやって来た艦娘の紹介をする……の前にひとつだけ連絡事項な。俺の

呼び出し食らった奴らにはもう話したし渡したが、緊急時のマニュアル的なやつがある。俺ひとり全員に内容を教えるのは難しいから、その辺は貰ったやつに一任する。結構大事なことから、ちゃんと教えて、皆が覚えられるように計らってくれ。よろしく頼む」

提督の言つたのは長門、陸奥、赤城、加賀、大淀、明石たちのことだ。他にも従業員の方でも同じものが渡されているが、そつちはそつちだ。

「で、皆お待ちかねの……だ。今から呼ぶから、お前ら仲良くしてやれよ」

俺のハーレムがまた前進したぞ……なんて小言を漏らし、妄想から帰ってきた提督は側のドアに呼びかけた。

「入ってくれ」

提督の声に、ドアがゆっくりと開いた。

入って来たのはふたり。ひとりは高身長で、健康的に焼けた褐色の肌にガングートと同じ、白髪。そことなく両側でぴよこつとはねている部分がどうも犬耳に似ているっぽい。そんな言ったらポイされそうっぽい。それほどの威厳を持っていた。

対してもうひとり。

「――」

――艦娘たちの時が止まった。いや、盗まれた。

ぞわり、と背骨の髄まで強引に滲み込むように感じられるナニカに支配され、昼前の提督に似た雰囲気を感じた。

その主はひとり目と比べるとはるかに低身長。もともとは白だったのか、もうボロボロで、灰色がかかった軍服を羽織り、薄茶色になぜか白が混じった髪の毛が違和感を生む。左目に眼帯。残された右目が写すのは――……。

「こいつらが新しく配属される艦娘だ。自己紹介をしてくれ」

そんな空気の中でも提督はふたりに問いかけた。

大きい方の艦娘が一步前に出て、腕を組む。どことは言わないが、豊かな双丘がこれでもかと強調される。

「私は大和型戦艦、その二番艦、武蔵だ。この鎮守府にまだ大和がないのは残念だが……まあ、これからの提督に期待しよう。皆、よろしく頼むぞ」

ニヤリと口角を上げる武蔵をよそに、提督はうんうんと頭を抱えて唸る。

やめて！ 提督さんの蓄えている資材の量はすずめの涙よ！

なんてツツコミが入りそうだ。

「……善処しよう、うん。じゃあ次」

「はい、先生」

嗚呼、まただ。この雰囲気。

この艦娘からはただならぬ気を感じた。酔っていた軽空母も冷水を顔面に浴びせられたように正気に戻り、さらに気づかぬうちに手に持つグラスがカタカタと震えていた。

空気の読めない古時計の、静かに秒を刻む音すらよく耳に聞こえるほど、食堂は静かになった。

「――私は」

その声は冷たく、絶対零度。

「暁型駆逐艦、四番艦、電」

その表情は、悲しく、強く、恐ろしい。

「いろいろな事情が入り混じり、先生の鎮守府に飛ばされた身」

その振る舞いに女神すら見惚れ、地に堕ちる。

「よろしく、などとは言わない。私の生きる目的はただひとつ……深海棲艦を『殺す』こと。それ以外は不要だ」



それは、死神と疫病神の、邂逅。

死神

無から有は生まれぬ。

同じように、原因なしの結果などないのだ。

そう、ある日死神は言った。



夜の歓迎会は終わった。

酒に酔った加賀が歌を歌ったりと大盛況で、誰もが戦いを忘れ、楽しいひと時を堪能した。

提督は執務室で最後の資料にサインを書き、大きく、そして太く息を吐く。

眠いし、少し酒も飲んでしまったから酔いがきている。しかし、提督たるもの、その程度では平常心は削がれない。

「くッ、ああああ……」

背中をそらし、背もたれ椅子が大きく後ろに曲がる。ポキポキッと背骨が鳴り、提督はその気持ち良さに強く目を閉じた。

その時。ドアをノックする音。

「……先生」

電だ。

「どうぞで」

ドアを開け、入ってきた電を提督は過去を思い出しながら見つめる。

電は……提督の『後悔』だ。

『後悔』の具現化。

だが、電も自身を『後悔』の果てだと認識している。

そしてこのふたつの『後悔』は地獄の苦しみを経てついに収束した。それがこの電だ。

電は四歩ほど進み、止まり、後ろ手に組んだ。

「……久しぶりですね、先生」

「……そうだな、電」

「正直私は、もう一生会うことすら出来ないと思っていました」

「俺もだよ。でも、こうして会えた。俺はとても嬉しいぞ」

それをきりに2人の会話は止まってしまった。

ドタドタと廊下を誰かが走る音。きつと今日も夜戦がしたいだのなんだのと川内が走り回っているのだろう。しかも今日は酔っているときた。

提督は電から視線を外し、軍服の第1ボタンを開けた。このボタンが首を締め付ける

ようで、いつまでたつても慣れることはなさそうだ。

「丸くなられましたね、先生」

「まあ、な。さすがに丸くならないと首が飛ぶからな。物理的に」

電は無表情だ。

何を思っているのか、だいたいわかるのは提督だけだ。そして、だいたい何が言いたいのかわかっているのも提督だけだ。

「この鎮守府がお前の一番嫌いなタイプなのはよくわかっている」

「はい」

「仲間とか絆とか友情とか、そんな精神論じみたことを軸にしてるからな」

「逆に私にはどうして先生がそんなことを考えるのかがわかりません」

「建前だ。でも、本音でもある」

「だいたいこの鎮守府は平和に運営しようとする。」

ひとりも轟沈はさせたりしない。みんな幸せに。毎日を楽しもう……などなど。だが電にとっては、それら全てがクソくらえだ。

電は提督に『育てられた』。

電はその過程で考えを改めた。敵を全て殺す。そういう前提で艦娘は利用されているのだと。それは『全て』を考えた結果だ。どこにも間違いはない。

「俺は精神論はいいと思ってる。でも、お前の考え方もいいと思ってるんだ。言っ
てしまえば、両者の調停者って感じかな」

調停者って言葉、使い方合ってるかな？ と提督はぼそりと零す。

電は無表情だ。

「先生、私はこれからどうすればいいのでしょうか」

電は武蔵とは違い、左遷された艦娘だ。もちろんその報は大本営にも届くし、何しろ『疫病神』だ。監視の目も厳しいの言うまでもない。

かといって提督は電に活動させないつもりは微塵もない。むしろバンバン活動させたいほどだ。なんなら不休不眠で。もし提督がそう言うのなら、電はその通り食事や他諸々生理的な欲求を除いて不休不眠でやってのける。

そう『育てた』のも提督だ。

「基本的にお前に出撃の許可は出せない。だから、お前には戦闘の講師として働いてもらうつもりだ」

「講師……ですか。さすがにそれは初めてですね。しかし、やってみせましょう。そうですね……準備のために一週間ほど頂いてもよろしいでしょうか？」

「うん。許可する。お前の教えが艦娘たちの練度、そして意識の向上に貢献することを期待するぞ」

「ありがとうございます。あと、ふたつほどお願いしたいことがあるのですが」
「なんだ？」

「明日から私に授業をしてくれませんか？ 私はまだ、完全に覚えきったわけではないので、復習を兼ねて教わりたいのです」

提督が電に授業をしたのはつい2、3年前のことだ。そして、その勉強量は想像をはるかに超える膨大なもの。

提督は電がまだ完全には至っていないことはわかっている。永久に覚えておくことなど難しく、どこからか記憶の穴から抜けていくのが常だ。

これまで教えた教科の内容を脳の中で走らせて、提督は頷く。

「わかった。それで？ あとひとつは？」

ここで初めて電の表情が変わった。

……獣だ。

飢え、血に飢え、肉に飢え、命に飢えた獣だ。

「――先生はこれからどうなされるのですか？」

なんだ、そんなことかと提督は小さく口角を上げる。

電のこんな表情を見たのは久しぶりだ。それはかつての自分の鏡写し。

そして答える。

「復讐だ」

ー疫病神は歓喜する。



ガングートはイライラしていた。

武蔵……大和型の評判は前々からよく耳にしていた。日本最強の戦艦だとか。関係ないが（どことは言わないが）とにかくデカイとか。そんなことをまな板軽空母は苦虫を噛み潰すような表情で語っていた。

確かに武蔵にはその風格はあつたし、自信に満ち溢れていた。さすが、とも思った。だが。

……あの駆逐艦。

……あの駆逐艦がどうも気に食わない！

食堂の壇上でガングートたちを見下ろした目。あれは完全に格下を見るような蔑みの目だった！

よりにもよって、駆逐艦に、だ!!

腹立たしい！ 腹立たしいツツ!!

かじろうとしていた梨を握りつぶす。果汁と果肉が飛び散り、整備されたアスファルトを汚す。

そんなこと、知ったことか。

落ちた欠けらをグリグリと踏みにじる。しかし、これくらいでは怒りが収まりそうになかった。

戦闘において、力こそが全てだ。

どれだけ準備を整えようと、どれだけ戦略を立てようと、圧倒的な力の前では非力なのだ。

ましてや駆逐艦がどうやって戦艦と戦うものか。向こうがちまちま撃ってくる間にこちらが一発撃てばそれで終わりだ。

軽巡も、重巡も、軽空母も、足りないのだ。火力が。

ガングートは果汁に濡れた手をハンカチで拭き、後方のグラウンドを見る。

ここでは夕雲型の艦娘が何人かバドミントンをしている。

「……ふん、雑魚が」

「ー雑魚とはいけませんね」

独り言のつもりで言った言葉を拾われて、ガングートは声のした方を振り返った。

「誰だ」

腹が立っているからか、無意識に問う言葉が強くなる。

「翔鶴です」

「翔鶴……ああ、確か……二航戦だったか？」

「違います。五航戦ですよ。二航戦は飛龍さんや蒼龍さんです」

翔鶴はガングートに歩み寄ると、近くの切り株に腰を下ろした。

ガングートもそれにつられて隣の切り株に座る。

「で、何の用だ」

「散歩していたら偶然聞こえてしまって」

「そうか」

無愛想に返し、ガングートは先ほど踏み躪った梨を見つめる。

砕けてなお美味しそうな果肉に蟻たちがすでに集まり始めている。真っ黒になるのは時間の問題だろう。

「どうして、雑魚なんて言うんですか？」

翔鶴は尋ねる。

翔鶴はこの鎮守府で精神論を軸にして育てられた艦娘だ。そしてガングートの言葉はその琴線に引つかかった。声は落ち着いているが、心の中では不快だった。

「雑魚だからだ。それ以外に理由があるか？ ましてや駆逐艦。息を吹ければ飛んでいくほどの脆さよ」

ガングートは知らない。

この鎮守府の『絆』やら『友情』やらをまだ知らない。

着任し、それなりの日は経ったが、他の艦娘との溝は決定的となっている。そんな彼女には到底無理なことだった。

ガングートは鼻で笑う。

「ガングートさん、あなたは間違っています。それはあまりにも失礼では？」

「悪いが、私は失礼とも間違っているとも微塵も思っていないぞ。第一、私は今イライラしている。あまり気安く話しかけないでもらいたい」

もうガングートの足元では蟻の行列ができている。

仕事の早いことだ。

しかし、もし次の瞬間にガングートが足で蟻の行列を踏めば、何匹もの蟻たちが死ぬ。

……結局は、そういうことだ。

「察するに……昨日のことで、ですか？」

「さすがに分かるか。ああそうだ。私はあの駆逐艦に虫酸が走る」

「まあ、あの子が電ちゃんだとはねえ……」

翔鶴は他の鎮守府との演習で何人か電を見てきた。その特徴は統一して、引つ込み思案で平和主義者だということ。

もうこれは意図的と言ってしまってもいいほど、ずっと末っ子が偶然的に着任しな

いここの鎮守府の暁型の子たちには激しく同情したものだ。

で、念願の着任かと思えばあれだ。

全てを180。方向転換したような電に翔鶴……いや、『電』を知っている艦娘たちは狼狽した。

「ガングートさんは、電ちゃんも雑魚だと思えますか?」

「どうだろうな。雑魚とは簡単には言えないだろうな」

意外な返答に翔鶴は驚く。

「そのことは置いて、あの目、その意味を思い出すだけでも無性に腹がたつ」
眉にシワがより、ガングートの顔が歪む。

ガングートには崇高なプライドがある。それはきつと、長門と同等くらいだろう。だから負けたくない。譲りたくないと言ったガングートは頑固になつていく。

その点が長門とガングートとの違いだろう。

「一度面と向かつて話してみてもはどうですか?」

「私がか?」

「はい」

翔鶴が後ろの夕雲型の子達を眺める。

秋雲が見事なスマッシュを決め、ペアの朝雲が喜んでる。

そんな微笑ましい様子を見て、翔鶴もつい嬉しくなり、頬が緩む。

「動かないと、その子がどんな子なのか、真にわかることは永遠にありませんよ」

そう言われてガングートは考えを巡らせる。

確かにあの電とかいう駆逐艦は他とは違う、らしい。もしかしたら分かりあえるかもしれない。もしかしたらあの時の視線はガングートの思い違いだったかもしれない。

そんな淡い期待が徐々に膨らみ、翔鶴の言う通り、自分から行動してみる気概を起こした。

「……そうだな。貴様の言うことも一理ある」

「噂をすればほら……電ちゃんですよ」

翔鶴が視線を本棟へ向ける。

ちようど電が正面玄関から出て来たところだ。

やはり目立つ。あのボロ外套が異様な存在感を放っている。

「では行ってくるか。どれ、いま一度面を拝ませてもらおうか」

そう言つてガングートはスツ、と立ち上がると、ゆつくりと電の方へ向かつていった。

「悪いことにならないければいいのですけど……」

翔鶴はひとりぼそりと呟く。

アスファルトにぶちまけられた梨は、既に蟻が全て回収していた。

◇ 正面玄関を出た電は広い鎮守府を見渡した。どちらかと言えばこのの方が前の鎮守府より大きいだろう。

最低限の荷物は電が自ら持ってきたが、他にも荷物はたくさんある。先生にそれらを置いたためのスペースもちゃんと確保してもらっているから、先生には感謝の念が絶えない。

というわけで、今からその場所の下見に行く。

右前方ではバトミントンをしている艦娘達がいる。

長い間やってきたのだろう、それなりに様になっているバトミントンだ。

電は特にバトミントンに興味はない。かといってできないわけではない。とりあえずできる程度。あそこの艦娘たちには余裕を持って勝てるほどの練度だ。

一瞥した電は体の向きを変える。

ばさりと外套が波打つ。

「……」

前の方から、ひとりの艦娘が近づいてきているのが見えた。

白髪に長身。ともに着任した武蔵ではないが、見た感じだと海外艦か。

そんな想像をしながら電はやって来るのをじつと待った。

「貴様は、電だな？」

威圧的な声。身長差からくる必然の見下げ。

この瞬間、電はこの艦娘はプライド高い系の艦娘だと確信した。

「そうだ。そういうお前は何者だ？　あまり見ない顔だが」

「私はガングート。オクチャブリスカヤ・レヴオリューツイヤ、ガングートだ」

少なくとも電の記憶にはそれに準ずる艦娘を知らない。ということは、新型の艦娘というわけだ。

「ほう。で、ガングートよ。何の用だ」

そちらが威圧で来るならこちらも。

ガングートは帽子を上げ、腕を組み、股を広げた。

「……貴様は強いか？」

あまりのバカな質問に、思わず鼻で笑いそうになってしまった。

しかし、ガングートの顔は真剣だ。同じ艦娘として蔑ろにするのはどうも失礼だ。

「愚問だな。この鎮守府……いや、全ての艦娘より私は強い」

「……ハッ」

◆　そしてまたこの瞬間、ガングートはこの駆逐艦とは馬が合わないと強く確信した。

「ー長門さん、ガングートさん、摩耶さん、鳥海さん、島風さん、そして武蔵さん。提督の召集がかかりましたので、執務室へ集合してください。」

その日の夕方、鎮守府内放送で大淀がそう言った。

「さてお前たち、晩飯は十分に食べたか」

提督の第一声に執務室に揃った全員が頷く。

「大変よろしい。で、いつものパターンで言うと、お前たちには明日出撃してもらおう」

提督は机の上に並べられているたくさんの書類のうちひとつを取ると、それを長門に渡した。

「近頃、深海棲艦が多数目撃される海域に出撃、これを撃滅せよ……か」

「そうだ。それほど厳しい海域でもないことを考慮した上でお前らを選抜した」

「ですが提督……」

若干引き気味に鳥海が手を挙げる。

「そうはいつても、戦艦3人はさすがに多いのではないでしょうか……?」

鳥海の言うことはもつともであり、提督もそれを理解している。

きつと鳥海は資材の問題のことを指摘したのだろう。事実、武蔵を建造したことで資材は大きく減少した。

いくら遠征で貯蓄していたとはいえ、この消費は手痛いのは自明。そんな最中に戦艦

3人の出撃だ。

「そうだろうな。でも大丈夫だよ鳥海。お前の考えていることに関しては問題ない。戦艦3人を出すのは念のための保険だ。蜘蛛の件もあるし、何が起こるかわからないからな」

鳥海はなんとか納得したようで、ずつともじもじさせていた脚が止まった。

「戦艦がいようと、この摩耶様がいるんだ！ 何も心配することねえって！」
そう言つて摩耶が胸を張る。

実に頼もしいが、話の芯がズレていて、鳥海が苦笑いで受け止める。

「さすが摩耶様！ カッコいい!!」

「お、おう……サンキューな、提督……」

自分のことを摩耶様摩耶様と連呼するくせに、人から言われるところも照れる。

その矛盾が提督には愉快極まりなく、時々こうやってちよっかいをかける。

提督は「まあ？ 摩耶様だし？」などとぼそぼそ言つてポリポリ頭をかく摩耶様を放置し、武蔵の方を見る。

「ま、それは置いといて」

「置くのかよー！」

「うるさいぞ摩耶様。武蔵に誤解されたらどうするんだ摩耶様。摩耶様のせいで提督は

調子に乗った野郎だと思われたらどうするんだ、摩耶様」

「アタシの名前を連呼すんな！」

「とまあ、それは置いといて」

「また置くのかよ！」

「いや、もう提督のイメージはだいぶ定着してしまったのだが……」

武蔵が呆れた様子で提督と摩耶のやり取りを傍観している。

昨日着任したばかりとだけあって、提督のテンションについていけないのだ。

一息ついた提督は再び武蔵の方に向いた。

これから彼女の司令官となる人物だ。

目の前に立つ男はまだ見た目が若く、おそらく20代から30代の間。高身長の武蔵からすると、拳一つ分ほど小さい。日本人の特徴的な黒髪で、超絶普通の髪型だ。

決して顔立ちがすぐ整っているとは言わないが、どちらかと言えば平均以上だろう。

艦娘と提督の間には信頼と信用が何よりも必要とされる。

武蔵は提督とそれらを築き上げることを期待していたが、早速出端を折られた感じだ。

「マジか。人は外見が100%だというのは嘘だったんだな」

「外見と内面のふいふていーふいふていーじゃない？」

「俺は嬉しいよ島風。ちゃんと中身も見てくれる女性がいつか俺の前に現れることを待っているぞ」

「でも現れるとは言ってはなーい」

「ぐはっ」

「いや、私は提督の中身を見てそう言ったのだが……て、違う！　提督よ、なぜ私を出撃させるのだ？　させるとしてもなぜ電も出撃させない？」

だんだん話がぐにやりと曲がっていきそうだったのを武蔵が食い止める。

ブリーフィングだというのに、こんなにも緩い。武蔵は疎外感というか、これじゃない感を感じている。

そもそもこういういった場面ではもっと真面目になるべきではないのか？　と疑問に思う。

武蔵が正しい。圧倒的に正しい。

ただ、この鎮守府はそういう特徴があるのだ。もはや慣れるしか道はない。

「なに、肩慣らしだ。それにお前には戦艦の先輩がふたりもついている。いきなりの実戦だから、お前が完璧にできるだなんて全く思っていない。ふたりにたくさん迷惑をかける。そして助けてもらえ。その中で成長しろ」

まさかの突然の名言に武蔵はたじろぐ。

横の先輩ふたり……長門とガングートを見る。

確かに今の武蔵ではまだまだひよっ子だ。その自覚はしているし、また成長したいという向上心も持ち合わせている。

そのためにはふたりから教えを請うことは必須事項だ。武蔵は素直に提督のアドバイスを受け止めることにした。

「その、なんだ。ふたりとも。迷惑をかけるが、どうかこの武蔵を導いてほしい」
頭を深く下げる。

まさかそこまでするとは予想していなかったのか、長門が感嘆する。ガングートは依然としている。

数秒ほど経つと、ようやく武蔵は頭を上げた。

「……が、いつまでも足を引っ張るつもりはない。将来、お前たちを超えて見せるつもりだ」

ニヤリと武蔵が笑ってみせる。

これは新人からの挑戦状だ。長門とは新たな未来のライバルの出現に心踊る。競い合う相手は多ければ多いほど、そして強ければ強いほど良い。こちらに對してのプレッシャーを感じられるし、互いに実力を高めあえる。そんな期待だ。

「……それは楽しみだな。そうだよな、ガングート。お前も先を越されないようにしなければな」

長門が嬉しそうにガングートに話しかける。

しかし長門はこの時考えていなかった。戦艦が活動すれば活動するほど資材を著しく減少させることを。その言葉を聞いて、提督は内心で震え上がる。

「言われるまでもない。武蔵、貴様が『武蔵』だろうが、いち戦艦として貴様はここに着任したのだ。歓迎はするが、可愛がったりはしない。私もまだ着任してあまり日は経っていないが……なに、共に励もうではないか」

ガングートはずっとしていた腕組みを下ろし、片手を武蔵に差し出した。

「そう言ってくれると私もありがたい。これからよろしく頼むぞ」

そして、武蔵はその手を力強く握った。

親愛と親睦と、ライバル心を込めて。

「提督、私そろそろ部屋に戻りたいんですけどー」

「悪いな、作戦概要だけ説明させてもらおうぞ」

暇そうに島風が頭の後ろに手を回してくるくる回転している。綺麗な脇が丸見えで、それを見る提督は島風の服装の露出度の高さに目を白黒させる。

しかしそんなことを言い出せばキリがない。あの子だつてこの子だつてのオンパ

リードだ。男にとっては夢のような理想郷かもしれないが、そこにいる者にしかわからない苦悩というものがある。

煩悩を振り払い、スイッチを切り替え。

提督は海図を机いっぱいに広げた。ペン立てから赤いボールペンを取った。

「待て。さつき武蔵も言ったが、なぜあの駆逐艦はこの作戦に参加しない？ 怖気付いたのか？ 説明を求めろ」

「あの駆逐艦とは、電のことか？」

「新しい私の競争相手だね！」

場違いに興奮した島風が「おうっ！」とうめく。

「そうだ。あの駆逐艦が参加できない理由などあるはずもなからう。なぜだ」

「電については、あいつ自身も言っていたが、様々な事情が絡まっているんだ。簡単に出撃命令は出せないんだ。あとガングート。あの駆逐艦、なんて言うな。電だ」

ガングートはふん、と鼻を鳴らす。

提督への信頼度の低さと、電への不快感がガングートの今の態度を作り出す。

戦艦同士での協調性は良いが、それが以外とはめっっぽう悪い。まだガングートも欠点が目立つ。

早々に改めないと、きつと痛い目にあうことになるだろう。それも本人に。アドバイ

スはしない。ガングートも一度、彼女の生物離れした力に圧倒され、プライドを完膚無きまでに叩き潰されるべきだ。提督として、できるだけ私闘はさせないでいるが、これは別だ。

ふたりにすまなく思いながら、提督は第一ボタンを締めた。そして、提督は海図に向き直る。

「さて、ガイダンスは聞いているとは思いますが、それを前提に話を進めるぞ……え？　摩耶様ガイダンス聞いてない？　まあそれは置いといて」

「置くのかよー！」

「うそうそ。さすがに後で鳥海に教えてもらつとけよ」

「摩耶、あなた聞いてなかったの？」

「と、とにかく後で教えてくれよな！」

暗い夜。執務室の明かりが、まだ提督が活動していることを意味する。寮でそれぞれの夜を過ごす艦娘たち。これまでの生活はこれからも続く。

戦い、帰り、食べ、休み、そしてまた戦いに赴く生活。

そんな中で『死神』と『疫病神』の邂逅を起点として、この鎮守府は……提督は『提督の戦い』を改めて自覚する。

ずっとずっと止まっていた古い歯車が長い時を経て、重い音を響かせてようやく再稼

動する。

――全てはあの日の復讐のため。

掃討戦

翌日の昼方、提督の号令により長門らは出撃した。

鎮守府との通信のために、無線機を長門に持たせてある。

「見て見て、トビウオが飛んでるよー」

島風が指差す方向を見れば、確かにたくさんのトビウオが生き生きとジャンプしていた。

見渡す限り青い海。明るい太陽の光がトビウオの鱗に反射し、キラキラと輝く。それはとても綺麗で、鳥海はその光景に見惚れていた。

「綺麗ですね……」

「でしょ？ 飛べるし、速いし、いいね！ でも私の方が速いもんね！」

島風がトビウオの群れを追い越すと、そのまま遠くまで離れていく。

「ここまでで、まだ島風たちは一度も会敵していない。そもそもこの海域では深海棲艦はあまり目撃されないのだ。」

「島風、あまり私たちから離れるな。浮かれるのは良くないぞ」

長門の一喝で島風がしよぼしよぼと戻ってくる。

何かあつてからでは困るのだ。無駄口を叩くな、までは言わないが、ほどほどにしなればならない。いくら敵が見当たらないといつても、突然奇襲を仕掛けられる可能性もあるからだ。

「チツ、これだから……」

ガングートが小さく舌打ちする。

提督も提督だ。なぜこんなちんぴな海域に戦艦を送り込むのだろうか。砲弾の嵐吹く戦場こそが戦艦の華だ。それ以外は軽巡やらその辺に全担すればいい。

だがしかし、まだ長門がいるだけ気が楽か。新人の武蔵もいるし、教育のいう面では提督の判断も悪くはない。

すると尚更、ある疑問が浮かび上がるのだ。それはなぜガングートが出撃するのか、だ。どう考えてもガングートの出撃は不必要。長門がいるから武蔵への教育は彼女ひとりで事足りるはずだ。

ではなんだ？ まさかガングートも『教育ついでに』出撃しているのか？

もしそうだとするならば……腹が煮えたぎる。あの駆逐艦だけではなく、提督ですらもガングートを蔑むのか。だが落ち着け。勝手な思い込みはいけな。あの駆逐艦のことは確信しているが、提督についてはそうでない。

深く帽子を被りなおし、長門に微かに嫉妬の籠った視線を向ける。

「長門、もし敵が見つからなかったらどうするのだ？ 夜になっても探すのか？」

武蔵が長門の横までやって来て、並走しながら尋ねた。

火力は十分。だが経験は皆無。そんなビギナー武蔵には右も左もわからないのも当然であり、また当然の質問でもあった。

「もちろん探す……が、夜となるとさすがに発見が難しくなるから……。一度提督に連絡し、判断を仰ぐつもりだ」

「そうか。わかった。それとひとつ、なぜ索敵をしないのだ？ いつ会敵するのかわからんのだろうか？」

武蔵はただっ広い海を見渡す。

遙か彼方に複数島の影が見える程度でそれら以外に何も見当たらない。

現時点で水偵を発艦できるのは摩耶と鳥海だけである。しかしふたりとも何もせずただ追隨するだけなので、武蔵には不思議でならなかった。

「それは目的の深海棲艦の行動半径から考えた結果だ。目撃された日からの最大移動距離を予測し、その範囲を定める。まあつまりは今私たちはその範囲に至っていないということだ」

「なるほど……」

「だが過剰な心配は時に功を奏することだってある。しすぎは問題だが、多少は大丈夫だ

ろう。どうだ、ついでに発艦してもらおうか？」

長門が後ろを振り向き、おしやべりをしていた摩耶と鳥海に声をかけた。

「武蔵が心配しているから、水偵を何機か発艦してくれないか？」

発艦については何も問題はない。

ただ腕に装着した艤装にセットし、あとは妖精さんの発進を待てばいいのだから。

鳥海は妖精さんに確認を取ると、セットする準備をしながら言葉を返した。

「了解しました。具体的に何機ほど発艦させましょうか……？」

多ければ多いほど索敵の精度は高まる。逆に少ないほど精度は下がってしまう。だからそのイロハは当事者に依存し、周りから期待される。これは先手を打てるか後手になるかの、ある意味とても重要な役割なのだ。

それゆえに鳥海は簡単に言われてしまうと悩んでしまう。

「アタシと鳥海で一機ずつで！ それでいいだろ？ 長門？」

全機発艦でもいいかもしれない……と考えていた鳥海だったが、摩耶が即答し、さつさと発艦態勢をとってしまった。

それはさすがに少ないのでは？ と意見しようとしたが、緊急時のことを考慮すると

摩耶の判断が一番妥当なので、おとなしく摩耶の言う通りにすることにした。

こうやって摩耶は先走りたがりなところがあるが、それが鳥海の判断力の鈍さを補う

ことが多々ある。鳥海は摩耶のブレーキ。

ふたりは一心同体。バランスのとれた姉妹である。

「その辺は任せることにするさ」

「任せておけ！ な、鳥海！」

「そうね」

摩耶と鳥海が水偵を腕の艤装にセットする。妖精さんと確認を取り、エンジンをかけ、それぞれまっすぐ空へと飛び立った。

やがて低いプロペラ音が遠ざかり、再び海は静かになる。

トビウオたちともすでに別れ、島風は黙って航行を続けている。ガングートも黙り、長門も黙り、武蔵も黙り、摩耶も、鳥海も黙る。

索敵は神経をすり減らす行動だ。『発見した』と『発見しなかった』はとてつもない差なのだ。それによって勝敗が決すると言っても過言ではない。

鳥海は精神を研ぎ澄まし、水偵が見ている景色を認識する。

何も無い海。摩耶の水偵とはすでに距離は離れ、互いに視覚することのできないほどだ。

上下左右素早く、そして正確に見回す。

……そして視界に入る、黒い影。

「ーいきました！ 二時の方向、敵の数は八。戦艦二、空母一、重巡三に軽巡二ですッ！」
鳥海が叫ぶ。

その瞬間、長門は主砲の向きを変え、目を凝らした。

「よくやった鳥海！ 武蔵もいい勘をしているな！ 敵の状況を報告してくれ！」

鳥海は再び水偵に意識を注ぎ、敵の様子を観察した。

敵の旗艦はおそらく空母。

そして敵艦隊はとも速いスピードで海を走っている。どうしてかそれが、鳥海には焦っているようにも感じられた。

「空母が旗艦と思われます。敵はこちらに気づいた様子はなく、最大戦速で航行している模様です……」

「歯切れが悪いな、ちゃんと報告してくれないとわからないぞ」

まだ肉眼で確認できていない長門が鋭く指摘する。

鳥海だってそれは分かっていた。戦場において、曖昧な情報が致命的なミスを犯す材料となることだってあるのだ。

でも……それでも……これは……。

鳥海はその姿に、心臓を握られるような圧迫を感じた。息の根が止まり、黄泉の世界へと突き落とされる錯覚さえした。生理的な嫌悪もした。

きつとこれは恐怖だ。酸素を求めながらも、喉にこみ上げる、純粹な恐怖に深く咳き込み、ぐちゃぐちゃになった思考のまま呼吸をしようとし、肺が暴れる。

胸が苦しくなり、さらに酸素の減った肺が、マグマのように灼ける。

「ゴホッ……ッ！　ううう、っ、ツツツ……！」

「お、おい大丈夫かよ鳥海?!?　今結構やべえ咳したぞ?!?」

摩耶が鳥海の側に寄り、艤装が邪魔で背中に手が触れられないから代わりに肩を優しくさする。

敵前だというのに、情けない姿を晒してしまい、唇を噛み締めながらなんとか息を整えた。

「っ、はあ……はあ……。ごめんなさい。少し、動揺してしまいました」

「それほどのことがあったということだな。鳥海、落ち着いて報告するんだ」

依然長門はこちらに顔も向けずに話しているが、その声色からとても心配しているのだと分かってしまう。そんな見えない優しさに感謝しながら、鳥海はゆつくりと口を開いた。

「敵旗艦、空母ですが……オーラを纏っています。それも、私たちの知るような赤や黄色ではなく、真つ黒です。闇をも飲み込むような……漆黒です」



提督は常に出撃している艦娘たちに対し何かしら対応するため、一切の煩惱を排除し、殺意すら帯びるような覇気で椅子に座る。

物音すら罪人だ。提督の集中を欠く全てが罪人だ。

いつもは賑やかなこの鎮守府も、今日は驚くほど静かだ。それがこの鎮守府のルールであり、艦娘たちの、提督への配慮だ。

大淀はもうこの空気には慣れた。他の鎮守府ではどうかは知らないが、一番妥当なものだと思っている。もしかすると他にさらにいい方法があるかもしれないが、これが提督のやり方だ。異論はない。

しかし、そんな大淀が珍しくそわそわしている。

普段ならば提督と大淀、そして長門か陸奥が執務室にいるのだが、今日は違った。長門は出撃しているため、陸奥がいるのだが、それだけではない。

陸奥もそのことは理解しているが、平常心を保ち、ソファーに座って静かに目を閉じている。

提督の隣で同じく黙って立っている艦娘。その子が大淀にはどうしても気になって仕方がなかった。

机の上の大きな黒光りした無線機の金属板の反射で提督の隣に立つ艦娘……電を観察する。

不動。とにかく不動。石像のように固まり、一定のリズムで呼吸で膨らむ薄い胸部が逆に妙な違和感を生む程だった。

長い間、直立不動の姿勢を保つことはとても難しい。足が痺れたり、頭が重くなったり、ついつい指を弄ったりするのがだいたいだ。しかし電にはそれがない。まるで等身大の人形のようなのだ。

大淀は一旦観察をやめて無線機に向き直る。大淀の仕事は現在出撃中の長門たちからの無線を受け止めることだ。

とはいっても、いつもは『作戦完了。これより帰投する』の旨の連絡だ。

ちやうど無線機に反応があったのを確認した大淀は今回はどんな感じで送ってきたのかをなんとなく想像しながら受けた。

しかし、それは大きく裏切られ、書き写していた紙に震えた字が並べられることになった。

「……………どうだ？」

提督は顔をこちらに向けて静かに問いかける。

『我、黒のオーラを纏う未知の空母深海棲艦と遭遇せり。是と苦戦中。蜘蛛の姿は確認せず。援護もしくは撤退の許可を求む』です……………」

陸奥がゆつくりと目を開ける。

ここで撤退は推奨しない。

長門たちが向かった海域はどちらかというところの鎮守府に近い海域だ。野放しにするのは得策ではないし、あの長門が支援要請の無線を送ってきたのだ。よほどの相手なのは間違いないだろう。

であれば自然と結論は支援派遣となる。有力なのは、赤城、加賀、川内、利根、筑摩、羽黒、足柄、黒潮、吹雪、浜風、不知火、深雪、夕雲あたりか。

そう目星をつけた陸奥は無言で提督の表情をうかがう。

何度か陸奥もそこへ行ったことがあるからわかるが、およそ1時間半ほどで着く。しかし支援となれば話は別だ。ここから目的地までは速さが勝負となる。そうなると低速艦の陸奥は暗黙の了解で除外となってしまうのだ。

提督は何かを考えているようで深く頭を落としながら考えて、長い時間をかけてようやく頭を上げた。

「……電」

「11分。誤差は1分です、先生」

いったい何を話しているのか、この時点では大淀と陸奥には何も分からなかった。

11分とは何か。ふと時計を見てもその時間ではない。

いやまさか……と陸奥は静かに悟る。

そんなことは不可能だ。あまりに速すぎる。駆逐艦単騎で全速力で向かうとしても、とてもそれだけの時間ではあまりにも足りない。倍にしても足りない。三倍してもまだ足りない。

意見具申をしてようと口を開きかけたが、電も、提督も冗談ではなく本気だったのが感じ取れ、おとなしく事の成り行きを見守ることにした。

再び提督は目をつぶり、腕を組み、顔を上に向けて眉をひそめる。

「大淀」

「はい」

返事と同時に無線機に向き直り、打つ準備を始める。

「長門に打電。援護を送る。10分耐えろ」



大きな水飛沫が上がる。

海水を全身にかぶった摩耶は大きく舌打ちしながら狙いを定めた。

「当たれえッ！」

撃つ。

だがそれは未来視したかのような精度で華麗に避けられた。

「クソッ！　なんで当たんねえんだよ!!」

イライラが募り、ついに摩耶が爆発する。

しかし、イライラしているのは摩耶だけでない。皆も同じだ。

『そこにいるのに、いない』

そんな矛盾が起こっているようだった。

黒い空母深海棲艦以外は撃沈してみせた。多少の連携のミスはあったが、なんとか安定を保つことができていた。

だが今はもう、そんなものはとうに崩れていた。

「当たらないよ〜!」

島風が弱音を吐く。

駆逐艦の専売特許はその速度だ。その頂点に誇る島風ですらこの様である。

空母と駆逐艦の速さを比べるのは愚かであり、初めから分かっていることである。

敵空母は明らかに島風より遅い。なれば一発や二発命中するはずなのだ。必ず。

しかし、島風たちには砲弾を撃たせる暇を与えられなかった。

空母は本来艦載機を発艦、それらによる攻撃を主にしている。

現状、6対1。しかし戦況は拮抗、もしくは劣勢になっている。原因は艦載機の正確無慈悲な攻撃。砲撃しようとするれば必ず邪魔が入り、接近しようものなら激しい攻撃に蹂躪される。

もはやあの敵空母は、完全無欠の要塞である。

表情を変えず、無言で未知の奇怪な艦載機を無数に発艦している。

艦載機の色は赤く、片方だけ異常に巨大な目玉、口はなく、形状は気持ち悪いほどの正十二面体。発射口が後部にあるのと前部にある二種類がある。

言い尽くせないほどおぞましい姿。それらが空を覆い尽くし、空を赤く染め上げる。

ガングートはその気持ち悪さに唇を噛み締めながら対空射撃を行う。艦載機は無数にあるからきちんと狙わなくてもそれなりには命中する、と考えながら空に向けて乱射したが、驚くべき機動力で回避され、全く命中させることができなかった。

「なんなんだこれは……」

絶望。

逃げ場ももうあと数分もすれば埋められてしまうだろう。

ガングートは迫りくる猛攻を必死に避けながら呆然とするしかなかった。

「耐えてくれ！　あと少して援護が来る！　それまでどうか耐えてくれ!!」

長門が声を張り上げる。

無線機を降ろした長門が武蔵に空母を任せ、対空射撃に徹する。だがしかし、思うように撃墜することができず、長門もこれまでにない苦戦を強いられている。

今回は武蔵の実践を兼ねての出撃だ。まさかこんな強敵はまるで想定外だった。

これはもう特異個体に迫るほどの強さ。本隊による撃滅が当然であるほどだ。初出撃で、これほどの激戦に巻き込まれた武蔵は満更でない。

「ッ」

経験の無さが浮き彫りになる。

ちやちな砲撃など敵は視界に入れることなく最小限の回避運動だけで済まされてしまう。

さらにやけくそになった武蔵が連撃を放とうとすると、今度は意識の外側にいた艦載機からの攻撃をまともに受けてしまった。

「ぐっ、あッ！」

「武蔵ッ！」

摩耶が叫ぶ。

一刻も早く手助けしなければ。だが敵の攻撃が摩耶たちの動きを封じ込め、武蔵を孤立させようと意図しているのは明らかだった。

10分。

たったそれだけ待てば援護が来るのだ。

異常な速さだが、それにとにかく言う余裕はない。

長門は恐ろしいまでの集中力で艦載機の爆撃の嵐を掻い潜りながら最後、横に身体を

大きく投げ出し空母へと連撃を放った。

まさか撃つてくるとはよにも思わなかったろう、敵の意表をつくことに成功するが、ありえない反応速度で上半身を逸らし、砲弾は腕を浅く抉るだけだった。

「なんだと……!」

海面に横腹が接触し、服が海水を含んで重くなったことなど感じられないほどの驚愕に、長門は絶句した。

「私がいくッ!」

その隣を駆け抜けたのはガングート。その後ろを鳥海と摩耶が援護する。

「邪魔だ! 私一人で十分だ!」

ガングートの叫びが艦載機の不気味な駆動音にかき消され、さらに激しい爆撃が耳を劈く。摩耶お得意の対空射撃の効果も今ひとつで、一方的に攻められている。

「お、おとおおおおー……!!」

ガングートが吠える。

攻撃を当てられても、狂戦士の如く爆煙の中から鬼の形相で敵へと肉迫する。

ついに敵はガングートを己に害を為す存在だと認知する。

艦載機をさらに発艦。

爆発。炸裂。爆砕。爆裂。破裂。

この世の終わりにすら思えるような破壊音が海の静寂を打ち砕く。

近くにいた島風はその爆風に紙切れのように軽々と吹き飛ばされ、深い傷を負った。

「ーまだ、だああああっツ!!」

黒煙を薙ぎ払い、中からガングートが再び飛び出す。

艦装は破壊され、砲撃すらままならない。頭から血を流し、満身創痍だ。大破とも言えるガングートをそこまで突き動かすものはいったい何か。

ガングートの視界が霞む。向かう目印は、深淵の黒。ただそれのみ。

こいつに一撃をくらわせる！ 必ず！

砲撃できないのなら拳で！

ギユツ、と拳を強く握りしめる。

しかし、敵はまるで焦らず、逆に煽るように不敵に口角を上げてみせた。

そんなこと、知るか。どうでもいい。

腕を振り上げる。狙いは顔。その気持ちの悪い顔をグシャグシャにしてやる気概で。

距離が五メートルをきる。

あともう少しで『そこにいるのに、いない』敵に触れることができる。

ーそしてガングートは、ふと敵の後ろに、巨大な影がいるのを視界がうつすらと捉えた。

極限まで瞳孔が開き、さつきまでの視界の悪さが嘘のように一気にクリアになる。

まず認識したのは大きな目玉。それにガングート自身の姿がくつきりと映されている。内臓を含め、まるで全てを隅々まで見られるような、初めて感じる生々しい感覚。

黒い巨体。

四本の巨腕。

それら全てにビッシリと砲門が並べられていて、どれひとつ欠けることなくガングートへと向けられていた。

「……あ」

死んだ、と思った。

さつきの敵のあれはガングートに対する嘲笑か。

よく頑張ったな、だがさよならだ、と。

これほどの敵、いったい誰が倒せるのだろうか。いや、例え連合艦隊で圧倒的火力で倒そうとしても、艦載機の攻撃で分断され、個々撃破されることになるのは明らかだ。

そもそもこいつは何者だ。なぜこんなにも強い？

ガングートはゆつくりと進みゆく世界で思いを紡ぐ。

きつと駆逐艦やら軽巡やらではこいつは倒せない。それこそ戦艦12人で火力重視の編成で早期決着に臨むべきだ。

しかしその12人の中にガングートはおそらく含まれない。なぜならここで沈むから。

!!
ーだがそれでも、この拳をあの気に食わない顔にめり込ませるまでは、沈めないツ

力の弱まっていた拳に再び力を込める。

すでに沈むことは確定。

あとは一発殴って沈むか、殴れずに沈むかのどちらかだ。

竦んだ身体に喝を入れ、腰を少し落として腕を曲げる。

ここでようやく敵の表情が明らかに変わる。驚愕だ。身を引き、ガングートの拳から

逃げようとする。

「逃がすかああああああああ!!!」

背後の巨体の砲門が熱を帯びる。

砲弾が撃ち出されるまで、あとおよそ0.6秒といったところ。

それだけあれば十分だ。

世界の遅延が解放される。

ついにガングートの拳が左頬を捉える。渾身のそれは敵を吹き飛ばし、ガングートは嬉しそうに乾いた笑みをこぼした。

しかし、背後の怪物は依然としている。万策尽きた。やりたいことはやった。静かに
瞼を伏せ、来る死への切符が切られるのを待った。

「……その心意気、嫌いではないぞ。だが諦めるのは感心しないな」

死を受け入れた矢先、ガングートの耳元で誰かの囁き声がはつきりと聞こえた。

服を掴まれたかと思うと、グイツ、と力強く引つ張られ、後ろへと大きく投げ飛ばさ
れる。

「!?」

刹那、無数の爆音が海を叩き、ガングートの元いた位置に大きく水柱が屹立する。

まさかの乱入者にガングートは口の中に大量に入った海水を吐き出しながらその姿
を目に焼き付けようとした。

「九分か……まだまだだな」

元は軍服だった、ボロボロの外套。

小さな背中に、外套がふわりと舞い上がれば、キラリと黒光りする異形の艦装が姿を
覗かせる。

爆煙が突風に流され、全身が露わになる。

長門が、摩耶が、鳥海が、武蔵が、島風が、そしてガングートが目を見張る。

「長門の要請により、駆逐艦電、ここに参上した。……ほう、これはなかなか面白そうな

敵ではないか。殺し甲斐があつて実にいい。お前たちは今日の夕食の話でもしながら帰ることだな。……こいつは、私の獲物だ」

援護に来たのはたつたひとり。それも着任して間もない暁型の末っ子。

空母と化け物を前に、悠然と腕を組み、目を細め、余裕げに嗤ってみせた。

真相追及

「早く帰れ。お前たちを心配して待つている連中がいるからな」

電は淡々と語ると同時に、黒い深海棲艦は体勢を立て直す。背後の怪物は不揃いな歯が異様に食い込んだ、『口らしきもの』をケタケタケタ、カタカタカタ、と開閉させる。

「援護は……援護はどうなんだ電!!?」

電以外に誰もやって来なかったことに、長門は困惑しながら電にぶつけた。しかし電はやれやれと言わんばかりに手を振る。

「今言つたばかりだろう? 私がその援護だ」

「そんな……! あいつは危険だ! ふざけるのも大概にするんだ!」

6対1で長門たちはこの様だったのに、電だけで戦うとなればもはや言うまでもなくなってしまう。

絶对的に、圧倒的に、絶望的に、不可能だ。

ガングートは無惨に破壊された艦装を見下ろし、素直に自分が戦力外であることを悟る。なんとか航行できるレベルだ。足を引く重い重い枷。

しかしガングートには意地があり、プライドがある。それも、最も嫌っている駆逐艦

に命を助けられ、挙げ句の果てにはぶつきらぼうに帰れと告げられたのだ。

これを恥と言わずして何と言えよう。

ヨロヨロと立ち上がると、ガングートはなお力強い声で電に迫った。

「助けてくれたことは素直に感謝するが、それとこれとは話が別だ。貴様が単騎で挑むだど？ ふざけるな。提督にも呆れる。この程度の援護で本当に今の状況から脱することができるのか？」

「……」

電は押し黙ったまま、ガングートを見向きもしない。

敵も全く動かずにこちらの様子を伺っている。下手な動きをすれば一触即発は確實。

一方的に無視を続ける電に頭に血が上ったガングートが、さらにつめ寄ろうとした、その時。

「――黙れ」

「――」

音もなく、そして予備動作もなく電は腕だけを上げて砲をガングートも額へと向けた。

「お前、今、私の先生を、侮辱したな？ ここが戦場でなければ、私は自分を抑えられずきつとお前を半殺しにしていたぞ」

それとも駆逐艦とは思えないドスの効いた重い声で、電からは殺意すら感じられるほどだった。

「今はそんな話をー」

「黙れ。理解力の乏しいお前のためにわかりやすく説明してやろう。先生がなぜ私だけを送り込んだのかが知りたいのだろう？ そんなの簡単だ。考えれば容易に分かることだ」

ようやく電が横を振り向く。

ガングートを睨みつけるように電の眼光は鋭く、ガングートは小さく身じろぎした。

ー刹那。

電は額に向けていた砲の角度を上にと上げると、何のためらいもなく弾を放った。

一同が目を見開き……く間もなく島風の直上で爆発が起こる。敵の艦載機の破片がパラパラと飛び散り、そこでようやく島風が攻撃されそうだったことを知る。

大破の彼女はよろよろと移動してなんとか摩耶と鳥海に寄り添う。今の電の一撃が無ければ、島風は確実に沈んでいた。

撃つ後も電は腕を下げず、再びガングートの額へと触れるほど近づける。

発射により熱くなった砲口が大破状態のガングートの額の皮膚をお構いなしにじりじりと灼く。

「――私ひとりで充分だからだ。それとも私とともに戦うか？ 仲間の危機すら救えない奴がついてこれるとは到底思えないが。悔しければ口を歪ませながら帰れ。帰って自分たちの力不足に枕でも濡らすんだな」

◆ 日は沈み、夜の盃は月光に輝き、そしてまた日は昇った。

長門、武蔵、ガングート、摩耶、鳥海、島風の6名は入渠施設でしつかりと傷を癒した。

だが、完治したというのに、長門と摩耶と鳥海はやるせ無い気持ちに苛まれていた。ガングートに関しては怒りだ。

大淀から預かった今作戦の報告書を長門たちは閲覧したのだが、そこには驚愕を通り越したものが記されていた。

『援護に駆けつけた電、未知の深海棲艦と交戦、黒空母、怪物を撃沈。損害、無し』
そんなバカな……！ と長門は二度見三度見さらに四度見すらした。それでも報告

書に印刷された文字は変化するわけでもなく、無慈悲に結果だけを伝えるのだった。

あれだけ手こずった敵を、ひとりで！ あるいは無傷で倒したというのか！

「お、おい……これ、嘘なんじゃねえのかよ？」

摩耶が震え声で呟く。

摩耶の震えはよくわかる。もしこれが本当に事実なら、電は異常だ。そして、自分たちに無能の烙印を押される可能性すら浮かび上がってくる。

「報告書の詐称は立派な軍規違反だが……提督が一度見たのだ。認めるしかないのだからな……」

「そんな……あんたは悔しくないのかよ!?」

「もちろん悔しいとも。しかし事実だ。ここで駄々をこねるのはさらにみつともないと、私は思う」

頬を強張らせながらブルブルと一枚の報告書を震わせながら持つ長門は、明らかに動揺していた。

よもやこれほどまでとは。

初対面の時から異常だったが、その予測範囲を軽く二倍も三倍も上回った感じだ。

「そうそう！ 私も、皆も電ちゃんに助けてもらったし、強いのはいいことだから、それでいいんじゃないの？ まあでも、速さでは譲るつもりはないけどねっ！」

にひひー、と無邪気に笑う島風を見て、長門は不安定な心に平衡が訪れる。

そうだ、長門たちは電に助けてもらったのだ。まずはそのことを感謝しなくてはならない。それは艦娘として、それ以前に心のある者として当然のことだ。

ああ、癒しだ、と長門は硬い表情の奥でニンマリと微笑む。

「待て」

しかしここでガングートが横やりを入れる。

不機嫌そうに腕を組みながらガングートは口を開いた。

「やはり私は気に食わん。あいつだけを送り込んだあの男の真意を聞かねば、私の腹の虫はおさまらん」

ここまで強情なガングートに鳥海は齒痒さを覚える。

実際、電が言った通り、ひとりで倒してみせたが、そもそも提督は電に関して出撃は滅多にしないと公言していたのだ。その昨日の今日でこれだ。

非常事態だから出撃させた、と言われればそれまでなのだが、もしそうであるならば、電は非常事態の場合『のみ』出撃するということになるのではないだろうか。

そもそもあの時点で、提督はその『滅多』はどのようなシチュエーションなのか、具体的に誰にも話していないのだ。

「ガングートさん、確かにあなたの言うことにも一理ありますが、まずは皆で電ちゃんにお礼をしに行きませんか？」

「……」

黙りこくったガングートはきつと心の中で葛藤を繰り返しているのだろう。

そしてやがて結論が出たガングートはスツ、と目を細めた。

「私はあの駆逐艦とは分かり合えぬ。だから私は援護についての疑問をぶつきたい」
「でも、電ちゃんがガングートさんを助けたのでしょうか？」

「ああそうだ。だがそれとこれとは話が別だ」

「……そう、ですか」

鳥海は残念そうに話を切り上げると、長門たちを促し、すんなりと電に会いに行くこととなった。

電は自分だけの部屋を提督から頂いている。これだけでもだいぶ特別優遇なのだが、いかんせん、その広さが二十五畳ほどもあるのだ。それに第六駆逐隊の寮にも電のスペースが開けられていることから、電の持つ広さは鎮守府一だ。

だが、電がなぜそのような部屋を手に入れ、また何をしているのかはまったくの謎である。少なくとも青葉が興味をそそられそうなネタであるのは間違いない。

そして電は今日、その部屋にこもっているらしい。

「ならば私たちは電に会いに。ガングートは提督に……ということでもいいのだな？」
これまでだんまりを続けていた武蔵が初めて発言する。

おそらく彼女たちの中で一番落ち込んでいるのは武蔵だ。あの時、結局彼女は何もできずに敵に一方的に攻撃されるだけの、ただの肉人形だった。

仕方ないといえば仕方ない。なぜなら武蔵にとってはあれが初出撃だったから。恐

怖に囚われず、戦闘に臨んだことはむしろ褒めるべきことだろう。

武蔵より、ひとまわりもふた回りも身体の小さい島風がボロボロになるまで頑張っていたのだ。その勇姿以上に武蔵の勇気を奮い立たせたものはなかった。

「私は、電はとても強い艦娘だと思った。戦艦たちからただけではなく、あの子のような駆逐艦たちからも学べることは多くあると思うのだが、ガングートよ……そこはどう思うのだ？」

「愚問だな」

「……そうか」

一歩たりとも譲ろうとしないガングートはこの会話に飽きたようで、行ってくる、と一言を投げつけて去ってしまった。

その背中とは、とても強固なプライドで補強され、見るからに刺々しいもののように武蔵には見えた。



ぶうん……と低く唸る機械。その山に囲まれながら、江本は無言でキーボードに強く打ち込む。エンターキーを押す音が薄暗い部屋に反響し、いつそ心地よいほどのそれに、江本の身体が静かに震える。

何かを見つけたようで、カーソルがとある場所で止まる。

クリック。素早くUSBを差し込んでダウンロード。

『ダウンロード中……4%』と順調に始まり、江本はほっと一息つく。

ようやくここまでたどり着いた。ほぼ確信に近いが、この情報は必ず核心に近づく手がかりになる。いくつもの水面下でのやりとりが実り、功を奏したのだ。

『ダウンロード中……28%』

まったくもってめんどくさい仕事を頼みやがって。心の中で自分よりも若い、しかしはるかに重大な責任が伴う役職に就く男に愚痴を言う。

江本がああ男に信頼をおく理由は果たして何か。それはもう、とうに忘れてしまった。ただ曖昧に覚えているのは、いつの日かに偶然ああ男に命を救われたことだ。そして利害も見事に一致している。

『ダウンロード中……54%』

江本は早く完了してくれと願うが、機械はそんなことは御構い無しにゆつくりとしたスピードでバーの色を伸ばす。

いったいどれだけのデータが取り込まれているのだろうか。そんなわくわくというか、興味というか、なんというか。江本はジッと画面に見入る。

『ダウンロード中……79%』

そもそもここに侵入できたのが不思議なくらいだ。正直、侵入できるとは欠片も思っ

ていなかったが、なんたる偶然か。神はどうやら江本に微笑んだらしい。

——な訳がないだろうが。

『ダウンロード中……92%』

93%になった瞬間、部屋の奥からカッン、と物音がした。

刹那の動きで腰に携えたホルスターから音も無く拳銃を抜き出す。薄暗い部屋の唯一の光源はコンピューターに埋め込まれている小さな無数のランプのみ。こちらが物を立てれば終わり。こちらが向こうの姿を視認したら終わり。

いつものことだ。

いつも渡つてきた命の吊り橋だ。

ただ、今回はちよつぱり心配性な提督のお叱りを頂くことになるかもしれない。

気配を探れ。勘を働かせろ！

研ぎ澄まされる意識。目を見開き、極限まで集中力を高める。決着はコンマの世界で。できればこの場で発砲は避けたいが、やむ無しだ。

固い足音は、部屋に確かな我を言い聞かせるみたい。しかし、その足音は部屋を大きくぐるりと周つただけだったようで、それきり聞こえなくなった。

「……」

まさか本当に気づかなかつたのか？

江本は内心驚きを隠せず、なお警戒したままゆつくりと歩を進める。

江本よりも高い機械に背中を預け、安全ロックが解除されていることを再確認し、躊躇いなく躍り出る……！

「……ッ！」

江本の視界には誰の姿も捉えなかった。どうやら本当にいなくなつたようだ。江本の存在に気づかなかつた。ただの警備員だろうか。だとすると問答無用でクビ。

もしかすると遊ばれているかもしれない。餌をぶら下げられ、それを必死に口で啜え取ろうとする様を見て、ワインでも飲んでいられることもありうる。いや、おそらくそうだ。ならばその卓上でせいぜい美しく踊ってみせよう。それに観測者が魅入る際に提督はやつてくれるはずだ。

パソコンの画面が移り変わり、ダウンロード完了を告げるメッセージが現れる。

江本はパソコンに歩み寄ると、ふとその容量を確認する。

「これは……」

骨が折れるぞ、と後ろ頭をかく。

しばらくは可愛い艦娘たちに癒されながら、デスクワークの日々を送ることになりそうだと、無意識に微笑んでいることに気づく。

平和ボケするのも悪くないな、とほんやり考えながらも、まだそれはいけないという相反する考えが対立し、色あせ、消える。

この道に生きると決めたから自身にハッピーエンドなど訪れないことはわかつてい

る。
パソコンをカバンの中につめ、同時にダサイ眼鏡をかける。すると、まあなんと

ことでしょう。これで冴えない無精ヒゲ男の出来上がりだ。

パスカードを手にし、何事もなかったかのように部屋を出る。

さて、これで仕事は終わりだ。さっさと帰って一服したい気分だ。欲を言えば、少し値の張ったものを。

『大本営 極秘サーバー室』の銀プレートが、鋭く光った。

提督問答

金剛は執務室で提督とふたりきりでお茶会を楽しんでいた。

提督ともっと仲良くなりたかったから。そんな単純で、純粹な理由だ。

とはいっても、金剛には提督と何をすればいいのか全くわからなかった。言い出しつpegこれでは埒があかないと思ひ、妹達にアドバイスをもらつたところ、お茶会と口を揃えたのだつた。

「どうですか？ 提督？」

「うーん……」

いまいちそんな顔で提督は金剛の淹れた紅茶を飲む。

正直に言う、以前より質がガクンと落ちた。仕方ないと言えど仕方ないのだが、この落差が金剛を変えてしまった影響のひとつだと思つてもやりきれない気持ちになる。

「そ、そうですね。『私』は紅茶を淹れるのなんて本を見よう見まねの初めてですからね……」

金剛のすぐ側には紅茶の淹れ方の部分のページが開かれている本が置かれている。

金剛は乾いた笑いをこぼしながら提督に差し出した紅茶を下げようとする。

「バツカお前、なんで下げるんだよ」

「え？」

提督が金剛の手を遮る。

「せつかくお前の淹れた紅茶だ。もつたいないし、嬉しいから下げなくていい」

そのまま提督は紅茶をぐくりと一気に飲んでしまった。

「あ……」

「まだまだだと思うのなら、もっと練習すればいい。……そうだ、長門がこそこそやっているのは知っているから、あいつに教えてもらおうといい」

言い終えた提督はお菓子に手を伸ばし、もそもそと食べ始める。

長門のあれはあまり知られていない趣味だったはずだが、提督に知られているのはなんだか可哀想だ。きつとおそらく、そのことをカミングアウトされると羞恥に顔を真っ赤に染めるに間違いない。

金剛はもそもそとお菓子を食べながら提督の顔をじつと見つめる。

不細工でもなければイケメンでもない。実に普通な容姿だ。前の金剛はこの人に（過度な）スキンシップを図っていたのか。ふと長門に見せられた動画のことを思い出し、自分のことでもないのに恥ずかしさにぶうん、と音が聞こえそうなほど素早く顔を背け

た。

「どうしたんだ。なんだ？ 俺の顔が不快だったか？ ……ああ、これは整形に直行だな。俺の貯金は……つと」

「いやいやいや！ 違いますよ！ そんなこと思ってませんから!!？」

徐ろに財布を懐から取り出そうとする提督を金剛が慌てて止める。

しかもよく見ると提督の財布はマジックテープで開け閉めする手のひらサイズのもとも小さいものだった。

「今、俺の財布がダサイと思ったか？」

「……正直に言うと、ハイ。ほんの少しだけ……少しだけ」

「いいか、よく聞け金剛」

お菓子の最後の一口を放り込むと、提督は立ち上がった。そしてビリリ、と財布を開いてみせた。

「俺には逆に、よくわからん革製の長い財布を持ちたがる理由がわからない。何よりも高い。それに大きさの問題もある。トドメに、財布はそう見せびらかすものじゃない。そんなことに金を費やすのはバカのことだ！」

語り終えた提督は満足げに座ると、またお菓子を食べ始める。

「提督は、その……変なところで捻くれてますね」

「安心しろ。自覚はしている」

「あ、あははは……」

話がひと段落つき、再び二人はお茶会を始める。とはいってもやはり金剛には初めてで、紅茶を淹れ、お菓子を食べる。そしておしゃべりする。それだけしか妹たちは教えてくれなかった。

もしかしたらふたりきりで、というのがマズかったのかもしれない。話題がなくなれば沈黙してしまうし、なんとなく話を持ち出しにくい。

ならいつそ妹たちも呼んでしまえばよかったか、とちよつぱり後悔する。

しかし静かに紅茶を飲むのもこれはこれでアリかもしれない。言い表すことが難しいが、簡単に言うとは、落ち着く、だろうか。

執務室の匂い。今座っている椅子の感触。雰囲気。すべてが金剛の心を落ち着かせる。

「そうだ金剛。最近海の上を走る練習をしているそうじゃないか。どうなんだ？ 出来は」

「うーん……なんとかひとりで航行できるレベル……です」

思い返し、苦笑する。

加賀を巻き込んで何度びしよびしよになったことか。加賀には申し訳ない気持ちで

いっぱいだが、それと同じくらいに深く感謝している。

「そっかそっか」

それだけ短く返すと提督は再び黙りこんでしまった。

「提督」

「ん？」

提督が顔を上げる。

ポットからほのかに香る金剛の淹れた紅茶。澄んだ匂いが執務室全体を満たし、ゆったりとした空間を生み出す。

「私は出撃できるようになるのでしょうか……？」

提督が身体をピクリと震わせる。

「ああ言ったのはいいものの、いつになったら私は皆の役に立てるのかなーって……でもでも！　ちゃんと努力はしてるんですよ！　この前は陸奥からいろいろ教わりましたから！」

ふんす、と腕を立てる。

皆、金剛に優しく接してくれている。建物内の知らない場所を潜水艦の子たちが教えてくれたり、資料保管室に「かも」と連呼しながら案内してくれた子もいた。

そう、皆が皆、優しいのだ。それゆえに金剛の中で彼女たちの力に少しでもなりたい

という思いが大きくなるのだ。

提督は黙ったまま、聞いているのかいなのかわからないような様子だったが、手を伸ばしたかと思うと、お菓子を一つ渡され、「とりあえずこれでも食べておけ」と押し付けられた。

仕方無しに受け取り、頭にクエスチョンマークを浮かばせながら食べ始める。

「うーん、どう……だろうなあ」

「……」

意外な回答に金剛の動きが止まったが、まあまあ、と提督に鎮められる。

「正直に言うと、お前がそんなにはやく皆に追いつくなんて到底思っていないんだよな。そもそも戦闘のいろはを知らない。弾を撃てない。隊列の組み方を知らない。連携を知らない。……なあ？」

「う……」

痛いところを全て突かれ、呆気なくやられる。やっと航行できるようになったばかりの金剛には遠い先の話のように聞こえてしまう。

何も知らないのだ。そして、ようやく1を掴み取っただけ。2も3も、まだまだある。これはいつぱい頑張らないと、と金剛は苦笑の裏でさらに苦笑する。

「まあ頑張れ。俺じゃなくて、艦娘たちから教わったほうがわかりやすいだろう。俺は

海の上を走れないからな」

「提督も、脚部艤装だけ付ければできるでは？」

「無理無理、そこは人間と艦娘の違いのことよ」

ひらひらと手を振り、提督は金剛の提案を潔く辞退する。

そもそも人間と艦娘は似ているようでその根底は違うのだ。人間はもとより生物として存在しているが、艦娘は違う。人間の生み出した、非生物である鉄の塊から生物へと昇華した、未だその過程の完全理解ができていない創造物。しかし艦娘には心があり、肉体があり、血が身体の中に流れている。

「ううん……わからないです」

「俺もわからないさ。でもいつかはわかるだろ」

「なんて適当な」

「まあまあ」

その時、針時計がちょうど午後四時をさし、古い鐘がゴウン、ゴウンと鳴る。

「ん、もうこんな時間か。仕事に戻らないと大淀に怒られてしまうな。そろそろ切り上げたいんだが、いいか？」

「はい。今日のお茶会、楽しかったです。またいつかお茶会しませんか？ 今度は妹たちも一緒に」

「……比叡らも一緒でいいのか？」

「もちろんですよ！ ふたりきりでも十分楽しいですけど、人数が多ければさらに楽しいですからね！」

「……そうか。じゃあ今度はそうするといい」

「はい！」

屈託のない金剛の笑顔に提督は魅せられ、つい顔を背けてしまう。

記憶を失ってもその肉体は金剛である。提督の以前の記憶を少なからず刺激し、英語訛りの目立つ彼女とすべてが重なってしまう。変わらぬ笑顔に提督は嬉しさ混じり、哀愁混じり、そして愛おしさ混じり。様々な感情が渦巻いた。

簡単に片付けを済ませ、とうとう金剛は執務室を出て行ってしまった。夕飯までは時間はたくさんあるから、きつとこの後にでも比叡たちから色々学ぶのだろう。

全く、勤勉なことだ。

ふ、と心の中で微笑み、ペンを手に取り、これから執務にかかろうとしたその時。ドアが力強くノックされた。

「ん？？」

突然のことに驚き、危うく書類に書こうとしていた文字が滑りそうになった。

大淀が来るにはまだ早すぎる時間だ。さらにこのノックの仕方、怒っているかそれと

も急いでいるかのどちらかしか考えられない。しかし大淀が怒るようなことをした覚えは提督には毛頭ない。ということは……急いでいる、か。

どうせ卯月らへんがいたずらして收拾がつかなくなっているのだろうと提督はやれやれと入室を促した。

だが、入ってきたのは大淀ではなかった。

「失礼する」

ガングートだ。それに提督が観察したところ、どこか興奮状態に陥っている気もする。

あくまで平然に。提督はゆっくりとペンを机に置くと、机の上に手を乗せた。

「できれば丁寧にノックして欲しかったんだがな。で、どうしたガングート？」

ガングートは無言のままズカズカと机に近づき、手を伸ばせば簡単に手が届くほどの距離にまで迫った。

「それはすまなかったな。それよりも貴様にどうしても訊きたいことがあるのだ」

「訊きたいこと？」

「そうだ」

「あの出撃のことか？ あれは俺の判断ミスだ。あのような事態を想定でき……」

「違う、そうではない」

「ならなんだ？」

「わかつているだろうか？」

「……」

事実として。先の出撃においてガングートたちは手痛い目にあつた。彼女たちは提督の指揮下で行動する部下たちである。そして何かしら損害が発生すれば、もちろんそれを指示した上司、つまり提督に責任が降りかかるのだ。

つまりこれは予想外の事態を予想できなかつた提督の裁量ミスとしか言わざるを得ない。

沈黙が流れ、提督とガングートの視線が交差する。獰猛な獣が如き眼力が提督を容赦無く突き刺す。しかし提督はそれをもろともせずに見つめ返した。

「電のことか？」

「ああそうだと。抽象的にはあの援護部隊。具体的にはあいつだ」

「それがどうしたんだ」

「なぜあの駆逐艦しか送り込んでこなかつたのかが納得できない。そもそも駆逐艦ごときが長門も攻めあぐねるあの深海棲艦に無傷で勝利だと？ ……ハッ、とんだピノキオだな」

高く鼻で笑う。

ガングートの電への疑いは深まるばかりだ。電にとつてはそんなことなどどうでもいいのだろうが、ガングートは違う。おそらく電のことをただ異質な服装の駆逐艦しか思っていない。その本質を知らずして、なお嫌悪感をありありと表に出す。

「電を送ったのは俺の判断だ。事実としてお前たちは電に救われた。そのどこが問題なんだ？」

「ああ。確かに私たちはあいつに敵を任せて撤退した。私が訊きたいのはそこじゃない。あいつに『そこまで』の力があるのかという疑いだ」

「電の実力を疑っているのか？」

「そうだと。報告書にはああ書いてあるが、嘘なのだろうか？」

「本当だ」

「鼻が伸びるぞ」

「伸びないさ」

このままでは話が平行線になるのは明らかだ。

嘘だと一点張りのガングートは、机を力強く叩きそうな覇気すら漂わせながら提督を問いたです。金剛の淹れた紅茶の残り香が部屋に淡く広がっていたが、すでにそれは消えてしまっていた。

「言っておくが、あの子はそこら辺の艦娘とは天地の差ほど実力が極まっているぞ」

「馬鹿な。もしそれが本当なら先日の出撃だって、私たちではなくてあいつの単機出撃でいいじゃないか」

「それは……無理だ。上からの縛りだな」

「なんだそれは。何かやったのか？」

「……まあ、やったな。俺も一緒だったけど。探るなよ？ 面倒くさいことになるから」

「……」

提督の、なんとも言い難い、深淵の闇を視界いっぱいに広げられたような感覚にガングートが訝しそうに表情を変える。

この男の抱えるナニカはおそらく相当のものなのだろうと大人しく引き下がることを決める。

「電は必要最小限のコミュニケーションしか図ろうとしないが、基本的に来る者は拒まない。どうだ、近々電が教鞭を振るうことになるがここはひとつ、受けてみたらどうだ。あいつのことを理解する一步には十分なりえるだろうよ」

「前に一度だけ口を交わしたが、分かり合えることはない」

「まあそんなこと言わずに。一度だけで印象を決めつけるのもどうかと思うぞ」

「……」

「よし、ならこうしよう。提督命令だ。ガングートは電の授業を一週間受けて来い」

「……チッ」

ガングートは小さく舌打ちをして踵を返す。そして荒々しく歩くと不満をぶつけるようにドアをバン！と開いてみせた。提督はその様子を表情ひとつ変えることなく見ている。

ガングートは最後にひらりと頭だけ後ろへ向けた。

「実に遺憾だが、命令となれば是非もなし。だが、これだけは覚えておけ。私は、決して、あいつを認めない」

最後の部分だけ強調してとうとうガングートは去っていった。

「やっぱり衝突は避けられない、か」

ガングートはそこまで傲慢な艦娘ではない。と、他のいくつもの鎮守府から耳に届いている。もちろん多少は怖いところはあるが、根は優しい奴だと。

これが『個性』ということか。提督はとんだ問題児を引き入れてしまったと舌を巻く。だが反省はしていない。後悔もしていない。彼女をいかに更生させるか。直接的であろうと、間接的であろうと、ここぞ提督の実力の見せ場に他ならない。

手駒は打った。あとは電がやってくれる。

「チエックメイトだな」

さてさて、それでは再び執務に戻るとするか。

大きなあくびをひとつ。紅茶の味が忘れられず、思い出しながらペンを踊らせ淡々と処理する。

今はまだ全てを温存するべきだ。資材。武器。設備。艦娘。この鎮守府には蜘蛛に對抗する力は万全ではない。しかし術は手に入れた。

順調だ。頗る順調だ。

耐えろ。我慢しろ。刃を研がせろ。必ずそれらは蜘蛛の喉元に届くことになる。

熱を滾らせよ。しかして静寂にて。

きつと電も同じ気持ちだ。運命を共にした過去を持つ電なら、もしかすると提督以上かもしれない。ふつつつと彷彿する血の興奮を抑えるのに精一杯だろう。

ピロリン、と机の上に置いていた携帯がバイブレーションで震える。

スス、とフリックして耳に当てる。

「もしもし。……そうか。よくやったな江本。これでお前への『目』も厳しくなるだろう。しばらく休息を与えるから、どうか『ゆっくり』してくれ」



艦娘とは何か。

それは永遠のテーマであり、シャーロック・ホームズも興味深さに我を忘れるはずだ。

明石は自身の裸体の写真とよくある医学に使われるサンプル写真を見比べながら唸

る。

艦娘と人間の外見ははっきり言うのと、同一だ。追求して言うならば、艦娘は必ず女性であり、かつ顔が整っている。

……では、いったいなぜ『そう』なのか。

艦『娘』と呼ばれているのだ、そういうものと自然に自己理解しているが、果たして男性の艦娘は現れないのか。顔の整っていない艦娘は現れないのか。江本から密かに手伝ってもらい、ほぼ全ての鎮守府の艦娘の情報をざっと眺めたが、そのような例外的な情報はゼロだった。

提督は裏でこそ何かをしているらしく、それを誰かに打ちあけようとは決してしない。ならば私も、と取り組み始めてみたこの疑問。

敵の正体を知ることが非常に大事だが、まずそれ以前に己のことを理解しなければならぬ。

明石とて過去は船。人の造りしモノとして使われ、今はこうして背もたれ椅子に座って器用にペン回しをしている。

「ん〜……」

ある仮説を立ててみた。根拠もない、確信もない、突かれると崩れやすい考えかもしれないが、ついさつき、ようやく完成までこじつけた。

それは、艦娘が女性である理由。

戦艦に駆逐艦。補給艦や工作艦など、過去の戦争で活躍し、花を散らした、もしくは生き残った船たち。

船は乗員を守るような存在ではないか？ と突拍子もなく思い浮かんだことがそれだ。女性は男性よりも遥かに痛覚に耐性があるという。実際、女性が出産するときの痛みは想像を絶するものらしいし、おそらくそうなのだろう。

そこから概念的な何かが結びついて、艦娘として顕現する際に女性として型が——いつそ運命とでも言うか——定められる。そう結論づけた。

もちろんぶっ飛んだ超理論であることは明石自身も十分にわかっている。それでも自分を一時的にでも納得させられる何かが欲しかった。それだけかもしれない。正直、当たっているかなんてあまり気にしていない。

コーヒーをずずずつ、と啜ってベッドで横になる。徹夜明けだから頭が少しズキズキして痛い。今の時間もわからない。もう確認するのも億劫だからいい。どうやらここ最近暇だから自己管理が曖昧になっているようだ。

これははやく直さないと、と反省しながら布団に潜り込む。

「ふあああ……」

しよぼしよぼとした目を閉じ、秒で眠りへと入る。

明石の真相追求は、
まだまだかかりそうだ。

迫られる対応

阿武隈は激怒した。

この鎮守府にいる艦娘すべてに裁きの鉄槌を下さねばならないと固く決意した。これまで耐えに耐え抜いた我慢。それがついに臨界点を突き破り、噴火したのだ。

その瞳はメラメラと怒りに燃え、戦闘中よりも凄まじい覇気を放っている。だがその背中はどこか虚しい。

そしてグラウンドの中心で膝をついて叫ぶ。

「なんで誰も私の漢字が書けないのーっ!?」



阿武隈のコンプレックスはその名前にある。

アブクマ。聞こえはいいものの、いざ書こうとなると、どうも手が止まるのが流れた。そこから艦娘それぞれの奇想天外で、とても愉快な名前がたくさん誕生するのだ。

興味本位で始めたこの独自調査、阿武隈はとても後悔している。どれほどかという、これまでの中でぶつちぎりである。

ある夜戦主義者は『危熊』と書いて可愛く舌をペろりと出し、またある瑞雲友好者は

1文字目はなんとか書けたものの、考えた果てに『阿部』と書いた。さらにまたあるフ怖は『Terrible Bear』と、もはやその概形は失われた。

阿武隈の精神的HPは1をさらに下回り、小数点の領域に突入している。

しかし阿武隈は諦めない。戦場で諦めは死に直結する。ましてここは戦場ではない。だから死ぬことはない。生命的には。なので足掻けるだけ足掻き、最後は社会的に無残に散つてみせよう。

阿武隈は涙目ながら最後の望みたる人物にゾンビのようによるよると歩み寄る。

「な、なに?」 阿武隈? どうしたの?」

当の人物は阿武隈の様子に驚き、小さく身体を跳ね上がらせた。

可憐で優雅にして、そして慎ましい。今日はいつものような髪型ではなく、電探力チューンシャを外してサイドテールにしている。なかなかお目にかからない髪型だ。

「金剛さん! 少し尋ねたいことがあるんです!」

「う、うん。そんなに鼻息荒くしなくても……」

阿武隈は慣れた手つきで肩掛けカバンから手のひらサイズのメモ帳とボールペンを取り出して、金剛に手渡した。

金剛は阿武隈が何を求めているのかわからなさそうに小首を傾げている。

「私の名前を漢字で書いてください! お願いです! もう金剛さんしかいないんです

うう!!」

涙目で今にもわんわんと泣き喚きそうな阿武隈に金剛は話が急展開すぎて頭がついていけない。

「もう耐えられないんです! ほら、仲間の漢字が書けないってなんとなくヤバイじゃないですか!」

「うーん……そう、だねえ」

「ですよね!」

興奮して阿武隈は金剛に言い寄る。

僅かに汗をかいている阿武隈。この流れは勢いで抱きつかれると静かに悟った金剛はそれとなく距離をとる。

阿武隈と金剛には会話する機会があまりなかった。この鎮守府にはたくさんの艦娘がいるので、広く、そして浅くしか金剛は口を交わすことができなかつた。今日はちようど暇をしていたから、比叡たちを置いて来ている。部屋を出る時のあの荒れようには空笑いであつた。

金剛は流れるようにメモ帳を開いてボールペンの芯を出す。

「そういえば阿武隈。あとはもう私だけって言つてたけど、他の人はどうだったの?」

「……聞くことはオススメしません」

「……よくわかったよ」

ハハハ、と乾いた笑い、金剛の頬がちよつと引き攣る。

詮索はかわいそうだ。ここはおとなしく引き下がり、本題のアブクマの漢字を書くことに入る。

……今の金剛は記憶喪失である。

ゆえに、みんなの記憶をもう一度イチから再構築している段階なのだ。

金剛が考える人のように険しい顔をしているのを見て、アブクマはようやくそのことに気づいた。完全に自分のことしか考えていなかった。もう誰でも……と匙を投げようとしていたところ、偶然金剛が現れた。それだけだ。

そして一瞬、以前の金剛が脳裏を掠め、本当に当たり前のようにこうして質問してしまっていた。

「あ、あの……やっぱり金剛さん……？」

「ちよつと待って。今思い出しそうなの」

遮る金剛。

目をギユツと瞑り、手を額に当ててウンウンと唸る。

その必死な様子にアブクマはつい押し黙ってしまった。

そして長い時間が過ぎ、ようやくゆっくりと金剛の手が動いた。しかし微かに震えて

いて、まだ鮮明には思い出せていないようだ。

「無理して……」

「大丈夫……大丈夫」

変なところで頑固だ。

ペン先をメモ帳に触れたまま固まってしまった金剛に声をかけても、頑として譲ろうとしない。

そしてついにとうとう、『阿』の文字を書いた。

「おおお……」

感嘆の息を漏らす。

正直無理だと密かに思っていたが、阿ブクマはその考えをすぐに破棄した。

阿ブクマは金剛のしてきたことを詳しく知らない。あの一週間の間に皆を理解しようとして鎮守府を奔走したこと。さらにそれからのこと。耳にする程度で、その内容を知ることがなかった。

……努力したのだろう。それもたくさん。

記憶喪失。知らない人たち。そして戦いを迫られる。恐怖以外になんと見えようか。恐らく自分ならば、あまりの非現実性に逃げ出したくなるかもしれない。いや、きつと逃げ出したくなる。だが金剛はそれに打ち勝ち、ここにいるのだ。

阿武クマは我に帰り、メモ帳を横目で見る。『武』を書き終え、最後の一文字に入ろうとしている。

ここで阿武クマの中で期待が膨らんだ。と、逆にみんなへの失望も膨らむ。金剛でもここまで書けるのだ。なぜだ。『阿部』って書いた人、前髪いじりの刑に処す。

「すごいです！ 私、感激です！」

「ふふん！」

そして、なんなくすべての文字を見事書いてみせた。

小さく息をつくくと、金剛はメモ帳とボールペンを阿武隈に返す。

「しゅげい……」

「ま、私にかかればこんな感じかな」

意気揚々と胸を張る。

阿武隈はそんな金剛に疑問に思ったことを口にした。

「どうして……どうして私の漢字が書けたのですか？」

「みんなのこと、覚えたからだよ」

屈託無く言う。が、まだ完璧じゃないけどね、と息を吹きかけてしまえばあつげなく消えてしまいそうな声量で微かに付け足す。

「本当にすごいです……よく覚えられましたね」

「そうだね、寝る前とかは暇だから提督からもらった名簿を見て覚えたんだよ。今回、それが役に立ってよかったよ」

そう言つて、金剛はにこりと笑う。

阿武隈はその純粋な笑顔について魅了されてしまった。以前の金剛の笑顔は何と云うか、ストレートな笑顔だった。それはそれでいいのだが、これは違う。

そう……まるで優しく身体を包んでくれるような、柔らかく、そして暖かいものだった。

「――」

「ん？ どうしたの？」

「ああいえ、なんでもありません！ 金剛さん、ありがとうございます！」

一瞬だけ惚けた阿武隈はふるふると頭を振ると、にぱっ、と笑顔を返した。

「スツキリしたらお腹空いちやいました！ どうです金剛さん？ お昼、食べに行きませんか？」

「うん、いいね。一緒に行こうか。今日の私はひと味違うよ。なんせ、半人前を食べられるほどになったからね！ もしかしたら阿武隈の分まで食べちゃうぞ〜！」

◆ 「それは困ります!!」

大淀はとても迷っていた。

教室のドアの前で、よくあるゲームで一定のルートのみを往復するNPCと化している。

どちらかと言うと緊急ではないが、しかし緊急である。

なので提督に手に持つ電文を渡そうとしているのだが、中から聞こえる質疑に大淀は入っていないかとても困惑していた。

——そもそも高速修復材は何からできているのか、だったか？

——はい。私たちはあれに浸かれば一瞬でほぼの傷を全治させることができます。確かにあれはとても素晴らしいです。私もあれに何度お世話になったことか。はつきり言つて、あれなしでは鎮守府はスムーズに運用できないでしょう。そこで疑問なのです。艦娘も生物であるということは、もちろんハイフリック限界に縛られるはず。例えば人の場合、PDLは50と言われています。しかし私たちはそれより遥かに高い数値であるのは間違い無いです。では、そうさせる物質とは何でしょうか？

——ハイフリック限界か……。艦娘にはPDLはないと思うぞ。あれは文字通り高速で血肉を再生させているからな。お前はあれを何度浴びた？ ……言うまでもないか。まあ正直に言うとな俺にもどんな物質かはわからん。専門家ではないからな。とはいつても一時期本気で調べてみたけど、わかったことはひとつだけ。それは——。

大淀は聞き耳を立てたことをひどく後悔した。

よくわからない高度な言葉に頭がクラクラリ。おそらく中にいるのは提督と電だろうが、まさか電がこんなに博識だとは思ひもしなかった。強さだけでも常軌を逸しているというのに、これでは完璧ではないか。と考えながらうろろする。

そして9分ほど経っただろうか。急にドアが開けられ、大淀はビクリと身体を震わせた。

「あー疲れ……って大淀？ どうした？」

腕を後ろに突き出し、疲れたとばかりに大きな欠伸をした提督は大淀の姿を捉える。

「は、はい。大本営から電文が届いたので知らせようと思つて……でも電ちゃんと勉強していたっぽいので邪魔するのも悪いと思ひまして……」

「そうだったのか、悪かったな大淀。じゃあその電文とやらを見せてもらえるか？」

提督は大淀から電文を受け取る。

内容は簡単なものだが、提督はすぐに怪訝な表情になった。

別に何も問題はないのでは？ 大淀は提督の様子を不思議に思つた。

「電」

「はこ」

いつの間にか提督の横で控えていた電が反応する。

やはりこの電はどうも見慣れない。大淀の中の『電』像とは大きく異なっており、上書きすることは容易ではない。が、しかし彼女はこの鎮守府に籍を置いた仲間だ。提督曰く仲間は嫌うそうだが、こちらが一方的に思うのには大丈夫だろう。

「悪いけど、明日の勉強はなしだ」

「わかりました。何か手伝いしましょうか？」

「暇があればお願いしたい」

「余裕です」

淡々とした会話が終わり、電は重そうな手提げ鞆を軽々と持つてみせると、スタスタと去ってしまった。

「だるいなあ。マズイなあ」

「そんなにマズイのですか？ 大本営からの使者……もちろん初めてではありませんが……。たぶん金剛さんのことについて直接話を聞きにくるのではないのでしょうか？」

大淀の疑問に、提督はさらに怪訝に首を振る。

「違うんだ大淀。本当にそれだけならいいんだけどな。そういうわけにはいかないんだよ」

「えつと……よく、わかりません」

「ああ。わからなくていいんだ。これは俺のミスだ。……くそッ」

髪をクシヤクシヤとかく。

提督がミス……？ 果たして何のことを言っているのか、大淀には皆目見当がつかない。

大本営がわざわざこちらに足を運ぶほどのミス？ いや、人間としては捻くれてはいないが、提督としての実力は申し分ないはずだ。それに最近のミスといえば……。

嗚呼。

長門たちの件か。

「提督、もしかして……」

「——大丈夫だ大淀。絶対にごごごにはさせない。向こうもそう簡単に出来ない。だから、安心して全て任せてくれ」

「……はい。わかりました」

その表情は凜としていて、有無を言わさぬ庄に、大淀はどこか安心を覚えてしまった。でも、やはり大淀は提督の力になりたかった。例え最後まで提督が何をしているのかわかることができなかつたとしても、だ。

ありがとう。今日はお疲れ様、と提督は言い残すと、大淀に背中を向けて去っていく。

「……あ」

ふと手を伸ばしても、届かない。

別に、今日ここで別れて、部屋に戻り、適当に時間を過ごして明日を迎えればまた提督に会うことは容易だ。執務室のドアをノックすればいいだけだ。

ーそうじゃない……私は提督を助けない！

気づけば走り出していた。

そして提督の背中にダイブする。

「んんん？」

提督は驚き、足を止める。

「……俺的には最高に最高なシチュエーション……語彙力足りないな。まあ置いといて。どうしたんだよ。お前らしくない」

「あー！」

顔を上げる。提督を離さないように腕を回し、そのまま身体に抱きつく。

「どうしても私、提督のことを手伝いたいんです。なんでもいいんです……小さなことでも。だから……！」

そしてギュツ、と腕を提督の身体に回そうとした瞬間、逆に大淀は腕を掴まれ、提督は大淀に向き直った。

「それはありがたい。本当にありがたい。でも、なんでそこまでして俺を手伝おうとするんだ？」

……そんなの、決まっている。

が、いざ口にしようとする、変に恥ずかしく、陸に打ち上げられた魚のように口をパクパクさせる。

言葉が喉につつかえてしまい、どうしても吐き出せないもどかしさについて大淀は顔を真っ赤にしながら押し黙ってしまった。

「ははは、ごめんごめん。ちよつとからかってしまったかな？ 別に無理していう必要はないさ。じゃあお前のお言葉に甘えて手伝ってもらおうか。明日、呼びに行くから電と一緒に頼むよ」

そして優しく頭を撫でたあと、よほど提督も緊張していたのか、足早に行ってしまった。

残ったのは、プシューッと湯気が見えそうなほど真っ赤な大淀だった。

その様子は、カメラのシャッター音と共に確かに納められた。

大掃除ですって、奥様

『今日はすべての出撃、遠征を休みとする。明日は大本営から使者が来るので、代わりに全艦娘と手の空いている職員は大掃除に取りかかれ』

この日、鎮守府で戦争が始まった。



「やばいですー。今までで一番やばいですー」

言葉と全く一致しない必死さ。

ポーラはめちやくちやに並べられた何本もの酒瓶を眺めながら呟いた。

突然の提督直々の放送に早くも鎮守府内は大騒ぎだ。鎮守府全体を震わせるほどのドタバタ。よく耳を澄ませてみれば、皆がやばいやばいと相当焦っているのがわかる。なにがやばいのかはそれぞれ。知られたくないあれや、秘密のあれ。

今だつてポーラは隼鷹と飲み明かした後だ。酔いも完全に冷めておらず、ふらふらと立ち上がる。自分の部屋で飲んだのがマズかったか。だが、そんなことをしなくともきつとポーラのセリフは変わらないだろう。

「そうだ、昼からやろうーうん。私はーできる子ー」

そして再び机に突っ伏して二度寝に突入しようとしたところを……。

「あー！ やっぱり!!」

ザラが突入体勢で部屋に入るやいなや、指をさして叫んだ。

「放送を聞いて、もしやと思っただけどそのもしやだったわ!」

酒くささに眉をひそめながらも、ザラはポーラの潜り込む布団を掴むと強引に剥ぎ取った。

その瞬間、むわつと生暖かい空気が解放され、ザラの周囲に纏わりつき、ザラの怒りゲージがさらに上昇した。

「ちよつ、なによこれえ! いったいどれだけ飲んだのよ!!?」

「ああ、ザラ姉様……そんなに喚くと頭がギンギンする……」

もそもそと芋虫のように身体をくねらせながら、服がはだけて情けない格好のポーラが姿を現し、そんな彼女をザラは強引に立ち上げらせて優しく寝起きの往復ビンタをしてやる。

「おう、いたい、いたいよおう。……起きた! 起きましたからー!」

「あのねえ、この部屋はあなただけの部屋じゃないのよ? 昨夜は他の子のところで泊まったけど、いつもは私もここに寝たりして生活しているのだから、そのところを気をつけなさい!」

「はい、はい、はい、はい、はい」

全く、ちゃんとしてよね。とザラは頬を膨らませると、カーテンを開け、窓を開けた。酒の臭いで充満した空気を外へと追い出し、綺麗な空気と交換だ。

まるでナマケモノほどの遅さでポーラはゆっくりと布団をたたむと、ひとつ大きく欠伸をする。

ポーラはザラがいなければ果たしてどのような生活を送ることになっていたのだろうか。ポーラオンリーの部屋。想像するだけでもそれら恐ろしい。ザラはそれ以上のことを考えることを放棄して、頭だけ後ろに向ける。

「私も手伝うから、必ず今日中に終わらせるのよ?」

「了解です、ザラ姉様」

だらしなく敬礼するポーラをさておき、テキパキとザラは掃除にとりかかり、まずはと空になった酒瓶を一本掴もうとした。

だがその瞬間、さつきまでのぐだぐだは嘘だったかのような機敏な動きでポーラはザラの手から酒瓶を奪い取った。

「な、なにをするのよ!」

せつかく善意でやってあげようとしているのに、それを邪魔するとは何事か。

しかし、それを大事そうに、まるで可愛いものを愛でるように撫でる仕草を見せつけ

られ、怒りを通り越してしまった。

「これはすごい年季の入ったお酒。そう簡単には捨てられないですよ」
さらに頬づりまでしている。

目頭を押さえながら、ザラは静かに上を向いた。

誰かこの異常なまでの酒への愛を治してくれないだろうか。何度注意しても。何度注意しても。いつの間にか懷に酒瓶を隠して飲んでいるのだ。

何度か本気で怒ったこともあった。でも、やはり妹とは可愛いもので、どうしても許してしまう。甘々なのは自分でもよくわかっているのだが、これ以上怒るのはさすがにかわいそうかな、と無意識にストツパーが作動してしまう。

「……はあ。わかったわ。じゃあいらないものは自分で出して。ゴミ出しは私がやるから」

「了解ですよ」

えへへえ、と微笑むポーラを見て、またもや私は甘さを表に出してしまつたと後悔する。しかしまあいいかと思つたりもする。

なんだかんだ、自分自身にも甘々なザラだった。



鎮守府内で一番焦っている艦娘『達』は言うまでもなく、あの三人だ。

「マズイですよ、大掃除は私たち秘密の花園を抱える乙女には過酷すぎます」

「いいえ、霧島。あんな秘密を抱えていて今さら私たちは乙女だと胸を張って言える？
絶対大丈夫じゃないわ」

「……言えません。ですが！ なら私たちはどうすれば……！」

「苦渋の決断ですが、やはりお姉様を除いて掃除するしか……」

「だめです」

「ですよね」

金剛がお手洗いにいなくなった隙に彼女達は密談を始める。もちろん内容は『秘密のアレ』をどうするか、だ。

記憶を失う以前の金剛にも知られていないこの秘密……『金剛これくしよん』。姉妹の、姉妹による、姉妹が金剛を影で愛するためにつくられた絶対神性。

その実状は全て青葉が隠し撮りした金剛のあれやこれなのだが、その量は言うまでもなく異常。

表向きは本棚なのだが、奥の方に隠されている小さな部品を外せば、カチリとさらに連動している奥の部品が外れて金剛これくしよんがぎつしり……という仕様だ。

「私たちに課された試練は……金剛お姉様に絶対に本棚を掃除させないこと。異議は？」

比叡が珍しく頭を使って妹達に語る。ふたりとも黙って頷き、三人の意思はここに固まる。

ちようどいいところに金剛が戻ってくる。

「さてさて、じゃあ掃除を始めよっか！」

可愛らしいエプロンに身を包み、謎のテンションで箒をくるくる回す。

これはこれで眼福であり、比叡たちは即脳内に連続して写真を保存し終わると、金剛の前に出た。

「そうですね、じゃあお姉様は私とあそこの机をお願いします。榛名と霧島はその本棚を。『とても大事だからゆっくり』、ね？」

——謀られた！

榛名と霧島は比叡のダダ漏れの欲望に気づけなかったことを今さらながら深く悔いた。本棚の件でひとまず安心したのがマズかった。比叡はそこを逃すことなく突いてきたのだ。

今日の比叡はどこがおかしい。3周ほど回って……賢いッ！

「いえ、それはおかしいのでは？ 2人組で掃除をするのは些か効率が悪い。ひとりひとりで役割分担をしたほうがよろしいかと。……ああ、でもまだ金剛お姉様はこの部屋を詳しくわかっているわけではないので、『あくまで補助』ということで私がついてやるべ

きです。ええ。本棚は『大事』ですからね。ふたりで『ゆつくり』、そして『時間をかけて丁寧』本棚を掃除してください」

2人組だと効率が悪いと言ったくせに最後は謎に2人組に落ち着かせた。

比叡と対照的に霧島の知能は落ちたが、メインの目的はしっかりと忘れていない。

「いえいえいえいえ、補助をするならやはりこの榛名が一番適任でしょう。ガサツさもなし。そして大雑把なところもなし。清廉で大和撫子なこの榛名が金剛お姉様と掃除をすべきです。そう！ 私は金剛お姉様と掃除がしたい！ その思いは誰にも負けません！」

本音ダダ漏れたかー、と比叡に霧島。

その素直さは評価すべきだろうが、状況が状況だ。今の言葉はもはや意思疎通を図る必要すらなくマイナス100点である。

三人のいつそ見苦しいまでの欲望に、金剛は乾いた笑いを漏らす。

掃除する場所ならばいくらでもあるのに、三人は意地でも金剛と掃除がしたいようだ。

「うーん、難しいね……。時間はいっぱいあるし、どうせなら4人で掃除しようか」

時計を見ればまだ昼にもなっていない。提督の言う大本营の使者が来るのは明日だし、余裕は手に余るほどある。

「そうですね。さすがお姉様。ではそのソファをまずはしましょう」

金剛の鶴の一声で、飲み込みのはい霧島がテキパキと行動を始める。その後、続いて比叡と榛名がソファの両端に立ち、持ち上げた。

「さあお姉様、（愛の）共同作業です！」

「う、うん」

何かが間に挿入されたような気がするが、違和感を感じながらも相槌を打ちながらも霧島とタイミングよく箒をはく。

「いいね、4人なら効率が悪くなるかもしれないけど、楽しいね！」

「はい、お姉様！ この調子でじゃんしゃんしゃんやっていきましょう！」

その後、完全に本棚のことを忘れ、金剛が偶然仕掛けを解除し、何百回と聞いた音に彼女たちの興奮が一気に氷点下まで転落したのは言うまでもない。



「感謝する、大淀。流石の私も高さの問題とするとどうにもできないからな」

「いえいえ。そういう電ちゃんこそ、よくこの数日で配置を全て覚えましたね」

最後のファイナルを柵になおし終えた大淀は同じく雑巾を絞る電に振り返る。

「掃除はいいものだ。心の整理にもなる」

意外な言葉に大淀の手が止まった。

戦闘狂、という先入観がどうも勝っていた大淀の中で、家庭的な発言に心底驚いた。出会い頭あのようなことを言っていたことが非常に印象に残っているから、それを完全に拭うのはまだ先になりそう。

「おーお前ら、終わったか。ご苦労様」

ちょうどいいタイミングで提督が執務室にやって来た。

だが、その後ろにはなぜか長門、陸奥、そして江本がいた。意外な組み合わせに、大淀はたいそう不思議がった。

「すごく助かった。ん、みたらし団子」

提督が手提げ袋を電に渡す。

「ありがとうございます、先生」

「あの……提督?」

「なんだ大淀? もしかしてみたらし団子足りなかったか? 結構買ったんだけど……」

「いやいや! 私、そんなに食いしん坊じゃないですよ!!? ……じゃなくて! どうして長門さんたちが?」

提督はああ、と言いながら椅子に座り、背中を預ける。

三人は黙ったまま、しかし何もわかっていないような表情だ。

「それはあとで。ひとまずは皆、掃除お疲れ様。これで明日を無事迎えられそう。江本、休暇は楽しめたか？」

「ええもちろんですとも。癒しも十分。やる気100倍つてとこですかね」

「それは結構」

「しかし提督、俺に用とは……『仕事』ですか？」

江本はうすら笑みを浮かべるが、提督は首を振った。

「ただの仕事だよ。お前なら鼻ほじりながらもできるだろう」

「……ほう」

会得顔だ。

とても楽しそう。大淀はそんな江本を見て奇妙にすら感じる。

いつも江本は提督の用心棒として暗躍しているらしいが、その内容は誰も知らない。どう見ても提督よりも歳上なのに、提督に対して敬語。単に立場的な問題なのだろう。彼はどの部門にも所属していない、言わばフリーだ。大淀には彼が秘書艦のような立ち位置だと認識している。

「提督」

「？」

「……」まで黙っていた長門が口を開く。

「大淀も言ったが、なぜ私たちが呼ばれたのだ？ このメンバー、何かあると私はみたのだが」

誰もが提督にいつも側にいる人物だ。電に限っては、おそらく彼女たちの中で一番長いだろう。しかし江本もいるというのは長門にはよくわからなかった。

「おつ？ 正解だ長門。他にも何人かは察しているが、まあ御察しの通りだ。お前たちには申し訳ないが、明日ここから離れてもらう。提督命令とさせてもらい、異論は許さない。その代わりお前たちは動物園に行つてこい。なに、休暇だと思えばいい」

懐からチケットを5枚取り出すと、徐ろに長門の手に握らせた。可愛らしくデフォルメされた象の絵。大人四人分に子供一人分。

「……は？」

「悪いが、命令だ。素直に引き受けてくれ」

「いや、しかし明日は……」

明日はとても大事な日のはず。いつも基本的に提督というメンバーがここにいる。そんな彼女たちをあえて手放す。そんな馬鹿げたこと、当然長門には受け入れられない。さらに言うのと、誰ひとり欠けることは論外なのではないか。

しかも、動物園ときた。冷やかされているのかと、長門の怒りに手が掠る。

「……な？」

「ああ、これだ。」

時折見せる、まるで普段の提督とは真逆の、比喻できぬ反転、提督の鋭い眼光に貫かれ、長門の呼吸が刹那の間、停止した。

彼女を以つてしてもこの様だ。これをされると、どうしても逆らえない。断固として拒否しているわけではないから抵抗は強くないが、このなんとも言えぬ感覚。おそらく一生耐えることはできない。

「……はい」

「明日は俺の側付きを霧島とザラに頼むつもりだ。心配するな。お前たちがいなくてもちやんとできることを証明するさ」

うまく言いくるめられた気がするが、これ以上どう言おうが提督はブレないだろう。それに命令となれば長門にはどうしようもない。

「わかった。今まであなたは私たちを正しく導いてくれた。ならば信じるまで。陸奥はどうだ？」

「別にいいわよ。あなた最近、働きすぎだから。たまには息抜きも必要よ？」

「む」
ジト目で陸奥に睨まれ、長門がすこむ。

嫌々やっているなんてわけではないのだが、どうやら陸奥の目に余った様子。逃げる

ように視線を泳がせる。

「江本を呼んだのはお前たちの保護者的な役割を頼むためだ。江本は状況把握力に長け、臨機応変にも対応できる」

「そのために俺も動物園に行けと」

「そうだ。あと、動物園へは車で行くこと」

「車」

「運転できるだろう？」

「まあ……ここしばらくはしていませんでしたが、大丈夫でしょう」

「よし決まりだ。大淀は問題ないか？」

「いいですけど……」

まだ不満そうだ。何か言いたげな大淀に提督は歩み寄ると、なんの前触れもなく抱きしめた。

「!?!?」

突然の抱擁に頭がついていけず、混乱して思考がフリーズしている。

「日頃からお前には本当に感謝している。明後日、お前の頼みごとをなんでもら聞いてやろう。できる範囲でだけ」

誰にも聞こえないように耳打ちされる。ぶるぶると身体が震え、脳髄にその言葉がこ

だまし。

……大淀の頬が、ぽっ、と赤く染まった。

訪問

突然のお呼び出しかと思えば提督に今日のお側付きを命じられた。どうもいつも提督の側にいる人たちはこぞつていないらしい。

それを咎める気はザラには無い。なぜなら興味が無いからだ。彼女たちにも休息は必要だし、どう過ごそうが彼女たちの自由だ。

そのことは、まあいい。だが、ひとつだけ、今の現状で違和感を覚えている。

「……」

霧島だ。

ソファアーに提督を挟んで反対側に座っている。しかし、誰が見てもテンションが低いのは明らかだった。

「いいか？ お前たちを選んだのは、お前たちがどんな状況になつても冷静に事を判断できると信じているからだ」

そんなことできませんんん！！ と叫びたかったが、できなかつた。

今さら否定しても、あと数分で来客は来る。もはや逃げ道はない。

「キリシーマさんはどうしてうなだれているのですか？」

「ええ……金剛お姉様にちよつとした秘密がバレてしまいました……」

何かを思い出したように霧島が再びうなだれる。よほどシヨックだったのだろう、ザラはそれ以上首を突つ込むのはやめておいた。



「用件は聞き及んでいます。どうぞ」

大門は車から降りた中年の男を丁寧招く。

角張り、微かに青がかつた白い制服。几帳面な部位がこれでもかと溢れるような、遊び心の一切ないワックスで固められた髪型。

カツカツとアスファルトの道を黒光りした革靴が鳴らしながら、男は大門の後ろを歩く。そのさらに後ろに筋肉質の護衛がひとり着いてくる。

「ほう、綺麗だ」

感嘆する男に、大門はつい嬉しくなる。

なにせ自分が所属している鎮守府を遥か上の地位の者に賞賛してもらえたのだから。やがて鎮守府本館の玄関を踏み、男を導く。

「君はこの鎮守府に配属されてどれほどになるのだ？」

「もうすぐで一年が経つほどです。まだまだ、といったところです」

「なるほど……」

質問の意味は分からなかったが、特に詮索することなく、それきりだ。

妙に緊張する。別段男が殺気を放っているわけでもないのに、広範囲に照射された標準レーザーに当てられているような感覚だ。

ふつ振り返ってみれば男は寡黙な表情で窓から外を眺めながら歩いている。

どこか威厳ある風格に、大門は黙って前を向きなおる。

「お待ちせしました、こちらです」

執務室の前で立ち止まり、男に説明する。

「そうか。感謝する。君は持ち場に戻るといい」

「ありがとうございます。それでは失礼します」

綺麗に敬礼をしてから男を背を見せる。

大門はこれから始まる男と提督の会談の内容は全く知らない。ただの気まぐれということもありえるし……まあ金剛のことだろうと想像はつく。

……ちよつと飯でも食つてから戻るか。



入つて来たのは2人の男。うち一人は護衛か。見るからにごつそうなガタイに黒スーツ。確定だ。

「ようこそお越しくださいました、黒禎様。どうぞおかけください」

提督と霧島とザラは立ち上がり、小さく礼をしてから提督が黒禎を座るように促した。

黒禎が正面のソファーに腰掛け、護衛はその隣で後ろ手を組んだ。

「うむ」

そしてぐるりと部屋を見回してから一言。

「綺麗だな」

「ありがとうございます。なんせ、昨日全員で鎮守府を掃除しましたから」

「ほう。その心意気や良し。汚れが残るのは虫唾が走る」

「そうですか。……して、本日はどうなさいましたか？」

提督は黒禎にどうぞとお菓子を勧めるが、丁重に断られる。

「私は大本営からの使者として来た。だから私の言葉は大本営の言葉と思ってくれて構わない。私が訪れたのは……そう、君の報告書にあった金剛のことだ」

「そうですか……」

「ああ、記憶喪失というのは前例がないのでね。大本営としても詳しく調べておきたい。

金剛の様子はどうか？」

黒く、しかし青い声で尋ねる。

姿勢正しく座り、生涯腰が曲がったりする心配は皆無であるほどだ。

「元氣ですよ。一般的な金剛に見られる英語訛りが無い程度でしょうか。ここに連れて来ましようか?」

今日は艦娘全員に基本的に自室待機を命じている。敵命ではないから何人かはうちよろと散歩なりしているだろう。そして彼女はきつと金剛型の部屋にいるはずだ。今頃きつと、比叡たちに(過度な)スキンシップでもしていることだろう。

が、霧島はここにいるから仲間はずれな気がして、少しかわいそうなのかもしれない。「他には? 戦闘については」

「それは……全くのド素人ですね。戦い方も全て忘れてしまったようで、最近ようやく艦装の装着にも慣れて、ゆっくりではありますが航行できるようになったほです」

「では戦闘能力はゼロ、と」

「はい」

「ならば彼女は必要ないので? なんならこちらで彼女を預かってもいいのだが」
「いえ、そちらに預けるつもりは同じくゼロです。失敗ばかりしています。彼女なりに日々訓練に励んでいますし、なによりも彼女自身がここに残りたいと言いました。誰よりもそれを姉妹たちがわかっています。だよな? 霧島」

金剛が訓練すると言えはば必ず側にいた姉妹たち。時々加賀も混じって海へと出ている。最近では脚部艦装だけでなく、武器艦装の装着もしているところだ。

しかし重心がうまく定まらず、その度に加賀を巻き込んで水浸しになっているのだ。

「ずぶ濡れの姿でお風呂へ直行すること何度やら。そんな笑い話も積もりに積もっている。」

「もちろんです。私たちにとつてのお姉様は金剛お姉様ただひとりです。いつも私たちがゼロから1000と言わず1000まで教えています」

「そうか。それは残念だ」

やや不満そうに黒禎が眉を曲げる。

「どうしてもか?」

「はい。どうしてもです。これは譲れないです」

「うむ……残念だ……とても残念だ……」

黒禎がカップに注いだお茶を飲み干す。それにすかさず霧島がおかわりを淹れた。

「潔く諦めるとしよう。メインは終わったから、これは少し私自身の興味から知りたいのだが、報告書にあつた黒い深海棲艦とはどういったものだったのだ?」

「それですか。少々お待ちください」

提督は立ち上がると後ろの自分の机の裏に回り込み、引き出しの中からファイルを取り出した。

「これです。私が直接見たわけではないですが、撃破した電がその特徴を絵に描いたので、イメージとしてはそんなものと思っただけです」

「電、か」

ファイルを見えるように開き見せる。始めの数枚はガングートたちによる報告文を簡易に留めていて、最後の2枚は電による直筆のイラスト付きの報告書だった。「ふむ。わかりやすいな。外見は従来のもので変わらないが、黒いオーラを纏っている。で、その護衛に黒い怪物が腕びつしりに砲台を構えていると。特異個体のそれと似ているな」

「ええ。電によりますと、ヲ級が空母役を担い、怪物は戦艦役を担っていると言っていました」

艦載機についても事細かに描写されていて、前方に発射口のようなものがあるものと、後方に発射口のようなものがある、つまりは二種類存在すると書かれている。

「最低限の絵心で多くの情報を表す。実に分かりやすい」

「ご満足いただけましたか？」

「もちろんだとも。そして『この程度』、君の電なら十分だったろう」

黒禎の眼光が少しだけ、鈍く、鋭くなる刹那の移り変わりを霧島とザラは感じ取った。ふたりはその只者でない覇気、豹変ぶりに身を強張らせた。

しかし、提督は微動だにせず、逆に半笑いすら浮かべる。

「やめてください。ふたりが怖がっているじゃないですか」

「これは失礼。つい癖で」

ザラはこの瞬間、悟った。

もしかすると、今、とんでもない修羅場にいるのではないかと。こつそりと霧島の方を見れば、同様に彼女もこちらを見返している。

それほどまでにこの鎮守府にいる電は大本営にとつて大きな存在なのか。プラスの意味かマイナスの意味か全く見当もつかないが、あれだけ異質なのだ、無理もないだろう。

「彼女を頼むぞ？ 君とふたりでようやくやく真価を發揮するのだから。これまでの我々の『苦勞』に見合つた働きをしてもらわなければならぬ」

「わかりました。私とあいつをくつつけるといふことは、それほどの『何か』があると受け取つてもよろしいですね？」

「……ああ」

静かで、そして荒々しい空気が去る。

黒禎は手を握り、開きを繰り返す。

外で誰かがグラウンドで楽しそうに遊んでいる声が、微かにこの部屋に聞こえる。

沈黙が部屋を制し、ただただゼロの時間が流れた。

一体どうすればいいのか。ザラは焦りに焦った。提督も黒禎も一向にだんまりのままで、話し始めようとするそぶりすら見せなかった。

「黒禎さん」

「ん？」

意外にもここで話を切り出したのは霧島だった。

「私たちはこれまで戦ってきたわけですが、確かな進展はあるのでしょうか？ 金剛お姉様のことや、今のその黒い深海棲艦。わからないことだらけで、むしろ後退すらしているように感じられます」

黒禎が小さく唸る。

霧島は黒禎の……大本営の把握している現在の状況を知りたいだけだ。

護衛の視線が霧島を刺す。

「以前にも同じようなことがあったな。……もちろん進展していたとも。君の姉がそうなるまでは。実は他の鎮守府でも同様に、黒い深海棲艦の目撃情報がいくつかある。それらの全ては滅多打ちにされ、徹底的に撈られ、撃たれ、瀕死で逃げ帰るのがせいぜいだそうだ。しかも轟沈した例もあるらしい。結論から言えば、これから後退するだろう」

「……そう、ですか。ありがとうございます」

「君のその好奇心、私は評価するぞ。しかしだからといってそれだけに盲目になると、足をすくわれる」

「肝に命じておきます」

他愛のない話をして、二時間ほど経った頃、黒禎は鈍色に光る腕時計を見て立ち上がった。

正直、霧島とザラは一発触発しそうな場面を何度も見せつけられ、精神的に憔悴してしまっている。

「さて、最後なんだが……ところで君の鎮守府に『鼠』はいるかね？」

後ろの護衛が長時間の直立に疲れたのか、右足を半歩下げて小さく肩を回して固くなった肩をほぐす。

『鼠』……ですか？ ええ、いますよ。この建物もさすがにどちらかと言えば古い。時々駆逐艦の子たちが見つつけて騒いでますよ」

もつとも最近のものだと時雨と暁が見つけたものか。トイレで見つけたらしく、それを退治すべく長門がわざわざ艤装の砲で焼き払おうとまでしていたが、結局龍田が何食わぬ顔で駆除した。

……いや、あれはGだったか。

あれからGホイホイを置いているが、時々引つかかっているのが笑えない話だ。

「違う。そつちではない。もつと『大きな鼠』のことだ。何とあろうことかその鼠は堂々と大本營の廊下を歩くのだよ。放っておけば『いろいろなもの』を齧られてしまうし、かといって捕らえようと罠を張っても容易に破られる。そんな鼠……」

今度こそ眼に殺意がこもった。ザラは確信した。幾度も戦場を駆けるザラにはわかった。深海棲艦が向けてくるそれに非常に酷似していたからだ。その本質、度合いは違おうとも、間違えるはずもなかった。

明らかに提督よりも歳は上なのに、それを一切感じさせないような新鮮な殺意だった。

「……いないか？」

だが、これすらも。

「いえ、いませんよ？　むしろ鼠ねずみごときが通れる警備体制……大丈夫ですか？」
どこ吹く風、提督は涼しい顔で皮肉すら込めた。

背中に汗が流れる。ザラは恐ろしすぎて、眼だけしか動かす余裕はなかった。

「大丈夫とは言えんだろ？　結局、人の敵は人、というわけか」

大きく息を吐き、黒禎はドアを開けた。

その後ろを護衛がつく。

何とも言えぬドス黒い雰囲気、ドアの隙間から抜けていく錯覚すらした。何の会話もなく、提督とふたりは黒禎の乗ってきた車までついて行った。

護衛が補助席のドアを開け、黒禎が乗り込む。そして窓を下ろして頭を出す。

「今日はここで帰らせてもらう。これから君の活躍に期待するでしょう。それと……」

黒禎が提督を手招きし、軽く耳打ちすると、窓を閉め、静かな駆動音で発進し、鎮守府から去っていった。

「……ふはあー」

最初に根をあげたのはザラだった。

へなへなと力を抜き、アスファルトの上にお尻をついた。

顔を上にあげ、だらしなく口を開ける。

「お疲れ様、ふたりとも。それと悪かったな」

提督はザラに近づき、脇を抱えて立たせた。

「ホントですよ、こんなのだと知っていれば私、断ってましたよ」

霧島が鼻頭を抑えながら疲れたように話す。

「だから言っただろ？ お前らが適任だって。他のやつらだったらきつと無理だった

さ」

「ならそれこそ長門と陸奥に任せればよかったのでは？ 暇を与えたそうですが」

「あれがベストなんだよ」

「はあ……」

ほら帰るぞ、と提督はふたりを促した。

どちらも頭がバーニングしているのは間違いないだろう。しばらく休息が必要だ。

財布の残金を脳内で計算し、少し高いデザートでも買ってやるか、とふたりを見てほくそ笑み、鎮守府へと戻っていった。

ドツタンバツタン大騒ぎ♪

車の割れた窓から流れ込む風が身が凍えるほど冷たく感じる。それはただの冷たい風か。もしくは殺気の孕んだ風か。

長門は泣き叫びながら、ミラーから見える、まるで冥府からの使者のようなドス黒い複数の車に恐怖した。

陸奥はどうの昔に放心状態。大淀は夢の世界。電は適確に江本に指示している。

「左から二台、大型トラックです」

「いけそうか!」

「余裕です」

「了解ッ! と!!」

ぐるっ! とハンドルを回し、明らかに対向車線に乱入する。

そして瞬く間に目の前にトラック2台が肉迫する。長門は大きく眼を見開き、今度こそ間違いなくここで死ぬと悟った。海の上で死ぬのならまだしも、陸で死ぬとはなんと無様なことか。

しかし、江本は器用に車体を制御し、右側を浮かせ、二台が避けようとして生まれた

隙間にギリギリ入り込んだ。タイヤをトラックに接し、ルーフをガリガリと削りながら1秒にも満たない刹那を耐え切ってみせた。

車体が地面に平行になった瞬間、大淀の方の窓ガラスが勢いよく割れた。

「本当に逃げきれなのだろうか?」

「大丈夫だぜ、ビッグセブン様。なかなかのスリルだろう? 折角だから楽しめつてよつと!」

サイドミラーから、銃を構えた男の顔が見えた瞬間、ハンドルを切り、射線を逃れる。長門は深く、深く。とても深く後悔した。

こんなことになるのなら、らしからぬ真似だが、仮病を使つてでも今日は来るべきではなかった、と。



「大丈夫かい? 迷子にならないように俺の手を握るか?」

「賛成です。そのまま一緒に警察署に行きますか?」

「……やっぱやめとこうか」

「無難です」

江本のお誘いをトゲトゲしく断り、電は大淀の横についた。

イルカのショーも終わったところで、人ごみの中彼女たちは昼食をとるために移動し

ている。

「ねえ？ あのショーは一日に複数するのよね？ 次は何時からかしら」

興奮を隠さず目を輝かせて問う陸奥に、やれやれと長門がパンフレットを開く。しかし、その表情はとも楽しそうで、艀装を装備すればその迫力に恐れおののくビッグセブンだなんてとても思えない。

「あそこにするか」

江本が指差したのはオムライス屋。可愛らしいパンダやイルカなどをケチャップで描いてくれるそうだ。

皆、文句なしの一致で店に入り、江本がメニュー表を開いた。

「お、意外にメニューはしっかりしているんだな」

動物園の中にある店だから、せいぜい四種類ほどしかないだろうと侮っていたが、どうやらそんなことはなかった。

明太子クリームやらなんやらで、むしろその手の凝り具合に舌を巻くほどだ。

「全員決まったか？」

江本の手元を覗きこんでいた彼女たちは首を縦に振った。

思いの外、料金は高く、特に長門と陸奥は戦艦だけに、食べる量も多い。仕方ないといえば仕方ないのだが、出費がかさみ、財布が少し寂しくなる。

あれやこれやとフランクフルトやら動物のキーホルダーやら鎮守府の皆へのお土産やら。何かにこぎつけて江本の財布の紐を緩めようとする。無意識か？ 無意識なのか？

「……ふう、楽しいな」

長門がすう、と眼を細め、呟いた。

「なかなかこういう機会は訪れないから、どうもはしゃいでしまう」

会計を済ませた江本が長門たちの元へ戻ってきて、バニラ味のソフトクリームを二本渡した。

「俺の手は2つしかないからな」

「ありがたい」

「こういう時はな、全力で遊ぶべきだ。俺も、お前たちも色々と堅苦しい生活を送っているんだからな。バチは当たらないさ」

長門は受け取ったソフトクリームの一本を大淀に渡し、残り一本を陸奥と分けあう。どうかと江本に進めてみるも、いや、いい。と断られる。

「私服を着ることすら滅多にありませんでしたからね。鎮守府内でも正装と言いますか……制服と言いますか……が板についてましたので、なんだか新鮮な感じですよ」

「そうだと大淀くん。君たちのその可愛さは俺にとっては眼福なのだよ。両手に、いや、

全方位に花畑。これは昇天しても悔いは無い」

「そ、そんな。大げさですよ」

煽てられた大淀は必死にかぶりを振るが、それはかえって江本の心をときめかせるばかり。

うさぎエリアでは、口をもぐもぐもそもそと一心不乱に動かす様に、初心に戻ったような無垢な表情で興奮していた大淀にはもはや言い逃れはできない。

「よし、そろそろ帰ろう。閉園時間に帰ったら渋滞で心をガリガリと削られるからお前たちも早く帰りたいだろう」

江本が腕時計を見るや否や突然言い出した。電もそれに賛成のようで、深く頷いている。

「私たちには役割がある。息抜きも確かに必要だが、抜きすぎはいけない。私も明日から講義をしなければならぬからな」

「講義？ ああ、そうだったな」

「どうだ長門？ 参加してみるか？ 誰でも歓迎なのだ」

「うむ……。明日の予定次第だな」

長門が残念そうに言う。

そもそも講義をするのは重巡の子たちがしている。特に足柄の講義は評判がいいら

しいのだが、毎回恋愛ネタを聞かされて、もしかして同情されているだけかもしれない。ともあれ姉妹艦の気前よくやっている。

口惜しそうな陸奥を長門がやや強引気味に引っ張る。鎮静剤としてイルカのぬいぐるみを江本の財布から買ったのだが、まだ少し涙目になっている。

周囲の人の目線に、大淀は恥ずかしながら長門を手伝う。

「……ふん」

チラリと後ろを振り返った電が小さく鼻で笑う。

「言わなくていい。たった今、提督が俺にしてほしいことを理解した」

と江本。

「それは良かったです。頑張ってくださいね？」

「言われなくとも。それが提督の思し召しというのならば」

◆

「寝ることをオススメするとはこういうことだったかッ!!」

「ああそうだ長門！ おかげさまで大淀くんは今頃余韻に浸っているだろうな！」

少しひらけた道路路に出たかと思えば突然カーチェイスが始まり、まったく状況が飲み込めない長門が声を荒げた。

割れた大淀側の窓からさらに風が吹き込み、長門はぶるりと身を震わせる。

「そもそもあいつらはなんなんだ!?!?」

「さあな。確かに分かることはひとつ。俺たちを知っているということだろうな。……おっと、頭を上げるなよ? 被弾したら死ぬかもだぞ?」

「人間の銃など艦娘の私には効かぬわ」

「言っただろ? 敵は俺たちを知っているんだ。なら対艦娘用の銃を持っていることを想定しろ」

瞬間、左のサイドミラーが爆ぜる。

「そんな……!」

「この先は完全に赤信号です。突っ込みますか?」

目の前では車が二台止まっている。だが、その右車線は空いている。

「もちろんだとも」

ニヤリと笑ってみせ、江本は江本は大きくハンドルを右にきった。そしてすぐ左へ。

「も、もつと優しく運転できないのか!?!?」

「なんだって? もつと荒々しく? よし、任せろ!」

「違うーッ!!」

長門の悲痛の叫びも虚しく、車体を大きく揺らしながら車線変更すると、そのまま交差点へと飛び出した。

言うまでもなく、突然のことながら割り込んできた江本の車に驚き、複数のクラクションが夕日の霞む空をスパイスに遠く反響する。

左から肉薄する三台の車を、ブレーキの絶妙な踏み具合で回避する。すれ違う瞬間、その機動力に口をポカんと開ける運転手たちに、長門は心の中で謝った。

なんとか通り抜け、一気にアクセルペダルを踏んで速度を100km/hまで上げる。

背後でクラッシュ音。遅れて爆発。

「一台排除。残り二台です」

「よし、電。俺の腰に銃があるから使うんだ」

そう言いながら江本は腰を助手席の電に寄せる。

「五発装填している。反動が強めだから、肩を持っていかれないようになッ！」

「わかりました。しかし、今の状態だと撃てません」

「無茶な注文するなあ!?!」

「それでもやるのでしょうか?」

安全装置を解除する。

江本は無言だ。しかし、口角をわずかに上げる。

車と車の間を縫い進む弾丸のように一切速度を下げることなく突き進む。

「お、おい！ 何か大きいのを持っていてるぞ!!?」

チラリとバックミラーから見えた、敵の助手席から覗く、遠くてもよく視認できる黒い筒状のものに、長門は叫んで江本に伝えた。

そしてその数秒後、正体を理解した長門は眼を大きく見開いた。

「――RPGツ!!?」

「ロケランなら逆に好都合だ」

「気がおかしくなったのか!!?」

江本の発言に、長門は自分の声が裏返っていることも気づかないほどヒステリック気味に叫んだ。

「電。俺がタイミングをつくる。それに合わせるんだ。いいね?」

「わかりました」

歩道に乗り上げ、花壇に植えられていた花々を散らし、白い花びらが舞う。

「まっすぐだと奴らの攻撃がツ―」

「……黙れ。今お前が一番邪魔であることを知れ」

一片の温情も感じられない、冷徹な電の言葉に、長門は押し黙った。

なおも江本は銃弾の雨をくぐり抜け、電は発射のタイミングを見計らっている。

「何を見て何を感じるのかはお前の自由だ。だが、私たちの邪魔は許さない。これ以上

騒ぎ立てるのなら蹴り落とすぞ」

銃口を長門に向ける。

車の外からも、中からも、殺意。

押しつぶされたカエルのように長門は縮こまった。考えてみれば電の言う通りだ。自分だけ馬鹿みたいに騒ぎ、ふたりに迷惑をかけている。

「……すまない、気を……つける」

「それでいい。だが、気づいたことは必ず伝えろ」

「わかった。全力でかかる」

再び電は銃口の向きを変える。

「完全に標準されました」

「了解。一瞬だけ隙をつくるから、そこで確実に潰すんだ」

そも、こうなったのはなぜか。

江本が大きくハンドルをきり、ボシユツ！ という発射音が聞こえるまでの刹那、長門はそんなことを静かに考えた。

普段から艦娘も鎮守府の外へと足を運ぶことはある。確かに申請やらしなければならぬが。

だいたいはこちらと私服を買いに行くとか、ちよつとゲームソフト買いに行くとか、

それぞれだ。それにこれまで一度も大きな問題が起こったことはない。せいぜい大雨に見舞われて帰ることができず、提督に迎えに来てもらった程度だ。

ところが今日はどうか。これは果たしてこの男のせいなのか？

――瞬間、爆音。



黒禎……の護衛の男。あいつは要注意人物だ。ごそごそして落ち着かないやつと思わせたかったのかは知らないが、手に銃を持っていたのは明らかだった。あの時の姿勢が詳しく語ってくれている。

このことを伝えたら霧島とサラは怖がるだろうから黙殺する。

提督は溜息を吐き、執務室に入る。椅子に座り、机の引き出しからノートパソコンを取り出し、ズボンのポケットからUSBを取り出し、差し込む。

電源ボタンを押すとブウン、という起動音が鳴り始め、20秒ほどで起動した。

面倒な起動シーケンスに欠伸をしながら待ち、終了を確認した後、USBから読み込んだ情報をクリック。それは動画のようだ。ウィンドウが開き、日付が表示される。

「9年前か」

映されたのはどこかの大広場。

ご立派に壇を用意されていて、そこに白衣を着た一人の男が立っている。後ろには大

スクリーン。男のPCのホーム画面をキャプチャしていた。

どうやら集会のようなのだ。それも結構重要な。その証拠に、お偉いさんが多数いるのを確認した。

ガヤガヤと自分主流で話していたお偉いさんたちだったが、男が静かに手を挙げると、皆が談笑を止め、男に視線を向けた。

『本日はお集まりいただきありがとうございます』

なかなか律儀な男だ。丁寧にお辞儀をして、ではともつたいぶつた話題もなしにいきなり本題に突入するようだ。

『……かつて、被弾することを前提とした軍艦が存在しました。それらを用い、戦争が繰り広げられました。しかし、近年は被弾しないことを前提とした軍艦が脚光を浴び、イージス艦という高性能の軍艦が人気を総取りしています』

スクリーンには、モノクロの昔の軍艦の写真と、イージス艦が映される。うんうんと首肯する人たちに、男はまあまあと宥める。

ーそして、スクリーンに映された軍艦2隻に大きくバツ印がつけられた。動揺し、憤慨して野次を投げる者もいたが、男はそれを無視して続けた。

『しかし、それらに終止符が打たれる時が来ました。もはやイージス艦などただの鉄屑。時代は……文明は進化し、新たなステージへと進むのです』

男は大きく手を広げ、そう言ったのだった。

ドツタンバツタン大騒ぎ♪ 終

……あ。

と、長門は自らの死を確信した。

しかし、それは隣の小型車が見事な空中回転をしながら、江本たちの車の上を舞うのみだった。

「一台排除。ラスト一台です」

「タイヤを狙ったか。さすがだな」

長門がゆっくりと後ろを振り返れば、スリップによつて三台を巻き込みながら大クラッシュしているのが見えた。

もくもくと立ち上る黒煙から一台の車が躍り出る。助手席の人物は同じようにRPGは装備していないが、銃を構えている。

ドリフトして引き剥がそうとするも、向こうも手練れらしく、なかなか難しい。

速度を上げれば上げるほど距離を空けることはできるが、細かいカーブを曲がることはできない。

どうするべきか、江本は提督に手渡したUSBのことを脳裏に浮かべながらぼんやり

と考えた。

やがて二台は開けた道路へ出た。

向こう200mも曲がり角のない、完全な一直線の道路だ。

「狙えるか？」

「射角が小さすぎて無理です」

電が淡々と告げる。

敵は真後ろにいるから、電の位置から狙うのは不可能だった。

悶々とした爆走は束の間に終わり、次に電車の線路の標識が江本の目に飛び込んだ。

このままでは堂々巡りだ。鎮守府への帰路だが、こんなひつつき虫をひつつけたまま帰ることはできない。

どうにかして処理しなければ。

もうすでになんの関係のない一般人を巻き込んでいるし、怪我人だっているはずだ。提督に掛け合えばなんとかしてくれるのだろうか、それはできるだけ抑えておきたい。つまりはこれ以上の無駄な影響を及ぼしたくないのだ。

「……揺れるけど我慢してくれ」

ちよūdいタイミングで上がった遮断機の下をくぐり抜け、線路を突っ切るかと思っただが、江本は急激にハンドルをきると、線路と線路の間に車体を納めた。

バラされている石ころを踏み、ぎこちないバランスで進む。後ろも同じく、左車体を線路に乗り上げて追って来た。

そして、発砲。

「ツッ!?」

寝ている大淀の頭の横をすり抜け、江本の座る座席の頭部に命中し、鉄の欠片が散った。

「伏せろ!!」

江本が叫ぶ。

その間にも敵は接近し、ついに横並びになってしまった。

電は素早く運転手に銃口を向けた。

後部座席の男も江本に銃口を向けている。

無言のまま、いつ触発するかわからない、まさに沈黙というモノがこの二台間のやり取りを押し殺しているようだった。

……男の体が揺れる。

……車体が揺れる。

……電の体が揺れる。

殺意と殺意の出し惜しみないのぶつけ合いに、長門はひとつまみ分の呼吸しかできな

いほど恐縮していた。作った握りこぶしが汗で滑り、爪が深くくい込んで少量の血が流れていることに気づかないほど。

駆逐艦にこれほどの眼力があるのかと長門は世界の常識すら疑ってしまった。歴戦の駆逐艦たちもその眼にはギラギラとした本能じみたものを感じていた。

だがどうだ。この駆逐艦、電は違う。決定的に違う。

例え姫級の特異個体三体と対峙したとしても無言かつ無表情で事務処理の如く戦い始めるような感じ。はるか超越した意識。

両幅は8m、フェンスに囲まれ撒くことは不可能。ここで落とし所をつけねばならない。それは向こうも同じだ。

ゴンツツ!! と体当たりをされる。

ガクンツ、と江本の車は大きくバランスを崩し、そこを一気に攻められて右の前車輪がレールの中に入ってしまった。

「クツ……ソ……!」

江本が悪態をつき、仕返しと抜け出そうと足掻くが、左からの敵の接触に、つつかえる右前輪。

「――前方から電車ああああ!!」

長門の雄叫びのような怒号に、江本の視線がはるか前方へと伸びる。

……確かに、まだ黒い粒だがあれは間違いないく電車だった。

このまま進めば確実に……。

「電!!」

「はい」

発射。

偶然重なった揺れで相手の窓ガラスを割るのみ。

「マズ……ッ!」

江本が短く喘ぐ。

男が指をかけ……。

「させるか!」

長門が手元にあつた自身の小さな手提げ鞆を迷うことなく投げつけ、運良く男の手元に当たり、銃弾は無辺世界へと跳ねた。

ほんの一瞬、判断が遅れていたらきつと電に当たっていただろう。

それに比べて手提げ鞆など安いものだ。中身はどうせハンカチティッシュ。パンフレットに陸奥のためにこつそり買ったイルカのキーホルダー。

……あまり安くはなかった。

「よくやった」

「それはいいから早くレールから退かないと！」

「電、今度こそ！」

大きな石ころをタイヤが踏み、車体が大きく跳ね上がった。

この1秒に満たない、切り取られた時間。ガタガタ揺れることのない約束された安定。これを逃せば、もうチャンスは

来ないと電は確信した。

眼を大きく見開き、銃の持ち手にヒビが入るほど力強く握りしめ、標準を合わせ、躊躇うことなく撃った。

直後、揺れる。

遠い向こうで電車の重いクラクションが響く。恐らくあと14秒。その間に決着をつける！

電の撃った弾は男の首に命中し、絶命していた。だがしかし、運転手が残っている。この男をどうにかしなければどちらにせよバッドエンドだ。

電は浮かれることなく次の標的を定め、一発で殺そうと引き金を引く。

電の手から銃が落ちた。

「グッ………！」

電の腕からは血が流れていて、江本はすぐに撃たれたのだと悟った。

江本が見ると、男は左手でハンドルを。右手で銃を構えていた。

あと11秒。

ガタガタ。ガタガタ。

ガタガタ。ガタガタ。

揺れる。揺れる。揺れる。

上手く絞られず男は撃てずじまいでいる。

あと8秒。

「銃をー」

それに反応した電が怪我していない左腕で銃を掴もうとしやがみこんだ。

ー銃声。

江本の鼻を掠った。

あと6秒。

電から江本に銃が渡る。

電車はもう目の前だ。

恐怖のあまり無様にお漏らしをして失神しそうだったが、長門は極度の緊張に、大量に分泌されたアドレナリンによって完全に意識をはつきりさせ、目は冴え、来たる瞬間を待っていた。

あと5秒。

勝負は一瞬。

狙いは完璧。後は撃つのみ。

地面の不安定さを案じる暇などない。

江本は指をかけ、躊躇することなく撃った。

……5秒後、長門の世界は暗転した。



『一隻建造するだけで何億という金を使う。私にはドブに金を捨てるのと同じように思えるのです』

男は語る。

確かにこの男の言う通り、今や海を航行するのは艦娘か、漁船か輸送船のみだ。軍艦などどこも数年見えていない。

『我々の技術は進化するのです。昔、石炭によって世界が変わったように。私たちはその『石炭』なりうる存在に邂逅しました』

重鎮たちはさつきまでの怒りを鎮め、黙って男の発表に聞き入っていた。

スクリーンが移り変わり、次が映し出された。

『そう！ この小人たちです！ 彼女たちによつて、新たな時代が幕を開けるのです！』
そこに映る映像は紛れもなく、妖精たちだった。工具を持って鋼材を加工したり、道具にメンテナンスを行っている様子が流れていた。

提督は一度ここで映像を一時停止させた。

ゆつくりと眼をつぶり、目頭を押さえ、ため息を吐く。この映像は江本が大本営から盗み出してきたもの。つまりこれに大本営が関わっていることは確実だ。

いきなりのトンデモ発言に早々提督は置いていかれそうになっていた。

江本が言っていたことを思い出す。

――入手したものの、すべて解析完了しました。その中で特に興味深いものを見つけたので渡しておきます。

――お疲れ様。それで？ 興味深いとは？

――それは見てからのお楽しみということ。ですがこれだけは約束してください。これを容易に艦娘たちに見せてはいけません。また提督がこれを観る時、必ず最後まで観てください。そして艦娘たちへの態度を決して変えないでください。

――そうか。ありがとう江本。明日観ることにする。それと、明日の動物園、楽しんで

でこいよ。何かあつた時は電もいるから大丈夫だ。

脳内回想を終える。

江本の言っていたこと、よほど重要なことなのが理解した。

ふと、パソコン画面に見直る。

……まだここまでは遊びの部分なのだろう。それを告げるが如く、映像はまだ半分以上も残っていた。

むかしのおはなし

精神補強完了。

江本の言う通りならば、今の衝撃的発言など前座に過ぎないようなものが飛び込むのだろう。ゆつくりと深呼吸をしてから再び続きを再生した。

『つい数年前、我々はこの小人たち……仮称妖精たちに出会いました。言葉は何も通じませんが、彼女たちの技術力は眼を見張るものがあり、人間より遥かに高い水準であることは間違いないです』

シーンが映り変わり、妖精が加工したと思われる超精密器具の数々が映される。

そのどれもがとも小型であり、男の言う通り、精巧さが滲み出ている。

『しかし、それだけが彼女たちの行動概念ではありません。『命』を創り出そうとしていたのです』

広場一帯に動揺が広がる。

大昔に、錬金術などでそれらのような非科学的な試みがキリのないほど検証され、そのどれもが失敗に終わっている。

それを現代となった今、実現させるといえるのか。

もし達成できたとなればそれは神の御技と言う他ない。人間のできることはせいぜい遺伝子組み換えによる生物の本質操作程度だ。

だが、その予想通り、男は残念そうに首を横に振った。

『ですが、妖精たちもまだそれを達成できていない状態でした。なので我々も微力ながら協力することにしたのです。とはいっても我々と妖精の技術力は天地の差。それはもう死に物狂いで勉強しましたよ』

男が乾いた笑いを零す。

するとここでひとりが手を挙げる。

『ご質問ですね？ どうぞ』

『その妖精……というのはよくわかったが、ならばなぜ今まで姿を見せなかった？ なぜ『今』なのだ？』

『わかりません。ただ、ツチノコを発見できた、そんな感じだと思ってください』

『なんだね？ 土の中でも掘り進めたのかね？』

『まさか。確かに我々は探検者ではありませんが、あくまで科学のですよ』

パンチの効いたボールをカーブのかかったボールで投げ返す。

『妖精と我々は頑張りました。しかし三ヶ月が過ぎましたがやはり命の創造は困難を極めるということで断念せざるを得なくなりました。ですから、今度は別のアプローチ

で、命の創造とまではいきませんが、それに似通ったものを創り出すことにしました』
いやいや。待て待て。

待て。

また提督は動画を一時停止させた。

ここから先はなんとなく想像できる。できるのだが、これは常識を真つ向から否定するものだ。

世に廻っている定説は、深海棲艦が突如現れ、人類に対し敵対行動。その後『また』突如現れた艦娘により、本格的な戦争が始まった。

胡散臭いあらずじだが、これが常識だ。

深海棲艦の正体としては、ある日起こった海底火山の大噴火により海の底から湧き出たという説。そもそも人類の知らない所で台頭し、急激に攻撃的になった別生物説。はたまた宇宙人説。

艦娘の場合は、その一切が不明。海の上に現れたというだけ。ごく少ないが、新人類であると主張する勢力もいる。

この動画だと、まるで人類と妖精が艦娘を生み出したかのような流れが作られていた。

『魂の譲渡。転移。それを目標に我々と妖精は新たにスタートしたのです。そこで妖精

たちは技術の提供、そして我々は論理の確認、修正を施し、一年後、ついに試作品が完成しました』

スクリーン画面が消え、壇上の端からなにやら黒い巨大な装置が運ばれてくる。

印象的なのは、側面に設置されている、人型の型だ。よほど高身長な人間でない限りすっぽりと嵌ってしまうもの。その周りには細長いチューブのようなものが無数に伸びており、頭部にはヘルメット状の被り物もある。

反対側にまわると、複数のグラフがモニターに映し出され、その下にはよくわからない透明な球体が音も無く静かにゆっくり回転している。

『これこそが！ 人類の新たな文明への鍵！ 魂という概念を具現化させる装置！！』ソウル・テレポーターです』

おお、と重鎮たちが感嘆を漏らす。

大きさは普通車ほどか。提督は押し黙り、男の説明を待った。

『具体的な説明をしようとする、まる2日はかかってしまうので割愛させていただきます。皆さん気になるでしょう、これが果たして何なのか。なので早速実践してみせましょう。ですがその前に忠告を。未だ魂の定着には完全成功していませんので、失敗する可能性が十分あります。そこはどうかご理解ください』

男の説明が終わると、またソウル・テレポーターと同じように移動式の簡易ベッドが

舞台袖から運ばれて来る。それに横たわるのはひとりの少女。白衣に身を包み、静かに眠っている。

装置の横まで運び、少女を型に納める。その後、ヘルメットを被せ、腕や首、脚に管を刺した。そして暴れないように厳重に拘束を。

するとここで先ほどと同じ男が手を挙げる。

『どうぞ』

『その少女はどこから？ あと魂と言ったが、『何の』魂だ？』

『今や少子高齢化という忌まわしき問題は解決され、逆に人間で溢れかえったこの国。』

『不慮の事故』なんてザラにありますよ』

質問した男が納得した顔で続きを勧める。

この瞬間、提督は確信した。

この集会にいる全員グルだ、と。

『魂についてですが、軍艦を用品です。かつての大戦で身を粉にして戦い、散った勇者たち。妖精たちもこれが一番やりやすいと言っていたので、決断しました』

『それこそ君が始めに言っていたイージス艦とかで良いのでは？』

『あれは論外です。魂の年季が違う。例え使ったとしても、未熟な魂が抽出されるだけなので』

ことしかできない肉人形と化していた。

そして変化が訪れる。

美しかった黒い短髪は徐々に茶色へと染まり、とても早いスピードで伸びている。まだ第二次成長期を迎えてすらなさそうな少女の胸が急な発育を示し、先ほどまでは上から下まで真っ直ぐだったのが明らかかな隆起を果たしている。

今なお苦痛の叫びが虚しく響くのだが、誰もそれについては無関心だった。ただ、この実験の結果がどうなるのかだけが知りたいのだ。

着々と魂の転移は進み、少女の心拍の波が『反転』する。左から右へと流れるはずの線が右から流れ、真逆の波長を刻む。

やがて型に横たわるのは数分前とは似ても似つかぬ、全くの別人だった。

『……………あ……………』

焦点の合わない目でだらしなくヨダレを垂らしながら呻く。まるで薬に溺れた廃人だ。

作業は終わったようで、あれほど轟々と鳴っていた装置は鎮まり、あとは静寂のみが残された。

成功か？ と穴から顔を出したトカゲのようにざわざわとします。

立ち上がり、成功に手を叩こうとした、その時。

『……お父さ、ん……お母、さ……ん……』

ーふわり。

最後まで報われず、何も見えぬ空に両親を求めて手を伸ばそうとしてもガツチリと拘束された手首が枷となり。何も。何もできずに儂く、あまりにも短い命が無慈悲に

その輝きを失った。

モニターがピー、と静かに非検体の死を知らせる。赤色に発光していた球体は何もなかったかのように透明にじつと動きを停止している。

『アプローチ317回目。失敗。今までで一番素晴らしい結果を残すことができました。ご覧の通り、完成までは時間の問題になりなす。きつと彼女もこの偉大な実験を手伝えたことに天国で泣いて喜んでいるでしょう』

ここで、動画は終わった。

提督は無言でウィンドウを閉じ、USBを抜いて引き出しに仕舞った。

その顔は無表情で、何の感情をも見えない。

震える手でペットボトルを掴み、水を一気に喉奥に流し込む。

そつとパソコンを閉じ、横にだけ、机に膝をつけて手の上に顎を載せる。

そしてちょうどいいタイミングで。

「明日はいい天気でしたね」

ドアが叩かれた。

厄病神の講義

ひとつ涼しい顔で部屋に入ると、江本はやれやれとやや大げさに額の汗を拭うふりをした。

だが、それにわざわざツツコミを入れる余裕は提督にはなかった。さきほどの動画のせいでどう反応すればいいかわからなかったからだ。

「その顔は、観た、のですね」

提督の脇に置かれたノートパソコンをちらりと横目で見、江本は呟いた。

「……ああ。とりあえずは、お疲れ様。よくあいつらを守ってくれた」

「ええ。私も完全にOFFモードで楽しもうと思っていたんですがね。やっぱりスリル満点のドライブの男の浪漫です」

「言わなくてもわかっている。修理代とその他諸々の手回しだろうか？」

「理解が早くて助かります」

わかっていたものだが、いざ取り組もうとすると少々、いや、なかなか厄介なことをしなければならぬ。車の修理代はどうとでもなる。しかし、一般市民への情報のみ消しとなれば、大本営にその旨を伝えなければならないのだ。

「いちいち関わるのは面倒だ、と提督は嘆息する。が、仕方ないことだからやるしかない。」

「わかりますよ。なぜあの娘たちなのかが。特に難しいことではありません。あの四人はよくあなたの側にいる艦娘。殺されればそれは直接あなたへのダメージとして入る。回りくどいですが、そういうことなのでしょうね」

「深海棲艦と戦うためのこの鎮守府なのにな。自らそれを壊しているのにすら気づかない。……全く、呆れたものだ」

「海からは深海棲艦。陸からは人間。まさに板ばさみというところですか」
つらつらと話し終えた江本はついでにそうど、とあることを思い出した。

「彼女……長門くんが予想以上の屁っ放り腰で驚きましたよ。彼女のおかげで助かったシーンがあったのですが、最後は目を開けながら失神してましたよ」

「笑ってやるな、それでもあいつなりに頑張ったんだろう？　むしろ褒めるべきことだ」
「ごもつともです」

今は長門は起きた陸奥と大淀に肩車してもらって部屋へと帰り、電は明日の講義のためと颯爽と部屋に籠ってしまった。

鎮守府内に電の講義のことは宣伝してはいるが、その量が少ない。たった3枚しかチラシを用意していないのだ。さらにそれらは鎮守府のどこかに適当に貼っているとい

う始末。

ガングートは提督命令で参加するとして、おそらく電の姉たち、暁、響、雷はも参加するだろう。あとは全くの予想もつかない。

確か明日はちよつとした遠征と出撃を予定していたはずだから、電の思うような人数が集まらない可能性も十分ある。

「江本」

提督が名を呼ぶ。

「はい」

返事をし、渡していたUSBを見せつけられた。

「お前の忠告、よくわかった。これはさすがに電にすら容易に見せられない代物だ」
「……艦娘とは、元々狂った人間と妖精の生み出した生物兵器」

提督はああ、と首肯しながらさきの動画を脳内リプレイする。

常人が観ればそのおぞましさに胃液が喉までこみ上げてくるだろう。型に拘束され、文字通り血反吐を吐きながら助けを求める少女を、実験用モルモットのように、舐め回すように眺めるもはや狂気という表現がふさわしい。

動画内で男は317回目また失敗と言っていた。ならば、それまでの316……316人も同じように実験台にされて死んだのだ。男の言葉から察するに、あの少女のより

もはるかに酷い最期となったのは間違いないだろう。

そしてさらに実験は繰り返され、艦娘として魂を得たのだ。

「提督、あなたの目的を達成するには、もはや大本営との正面衝突は避けられないでしょう」

「そうだな。向こうが何を隠しているのかがもつと必要だな。有力な情報は入手できたが、まだ叩くには道具が足りない、か」

「とりあえず次の目標はソウル・テレポーターからの実験履歴の奪取かと」

もう9年も前の代物だ。

しかし艦娘の起源となる装置の警備は言うまでもなくとんでもなく嚴重なはずだ。いくら江本といえど、そう易々とはいかない。

「そうだな。でもしばらくは息を潜めておいたほうがいい」

今日襲撃を受けたばかり。明日明後日に再び首を出しに行くのは、どうぞ殺してくださいと言わんばかりだ。双方のほとぼりが冷めてからが一番ベストといえよう。

ではそうさせてもらいます、と呼び出し用の電話番号の書かれた紙切れを置いて、江本は部屋を出た。

提督はそれを適当に折りたたみ、胸ポケットに突っ込む。

時間は夕陽が沈んで夜の帳が下りる頃だ。艦娘たちは各々の時間を過ごしているこ

とだろう。さらに言えば、そろそろ食堂が混み合い始める頃合いでもある。

今のうちにさっさと飯を食って、江本の事後処理をしたら今日は終わりだ。

明日からはしばらくの間、比較的穏やかな日常が送れる。

……例えば艦娘が造られたモノであったとしても。

提督の、艦娘たちへの眼が変わることは決してない。彼女たちだって生きているのだ。心臓は確かな生の脈動を刻むし、血だつて赤いのだ。傷つけば痛い泣くし、嬉しければ可愛らしくとびきりの笑顔をつくるのだ。

いったいこんなにも人間じみた彼女たちの、何が奇怪なのだ。何が。

食堂が騒がしい。今日は少しばかり遅かったか。

昨日はカレーを食べたから、今日は少し軽めに野菜炒めでももらおうか。

提督はドアを開けた。

ぶわあつ、と様々な料理のいい香りが鼻腔を優しく刺激し、空腹を呼び起こす。

「あ、提督?」

姉妹全員で食事をしていた金剛が提督に気づく。

すると周りの艦娘たちも提督に気づき、多数の手がこつち来いこつち来いと手招きしてくる。

はは、と小さく笑みを零し、提督は艦娘たちの輪の中に入っていった。

◆ 「来てくれてありがとう」

時刻は午前9時。空に登る朝日が部屋を差し、目覚めにはもってこいの暖かさだ。

電は壇の上から講義を受ける生徒たちを見下ろした。

暁、響、雷。

金剛型四姉妹。

一航戦に五航戦。

そしてガングートに望月、武蔵の計14人だ。

「妹の講義に姉が参加するのは当然じゃない！」

と、残念ながら直らなかつた寝癖をびよこびよここと跳ねながら、ふんすと暁がサムズアップする。

姉の威厳のなさに、逆に慣れてしまったふたりは何も言わずただ後ろの席で笑いを押し殺している。

「そうか。私もこうして教えるのはあまり経験がないからな。暇つぶしと思ってくれればいい」

「レディーは何事にも本気よ！」

またもう一度サムズアップを決める。

寝癖がこればかりに自己を主張する。

「さて、私が皆に話したいことは、戦闘の基本などではない。それくらいは知っているだろうから省かせてもらう」

そう言うと、電は皆を観察し、瑞鶴を指名した。

「瑞鶴」

瑞鶴は自分が当てられるとは思っていなかったのか、身体をビクリと震わせる。

「空母は航空甲板がやられると発着などができなくなり、カカシ状態になってしまう。そうだな？」

「そ、そうね。装甲したらもう少しはもつでしょうけど、その通りよ」

「では瑞鶴。そうなたら空母は何ができる？」

視線を泳がせ、数秒たってから瑞鶴は確かめるように答える。

「何も……できない、わ……？」

隣席の翔鶴に目で助けを求める。しかし、翔鶴も全くの同意見とひと蹴りにされる。

「ふむ。アウトだ」

「えええっ!?」

電にも即答で否定され、つい瑞鶴はすつとんきような声を上げてしまう。そしてすぐさま目の上のたんこぶな加賀がいることを思い出してほんと小さく咳払いする。

「次は響お姉ちゃん」

「ん。なんだい？」

「味方は駆逐艦ふたり。敵は戦艦複数を含む主力艦隊。どう勝つ？」

「勝つことはできないね。でも、天候、敵の慢心などを逆に利用することができれば可能かもしれない」

「……限りなく正解に近いアウトだ」

「なんと」

自信のあった解答だったのに、不正解となったことに響は静かに驚いた。

「このように、私が教えるのは不利な状況での活路を見出す方法、足掻き方などだ。戦いは美しいものなどではない。泥臭く挑んで、それで掴み取るのが勝利なのだから」

実に興味深い講義となりそうだ。

普段なら教えてくれないことを教えてくれるこの講義に、武蔵は胸の底で非常に楽しみにしていた。

あの黒い深海棲艦との戦いで、武蔵は何もできなかった。無様に汚れた外套を翻す電の小さな背中を、ただただ海上に伏せて力なく見上げていた。戦いぶりを見ることはできなかつた。しかし、報告書は圧倒的な強さを明らかにしている。

大和型二番艦、武蔵。それが彼女だ。戦艦の中でもトップクラスを誇る火力。戦艦の

中の戦艦。武蔵自身、皆から期待されているのは薄々気づいている。なんでも、とてつもなく強い敵を倒すための戦力として武蔵は建造され、電がやってきた。

もちろん期待の圧に押しつぶされるつもりは毛頭ない。着実に練度は上昇しているし、ある程度の自信もついている。

ちらりとガングートを見やると、彼女は不服を隠す気すらなく顔に出している。電の講義は必ず有意義なものになるから聞けと言いたいのだが、自分の考えを押し付けるのは間違っている。

金剛姉妹は……、ノーコメント。

「いきなり内容を伝えられて語り始められると呑み込みが悪いだろう。だから明日からということ、とりあえず今日はこれから外でドッジボールをしてみよう。私は皆の運動能力が見てみたい。……チーム分けは……そうだな、こうしよう」

お姉さま大好き、sの凍り付く間にさっさと電が手を伸ばして仕切りラインをつくり、呆気なくチーム決めは終わった。

暁、比叡、霧島、榛名、望月、赤城、瑞鶴。

響、雷、金剛、ガングート、加賀、翔鶴、武蔵。

結果、この二チームに分かれた。

「ひええええええつ!!?」

評価

・赤城

落ち着いて行動しているように見えるが、どうすればいいのかわからず慌てている場面がいくつかあった。さらに圧倒的運動量が不足しており、積極的に動こうとしていないのがよくわかる。

空母は攻撃する際、基本的には全て航空隊に任せっきりである。自身は敵からの砲撃などの回避を徹底すればいいだけで、必然と運動量が減る。そこが空母の致命的な弱点といえよう。例えば敵がネチネチとしつこく攻撃してくる場合、ジリ貧なのは間違いない。燃料が、体力が尽きて沈められる。

当分の課題は体力づくりだと私は思う。

しかし、良い点もあった。それは指示の質だ。比較的広い視野を持ち、多数の情報を一気に受け入れ、処理し、的確な判断を下すことができるのはとても貴重な力である。その力は味方にとっては非常にありがたい恩恵であり、戦闘をスムーズに進める大事なファクターだ。

受け入れ、処理、出力までの過程をもっと早く行えるようにできれば、さらなる高み

へと到達できるだろう。

・加賀

瑞鶴を気にしすぎである。

目の敵だが高んだかどうかでも良い。視線はいつも瑞鶴にある。それゆえに注意が疎かになり、当てられる場面がよく見られた。

無様な見栄っ張りには戦場では不要である。そんなものをいつまでも保ち続けるのであれば、いくら出撃しても無意味であり無価値だ。轟沈に直結するものと知れ。瑞鶴とのプライベートでの衝突ならばいくらでもするといいい。

だが、決して、それを戦場に持ち込むな。

赤城と比べたところ、基礎的な面ではだいたい加賀の方が優っている。しかし、総合的に判断すると負けている。

その理由は何か。

それはあえて教えないでおく。

赤城をよく観察しろ。盗める技術、戦術、考え方は全て盗みとり、自分のものとしろ。いつもすぐそばにいるのなら容易いことだろう？

・金剛

仕方ないとも言えなくもないが、一番パホオーマンズの悪かったのは金剛であるのは明白だ。

まずは全てにおける動作が遅い。投げたボールは易々とキャッチされ、避けようと体を動かしても、脚は付いてこられずに自爆。

良いリハビリとなったとは思う。そして自身への課題もたくさん見つかったはずだ。金剛の良いところは向上心のあるところだ。下手ながらも懸命に奮闘する様は、チームの全員を奮い立たせるのに十分な要素だった。自覚はしていないそうだが、あの時から流れが変わったのは明らかだった。

今後のリハビリに期待する。是非とも一刻も早く戦線復帰を願う。

・比叡

鋭いボール。最低限の動きでボールを避ける。

動作はどちらもほぼ文句なしの素晴らしいものだった。

しかし、決定的な弱点は、圧倒的に視野が狭いことだ。視野が狭い分、情報量が減り、最適な解答を導き出せているのだが、範囲外からのふたつ目のボールにはまるで気づいていなかった。

敵はいつも自分の見ている方向からしか撃つてこない訳ではない。奇襲まがいのことだつて当然される。

当面の課題は、広い視野を意識することだろう。

金剛を見すぎていたことを一応伝えておく。

・榛名

臨機応変な順応力、そして何より他人を気にかける、まさにサポート役にはうつつけなスタイルだった。

しかし、榛名も知つての通り、戦艦とは強大なアタッカーとして皆から期待されるのが性である。それを理解しているのなら問題ないが、していないのなら話は別だ。

私は実戦での榛名の動きを知らない。私は容易には戦闘には赴けないから、他人から聞いた情報だけでは私の榛名像は完成しないのだ。

その癖ともいうべき戦い方を、戦艦として貫けるのなら是非貫いてほしい。それはきつと、他の鎮守府の榛名とは違う、榛名だけの長所となるだろう。

あと、金剛を見すぎである。

・霧島

確実な分析。確実な算出。

おそらく何時間かけてでも触りすらせずに、知恵の輪をどうすれば解けるかを考えるタイプだろう。

直感で動くことが滅多になく、考えている間にせつかくのチャンスを逃すことが多かった。例えば赤城が目の前にいるにもかかわらず、すぐに当てようとしなかった。

敵の砲弾も霧島が考えている間、動きを停止してくれているわけではない。状況は常に動いているのだ。その度に考えていては埒があかない。直感を頼って行動すればいい結果を出せる時があることを覚えておいてほしい。

あと、金剛を見すぎ。とても個人的な意見だが、比叡以下は金剛への好意が過剰な気がする。咎めるつもりはないが、他にも目を当てておくべきでは。

・翔鶴

行動が消極的なのが目立った。

ドッジボールにおいて、よく女性のする行動が自身がボールを投げず他人に譲ることだ。翔鶴はその典型的なパターンにある。

自分に自信がないのかどうかは知らないが、いつも一步引いた立ち位置にいる。これでは明らかに間違っている意見を問いただすことすらなくなるだろう。

一航戦や五航戦がなんだというのだ。翔鶴はそんなただの看板を気にするのか？
妹がいるのだろう。

傷つけたくない妹がいるのだろう。

ならば姉としての威厳を示せ。矜持を示せ。

・瑞鶴

加賀と似た内容になるが。

加賀を意識しすぎである。煽られたら黙っていられない性格で、後先考えない、とても危ないものだ。

加賀に一矢報いたいとばかりに変なプライドを持っているようだが、戦場ではそんな余裕は決していない。全くもって愚かであり、轟沈に直結するものと知れ。

最後に、暁のアウトをキャッチして防いだのはとても素晴らしかった。その反応速度は誇つていい。戦場において大切なことのひとつはあらゆる物事についての反応だ。これだけは加賀をも軽く抑えてトップクラスだろう。

しかしだからといって加賀に優っていると調子に乗らないように。

・望月

私の知っている中で、上位に入るほどの切り替えの早さに正直驚いた。

それは戦闘において、無駄な行動を極限までカットするという、もつとも効率の良い戦い方に繋がる。

サボる時は徹底的にサボり、やる時は一瞬で切り替わる。だが、実力があまり伴っていないのが残念だった。体力もなく、かといって力がある訳でもない。

素晴らしい能力を有しているというのに、惜しくて仕方がない。

さらに、最後の一人になった時、やけにあつさりと当てられたのは拍子抜けだ。ガッツも足りないように思える。

・ 暁

余裕ぶるのがもはや悪い癖になっている。早急に改善することをオススメする。

積極的に攻撃に参加していたのは良いことだが、狙う箇所が全てど真ん中というのはいただけなかった。わざと脚を狙ったりするだけで、相手はキャッチが格段に難しくなる。これは実戦でもいえることで、ただ敵に当てるために狙うというステージは卒業し、敵のどの部位に当てるかを狙うことを考え始めてもいいのではないだろうか。

もちろんこれはとてつもなく難しいのは百も承知している。しかし、やるとやらないの差は歴然となる。精度向上の練習にもなるし、当てればそれで一石二鳥だ。

参考程度に覚えておくといい。

・響

単騎で戦うのなら全く問題はないが、味方とともに戦う場合、何よりも大切なのはコミュニケーションであり、それを疎かにしている傾向が見られた。

考えていることは口にしないと誰にも理解してもらえない。

それさえきちんとできればあとは特に言及することもない。あと、見えないところで暁のサポートをしていたのは評価すべき点だ。

・雷

明らかに許容できないことを背負いがちであり、結果自滅することが多い。

頼られることを至上の喜びとしているそうだが、そうするための力が雷には足りない。何も考えずに受け入れる傾向にあり、それは非常に厄介なことを生じる要因となってしまうことも十分ありえる。

自分の力量に見合ったことなのかをきちんと見極めることができるようにならなければならぬ。

・武蔵

頑張っているのはひしひしと感じたが、時々空回りしていた。

変に緊張しているのは、実戦で思い通りの行動ができない時があるので注意するように。誰も武蔵がすぐに成長するとは期待していない。誰しも始めは1から始まるのだから。この鎮守府には長門や陸奥、金剛姉妹やその他戦艦など、先輩に非常に恵まれている。

互いに切磋琢磨し、上を目指すといいだろう。

・ガングート

ひとりで突っ切るタイプなのはよく理解している。己以外の艦娘は、己を補助ための、言わばモブ程度の認識なのだろう。どう考えるかはガングートの勝手だが、味方の不利益となる結果を導くのなら、それはガングートが原因ということになってしまう。

確かに戦艦は最大のアタッカーで、敵艦を沈めるには最も強力な艦だ。だが、それを過信してはいけない。こちらも、あちらもただの鉄の塊ではない。頭を吹き飛ばされれば一発で死ぬことなど十分ありえる話だ。駆逐艦だって、戦艦の首を落とすことも可能なのだ。

例え敵が駆逐艦であろうとも鼻で笑ってはいけない。戦場では掌返しなど日常茶飯

事だ。だから慢心せず、いかなる時でも全力で戦え。

カボチャ大騒動

「ごめん、もう一回」

「その……私たちの発注ミスで大量のカボチャが届いてしまいました」

「おうふ」

間宮と鳳翔が申し訳なさそうに提督の前で頭を下げた。

基本的に食料などの管理は彼女たちと伊良湖に任せている。この鎮守府に所属する艦娘や職員、言うまでもなく提督の食欲を満たしているのはこの三人なのだ。それほともかくして、このようなミスはとても珍しい。

提督はふたりに頭を上げるように言った。

「誰にでもミスはあるからそこまで気にするな。でも……これはどうぶんカボチャ料理だな……」

「本当にごめんなさい……」

また間宮が頭を下げようとしたので提督はそれを手で制した。

「まあ別に深刻な事態ではないんだ。適当に赤城の辺に食わせておけばすぐになくなるだろ」

「提督の赤城さんへの見方がかわいそうです……」

「でも事実だろ？」

「そうですけど……」

間宮も否定しないあたり、もはや赤城の大食いは揺るぎないものへと固定されてしまった。

だが、どちらにせよカボチャをなんとかして消費し尽くさなければならぬ。赤城だけになく空母系にも手伝ってもらわなければならない。龍驤に成長できるからと勧めると間違いなく悪意のカケラもないのに、変に裏を読んでピーピー騒ぎ始めるだろう。

「じゃあ今晚にでも空母の奴らを……」

呼ぶか、と言いかけた提督の口が閉じた。

ふと気づけばドアが少しだけ開いていた。しかもそこから誰かがこちらを肉食動物が如く見ているのだ。

提督の動きが止まったのを不思議がったふたりは提督の視線の先へと頭を向けた。

空いた僅かな隙間から目がキラリと光っている。このような真似をするのは青葉以外にありえない。しかし、このカボチャの件に関しては特に記事にする必要もないはずだ。

……そして、主が乱入してきた。

◆ 「皆さんには！ 野菜が！ 足りま！ せん!!」

青葉……ではなく彼女……涼月はメドゥーサ顔負けなほどに、荒ぶる美しい銀髪をブンブンと振り回しながら提督の机を4回叩いた。

「現在我が鎮守府は大変な危機に陥っています。それは艦娘たちの食事バランスの明らかな偏りです」

ググツと机に身を乗り出し、涼月は提督に顔を急接近させる。

「うんうん」

対して提督は少し引き気味に頬を引きつらせる。

「カレーやカレーやカレー。そしてスイーツを挟んでカレー。なんですかここはインドですか!?」

「日本です」

「駆逐艦や軽巡、潜水艦の方々は甘いもの。重巡や戦艦は肉。空母に至ってはもはや雑食じゃないですか!」

「ステイ! ステイ!」

提督はここにはいない目の血走った赤城たちを手で押さえつけ、なんとか防いでいる。

鳳翔を尻目に、提督は次に背中に冷や汗がダラダラと流れるのを感じた。

「知っていますか？ カボチャにはビタミンやβカロチンがとても豊富に含まれているんです。その中でもβカロチン！ これは艦娘以前に心ときめく女の子である私たちには必須なのです!!」

これは涼月の皮を被った全くの別人ではないか？ と疑念を抱かざるを得ないほどの積極性に提督そして間宮に鳳翔はマジマジと涼月を観察する。

顔をジツと見つめ、徐々に視線を下へと移し、自己を主張する魅惑の白いタイツまで視覚すると本人であると確信する。

「お肌の美容は女の子の務め！ βカロチンはそれにとっても有効なのです！ この涼月、これはとてもいい機会だと思うのです」

「そ、そですか。お前がこんなに荒れるなんて珍しいな」

「これはもう荒れずにいられません！」

涼月は机から降りると、間宮から発注数の書かれた紙を受け取り、上の空でなにやら怪しげにぶつぶつと唱え始める。

やがて詠唱が終了した涼月は拳を強く握りしめて、こう高らかに宣言したのだった。

「本日より、私が料理を担当します！ カボチャの恩恵を受けるがいい！ です!!」



「今日も一段と動いたなあ。これは明日の筋肉痛は確実だな」

武蔵はペキペキと首の骨を鳴らしながら、そんな独り言を漏らした。

時は、もう夕暮れ……を通り越して夜へと移り変わる頃だ。夕日が水平線の彼方に沈むのを見届けると、武蔵は沖へと上陸した。

ぐるりと周囲を見回して忘れ物がないかを確認する。さらに練習用に用いたのを直し忘れていないかも確認して、問題ないとひとつ頷いた。

巨大な武器艦装を降ろし、次に脚部艦装を解除する。トテトテと寄ってきた四人の妖精にメンテナンスをお願いする。

「よろしく頼む」

妖精たちは了解と敬礼し、早速作業に取り掛かり始めた。

今日の練習は個人でだった。電からもらった評価はいったん棚に上げて、基礎に還りたかったのだ。自分の部屋の机の引き出しの中にしまっているから、戻ったら最優先で見よう。

そうぼんやりと考えながら武蔵は工廠を出た。

トンカチか何かで金属を力強く叩く音が聞こえる。おそらく明石が何かしているだろう。装備開発や改修、その全てを妖精たちが助力しているとはいえ、彼女一人で担っている。もしかすると一番腕力があるのは彼女なのかもしれない。

バカな、と一蹴にできない冗談を自己完結させ、武蔵は次はどうするかを考えた。先に食事に行くか、それとも風呂に入るかだ。

本音を言うのと今すぐにも食事にありつきたい。明石の作業音でかき消されたが、お腹の虫は確かに空腹を知らせをポリユームMAXで鳴らしていた。

だがこんなにも汗をかいた状態で食堂に行くもの気がひけるし、他の艦娘たちの不快を招くかもしれない。髪だって海水を浴びたせいで少しパサパサしていて気持ち悪い。

ここはやはり風呂が先か。

結論が出ればあとは早い。半ば足早に自室へ向かい、クローゼットから入浴後に着る服を取り出し、消費した燃料や弾薬などを提督に報告するための報告書を机の上に広げておく。これを提督に提出する度に「ん、気にすんな」とそよ風にすら吹き飛ばされそうな声で言われるのが、正直なところ申し訳なくてたまらない。

それはともかく、自室を出た武蔵は真っ直ぐに入浴場へと足を運んだ。

「まあ、そうなるな」

どこかの瑞雲友好者のセリフを頂戴し、四人の先客がいることを確認する。

長いストッキングを脱ぎ、次にスカートを脱ぐ。引き締まった肉体に、触れなくなるほどのスラリと伸びた健康的な美しい脚。その二本にパンツがずり落ちろされる。胸にまで巻きついた腹巻を解き、これはそのままゴミ箱へほい。

首の艦首を外し、電探カチューシャと髪ゴムを解いてようやく武蔵は糸まとわぬ姿となった。

準備完了となったところでようやく武蔵は風呂場へと突入した。

「あはは、お酒が、こんなにいっぱい」

「くらー！ それはお湯よ！」

湯桶にたつぷりすくったお湯を口元に持つていこうとするポーラをザラがひったく

る。
「ああああああ!!! へぶしッ」

ザラに掴みかかろうとしたが、それはなんなくと避けられ、頭にチョップを食らった。

なんとも騒がしい姉妹だ。だが金剛姉妹に比べるとまだかわいいものだ。武蔵はバスチエアに座り、黙々と体を洗い始めた。

直後、背後から誰かに抱きつかれる。

「ん？」

手を止めて顔だけ後ろを振り向く。するとそこには泡まみれの子がいた。

武蔵は無言でシャワーを掴み、水を出してその子の泡を流してやった。頭はすぐに流しきれなかったから、両脇を持って自分の膝の上におろし、わしゃわしゃと丁寧にした。

「ふはあー！」

姿を現したのは清霜だった。ふるふると子犬のように頭を振ると、ゆっくり顔を上にあげた。つぶらな瞳が武蔵を捉える。

「ああつ！ 武蔵さん！ こんばんは」

「ん、こんばんは。清霜」

よいしょ、と清霜は武蔵の膝の上から降りた。

するとすぐに沖波が寄ってきて軽く清霜に一喝入れると、武蔵に向き直った。

「ああ、もう……。ごめんなさい、武蔵さん」

「なに、気にすることはない」

「もおー、沖波姉さんが泡だて過ぎたからでしょー？」

ぶんすこと頬を膨らませた清霜が言い合いを始めた。

やれひとり洗えばよかったじゃんとか、やれそんなに洗剤使ったからじゃんとか、やれ戦艦みたいに大胆によるしくって……と、ぴいぴいエスカレートしていく。

戦艦みたいに大胆とは訳のわからないことを。

そんな様子を黙って見ていた武蔵はガシツとふたりの頭を鷲掴みした。

「んにゅっ」

「ゆんっ」

「はいはい、喧嘩はそこまでだ」

喧嘩している間に身体と髪を洗い終えた武蔵はふたりをわしゃわしゃとやや乱暴に頭をしごくとき、片腕で持ち上げると、そのままザブザブと勢いよく湯船に入っていた。「私の、私による私のための酒……あぶぶぶぶ」

まだ酔いの覚めないポーラを波が襲い、完全に気の抜けていた彼女をザラごと流した。

「うはは〜！」

「ひゃー！！」

両腕のふたりな対照的な反応をよそに、武蔵は深く身体を浸かった。

「あ、あああ〜……」

おじさんみたく、身体の芯にまでじんわりしみる熱に唸る。

豆鉄砲を食らった鳩のように腑抜けた顔を晒すポーラを、ザラはこれ好機と引きずり、武蔵に軽く会釈して風呂場を出た。

「やんだかもう、怒る気をがせてしまいました……」

沖波が口を沈め、ぶくぶくと泡を吹く。

「うんうん、器の大きい沖波が大好きだよ！……戦艦みたいだね！」

大きいイコール戦艦の公式が清霜の中では制定されているらしく、「ねー？」と無邪気

な笑顔で武蔵に問いかける。

無下にするわけにもいかず、武蔵は反射的に「そ、そうだな」と返してしまふ。

太ももの、鉛のような重りが降ろされる感覚が気持ちいい。空を仰ぎ、ゆつくりと瞳を閉じて享受する。

「ところで武蔵さん」

両手で水鉄砲の練習をしていた清霜が武蔵に尋ねた。

「ん？」

「戦艦になるにはどうしたらいいでしょう!!」

「う、うーん……」

なんと答えればいいか。それは今日の練習よりもはるかに難しく、かつ細心の注意を払わなければならなかった。

常識的に、駆逐艦が戦艦になるのはほぼ不可能と断言してもいい。かといってそれをそのまま伝えるのはあまりにも清霜がかわいそうだ。

ジツと清霜に見つめられ、つい武蔵は視線を逸らしそうになつてしまふ。沖波は武蔵の考えていることがわかるのだろう、申し訳なさそうな顔で明後日の方向を向いている。

「戦艦になるには……だな？」

「なるには!!?」

「そ、そう! よく食べてよく寝る、だ!」

「おおー!!」

本当にすまない、と心の中で謝りながら武蔵はさらに言葉を紡いだ。

「それとだな、日々の鍛錬も大事だ、戦艦の艦装は大きいからな。力がなければ持ち上げられないぞ?」

「すつごく参考になります!!」

「というわけで私はこれから食事に行こうかと思うのだが、どうだ?」

謝罪の連撃を放ち、いい感じに話を切り上げる。

ざばあッ! と力強い脚が湯船に屹立し、すかさず清霜が右脚にしがみついた。

「うくん、太くい!」

「こら清霜!」

沖波が喝を入れるも、キョトンとするのみ。

「ちよつと傷つくから太いはなしだぞ?」

そんなつもりで言ったのではないことはわかるのだが、武蔵もやはり乙女なのだ。清霜をひつぺはがすと、生意気だぞ、と放り投げた。

「!!?」

清霜の身体は見事な放物線を描き、ちやくだーん、なう！ と水しぶきを高く上げて着水した。

「ちよっ！」

沖波が類を見ないほどの焦りを見せて清霜にじやぶじやぶと寄るが。

「うーん、面白い！ もう一回！ もう一回やって!!」

と武蔵にせがむしまつだ。

「清霜よ、戦艦ならばこの程度のこと、容易くできなければならぬぞ?」

まあ少し危ないから気をつけるんだぞ、と釘を刺しておく。

おおー!! と宝石みたく目を輝かせる清霜に、罪悪感まじまじの武蔵はそそくさと

風呂場を出た。

さっさとバスタオルで身体を拭き、髪をドライヤーで乾かして手櫛を少々。最後にウオータークーラーの水を紙コップ半分飲む。

このキュツとくるなんとも言い難い感覚に、気持ちよくふう、と息を漏らすと腹の虫のご機嫌を伺いながら食堂へと向かった。

もちろん清霜の後のことは全て沖波に全投げである。

合掌。

◇

武蔵の鼻腔を突如くすぐったのは、明らかにいつもと違う香りだった。たいへんお腹の空いている今の武蔵は嗅覚が洗練されている。

これは決して肉の匂いではない。カレーのルーの香りの欠片も感じ取られなかった。その代わりが……。

「……カボチャ？」

それにしても匂う。まるでカボチャしか食堂にないような、圧倒的カボチャだ。

……いやいや、おかしい。

武蔵はピーピー騒ぎ立てる腹の虫を押さえ込みながら頭を稼働させる。今日は確かに金曜日のはずだ。ならば当然カレー。つまりカレーの匂いでなければならぬのは然りである。

なんだか嫌な予感がする。

そう思いながら武蔵は食堂へと入っていった。

「そんな……そこをどうにかできないのか」

「ダメです」

「君には特別な瑞雲をやろう。これで……」

「ダメです」

「瑞雲を」

「ダメです」

「ず」

「ダメです」

瑞雲友好者は意気消沈して波々突如お盆に乗せられた料理の数々を見下ろす。そして重く息をつく。

「なんだ……これは」

彼女とすれ違う瞬間、チラリと『見てしまった』武蔵は絶句した。

カボチャ。カボチャ。カボチャ。そしてカボチャ。最後に申し訳程度にカボチャをどっさり。

彼女の様子にも心底納得だ。

だが間宮はどうした。伊良湖はどうした。鳳翔は。

いったい誰だ。

武蔵は料理場を覗きこんだ。

「違います！ もう少し煮込むのです!!」

「ええっ！ もう揚げちゃったよお！」

「……もう、そのまま出しちゃってくださいッ！」

「ええええええっ!!」

……見なかったことにしておこう。

照月の失敗作が空母系の艦娘の胃に届くことを願う。

武蔵はジト目で視線を逸らすと、自分の席を探し始めた。

ピークは過ぎた頃だ。混雑も随分と空き、席も空き空きだ。ぐるりと見回り、ふとピンク色の花園をふたつ発見した。いや、してしまった。

「北上さん ああ北上さん 北上さん」

「うーん字余り！」

ふと大井と目が合ってしまった、慌てて武蔵は視線を彼方へ投げる。

「さあお姉様、私のカボチャをどうぞー！」

「あ、榛名ずるい！ なら私も!!」

「ならばこの霧島、その倍を……」

金剛はどうの昔に白目だ。だが、武蔵に気づいた瞬間、サツとハイライトが戻り、目力で武蔵に助けを求めた。

一瞬間だったが、やはりそばを通り過ぎた。

……すまん、金剛。

絶望に染まった表情の金剛に、沖波以上だ、心の中で土下座するほどの勢いで謝った。

……とりあえず、席より飯。

武蔵はメニューを見て、さらに絶句した。

全て、カボチャ料理なのだ。普段なら酒などの飲み物も注文できるのに、それすらもカボチャジュース Only となっている。

「ご注文はお決まりですか？」

ひよこつと窓口から顔を出した照月に、悩んでいた武蔵は不意打ちを突かれ、メニュー表を落としそうになってしまう。

「今日はなぜカボチャ料理しかないのだ？ 私はカレーを楽しみにしていたのだが」

「うーん……涼月がちよつと覚醒してしまつて」

「は？」

「覚醒」

「覚醒」

ついつい鸚鵡返しになってしまい、すぐさまいやいやと頭を横に振つた。

「ちよつと待つた。そんなこと、提督が認めるものか」

「涼月は本当に悪気はないんです……ただ皆に食事のバランスを考えてほしいだけで

……」

そう言いながら照月は手元にあつた適当な紙を武蔵に見せた。

『数日間、涼月に調理場に立つことを許可する

提督』

ひよろひよろとミミズのような文字で確かにその旨が書かれており、しかも正式な書類用の判子までご丁寧に押してある。

血迷ったか?!? と武蔵は腹の虫の怒りを代弁した。だがしかし提督の心労を考慮すると何も言えない。

涼月の言う通り、食事のバランスは大切だ。だが、だからといってカボチャパーティーは違うだろう?!?

「本っ当にごめんなさい……」

起きてしまったことはもうどうしようもない。

とても不満だが、涼月は艦娘たちを思つて行動したのだ。その行動力は評価されるべきだろう。

清霜は言った。戦艦とは器の広い人だと。そうだ、その通りだ。武蔵は己が意地を貫き通す、我儘な艦娘ではない。

たいへん遺憾だが、戦艦になるにはと語つたのだ。そのためにはまず自分が見本を見せなければならぬ。

「わかつた。わかつた。お前たちの案にはもう反対しない。……とりあえずこれを」

武蔵が指差したのはスペシャルメニュー。先ほど見た瑞雲友好者のそれよりはるかにポリューム満点なカボチャカボチャだった。

「……大丈夫ですか？」

「私はお腹が空いているんだ。質より量を求める。くれぐれも半端なカボチャを入れるなよ？」

「は、はいいいいい!!」

何のことかわかったようだ。

少し涙目で返事した照月は調理場へと逃げるように走っていった。

そして7分ほどの時間を経て料理が運ばれてきた。

「……」

なんとというカボチャ。

これぞ圧倒的カボチャ。

さつき後に回した席探しをして、再びハイライトの取り戻した金剛のもとに仕方なく失礼することにした。

「武蔵、あとは任せるねッ！」

「なッ！」

武蔵が席に座った瞬間、金剛は島風顔負けの速さで逃げてしまった。

さつきまでの死にそうな顔は演技だったのか!? そう思ってしまうほどの急変ぶりに、武蔵は反応する時間すら与えられなかった。

「逃がしませんよ!!」

しかもさらに比叡たちも変に声をハモらせて、自分の飯も食べ終わっていないのに食堂を去ってしまった。

なんだ、結局一人ではないかとひとり虚しくもそもそと食事を始める。

「……美味い」

カボチャだけというのがネックなのだが、十分に美味しいからそのことは流せる。

ペロリと平らげた武蔵は食器を返そうと……。

「武蔵さん、お残しはいけませんよ?」

「おお!?」

川内もびつくりといつの間にかすぐそばにいた涼月に声をかけられ、思わず武蔵は後ずさった。

「お残しなんてしていないぞ?」

「ほら、そちらにたくさんあるじゃないですか、お残し」

涼月は視線を金剛姉妹の置いていったカボチャ料理の山を見て、武蔵を見る。

「いいいや、これは金剛たちが残した……」

「言い訳無用っ!」

武蔵の言い訳をバツサリ切り捨てる。

「戦艦や空母の皆さんには特にカボチャを食べて欲しいのです。さらにあなたは大和型戦艦。この程度、たいしたことないでしょう？」

「さすがにこれはちよつと……」

どこかに隙はないのか？！

どこからどう見てもこの量は武蔵一人では無理だ。戦艦四人分の料理など、誰が食べるものか。周りに助けを求め、皆ぞ知らぬふりだ。

こういう時こそ一致団結して助け合うべきではないのか。

「あ、武蔵さん——！」

清霜と沖波が都合悪く食堂に入ってきた。風呂上がりだからだろう、沖波がひつきりなしに眼鏡の曇りを拭きとっている。

そしてこの瞬間、武蔵はすべて食べきるしかない涙ながら心の中でアーメンを1秒間で100回唱えた。

金剛、初出撃

例えば、大變友好的な宇宙人がやって来たでしょう。本当に悪意はなく、ただただ良い信頼関係を獲得したいだけの真なる善意で。だがその容姿は地球人にとってはこの上ない醜さとする。

するとどうだろう。面白いことに、宇宙人と人間は数年後決別した。原因は、人間の偏見による一方的な差別。

未知のもの。しかも気持ちの悪い生命体は、人間にとって、近づきがたくかつ恐ろしいものとなってしまふ。そして、それを排除しようとする強行派が現れ……。

結局はそんなところだ。

人間は、未知に対して過剰に敏感なのである。

◆ 「……またか」

提督は正門を眺めながらぼつりと呟いた。

正門前にたくさんの人ばかり。目的は明らかだ。離れていても良く聞こえる喧騒、デモだ。

掲げる旗には、出ていけやら艦娘は不要やら、いつもの上等文句ばかり。変わりない風景にもう見飽きてしまった。連中も同じようなことをいつも繰り返して飽きはしないのかと疑問に思う。

受話器を取り、ダイヤルをかける。

「……うん、大門。まただ。対応を頼む」

わかりました、と返事が返ってきて、受話器を戻す。この間たったの四秒。やる気になれば二秒でできる自信まである。

数分後、大門率いる治安部隊が出動、デモ隊を鎮圧した。彼らの心労はなかなかのものだらう。

「そうだそうだ。今日はお出撃だったな」

メンバーは昨夜組み終わり、通達も済ませている。

出撃ドックに顔を出すと、すでに全員が整列して揃っていた。提督に気づき、敬礼する。

「ん」

姿勢を崩す。

金剛、比叡、榛名、霧島、龍驤。うち、お姉さま好き好きトリオが眠そうにあくびをする。

それを金剛が軽く一喝する。

「こら、三人とも。提督の前でしよう？」

「「い、い、めんなさい……」」

「私にじゃないでしょ」

しかし、提督はそれを制した。

彼女らが何をしていたのか、なんとなく想像できたからだ。しかも今回の出撃は早朝だ。金剛に怒られるだけでも十分反省するだろう。

提督は通信機を龍驤に手渡した。

「旗艦は龍驤でいく。よろしく頼む」

「了解やでー」

薄い胸を張り、龍驤はフンスと鼻息を吐く。

提督はうんと心内涙目でうなずくと、大淀に連絡する。

潮の匂いが金剛たちの鼻腔を優しく撫でる。金剛は出撃ドックの先、遠い水平線に目を細める。ここに残ると決めて以来、毎日艦娘として戦力になるべく訓練してきた。加賀には毎回こけるたびに巻き込んでしまい、ふたりしてビショビショになって帰ってきたものだ。鳳翔には洗濯の時に大きな迷惑をかけた。もう最近ではそんなことは滅多に起こらなくなり、逆に淋しい顔をされた。あの表情は、ようやくおねしよをしなく

なった我が子の成長に喜びつつも、ついに手間をかけて布団を干すことがなくなつてしまったそれだ。

「今回の目的は、お前たちもわかっている通り、金剛の初出撃だ。そのため突入する海域は危険度の極めて低いところにする」

「それはええんやけど、戦艦三人はちよつと大げさやないか？　心配なのはわかるけど」
「悟れ」

「え？　……あ、あー……うん、理解したわ」

数秒考え、ほほーんと龍驤が得意顔になる。

「ずつと前から言っているが……」

「……黒い深海棲艦もしくは蜘蛛を見かけたら、鎮守府に通信、何をしていてもすぐに帰投する……ですよね？」

「その通り」

金剛の応えに、提督は頷く。

「よし。じゃあ行つて来い！　抜錨だ！」

ハイ！　と気持ちのいい返事を返し、五人はパネルを踏み、艤装を纏う。金剛だけはまだ慣れないらしく、「うわあッ!？」とバランスを崩しかける。

危なっかしい。実に危なっかしい。出撃前からびしょ濡れなんてさすがに士気が萎

えそうだ。

だがしかし、あの過保護な三人がいるからきつと大丈夫。出費がかさむリスクまで冒して出撃させるのだ。どうせ一人でも外せばどうなるか簡単に予想できるし、どちらかというところとガングートより厄介かもしれない。

ものの数分で彼女たちが豆粒ほどの大きさになり、水平線の彼方に消えたのを見届けた後、ようやく提督は踵を返したのだった。



こんなに遠くへと行くのは金剛にとつて初めてのことだった。何度も何度も後ろを振り返って鎮守府を確認し、ついに見えなくなってしまう時は少し泣きそうになってしまう。

四人に悟られないように普段を装って、声を張る。

「龍驤、索敵はいつするの？」

先頭を航行する龍驤は後ろを振り返り、手を顎に乗せて数秒考える。

「うーん……そやな、もう少ししたらするわ！」

彼女は背中に背負った大きな巻物を前に持つてくると、紐をほどき、ゆつくりと発艦の準備を始める。

風を感じる。身体全体でそれを受け止め、その気持ち良さを享受する。いつもならな

にも思わないのだが、なぜか解放的な気分になる。

両手いっぱい広げたかったが、さすがにそれをすると変な子扱いされるのではないかと危惧が金剛を押しとどめた。

「ほな、そろそろ索敵機出しとこか」

左から右へ、勢いよくバツ！ と龍驤が巻物を開き、しゆるしゆると横に大きく広がる。そしてそこから索敵機を四機召喚し、広範囲をカバーできるよう、それぞれに角度をつけて飛ばす。

無事に飛んで行ったことを確認して一息ついた龍驤は無線機で一言だけ、手短に伝える。

『提督、索敵機を出しといたわ』

『わかった。気を抜くなよ』

『もちのろんや』

そこで通信は終了し、龍驤は索敵機からの情報を得るのに集中し始める。

その間に金剛は自身の艦装の調子を調べることにした。

砲台の向きを縦、横とゆくり動かし違和感がないことを確認する。弾もちやんと入っていて、照準さえ合わせばいつでも撃てる。燃料も満タン。脚部艦装も錆びびひとつない。

「気合入ってますね、お姉さま！」

そうやって金剛の隣に移動してきたのは比叡だ。

おかげさまで脚部艤装が巻き上がる海水が金剛の脚に盛大にかかり、比叡の顔が一気に青冷める。

「Oh……」

「ご、ごめんなさいお姉さま！」

必死に謝る比叡を見て、金剛は潔く許すことにした。彼女に悪意などあるはずがないし、ただ純粹に金剛とのスキンシップを図りたかったのだろう。そう思うと怒るに怒れない。かわいい妹の、ちよつとしたミス。だがはいはいと許すわけにはいかず、金剛は左脚をわざとずらし、踵を外に向けて比叡に海水をかけてやった。

「はい、これでお相手ね」

ひええええ!! と叫ぶ比叡を無視し、金剛はあははと笑う。

そしてすぐに金剛は意識をお遊びから切り替える。今日はいつも通りの訓練ではない、実戦なのだ。

少しばかりふざけてしまった自分を戒め、キリツと前を向く。

「敵艦発見やで。ここから10時の方向におよそ16km。軽巡2に駆逐4の水雷戦隊やな」

4人の顔が引き締まる。龍驤の言った方向を目を細めてみると、確かに黒い粒のようなものが見える。

敵だ。

「お姉さま、大丈夫ですか？」

榛名に訊かれ、金剛はいつの間にか握りしめていた拳の力を抜いた。

初めての戦闘だと思うと、無意識に生物的本能が逃げろと叫んでくる。だが金剛は決意したのだ。ここに残り、戦うのだと。これは、その大きな一歩となる。

『こちら龍驤、敵艦隊に邂逅。これより戦闘を開始する』

無線を一方的に送って、龍驤はさらに艦攻、艦爆と次々に発艦させる。

ババババ！ と音を引きずりながら金剛の頭の上を通り過ぎていく。

「確認やけど、今回は金剛の実戦が主や。やからうちはあまり手は出さんで。こちらはできる限りのサポートをする。あんたは敵を沈める。ええな？」

「うん」

頷く。

それと同時に遠くで爆発が起き、数秒遅れて音がやって来る。

「初撃はお姉さまにお任せします。盛大にどうぞー！」

比叡が頑張れポーズを決めて金剛を励ます。

これが、初めて。これが、実戦。

今一度心を落ち着かせ、金剛はゆっくりと砲台の角度を調整する。

弾薬、装填済み。

全てOK。いつでも撃てる。

みんなに大きな迷惑をかけ、それながら懸命に金剛は知識や技術をスポンジのように積極的に取り込んでいった。

みんなには本当に感謝だ。

いける。私ならいけると言い聞かせて。

「――撃ちます!!」

全門斉射。

耳元で響く激しい破裂音とともに、四発の弾丸が飛んでゆく。

それらがだんだん小さくなっていき――…爆発。

「命中しました! さすがです、お姉さま!」

榛名に褒められ、つい頬が緩んでしまう。

しかしそれをすぐに引き下げ、キツと表情を変える。

今の攻撃で敵水雷戦隊は完全にこちらに気づいた。本格的な戦闘が始まる。

龍驤が水しぶきを上げて急カーブ。金剛たちはその後ろをピッタリと張り付き、砲台

の偏差射撃を繰り返す。

「うちは何もせえへんからな！ あんたらだけで頑張りよ！ ……金剛、撃て!!」
 「う、撃ちます！」

さつきまでは普通の口調だったのに、つつい敬語で話してしまう。それは龍驤の普段は見せない気迫に驚いたからか。それとも刹那の判断が結末を大きく変える戦いだからか。

そんなことを悠長に考える暇はなく、金剛は弾を二発撃った。しかし駆逐艦を狙ったそれは最小限の旋回だけで避けられてしまう。

「外し、た……！」

ならもう一度だ。

敵の動く瞬間を見極めて、今度こそ……!!

「金剛！ 四時の方向から魚雷二本接近やで!! 距離150、はよ避けーッ!!」
 「ッ!?」

急遽射撃体勢を崩し、龍驤の吠えながら言った方向を視認する。

確かに音は無く、だがうつつすらと見える白い軌跡が魚雷であることを何よりも物語っていた。

最大戦速。脚部艤装のモーター部分が激しく回転し、金剛は早急にその場から離脱す

る。数秒後、標的のいない場所を貫いた魚雷三本はそのまま無辺世界へと誘われる。

「はあッ、はあッ！」

生命の危険を感じた。

龍驤の指示が無ければ、きっと最後まで気づかず金剛は三本の直撃を食らっていた。当たりどころが悪ければ一発轟沈だった。

金剛は激しく息を吐き、胸に垂らされた恐怖に苦しむ。右手で胸を押さえ、必死にそれと戦う。

……だがやはりそんな呑気ことをしている暇はなかった。

「お姉さま、左前方の駆逐艦、距離165。狙えます!!」

比叡が声を張る。

「ーはッ」

力強く胸を叩き、金剛は砲身の角度を調整する。

恐怖は誰もが持つもの。比叡、榛名、霧島、龍驤。彼女らも少なからず抱いているのだ。

これが戦場。

これが、艦娘。

直後、脇腹にゴッ!! と潰されるような痛みが襲った。視界が一瞬だけ点滅し、ふら

りとバランスを失って片膝をつく。

「痛……い」

よく見ると直撃を受けた横腹部分の服が焦げてしまっていて、その破けた隙間から血が流れているのもわかる。

ここで金剛は自分の視野の狭さを認識した。魚雷の時だってそうだ。目の前のことにしか集中していなかったせいで他のことがおざなりになってしまっていた。

その結果がこれだ。

「大丈夫ですか……!?」

霧島が敵の撃つ砲弾を避けながら金剛に接近し、肩を貸して立ち上がらせる。

ありがとう、と立ち上がった時に再び襲った全身を駆け抜ける痛み在眉をひそめる。

「大丈夫だよ……うん。まだやれそう。敵は？」

「あとは軽巡と駆逐、それぞれ一体。こちらの勝利は確実です。追撃しますか？」
元に戻った視界で敵の姿を確認する。

二体はどちらとも満身創痍だ。あともう少しで殲滅できそうだ。都合のいいことに、敵は逃げ腰気味だ。背中を狙えば沈められないこともない。

龍驤の判断を煽ろうとしたが、彼女は顎だけで金剛をさす。これはきつと、金剛が判断しろという意味だろう。

今回はあくまで金剛の初出撃。敵を全員沈めたとなればそれはもちろん大したものだと褒められるかもしれないが、目的はそれではない。

全員の被害状況を見る。比叡と霧島が少し被弾しているようだが特に問題はなさそう。むしろ金剛がこの中で一番怪我が重い。

無理はいけない。極めて短時間の戦闘だったが、それだけでも十分金剛は疲れてしまった。足りないところもはつきりわかったし、これ以上の進撃は金剛にとって疲労を溜めるだけだ。

「……撤退したいです」

「ええ判断や」

龍驤が艦載機を収納し、にかっ、と微笑んでみせる。

あまり遠くまで足を伸ばしていないから早く鎮守府に帰れそうだ。

通信機で撤退を伝えた龍驤は先頭をゆっくりと航行していく。

お腹が空いた。

それに少し眠い。海の潮のせいでパサついた髪の手入れをしたい。そしてふもふのベッドで眠りに落ちたい。

◆ 欲望を心の中で超早口で言った金剛は大きく伸びをした。

迎えてくれたのは提督と加賀だった。

出撃ドックに帰還し、艦装を取り外し、身体の重荷から解放された金剛たちは見た感じは軽やかな足取り。だが心は疲れきった様子だ。

艦装は妖精たちが受け取り、早速メンテナンスを始めている。

「こちら龍驤、以下金剛、比叡、榛名、霧島、無事帰還しました」
敬礼し、提督も返す。

「ん。お疲れ様。崩していいぞ」

提督は持つてきていた水を加賀とふたりで彼女らに手渡し、水分補給をさせた。

「正直俺もすぐく緊張していたが、無事に帰ってきて本当に良かった。それぞれ思うところはあろうが、いったん入渠などして疲れを癒やし、晩にまた報告に來い。以上だ。……あと金剛は少し残れ。先に入渠しとくか？」

「いえ、別に大丈夫です」

「そうか」

断腸の思いで比叡たちが別れる。

「お姉さま、バーニングラアアアアブ、ですからねっ!!」

「あは、あはははは……はあ」

比叡からの熱い告白を乾いた笑いで受け取り最後にため息。

加賀が饒舌に今日の夕食のメニューを語り始め、そのまま五人は扉の向こうに消えてしまった。

「お前もあいつらに苦勞してるんだな」

「まあ、はい……私のことを大切に思ってくれるのはありがたいんですけどちよつと……。あ、いや、別に嫌とかそういうのではなくてですね？」

「ぶんぶん！」と擬音が聞こえそうなほど勢いよく手を振る金剛に提督は吹き出してしまふ。

温かい雰囲気に入れられ、金剛もなぜか提督につられて笑ってしまう。

「前はお前もあんな感じで俺に突撃してただけだな。客観的に見ていて、なかなかあれだったぞ」

「も、もう。私をいじらないでくださいよ、提督」

赤面する金剛もなかなか面白い。

無駄話が多すぎたと反省し、提督は話を切り出した。

「……で、どうだった？ 今日の出撃は」

くるとわかっていたのだろう、金剛は言いづらそうにしどろもどろながらも、言葉を拾い上げるように口を開いた。

「本音を言うと……怖かったです。口ではみんなのために……って言ってましたけど、

あの時はただ目の前のことに必死でした」

思い出すのは敵の攻撃。

あの時、痛みを感じた瞬間、その場から逃げ出したいという逃避本能が現れた。でも、それではいけないと歯を食いしばった。

「わかった。お前にとつては初めての戦いだ。無理もない。でも今は戦わなければならぬ。そこはどうか、理解してくれ」

「理解するもなにも、私が決めたことです。頑張ってみせますよ」

「そう言ってくれるとありがたい。……金剛、ちよつと」

提督がちよいちよい、と手招きする。

意味はよくわからなかったが、金剛はそれに大人しく従って提督にさらに近づいていった。

何をするのか、と小首を傾げたが、次にした行動は彼女の度肝を抜くものだった。

腰に手を回し、グイツと胸に抱き寄せたのだ。あまりの突然のことに抵抗などできるはずもなく、金剛はなすがままにされてしまった。

「な……な……な……な……！」

「ん？」

「にやにするんれすかッ!?？」

恥ずかしさのあまり、提督を突き放してしまう。提督は残念そうな顔をするが、金剛はあわあわと耳まで真っ赤にしながらから右往左往し始めた。

提督の顔がまともに見れない。

顔を手で覆い、やんやんと身体を振る。

「ほら、初めての出撃でよく頑張ったなご褒美なんだけど……嫌だったか？」

「嫌ではないですけど、嫌です！」

明らかに矛盾している発言をした金剛はそのまま出撃ドックを走り抜けてしまった。

「ちゃんと入渠しとけよ！ 高速修復材はいるかー？」

「いーりーまーせーんー!!」

そしてついに金剛は出て行き、提督一人だけが残された。

提督は肩をすくめ、妖精たちの所感を伺うと、誰もが膝を叩いて大笑いだ。

どうやら今回はやりすぎたらしい。

しかし、収穫はあった。

どうせあいつならこのどこかでスナイパーのごとくシャッターを押しまくっていたことだろう。だからプラスマイナスゼロ……いや、プラスだ。

金剛からの好感度は下手すると下がったかもしれないが、妖精たちはほんの少しプラスだな、とコメントした。

その具体的な数値は？ と訊くと、eのマイナス10乗と言ってまた笑う。
生意気な奴らめ、と提督は心の中で1秒で100回愚痴を呟き、出撃ドックを出た。
まだ書類を全部こなししていないから、それが大淀の逆鱗に触れていないかがちよつぴり心配だ。

生意気のはね返り

吐き気がするほどつまらない毎日である。

電による講義への強制参加を命令されてからはや数週間。ガングートのストレスはピークに達しようとしていた。

つい先日、金剛が初出撃し、決して目立つ戦果ではないが、無事帰投したという。

戦艦が新たに戦力に加わるのは非常に頼もしい。しかしその分競争が激しくなり、出撃の際に召集がかかる頻度に差が現れてしまう。だから今すぐにも海に出て、戦いたい。

なのに。

「私たちは艦娘だ。あのバカみたいに巨大な凶体はない。それゆえの耐久力もない。だが、人型である私たちは機動力を活かし、艦に縛られない動きができる。……では武蔵、例をなんでもいいからひとつ挙げてみせろ」

当てられると思っていなかったのか、武蔵は身体をピクリと震わせ、雲の上の天使を探すように視線を彷徨わせながらも、自信無さげに答えた。

「……私たちには手があるから、誰かの手を掴み……遠心力を用いてスピードを殺さず

に急激な方向転換……だろう、か……？」

まさに虚をつかれた様子で電は一瞬だけ目を丸めた。そしてパチパチと小さく拍手した。

「素晴らしい。武蔵、お前のそれはとても素晴らしい。全くもってその通りだ」

チヨークで黒板に武蔵の例を書き、さらにもうひとつ項目を作った。

ガングートはそれをつまらなさそうに見ている。

「他にも例はたくさんある。主砲や魚雷などに頼らない戦い方だ。天龍型が持つ太刀や槍。あれも非常に便利なものだ」

『砲撃以外の攻撃方法』とチヨークで書き殴る。

ハッ！ とガングートは心の中で盛大に電を馬鹿にした。砲ではなく、あの原始的な武器が良いと言うか。笑止。全くもって笑止である。

そんなものに頼るのは、砲では倒せないからである。だからそんなものに神様に縋るが如く言いよるのだ。そして誤魔化しの言葉を自身の心に泥のように塗りたくる。

見るに耐えない惨状だ。

「他に挙げるならば、陸上での戦闘というものもある。私たちは艦娘だが、だからといって必ずしも海の上で戦うわけではない。もし敵が陸から撃つてきても海から反撃し続けるのは愚かの極みだ」

武蔵を筆頭に、何人かの艦娘は真剣に電の言葉に聞き入っている。だがそのさらに少数の艦娘はあまり理解できないと首を曲げている。

電は普段では誰も教えてくれない、非常識的なことばかりを取り上げる。彼女のリアルすぎるその話はきつといくつかは実際に体験して得た教訓なのだろう。

例えばこんな話をした。

作戦完了からの帰投中、敵艦隊に襲撃された。全員疲労困憊で、電を含めて無傷の者はいなかった。

当然燃料も弾薬も雀の涙ほどしかなく、絶体絶命のピンチに陥った。まず初めにやられたのは四番艦だった。敵艦隊の連撃が命中し、左脚を根元から撃ち抜かれ、さらに脚部艤装も破壊されてバランスを崩したその艦娘は、ぶくぶくと海に沈んでいったという。

必死に手を伸ばし、電の足にしがみつこうとしたが、電からしてみればとんでもない迷惑でしかなかった。はつきり言う道連れに等しい行為であったが、虚しくもその手は果たして電に届くことはなく、孤独に沈んだ。

そしてひとり、またひとりと撃沈され、ついに電と旗艦だけになった。旗艦は希望を信じ、弾幕を張りながら撤退することを命令したが、電はそれを拒否し、頭部を喪失し、ぶかぶか浮いている味方戦艦の身体を抱き上げて言った。

『私はこの人を盾にします』

結果、戦場でくだらない喧嘩が発生することになり、結局弾薬が尽きた旗艦だけが恨めしそうに電を睨みつけながら沈み、電はなんとか生還したという。

「戦場とは、決して綺麗なお花畑ではない。生き残るためならば、手段を選ばない。どんなに汚い手を使つても、生き残れば勝ちだ」

上手い具合に言い含めることができた電は、これで終わりとはばかりに簡単な会釈だけをして部屋を出て行つた。

まるでそれがスイッチのオンオフの切り替えのように、一斉に艦娘たちが口々に話を始めた。

まず我先にと口を開いたのは暁だった。ふんすと胸を張り、さも電の言つていたことが全て理解できたかのような自信が眩しいほどに輝いていた。

「つまりあれね！」

「あれとは？」

「あれって……あれよ！ えつと……そのお……」

響の鋭いツツコミに、暁の自信はしだいに降下し、呆気なく地に落ちた。姉だというのにグイグイ攻めるところ、容赦がない。

摩耶と鳥海が部屋を出て行き、その後には暁たちも出て行く。急ぎ足であることから考

えるに、何かを急いでいるようだ。どうせ電閔連のことだろう。歓迎会、といったところか。ガングートは嘆息し、もうここに用はないと椅子から立ち上がった。

「ガングート」

「ん？」

掛けられた声に反応する。

声を掛けたのは武蔵で、ガングートの机の横に歩み寄ってくる。世界に名高い大和型からくるだなんて少しばかり光栄な

気持ちにもなれようが、今の彼女にはそうする心の余裕はなかった。

なんせ武蔵は電への関心がとても高い。時々尊敬すら孕んだ眼差しを向けていた。

駆逐艦ごときに。あの最強戦艦が？ 失望すら通り越して笑ってしまいそうだった。

「今から暇か？ もし暇なら私の訓練に付き合って欲しいのだが」

暇かと訊かれると、確かに暇であった。事実これからぶらぶらと鎮守府を散歩しようと呑気なことを考えていた。

提督と顔を合わせたくないし、電はもつと願い下げだ。どうせアイツは大好きな提督のところに行くはずだ。この時間帯なら彼は本棟の執務室にいるから、自然とそこにふたりは集まる。

タイミングとしては最高だ。

内心武蔵に付き合うのは嫌だったが、同じ戦艦の、さらに後輩の頼みだ。そう無下に
するのも後味が悪い。

「ああいいだろう。砲撃訓練か？ それともー」

「私とお前の一対一だ。その方が心躍るだろう？ 最近あまり出撃していないからな。
腕が鈍ってしまいそうで心配だったんだ」

「ハラショー。言うじゃないか。貴様の腕が鈍っていよういまいが私にとつてはどうで
もいい。所詮まだ貴様はペーパーのひよつ子。私には到底かなわれないという事実を教
育してやろう」

「では負けないと？ いいだろう、負けたら何をしてくれる？」

武蔵の問いに、ガングートは笑いが止まらなかった。

すでにふたりしかない部屋を、たくましい彼女の笑い声が支配する。

「はは、はははははははははは!! この私が？ 着任ほやほやの貴様に負ける？ ありえんっ

!! 終わった後、貴様には涼月の愛妻弁当を一週間食べてもらおうか！ 知っているぞ
？ まだ消費しきれしていないカボチャが冷蔵庫に眠っていることを」

ガングートは武蔵が涼月の料理が軽いトラウマであることを知っている。なんとも
最低な要求だったが、武蔵は掘り返されたそれを必死に引きつった微笑みで隠し、ポー
カーフェイスを維持しながらなおもガングートに反撃した。

「ならば私が勝てばなんでもしてもらおうか」

「いいだろう!」

バチバチとふたりの間に交わる稲妻は決して敵意のぶつかり合いではない。己が力を誇示したい。自分の力を試したい。戦艦ならば本能的に抱く欲求である。

互いの肩を力強く叩き、どちらも『につこり』と美人さながらの笑みを浮かべながら出撃ドックへと歩く。かと思いきや、いつの間にか早足になり、しまいには全速力になつていた。

それがちょうど改修中だった明石を驚かせ、見事失敗させることに成功した。そして自然とこのツケを払うのも負けた方、と決まる。彼女が改修していたのは機銃だった。

武蔵とガングートは砲身がおかしな方向に湾曲した機銃には目もくれずに艀装を装着する。燃料、弾薬の確認を数秒で済ませ、海の上に立った。弾薬はもちろん演習用のゴム弾。本物を使つてしまい、味方を沈めてしまったとなると笑うことも出来ない。がらがらがらから。

……ゴトンツ!!

鎖が巻き取られ、目の前の開閉ゲートが開放される。

「戦艦、オクチャブリレヴォリユーツイヤ、ガングート。抜錨!!」

「戦艦武蔵。参るツ!!」

脚部艤装が一気に最大出力まで引き上げられ、海水がふたりよりも高く屹立する。どちらも低速艦とは思えないほどの加速で出撃ドックから飛び出した。

徐々にふたりの距離は離れていき、互いの姿が豆粒ほどの大きさとなった時、始まった。

まず仕掛けたのは武蔵だった。ガングートは彼女の砲が火を噴いたのを視覚した瞬間、回避運動に移行する。ゴム弾がついに見えるほどの距離に近づき、遅れて重い発射音がようやく耳に届く。

速度、位置、方向、風向きから落下予測地点を導き出し、悪すぎる精度に鼻で笑う。続いて発射音を追い抜いて飛来する弾の雨もガングートはなんなく避ける。

「この程度か！ まったく、大和型が聞いて飽きれるぞ!!」

その声はきつと届いていない。しかしガングートはそう叫ばずにはいられなかった。

数秒後、砲撃が止んだことを悟ると素早く水偵を二機飛ばした。今日はすこぶる良い、雲ひとつない天気のせいで発見されることは間違いないだろうが、問題ない。武蔵の正確な位置さえ把握できればこちらの勝ちだ。

今度はガングートの番だ。

大きく旋回しながら、しかし確実に距離を詰める。副砲をばら撒いて適当に注意を引きつけながら水偵からの連絡を待った。

命中することは期待していない。あくまで時間稼ぎだ。そのことはきつと向こうもわかっているはずだ。少して、武蔵の副砲が上空に向けられたことを視認した。どうやら水偵がバレたようだ。落とされては困る。ガングートは咄嗟に副砲から主砲へと切り替え、彼女の対空射撃を阻害する。

ゴトンツ、と空弾が排出され、海に落ちる。再装填、発射。

十発中三発命中。

武蔵の鍛え上げられた身体がぐらりと揺れ、倒れまいと踏ん張りを見せた。

「ほう」

正直な賞賛。

膝についても仕方のない砲撃を浴びせたつもりだが、どうやら存外にあの戦艦は耐久力に自信があるようだ。だからといって手を抜いてやろうなどという半端なことはしてやらない。

ーもつとだ！ もつとこのガングートを滾らせる!!

弾の装填を急がせる。

着弾観測するための用意は完了した。だがガングートはそれをする前に、武蔵がどこまで耐えられるかという興味が湧き上がったのだ。

装填完了の知らせを妖精から受け取り、さらに副砲の使用も命令する。

撃って撃って撃ちまくる。日本を誇る武蔵という名がただのお飾りではないこと、訴えろ！

「全砲門開け！ 撃ち方……始めッ!!」

火薬の燃える匂いがガングートの鼻腔をくすぐり、彼女の戦意にさらに拍車をかける。

頭の中で思考が弾ける。しかしそれを反動で身体にかかる海水が冷やしてくれる。武蔵はどうやらここが正念場と思っっているようだ。水偵を意識から完全に排除し、避けることに徹底しているようだ。

「は、は、はははははは!!」

あれだけ大口を叩いておいて、これか！

武蔵を馬鹿にする。どれだけ電に対して執心していようと結局最後にモノを言うのは正直な、純粋な、そして残酷なまでの単純な力なのだ。

笑う。これだから駆逐艦は弱い。価値もない。せいぜい対潜ができるだけではないか!!

だがこの瞬間、ガングートは確かに油断をしていた。それゆえに、武蔵がガングートの砲撃の嵐の隙間を、針糸を通すような絶妙な一発の弾に気づくことができなかつた。

それはガングートの左肩に見事命中し、ズパアアアアン……!! という誰が聞いても

快音であると頷く音が爆発し、肩を外れさせた。

「な……!!」

痛みよりも先に、なぜ、という疑問が全身を光速で駆け巡った。ガングートの砲撃は一切の正確さを無視したデタラメな砲撃などではなかった。水偵の補助がないため決して良いものとは言えないが、それでもある程度の照準は合わせていたはずだ。いったい、なぜ……………。

当てられた、よりも撃ち返されたという事実にはショックを受け、ガングートの攻撃が一時止まる。そこを武蔵は見逃さず、そして出力を上げてこちらへと急接近し始めた。

「クツ……………」

我に返ったガングートが武蔵に対して容赦のない砲撃を浴びせる。すると武蔵は両腕を頭の前で組み、防御の体勢を維持しながら突っ込む。例えば命中しようとそれでも近づいてみせる。そんな戦艦ならではの耐久力を生かした、あまり良い作戦とは言えない方法だった。

身体がこちらに向いているため、当てられる面積が少ない。当てられたとしても腕で防がれる。ダメージは与えられるが、結果がどうなるかなど火を見るより明らかだった。

つまりこの状況において砲撃は無意味となった。実弾ならばなんとかなることもある

るが、ゴム弾程度ではどうしようもない。

砲台を確認し、砲身を常に真横に向けるように命令する。

腕を払い、ガングートも脚部艤装をフル稼働させて武蔵を出迎える。

互いの表情の細かな変化すらわかるほど近づいた瞬間、先に手を出したのは武蔵だった。

咄嗟に腕を解き、ガングートに殴りかかった。

「ふっー！」

「くどくどー！」

腰の動きに集中し、まずは足運びを意識する。まずは右足を踏み込み、腰を突き出す。

そして左足を軸にして回転。

そうすることでガングートの砲台がちょうど良い具合に武蔵の攻撃を防いだ。

そして……。

「撃てッッ！」

「!!」

砲身がちょうど武蔵の顔を覗き込む。そしてまた武蔵もその奥にうずうずしている

砲弾を窺った。

火が爆ぜ、瞬間的に爆発エネルギーを得たゴム弾が放たれる。

首の骨が折れてもおかしくない角度まで武蔵は首を横に曲げ、なんとか手から肩まで軽い火傷だけで済んだ。しかし、命中してしまった腰臓器はその部分だけ少し変形し、ガギギ!! と嫌な金属音と共に砲台を圧迫し、命中率の低下というお土産がきた。けれども武蔵はまだここで諦めていなかった。そのまま彼女の砲身を掴み、ぐいつと身体を胸元まで寄せ、獣のようなどう猛な笑みを浮かべていった。

「――海を汚すなよ?」

横を向いているガングートではこれに対応するだけの余裕はなかった。

腹部への超至近距離での砲撃。それも大和型の。

内臓が一瞬だけ薄紙一枚になったかのような急激な身体の変化に耐えきれず、ガングートは喉まで込み上げてきたものを吐きかける。数秒だけ世界が暗転し、海の果てを見届ける。

膝をつき、口元を抑える。

「参ったか。随分と私を見下げていたが……今はどんな気分だ?」

「……クソだ」

ようやく砲身を正面に向けたガングートが汚い言葉を吐き捨てる。

今の攻撃は勝敗に大きく影響するものであったことは確実だ。しかし、これはそうではない。

口角がわずかに上がる。

武蔵が怪訝そうな表情を見せた瞬間、ガングートは真下……海に向かって発射した。海水が空高く吹き上がり、注意の削がれた武蔵の隙をつき、ガングートは彼女の意識から逃れた。

つい反射的に武蔵は主砲をお見舞いした。するとすぐに肉体を叩く快音が帰ってきて、命中を理解した。

大量の海水が降ってくる。そしてそのカーテンを裂いてぬうつ、と現れたのはガングートだった。

「は」

右手が伸び、武蔵の襟首を掴む。そして一気に身体を寄せ、激しい頭突きを武蔵にお見舞いした。

武蔵が大きく仰け反る。しかし手は離さず、そして武蔵もガングートの左袖を確かに握った。身体をびくりと震わせ、再起動した武蔵が今度とはガングートを引つ張る。ガングートもそれに対抗すべく服が破けるほど力強く引つ張った。

鼻と鼻が触れ合う距離にまで密接し、互いの荒い呼吸が顔にかかる。

そこからふたりが動くことはなかった。東の間の休息が訪れたかのように思えたが、それは間違いだった。

「私の勝ちだ。最後の一瞬、感情的になったのが決め手だったな」
「……」

言われた方は無言を貫いたまま、相手の砲が顔面に向けられていることを確認する。そして自分のを確認するが、せいぜい偶然手足に向けられているだけで、実弾ならば一撃必殺の絶体絶命的状況から脱することはどう足掻いても不可能だった。

頭を垂れ、大人しく手を離れた。すると彼女もちゃんと手を離す。ついでに少し乱れた服も直してやる。

「……参った」

そして、涼月の愛のカボチャ弁当、悦びの七日間が決定した。



勝った。

ガングートは当然の結果を嘸み締めながら武蔵の肩を叩いた。

「言っておくが、朝昼晩毎日だぞ？　はは、痛快だ。駆逐艦も喜び、win—winじゃないか」

そう言われた武蔵は満更ではない様子でガングートの手を払い、絶望を隠すことなく顔に出して叫んだ。

「ああ私には無理だ！　カボチャに汚染された私が簡単に想像できるぞ？！」

「知るか。もともと決まっていたことだ。気にするな。なんなら私がちゃんと食べられるように側にいてやろうか？」

「……悪魔め」

「戦艦だ」

ぐだぐだと航行し、ようやく鎮守府に帰ってきた頃には夕日が沈もうとしていた。出撃ドックの開閉ゲートは開かれており、誰かに帰っているところを確認されたのだろうと考えてふたりはそそくさ中に入る。

艦装をパージして、妖精たちに預ける。そして適当な休憩室に入った瞬間、どつと重荷から解放されたふたりはその場に腰を下ろした。

「約束は約束だからな？ まさか大和型が反故にするなんてことはあるまいよ」

「くっ……」

全く、上手いことを言う。こいつは本当にロシア出身なのかと疑うほど口が達者だ。だが言われていることはどうしようもない事実で、武蔵には反論のしようがなかった。

つまらぬ……なんてことは決していないが、それなりのプライドのぶつかり合いだったのだ。今からうだうだと駄々をこねても見苦しいだけだ。武蔵は魂すら抜け落ちそうなため息を吐いて、空を仰いだ。

「……やつと帰って来たか」

いつの間にかドアを開けてこちらを見ていた男がいた。

提督だ。そして電もいる。彼女の無機質な視線がガングートに突き刺さり、あからさまに舌打ちをする。

その一部始終を提督は見ていたが、あえて何も触れずに話を切り出した。

「勝手に演習を行ったそうじゃないか？ 演習をすることはいい。だがそのことをちゃんとする前に上官である俺に伝えてからしろ。事後処理は誰がしていると思う？ 消費された燃料。ゴム弾の調達。それに傷ついた艦装を修理するのに妖精たちから鋼材を要求される。お前らにとっては楽しい楽しい演習だったんだろうが、俺にとっては辛い事後処理が始まるんだ。自己中心的な考えから離れろ。お前たちの精神年齢はそう低くないはずだ」

目頭を軽く押さえ、提督はきたる事後処理に頭を悩ませる。くるとわかっていたのならばそこまで問題なのではないが、突然だと非常に困る。なにせそれに当てる時間が無いからだ。提督としてやらなければならないことが山積みで、綿密なスケジュールの上で鎮守府を運営している。それなのにはいよしくと書類を突っ込まれてもそれに手をつける時間が無いのだ。

いつそ提督が複数人だったら、なんて馬鹿な願いを抱いた提督は頑として厳しい態度で二人に接した。

「今回は電が早く気づいてくれたからそこまで面倒なことにはならなかったが、今度はどうなるはわからん。次は相応の処罰をするから、心の深く刻みつけろ。わかったな？」

そう冷たく言われて、武蔵は少し凹んだ。

期待されて鎮守府に建造という形で着任したのだ。周りの人や艦娘たちの想いに応えなければという使命を背負って頑張ってきたつもりだった。それは足枷だとかそんなものではなく、ただ純粹に武蔵が応えたいと願った。そして今まで頑張ってきた。

だから提督を失望させるような真似をして、自分の浅はかさを悟った。

「す、すまない提督。私は――」

「理解できん」

素直に謝罪を口にしようとした武蔵を、ガングートが遮った。

ここでガングートも謝ればそれで終わりだったのに、なぜ蒸し返すような真似をする。

敵意むき出しの眼で提督を捉え、糾弾する。

「それはつまり資源が根本的に足りていないということだ。戦艦ふたりを満足に運用できない奴にとやかく言われる筋合いはない。それに時間が足りない？ いっだって思い通りに事が進むわけないだろう」

武蔵が息を飲む音が聞こえる。

上官に対して挑戦的な態度をとるガングートに、場の空気が瞬間に凍りついた。

提督は澄ました顔でガングートの主張に耳を傾けた後、「確かに」と彼女のただの煽りではない反論に返事する。

「資源が足りないのは武蔵を建造するために消費がかさんだからだ。それに臨機応変な対応力というのはお前のいう通りだ。だからといって全て完璧にこなす者が存在するともいえるのか？」

「少なくとも私は貴様にそうあれと思っている。……まったく、こんな低能な男の鎮守府に着任するだなんて後悔してもしきれんぞ」

わざとらしく肩を竦めてやれやれと言わんばかりに失望を露わにする。

ガングートの、提督への態度の悪さはどうしようもないレベルだ。ロシアならではの気質の違いが如実に表れている。だがそんなことを言ってしまうえば響にも同じ事が言える。

だからこれは、『ガングート』個人の人格である。

提督は残念そうに目頭を押さえ、短く嘆息する。

その意味するものは何か。お手上げなのか、それともガングートに対する哀れみなのか。無性に腹が立ったガングートはさらに提督を問い詰めようとした。

その時。

「お前……今なんと言った？」

ガングートの目の前に電が立ち、彼女を見上げていた。

しかしその眼は殺意すら孕んでいるもので、魂が萎縮するほどの力のこもったそれがガングートを見上げていた。

それでもガングートは電をひと笑して繰り返した。

「こんな低能な男の鎮守府に着任するだなんて後悔してもしきれんぞ、と言った。なんだ？ あと何度言つて欲しい？ 可愛い可愛い駆逐艦様のお願いだからな」

圧倒的な身長差のせいもあって、電はガングートの裾の部分を汚く掴み上げた。

対するガングートは顔色を変え、何かあればこの駆逐艦を退けようとする準備をした。

「先生を低能と言ったな？ それはお前が五度海の藻屑になつてバクテリアに食われてもなお飽き足らぬ失言と知れ。前々から目を瞑つてやっていたが、お前のその態度はもはや見過ごせるレベルを通り越した。……殺してやる。今すぐにもお前を殺してやる」

「はははっ！」

駆逐艦が？ 戦艦を？ 可愛い冗談を。

面白おかしく感じたガングートは場の空気にも関わらず大笑いした。微かに目尻に浮かんだ涙を拭って、電の手を払うこともせずと言った。

「殺すと。味方を殺すというのか、末っ子。随分と幼稚な戯言を言ってくれるじゃないか。だがもしそれが本気ならば……その言葉は聞き捨てならんぞ」

ふたりの視線が交差する。バチバチと見えぬイナズマが迸り、ついに衝突して爆散した。……つまりは両方の堪忍袋の尾が切れた。そういうことである。

「先生、この戦艦との演習を希望します。今から」

尋ねられた提督は考えるそぶりすら見せずに答える。

『これ』が起こることを想定していて、そのために用意していたカンニングペーパーを読み上げるような反応だった。

「許可する。だが殺すのはダメだ。あくまでお前たちはこの鎮守府に所属している艦娘であり、仲間だ」

睨み合い、いがみ合い、嫌い合う。

ようやく電はガングートから荒々しく手を放すと、妖精の一人に話しかけ、艀装の用意をさせ始めた。

提督は無言でガングートを見つめる。そして数秒視線を交差させた後、何事もなかったかのように部屋を出て行った。今の無音の会話は、駆逐艦が相手ならば連続で演習を

行っても問題ないだろう？ とある種の挑発にも似たものを感じた。

初めて食堂の壇上で紹介された瞬間からただものではない気配を放っていた。……
間違いなくあの電はそこらの駆逐艦より異質な存在だ。

ーだからどうした。

駆逐艦は駆逐艦の枠を超えることはできない。

駆逐艦は戦艦には敵わない。絶対に敵わないのだ。

ゆえにガングートの勝利は約束されている。この生意気な駆逐艦と、馬鹿な男に事実を知らしめてやるのだ。

そう考えると、ガングートは電との演習がとても楽しみになってきた。

口角を上げ、音もなく嗤った。